

---

# 俺の周囲は変人ばかり

ヒトシ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺の周囲は変人ばかり

### 【Nコード】

N0705S

### 【作者名】

ヒトシ

### 【あらすじ】

幻影旅団が盗賊団だと知らずにクロロ達に育てられた10歳児が原作に介入する話。

「え！？ 雑技団じゃないのっ!？」

申し訳ありませんが原作を読んでいないと分からないネタがあると思われます。キャラの能力名とか。

## 第一話 始まり×変人×ハンター試験（前書き）

原作の空気を壊さない程度のつもりで原作崩壊・作者独自解釈・原作キャラ  
の性格改変？があります。ご注意ください。

## 第一話 始まり×変人×ハンター試験

空は文句無しの快晴。

燦々と降り注ぐ太陽の光りを一身に浴びながら、一人の少年が町の雑踏の中を歩いていた。

年齢は昨日でちょうど10歳となり、背丈は平均よりも少し低い130cm。

つぶらな黒い瞳に肩甲骨辺りまで伸ばした黒髪ポニーテール。

カッコいいと評するより可愛らしいと表した方が的を得ている少年は、携帯電話で会話をしながら額の汗を袖で拭っている。

これは、そんな少年の夢と冒険に溢れた旅を記す壮大な物語で

すみません。嘘です。ちょっと冒険譚風にナレーションしてみただけで、そんな要素は何一つありません。

俺はただの10歳児です。

『あははは、ただの10歳児がハンター試験なんて受ける訳ないじゃない』

心を読むなイケメン優男。

相変わらず色々と人間離れしている奴だ。

『それで、ケイタは今どこにいるの？』

ケイタ。それが俺の名前。

ちなみに名前の由来は育ての親がちょうど読んでいた小説の登場人物から抜擢。

まあ、他に拳がった名前候補が『ポチ』やら『ゲボク』やら人権無視としか思えない名前だったから特に文句は無い。

もし上記の名前になっていたら名前を考えた筋肉馬鹿や拷問好きチビに復讐を誓っていると思う。

ほぼ100%で返り討ちだろうけど、男として逃げてはいけないう時ってあると思うんだ俺は。

「今はザバン市のツバシ町。もう試験会場に着く筈」

俺が今から行くのは第287期ハンター試験会場。

ちなみにハンターとは財宝探しや賞金首狩りとかの、ある物事を追求する事に生涯を賭ける人達のこと、その功績からハンターの資格を持つ者は様々な面から優遇されている。

例えば殆どの国はライセンス一つでフリーパス入国、大概の公共施設は無料で利用。

超信頼性が高く量も豊富な情報サイトを閲覧出来るし、ライセンスカードを売れば人生七回は遊んで暮らせる程の金が入るらしい。

素晴らしいハンター人生。

その代わり試験は超難関で死亡率もハンパないらしいけど、命を賭けてでも志す価値がある。それがハンターという職業だ。

しかし最近はライセンス目的で純粹にハンターになりたい奴は少数らしいけど。

俺だってその口だし。

『そっか。そういうばさ、ケイタが一人でここまで遠出するのって

初めてだっけ？」

「つーか流星街から出るのが初めて。世界って凄いなだね」

流星街とは一言で言えばゴミの町。

外界とは一部を除いて殆ど隔絶された町で、住人全てが町に不法投棄されるゴミを再利用して生活している。

そんな町で物心付く頃から暮らしてきたから、世間に疎いのは当然だ。

異臭が漂うゴミや小バエ、それに死体なら見慣れたが、こんなに綺麗な場所や景色は生まれて初めてお目にかかる。

流星街にも車は走っていたしお店もあった。町の基本構造的なもの世界共通。

だけど綺麗ってだけでここまで世界が変わって見えるのだから不思議だ。

本当、外に出て良かったと思う。

『それは良かったね。ああ、団長から伝言。試験に落ちたら訓練10倍だっつてよ』

この一言で俺の気分は一気に地獄に堕ちた。

……神は俺を見捨てたか。遠回しの死刑宣告なんていらん。

「……必ず合格するってクロロに伝えて。そんじゃ、もう会場に着くから」

『分かった。まあ、ケイタなら死ぬ事は無いと思うから頑張りなよ』  
「ありがとうシャルナーク、皆に宜しくね」

そう言って通話を切り、シャル製印の携帯電話をシヨルダーバツクに仕舞ってから、俺は試験会場である定食屋に歩を進める。

ちなみにクロロとは俺の育ての親兼戦闘の師匠で、シャルナークはクロロの仕事仲間。

まあ、戦闘の師匠はクロロ達全員に言える事だけど。

クロロが俺を拾った経緯やら詳しい事はまた後日語るとしよう。

「にしても『団長』だもんな。何で雑技団があんなに強いんだか」

正直言えばクロロ達の仕事は知らない。

けどシャル達がクロロを団長と呼んでるから、数年前に変態奇術師が入団したし雑技団やサーカス劇団が何かだろう。

そんな風に世間一般からすれば変人集団の家族について考えている内に、ようやくゴール地点に到着です。

流星街からここまで本当に長かった。

「いらっしやーい！ ご注文は！？」

「ステーキ定食。焼き方は弱火でじっくり」

シャル情報によるとこう言えば会場に行けるんだと。

そして料理人の顔がピクリと動き、探るような視線になってから通されたのは奥の個室。

そこに入室して席に着いた途端、部屋が急降下を始めた。

どうやらエレベーターになっており地下に向かっているらしい。手が込んでるな。

「ハンター試験か……念無しで行けるかな？」

念とは肉体の精孔セイコウという部分から溢れる生命エネルギー 通称『オーラ』と呼ばれるモノを自在に操る能力のことで、ハンターの必須技術にして戦闘の奥義。

これさえ使えれば一般人はいくら強くても太刀打ち出来ない反則気味な力を得る事が出来る。

俺はその念能力をクロコ達から教わって、現在も修行中の身。かといって生身の肉体の鍛錬を怠っては強くなれないので、そっちも平行して鍛錬中。

念無しでハンター試験に挑むのは肉体面の鍛錬の一環だ。

「でも、今さらながら何で俺は戦闘技術を身に付けてんだらうな」

ステーキの弱火設定を強に直し、美味しく焼けたステーキを食べながら自問自答して思い出されるのは『俺達が育てるのだから強くなるのは当然』という神クワロクからのお達し。

五歳の時に拾われて、念を一通り習い終わったついで最近まで修行に明け暮れた。

いや、アレは修行じゃなくて拷問や虐待だ。

どこの世界に『出来なきゃ死ぬ』という言葉と共に念を放つてくる奴がいる。

いくら手加減しているとはいえフランクリンの【俺の両手は機関銃シガン】を全て避けるとか、フィックスの【廻天リップバー・サイクロトロン】を受け止めるとか正気の沙汰とは思えない。

修行ノルマをクリア出来なきゃフェイタンの拷問部屋に連行だったし。

お陰で回避や危険察知のスキルは向上したけど、素直に感謝する気になれないのは何でだろう。



「……あれ？ アイツらって結局、俺を虐待してただけじゃ……」  
「あの〜、さっきからお呼びしているんですけど……」

食事も終わり、新事実に驚愕して思考の海にダイブして気付かなかったが、どうやら最下層まで降りきっていたらしい。

豆の人（勝手に命名）が俺に話しかけている。

どうやら俺が降りないとエレベーターが使用出来ず、他の受験者がここまで到達出来ないとのこと。

ならここに居座ってライバル達を蹴落とすのもやぶさかではないのだが、流石に実行すると白い目で見られそうなので考えるだけにしておこう。

あまり目立ちたくないし。

案内人から番号プレートを受け取り、俺は地下道に降り立った。

「300番か、キリが良いと嬉しくなるのは何でだろう？」

「やあ、君って初めて見る顔だね」

着ている服にプレートを付けた所で話しかけてきたのは、四角張った鼻をした16番の小男。

見るからに優しそうな人だ。

こういう人は世間のためにも死んではいけないと思うので、自殺志願者共と揶揄されるハンター試験受験者の中でも生き残るのを祈るばかりである。

「そうだけど……おじさん分かんのか？」

「そりゃそうさ。なんたって俺は35回もこの試験を受けてるベテランだからね」

いや、ベテラン過ぎるでしょ。  
つーか自慢出来る事じゃないって万年落第生。

「だからまあ、初受験の君に先輩から何か助言でもと思ってね。あ、喉渴いてない？ ちょうどジュースが」  
「やあ、ケイタじゃないか？」

善人おじさんから缶ジュースを受け取ろうと手を伸ばした所で背後から聞こえてきた、なんか語尾にハートマークでも付いていそうな身の毛もよだつ声。

すっごい聞き覚えがある声なのだが、振り返りたくないと全力で思ってしまう俺は悪くない。きつと幻聴だ。

例え目の前のおじさんが全身冷や汗ダラダラで、変態ピエロの名前を呟いているのも気のせいに決まっている。

「じゃ、じゃあ俺はこの辺で。試験頑張れよ」

バビューン！という効果音付きでおじさんは離脱した。  
逃げ足が速いな。

……って、ジュースまだ貰ってないのに。  
いや、そんな事を考えている場合じゃないのは分かってる。  
でも誰だって現実逃避したいじゃないか。

とか思っていたら

「うひゃっ！？ 危ないだろヒソカ！！」  
「くっくくく、君がボクを無視するのがいけないんじゃないかなあ？」

「だからってトランプ投げる奴があるか変人ピエロ！」

念を込められたモノは何だって凶器になる。それが実力者なら尚の事。

ほら、トランプが数枚コンクリの壁に突き刺さっているし。

もし避け切れなかったらと思うと恐怖だ。

完全に当てる気だっただろコイツ。

「でも、結局はちゃんと避けているだろう？ 結果オーライというやつさ？ それにしても、しばらく見ないうちに大分成長したみたいだねえ。偉い偉い？」

頼むからその表情で舌舐めずりして頭を撫でようとしないでほしい。

変態度が更に際立って見えるぞ。

いや、こんな変態でもちゃんと良い所があるのを俺は知っている。例え変人で変態で戦闘狂で殺人中毒者で両刀だとしても……ダメだ。

前言撤回。良い所が思い浮かばない。

俺のボキャブラリーでコイツを褒めるのは不可能だ。

何でクロロもこんな色々と終わってる危険人物を入団させたんだか。

「……つかさ、何でヒソカがここにいるの？ 試験官半殺しにして不合格になったって去年言ってたじゃん」

「そつだよ？ でもまあ、だから来年も受験しちゃいけないってルールは無いしねえ？」

ナンテコツタイ。

来る者拒まずにしても限度があるぞハンター協会。  
受験資格永久剥奪くらいしようよ。

「…か何でコイツは賞金首じゃないのだろう。」

協会もこんな危険人物を野に放つな。

主に俺を始めとする青い果実認定された者のためにも。

「…俺以外にいるか知らんけど。」

「でも、去年は落ちて正解だったなあ。今年は去年よりも面白そう  
だ？」

「そ、そっか。じゃあ俺は色々と探検してくるから！」

「いつてらつしゃい？ という言葉を受けて俺は駆け出す。」

もう今の出会いを忘れる勢いで。

さっさと忘れないと俺の精神が崩壊する。

それほどアイツは精神衛生上よくない存在だし、今の表情や雰囲気  
気もヤバイ。

マチヤパクノダにも極力ヒソカに関わるなって言われてるし、触  
らぬヒソカに祟り無し。

「……ハンター試験ナメてた。危険度が高すぎるでしょ。」

主にたった一人の所為で。

第一話 始まり×変人×ハンター試験（後書き）

誤字誤用脱字に御意見や御感想がありましたら、是非ご連絡ください。

## 主人公設定（前書き）

ネタバレありです。

## 主人公設定

### 【基本プロフィール】

名前 ケイタ

本作主人公で物語開始時は10歳になったばかり。

身長130cm 体重27kg 血液型不明

座右の銘 unnecessaryプライドなんてものはトイレにでも流してしまえばいい

肩甲骨辺りまで伸ばした黒髪ポニーテールでカッコ良いより可愛らしいと形容される顔立ち。つぶらな黒い瞳に若干丸みを帯びた輪郭。ヨークシン編からは短髪に。

服装はノブナガの子供バージョンみたいな藍色の服に草鞋。一応ジャージ等の服も所持しているが、ハンター試験には持ってきていない。天空闘技場ではジャージ、ヨークシンでは迷彩服。

いつも持ち歩いているショルダーバックは拾い物。中身は携帯食料に携帯電話。着替えと財布。マッチなどのサバイバル用品や医薬品の類。

### 【性格やその他】

育ちと戦闘力を除けば歳相応の子供っぽい性格で、喜怒哀楽をしつかりと面に出す少年。ただし天然馬鹿が混じっていたり発想が常人とズレている。

肉体面の運動能力はキルアと同じくらいで念の腕前はG・I編のゴンやキルア（修行終了時）より少し低いくらい。  
力は念無しで試しの門を3まで開ける程度。

毒薬と拷問に関する知識を持ち、クロロ達からは戦闘・暗殺術について学ぶ。

家事万能で料理は好きだが味は壊滅的。それでも将来の職として美食ハンターを視野に入れている。

作中一番の苦勞人。トラブル不幸體質。

#### 【生い立ち】

物心付いた頃から流星街で浮浪者同然の生活をしており、生きるためには幼いながらも何でもこなしてきた。五歳の頃にとある理由から念能力を開花させ、偶然クロロに拾われて幻影旅団に育てられることに。

当初のクロロは飽きたら捨てるつもりでの遊び半分で拾い、それまで気まぐれに念を教示し、万が一、希少且つ便利な能力を発現させたら奪うつもりでいたが、予想以上にケイタには才能があり僅かながら情も沸いたので、予定変更で準団員扱いすることに決定。

しかしケイタは幻影旅団を雑技団か何かと勘違いしており、事実を知らないのはとある理由があるからで、ケイタが自分で気付くのを団員全員が待っている。



## 【念能力】

得意系統は具現化系。

## 【万人受けする味】

ベテントイスト

オーラを理想通りの味に変化させ、念を込めた料理の味を改変する変化系統の能力。

制約と誓約：特に無し。

如果说えれば能力使用後に訪れる寂寥感と、料理人としてのプライドがあるからこそ味を騙すこの能力を容認出来ない、しかし人が美味しそうに料理を食べる姿を見るのは好きなので能力自体は気に入っているというジレンマに悩まされること。

## 【一家団欒の相棒達】

ダイニングツール

特殊な力を持ったサイズ変更可能なナイフ・フォーク・スプーンの食器類を創り出す具現化系統の能力。

## 【一家団欒の相棒達】 全体の制約と誓約

- ・食器は一度に一つまでしか出せず、複数個同時に出すことは出来ない。
- ・食器のサイズは最小で通常サイズ。最大で6 m。

## 【スプーン】

・スプーン自体の殺傷能力は皆無。打撃武器として対象を殴っても、少しも衝撃や痛みが伝わらないと徹底している。

・気体は無理だが、固体や液体ならほぼ何でも『すくい取る』ことが出来る。ただし、スプーンでしっかりと触れられることが条件。

・生物はすくえない（具体的には生体の身体全般 体内の内臓器官や血液、それに頭髮などの元から存在する身体のパーツも含まれる）。しかし、死体や身体から切り離されたモノ（腕や足といった各身体パーツや頭髮、体外に出た血液など）は対象外なのですくうことが出来る。

・もし体内の異物をすくう場合、スプーンは痛みを与えること無く体内に潜り込む（生物はすくえない・殺傷能力皆無という制約があるため）。

・スプーンで生体に触れるかは任意。

・念に対しても有効であり、念をすくう場合は状況に応じてスプーンにオーラを込める必要がある。ナツクル風に言えば、1000オーラのモノをすくうにはこちらも1000オーラをスプーンに込めるといった感じ。

## 【ナイフ】

・具現化するナイフは現在二種類。

・ステーキナイフは生物しか斬れない。

・テールブルナイフは生物以外しか斬れない。

・デザインの違いは柄尻にある小さな刻印だけで普段見せない場所

なので、見た目で判別するのは難しい。

- ・斬れるモノを特定することで切れ味を上げている。

#### 【フォーク】

- ・具現化したナイフで傷付けた箇所目掛けて追跡し、自動で貫く能力を持つ。

・ナイフで傷付ける。傷を負わせてから二分以内。対象が自分を中心に半径6m以内にいること。以上の三つの条件をクリアした場合のみ、発動出来る。

- ・追尾する時は最大6m柄が伸びる。

#### 【バタークーラー&バターナイフ】

- ・生物以外の物質一種類・一個を収納出来る。
- ・収納したオーラをバターナイフで対象者に塗る事でオーラを同化。質と量に応じて最大五分間オーラ量と強さを増強する。

- ・ドーピングの効果を上げるため、効果時間は最大でも短い。
- ・念を収納する際、クーラーの大きさは1mに固定されるので、それより大きい念で具現化されたものは収納出来ない。
- ・クーラーに保存出来るオーラ又は念は一系統が限度で、ドーピングは同系統の念能力者に限る。

(例：具現化系能力者の主人公がドーピングする場合、シズクやコルトピといった具現化系能力者のオーラしか使用出来ない)

- ・複合能力の場合は使用者の得意系統として保存される。

(例：ビスケのマジカルエステの場合は変化系能力として扱われる)

・裏技として、何か複数種類・複数個を収納したい場合はカバンや布に包む事で『カバン』『布』という一括りにし、収納する事が出来る。

・オーラは半日、それ以外の物質は二十四時間入れたままだと消滅する。

・収納したクーラーを空にしない限り新たなモノは収納出来ないの  
で、例えば物質を収納している最中に新たなクーラーを具現化し、  
オーラを保存する事は出来ない。

#### 【ケイタから見た幻影旅団】

クロロ：自分への生殺与奪を握っている暴君兼師匠兼……百歩譲つて一応育ての親。逆らってはいけない人物堂々のナンバーワン。1 / 4 裸。

シャルナーク：頼れるイケメン兄ちゃん。でも腹黒で金が大好きな雑技団のブレイン。たぶん雑技団の財布はコイツが握っている。

マチ：おそらく一番世話になっている人(生活面や修行時の治療という意味で)。しかし金の亡者でツンデレ気味。雑技団内でのヒソカの犠牲者ナンバーワン。

パクノダ：雑技団全ての人にとっての母親的ポジションを獲得。嘘をついたり色々と失敗を誤魔化しても直ぐバレるので、懲罰に対するの裁判官的ポジションも兼ねている人物。

ウボオーギン：比較的気が合う友達。愛すべき怪力馬鹿。

ノブナガ：ちょんまげ。

シズク：天然娘にして唯一の癒し系。具現化修行の師匠その一。

フランクリン：意外と知的で数少ない常識人。しかしトラウマ発動原因三人衆の一人。

フィンクス：キレ易くて常時不機嫌顔の典型的ヤンキー。トラウマ発動原因三人衆の一人。

フェイタン：ドSの権化。拷問魔人。トラウマ発動原因三人衆リーダー。

ボノレノフ：雑技団唯一の良心にして一番の常識人。人生相談の主な相手。

コルトピ：具現化修行の師匠その二。ライバル（身長と腕相撲に対して）。

ヒソカ：百害合つて一利無し。精神衛生上存在を認めてはいけない人類の敵。メイクしないとイケメンで、それがまた腹が立つ。ストレスの原因。生理的に受け付けない。黒Gの汚物よりも下等な不気味生命体。変態変人狂人殺人中毒者戦闘狂両刀e t c：言葉で表すとキリが無いピエロ。



## 主人公設定（後書き）

物語が進むにつれ更新します

## 第二話 友達計画×マラソン×緊急事態

俺が試験会場に来てから数時間が経過した。

ここは人口密度が高くて暑苦しいので、俺はとうとさつさと上の太いパイプが何本も剥き出しになっている部分に避難し、エレベーターで降りてくる受験者を観察する事で暇を潰している。

その間、ちゃんと念の修行もしています。

念には四五行と呼ばれる基本技術が存在し、出したオーラを身の回りに留める「纏<sup>てん</sup>」。

精孔を閉じてオーラを絶つ「絶<sup>ぜつ</sup>」。

普段以上のオーラを生み出す「練<sup>れん</sup>」。

そして、自分のオーラを自在に操る「発<sup>はつ</sup>」。

以上の四つが基本技。

発を基本技にして良いのかは疑問だが。

### 閑話休題

とにかく、様々な技術がある念の中でも俺が今やっているのは練の応用技で凝<sup>ねん</sup>と呼ばれるモノ。

身体の一部にオーラを集中させる技術で、これは念能力者同士が闘う時にはとても重要。

何故ならオーラを集めた箇所は必然的に防御力が高くなるから相手の攻撃を部分的に防御する際に必要な技術だし、眼に凝をする事でオーラを容易に肉眼で捉える事が出来る。

発と並び、凝は念能力の奥義とも評される重要技術。

よって訓練するにこしたことはない。



「とはいえ、やっぱり修行する場所は選ばないとダメなのかなー…  
…ハア……」

ちょうど400人目の受験者が来た所で休憩がてら大きく伸びをする。

伸びをしながら思い返すのは今から数時間前の事だ。

「まさかヒソカ以外に念が使える奴がいるなんて思わないじゃん。  
どうしよ、完全に目を付けられたよ」

念は修行次第で誰にでも出来る。

だからこの使い手によつては最も危険な技術に成り下がる便利能力は、ハンター協会の手で意図的に世間一般からは秘匿にされている。

知っているのは念能力を知っている者と運良く交流を持てた者だけだ。

普通なら誰も知らない。

どうせ目の前で使つても勘が良い人物が『何かやつてる』と漠然な事を辛うじて掴む程度の事だしと高を括っていたら、俺の次に会場に来た301番の能力者に気付かれた。

しかも戦闘でよく用いられる凝で観察してしまったから臨戦態勢を取られ、危うく攻撃される所でした。

直ぐに手を合わせてごめんなさい。悪気は無かったですと必死にジェスチャーする事でなんとか事無きを得たが、アレはまだ警戒している。

現に数十m離れた場所から時々殺気やら針が飛んでくるし。

ああ、ただでさえ見た目がモヒカンで顔中に針が刺さってる超不審者なんかと関わり合いになりたくないのに。

更に厄介な事にヒソカと知り合いみたいなので、俺のチキンハートはストレスで穴が空く寸前。

何でこんな事になったんだか。

「あ、見てよクラピカ、レオリオ。あそこに子供がいるよ」

「馬鹿！ 指を指すな！！ アイツはヒソカの友人で301番に因縁付けられてる危険度MAXのガキなんだぞ！？ 死にたくなかったら近付くな」

ふと視線をエレベーターに戻すと、新たに登場した十代三人組に、あの優しいおじさんがいた。つーかおじさんの言葉がショック過ぎる。

誤解されてるとヒソカの友人って見られたことに対する二重の意味で。

「……ダメだ。心機一転のためにも寝よう」

年齢が比較的近そうなああの三人組とはお近づきになりたいのだが、今行っても避けられるだけだろうし不貞寝する。

バックを枕に眼を閉じて、直ぐに俺は夢の世界へと誘われていった。

「ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイっ！！」

こんなにヤバイを連呼している俺の方がヤバイ気もするが、実際本当にヤバイので仕方が無い。

何で俺がこんなに急いで走っているのかと言うと答えは簡単。起きたら誰もいなかったからだ。

どうやら試験は始まっているらしい。

とにかく場所を探るために不本意だがヒソカに連絡を取り、試験内容を理解したのが五分前。

そして、試験が開始したのが今から四時間前。

いつ二次試験会場に着くかも分からないので、早く合流しないと非常にマズイ。

「つーか何で誰も起こしてくれなかったんだよ！ 薄情過ぎるですよ流石にさあ!？」

こんな事で試験に落ちたらフィinksやフェイタン、ウボオーやノブナガに馬鹿にされる。

いや、その前にクロロに殺されるか。

「……にしても走り辛いな。よくノブナガはこんな服装で走れるよ」

俺が着ているのはジャポンの服で、昔だと野武士という人達が着ていた服の子供用。

ちなみに色は藍色。

履いているのが草鞋わらじという所もポイントだ。

まあ、この姿にショルダーバックという服装は見る人によって変だと感じるかもしれないが、俺個人としては気に入っているので問題無い。

なら文句を言つなという天の声はスルーする。

更に走ること二時間。

途中で壊れたノートパソコンを持った人物に出会ったので何時間くらい前に皆が通過したか訊こうと思ったが、とても訊ける状態ではなかったので仕方なく放置。

くそつ。無駄な時間を過ごしてしまった。

こっちは早く試験官に会って俺にまだ参加資格があるか尋ねたいのに。

「あれ？ 階段か？」

小太り七三分けと出会って三十分後、目の前に現れたのは果てしなく長い階段だった。

その階段を五段飛ばして駆け抜ける俺の手に握られるのは再び登場携帯電話。

「ヒソカ！ ヒソカが階段上がり始めてどのくらい経つ！？」

『やあ？ もう階段の所まで来たのかい？ 子供は元気だねえ』

「そんなほのぼのトークは期待してないから可及的速やかに問いに答える！！」

途中でへばって通行の邪魔をしていた脱落者を蹴飛ばしながら駆け上った所、一時間前から上り始めたという言葉を頂いた。

もしこの階段が地上まで延びているのだとしたら、あっちはもうそろそろ地上に着く頃だろう。

それなのにこっちは階段を登ってまだ十分。

本格的にマズイ。

しかも、

「邪魔だよアンタら!!」

脱落者やノロノロ登っている人達が邪魔で困る。

かと言ってスピードを落とす事は出来ない。

どうしようか数秒だけ考え、ついに閃いた俺は我ながら天才だ。

「なっ!?!」

「おい……マジかよ……」

階段ではなく壁を走っている俺を見て受験者が驚きの声を上げている。

いや、このくらい出来るでしょ。

クロロ達は皆出てくるぞ。

そのまま数十分走り続け、ついに

「見えた!!」

眼に飛び込んで来るのは紛れも無い地上への光。

やっとこの薄暗い地下道から出られると思うと嬉しくなる。

しかし、

「ちょっと待ったあああつ!!」

あろう事かシャッターが降りていく。

このままでは間に合わない。

だから俺は仕方なく戒めを解く事にした。  
本当は念の補助無しでクリアしたかったのだが背に腹は変えられない。

落ちたら意味が無いんだ。

そう言い聞かせながら階段に降り立ち、瞬間的に凝で足にオーラを集め、力の限り跳躍する。

「間・に・合・ええええええええつ!!」

その脚力に耐え切れず階段が爆発。

その破壊音を聞きながら俺の身体は弾丸のようなスピードでラストパートをかけた。

そして、

「セーフっ!! いやー、マジでダメかと思った!! 頑張った、超頑張ったよ俺!!」

シャッターが降りきる寸前にヘッドスライディングで身体を潜り込ませ、なんとか地下道からの脱出に成功。

しかし俺は失念していた。

この場には他の受験者が居たことを。

『.....』

.....周囲の視線が痛い。

その変人を見る目は笑いを押し殺して悶絶している殺人ピエロに向けて欲しい。

俺は念が使えるだけの一般人なんだ。

ちょっと戦闘・暗殺技術に各種知識を蓄えてるけど。

「……って、そうだった！ 試験官！！ 俺ってまだ受験資格ある！？ 会場には居たけど寝てた所為で走り始めたのが試験開始四時間後なんだけど！！」

「四時間後だあ！？ おいガキ！ てめえ一体どんな身体してやがるんだ！？」

上半身裸の人が喚いている。

普通なら迷う事無く変態認定している姿だが、ヒソカや301番のこともあるので一般人の域を出ない。

運が良かったな403番。

「ふむ、そうですね……ちゃんと間に合いましたから良いでしょう。協会の方に403名参加と伝えましたが、404名と私のほうから訂正しておきます」

「た……助かった……」

気付けば汗がダラダラだった。

殆どが緊張から来る冷や汗的なものだけ。

つか肉体面より精神面の方が疲労が激しい。

とにかくこれで一次試験中間地点までの合格者は311人だ。

本当、一安心です、ハイ。

暗い地下道から心機一転、今俺達が走っているのはヌメーレ湿原という湿地地帯。

通称詐欺師の罫<sup>ねぐら</sup>。

その名を表すかの様に偽試験官と人面猿が登場、そしてヒソカに殺されるといったハプニングがあったが、今はちゃんと収集がついて試験が再開されている。

ちなみにヒソカはご丁寧に俺にも複数のトラップを投げつけてきやがりました。

いつか絶対泣かす。

可能性はマチがヒソカと交際するくらい望み薄だろうだが、夢を見るくらい誰だって自由な筈だ。

「ぎゃあああつー!！」

「助け　ッ!？」

周囲では怪物の鳴き声や受験者の悲鳴が轟いており、俺としてはどんな事が起きているのか一目見に行きたいのだが、サトツという名の試験官から目を離すと迷子になりそうなくらい霧が深いので自重しておく。

それにもっと後ろに下がってヒソカに近付くなどあつてはならない。

アイツ、さつきから殺人病を発病させて危険度に磨きがかかっているし。

「レオリオー!!!　クラピカー!!!　キルアが前に来た方が良かったさー!！」



前方から声が聞こえてきた。この声はアレだ。  
405番。

さっき俺に気付いた奴。

流星街で修行ばつかの生活だった所為か俺にクロ口達以外では知り合いがないので、ほぼ同年代なんてレアな人種とは是非お近付きになりたい。

スピードを上げ、俺は二人の少年に接近した。

「ねえ」

「つてえー！！！」

405番の肩を叩こうとした時に唐突に聞こえてきた叫び声。

そうしたら405番は叫び声の方へ走ってしまった。

しかしあつちは死へ一直線の地獄。

多分今のはヒソカにやられた声だろう。

今405番が向った先からはヒソカの邪悪なオーラがひしひしと伝わってくる。

うん、相変わらず身体に悪そうなオーラだ。

「行かなくて良かったの？ 405番と知り合いなんですよ？」

「何でだよ？ 俺嫌だよ、ヒソカと殺り合うの」

「だよねー」

なんだかこの99番とは気が合いそうだ。  
見る限り暗殺者っぽい体捌きしてるけど。

「なあ、お前名前と歳は？」

「ケイタ。歳は昨日で10歳。そっちは？」

「俺はキルア。今は11歳。……ふん、もつと下かと思ったら1つしか違わないんだ」

「……やばい、初めて友好的な自己紹介が出来たかと思うと涙が出てくる。」

「なんたってウボォーとかとの初対面は『力を見せてみな』の一言で肉弾戦の訓練だったから。」

「そっぴやお前さ、試験前に寝てて出遅れたってマジ？」

「マジマジ。誰もいなくてビックリした。ヒソカに連絡なんて苦渋の決断を下す羽目になったし」

「うわ、お前マジでヒソカと知り合いかよ。ゴンも本当なのか気になつてたぜ」

よし、どうやらあつち俺に対して興味を持っているみたいだ。

これなら会話するチャンスもある。

小さくガッツポーズをしている俺をキルアは興味深そうに見ていた。

「……ケイタってさ。ヒソカと知り合いって感じしないよな」

「そう思ってくれるのは大変嬉しい。アイツと知り合ったのは人生でもトップ3に入る汚点だ」

ちなみに一位はクロ口の書庫を水浸しにした時。

アレは本当に地獄を見た。

パクやシャルが助けてくれなかったら俺は今頃念魚の腹の中。

弁解する暇も無いいきなり【盗賊の極意】スキルハンター出すとか行動がやんち

や過ぎる。

「でもさ、何でキルアはそう思うの？」

「臭いが違うからさ。……俺もヒソカと同類だから、何となく分かるんだよ」

「……お前も変態だったのか。ヤバイ、話しかけなきゃ良かった」  
「意味が違いよっ!!」

憤慨してますと全身でアピールしながらキルアがチョークスリーパーを仕掛けてくる。

キルアは身長が150cm後半だしベストポジションに俺の首があるのだろっ。

見事な早業だった。

「な、この野郎！ 本気で掛けるな苦しいだろ!!」

「そういうお前だって本気で俺の腕掴んでんじゃねえよ！ どういう力してんだ!？」

「俺は非力だ！ 俺の家族は皆俺以上に力があるぞ!!」

そう、腕相撲ランキング最下位のコルトピですら俺より力がある。腕相撲では左利きのシズクに右手で挑んで勝てるくらいだが、こんなものでは自慢にもならない。

「へえ、ケイタの家族って殺し屋か戦闘屋でもしてんの？」

「良く分からないけど、多分きつと雑技団」

踊りと音楽に長けたボノレノフや傘の扱いが上手いフェイタンに怪力自慢のウボオーギン。

ついでに認めたくないけど奇術師もいるし。

ああ、ちなみにヒソカは家族ではない。断じて無い。これだけは

譲れない。

「んな訳あるかっ!!」

「本当なんだよっ!!」

チョップのお返しに背中を蹴る。

そうしたら貫手を放ってきた。

爪が尖がっていたのは俺の気のせいだろう。

……気のせいだと思いたい。

つーかキルアが予想以上に強くて驚きを隠せない。

念を使ったら楽勝だけど使わなかったら同じくらいの力量だ。

才能ありそうだし、念を習得したら直ぐに抜かれそうな気がしてならない。

「この野郎！ 俺に喧嘩売ったんだ。生きてられると思うなよ!!」

「上等だバーカ。年下に負けてられっか!!」

結局俺達の割と本気な喧嘩は二次試験会場に着くまで続けられた。他の受験者の視線が呆れ気味だったのはスルーする方針で行こう。

## 第二話 友達計画×マラソン×緊急事態（後書き）

誤字誤用脱字、御意見や御感想がありましたら是非ご連絡ください。

### 第三話 友達×料理×能力発動

お互いの実力を健闘し合っていたらキルアが405番を発見した。その指差した方向を見て内心で『嘘だっ!!』と叫んでしまった俺の反応は至極当然だと思う。

あのヒソカと一悶着起こして無事であるなど人間に分類して良いのかも怪しい。

それなのに405番どころか404番と403番も一緒にいるので俺の混乱に拍車をかける。

(……ハンター試験は化け物揃いか?)

悔り難しハンター受験者。

「ところで何で皆は建物の外にいるのかな？」

「中に入れないんだよ」

三人に背後から忍び寄り、ゴンの疑問にキルアが答えた。

そう、俺達は二次試験会場と言われた倉庫だか工場みたいな建物の外で待ち惚けを食らっている。

入り口の扉は閉ざされ、さっきから中から怪音が轟いているので、なんか化け物と対決させられるのかなというのが俺とキルアの意見。

「つーかさ、405番達はどうやってここに来たの？ もう絶対合流出来ないって思ったのに」

この俺の問いに405番　ゴンはレオリオなる人物の香水を辿ってここまで来たとアリエナイ発言をかました。

犬か己は。

それにヒソカと対峙して怖いんだけどワクワクしたなんて危ない人発言もしたから俺の顔が引き摺っている。

笑っていられるキルアの神経が分からない。

つーかゴン、絶対に青い果実認定受けたな。

ご愁傷様。

「えっと、レオリオだっけ？ よくヒソカと喧嘩してこの程度で済んだよね。……それにヒソカに担がれたとかお気の毒……後でシャワー浴びて身体中を消毒することをオススメする」

「ああ、ありがとよ……」

心の涙を流しているレオリオはどうやら常識人らしい。

16番に続いて人生二人目の常識人発見。

クロ口達は色んな所で理解の範疇を越えている。

(あとは……)

ゴンはとりあえず初めから友達になろうと思ってくれていたらしく問題無い。

レオリオにもこれで俺がまともな人間だとアピール出来た。

あとは404番だけだ。

そう思っただけの期待の眼差しを向けると、404番は綺麗な微笑みを返してくれた。

「私の名はクラピカだ。……ケイタと言ったか？ どうやら君のことを誤解していたらしい。すまなかった」

謝罪と共に握手を求められ、もちろん応じる。

良い人だ。

初めてまともな女性を見た気がする。

周囲の女性はマチ・パクノダ・シズクの三人だけだったが、それでもこの三人が常識からかけ離れている存在だということくらい分かります。

そつだ。これが普通の一般的な女性なんだ。

俺の周りが魔界なだけ。

「……一応言っておくが、私は男だ」

「……ワ、ワカッテマスヨ」

この歳で軽く女性不審に陥りながら見事なポーカーフェイスを披露した筈なのにクラピカのジト目が痛いです。

そのままクラピカに睨まれ、ついに正午になった。そして開かずの扉が開かれる。

そこに現れたのは、

「どうお腹は空いてきた？」

ソファーに座っているスタイル抜群の美人。けど髪型が奇抜過ぎる姉ちゃんど、

「聞いての通り、モーペコペコだよ」

一目で大食漢と分かる巨大なお兄さん。つーかこの怪音って腹の音かい。

「そんな訳で二次試験は料理よ!!」



予想外の課題が試験官から下された。良い意味で。

(おっしやああっ!!)

それでも料理は大得意なので顔が自然に綻んでいく。

流星街にある雑技団の『あじと』って名前の家に居候していた俺は必然的に主夫と化していたのだ。

基本は俺と代わりばんこに修行をつけに来てくれていた団員二人の計三人分しか作っていなかったので大量に作るのは苦手だが、一癖も二癖もある団員の好みに合わせてきたため大抵のモノは作れる。お陰で発にも少し影響が出るくらい俺は料理好きだ。

「美食ハンターか……悪くないな」

ライセンスだけが狙いの俺だったが、美食ハンターという職種には興味を引かれる。

なんか夢が膨らんだ気がした。

「さあ、どんと来い!!」

二次試験は楽勝だ。

「……………だと思っていた頃が俺にもありました」

二次試験は二人の美食ハンターがそれぞれ出す課題の料理を作つて美味しいと言わせれば合格。

大食漢のブハラさんの課題は良かった。

なんせ豚の丸焼きだ。

あの巨大な豚をブタというカテゴリにして良いのかは甚だ疑問だが、とにかく簡単だった。

血と内臓を抜いて焼くだけだからだ。

手間だったのは火を熾すくらいだけど、マッチくらいはバックに常備されているので比較的簡単。

お陰で前半メニューは合格出来た。

3mはありそうな豚の丸焼き70頭を念の補助無しに完食した辺り大概に人間辞めてると思うが、そんなことはどうでも良い。そのことについて真面目に考察していたクラピカと論議を交わしたい所だがそんなことをしている場合ではない。

問題は次の髪型奇抜美人　メンチさんの課題だった。

「……………ニギリズシって何？」

さっぱり分からない上に聞いた事も無い。

メンチさん曰くどっかの国の民族料理らしいのだが、そんなのを課題に出すなとツツコミを入れたいのは俺だけではない筈。

っ！かこれって美食ハンターにとって常識的な料理なのだろうか。

……早くも美食ハンターを目指すという夢が風化しそうな俺でした。

「ライスだけで作るのかな？」

「道具とか見ると他にも何か使いそうだが」

隣ではゴンとキルアが首を傾げている。

ちよつと遠くを見ればクラピカとレオリオも似たり寄ったりな顔をしている。

それは他の受験者も同じ 訂正、294番のハゲだけは違った。

「ねえ二人共。あの294番が知ってそうだから真似しない？」

俺の優れた洞察力が生んだ作戦に同意した二人と共にしばらくハゲを観察することにしたのだが、トラブル発生。

アイツは先ほどから他の受験者が作る物を見て笑っているだけで自分のを作ろうとしない。

使えないハゲめ。

「どうするよ二人と」

「ふうん？ ケイタもスシって何か知らないんだ？」

……わざわざ絶を使って気配を絶ちながら背後に立つなヒソカ。

本当は全面的に無視したいのだが、それをしたら殺人トランプを

投げつけられたという過去があるため仕方なく対応することにする。友達を見捨ててさっさと退避したゴンとキルアには後で報復と説教が必要だ。

「何で俺の所に来るんだよ？」

お陰で周囲10m以内に誰もいなくなった。

「フーか己は包丁を持ちながらそう楽しそうに笑うな。」

何故ハンター協会はコイツを第一級隔離指定生物に指定しない。

「ボクの知り合いで料理に詳しいのは君くらいだからさあ？ 知ってたらと思って訊きに來たんだよ？」

「……誰から聞いた？」

コイツに手料理を食わせた記憶は無い。

修行中に遊びに來たのは合計で三回くらいだが、全部昼前に帰っていたから料理を作る必要性が無かったんだ。

ふらつと現れて気まぐれに立ち去る。

その度に死にそうになってマチの念糸縫合のお世話になるんだから困る。

「クロロだよ？」

「あの腐れオールバックが……ッ！」

「そう伝えておくよ？」

「勘弁してください」

『あじと』で生活して自然に習得した完璧な土下座。

不必要なプライドなんてものはトイレにでも流してしまえばいいというのが座右の銘です。

生きなければ意味が無いのだから。

女性陣達やシャルとコルトピ。それに雑技団唯一の良心であるボノレノフは許してくれるが、クロロは容赦が無い。

それとフィンクス・フェイタンのヤンキー拷問コンビ。

アイツらは鞭しか寄越さない悪魔だ。

飴は血の雨だし。

「魚ア！？ お前、ここは森の中だぜ！？」

「声がでかい！ 川とか池とかあるだろーが！！」

いや、クラピカの方が声がでかい。

お陰で受験者全員に材料が伝わり一目散に外へ出て行く。

そののピエロも律儀に俺と一緒に起こうとしなくて良いのに。

「連れないねえ？ ボク達は友達だろう？」

「一生俺の前に姿を現さなかつたら友達になってやる」

「そっか、親友かあ？」

「理解不能な自己中翻訳するな！！」

もう付き合つてられない。

念まで使つて足にオーラを集中し、爆発的な脚力を駆使して即行でここから退避する。

冗談だよ？と呟いていたのがせめてもの救いだ、マイナス100の精神状態に1がプラスされても焼け石に水だ。

「ゴおおんっ！！ キルアああっ！！」

川辺に到着し、釣りをしているゴンを巻き込む形で川に入って魚を獲っていたキルアを蹴り飛ばす。

薄情者にはこのくらいがちょうど良い。  
二人揃って川に倒れてざまあみる。

「ケイタてめえ！ 何てことしやがる！！」

「魚が逃げちゃったじゃん！！」

「喧しい！ 俺を見捨てたロクデナシはこの扱いで充分だ！！」

このまましばらく口喧嘩を続けて大乱闘に入りかけた俺達三人。  
しかし今の状況をふと思い出し、直ぐに怒りを忘れて魚獲りに励み始める俺達は順応性が高いだろう。

単純では決して無い。

ゴンはウボオーと同じ雰囲気出してるから単純馬鹿の強化系だろうけど。

「じゃあ俺もさっさと獲ろう」

ショルダーバックに手を突っ込み、自身の能力を発動する。

別にバックに手を突っ込まなくても使えるのだが、念を隠すためのカモフラージュは必要だ。

もうここに来るまでで大分念を行使しているし、もう戒めなんてどうでも良くなってきた。

常に最善を尽くすのが俺ということにしておこう。

「ケイタお前……そんなのどうやって入れてたんだ？ というより

……それって……」

「それに……なんか嫌な感じがする……」

「伸縮式なんだよ」

無意識に念の脅威を感じ取って慄いている二人に笑いかける俺の手に握られているのは、長さ1m程の巨大な黒フオーク。

俺が念で作りに出した武器だ。

念には六つの系統があり、人はそれぞれ自分の得意系統を一つだけ持っている。

先ほど話に出した強化系もその一つ。

その名の通り何かを念で強化することに特化した系統なのだが、俺の得意系統はオーラを物質化させるのが得意な具現化系。

特殊な力を持ったサイズ変更可能なナイフ・フォーク・スプーンの食器類を具現化する能力。

これが俺の能力【一家団欒の相棒達<sup>ダイニングツール</sup>】だ。

何故こんな力にしたかと言えば、念は自分に合っているというフイーリングが大事であり、精神面に左右されやすいからで。

ついでに自分にとって思入れが強いモノの方が具現化した時に強く作用し易いと教えられ、真っ先に思い浮かんだのがクロ口達との初めての食事。そしてその時に使った食器達だったからだ。

クロ口達に出会う前は独りだったし食い物だってゴミを漁っての手掴みが基本。

だからあの時の一時は印象に強く、具現化系と教えられた時はコレっきゃ無いと思って食器を具現化することに決めた。

あの決意から一年半。

やっとここまで形に出来た。

まだまだ発展途中だけど。

「じゃあさつさと獲っちゃおう！」

「お前が邪魔しなかつたらとっくに捕まえてんだよ！」

「俺だって魚が餌に食い付いてた所だったのに……」

……意外と根に持つ奴らだ。

某RPGのMP不足で強力呪文が使えない子悪魔が持っているようなフオークを銚のように構え、勢い良く川に投げつけ、俺はお魚さん達を獲り始めた。

さて、食材は捕れたがこれで問題が解決されたわけではない。

当然の事ながら試験の本番である料理が待っている。

一応川魚の内臓を取るなど基本的な処理は施したが、いったいどうやって作るうか。

アニサキスとかの寄生虫が怖いので加熱したいけど、もしこれが生の切り身を使用する料理だったら全て台無し。

メンチさんの健康面を気にするべきかスシという珍妙な料理について追究するか悩みどころ。

「まあ、多分大丈夫だよ、うん。美食ハンターなんだから身体も丈夫だ」

スシを課題にしたってことは川魚を使う事を奨励したっていう証なら生の魚が出てくることだって当然想定している筈。

寄生虫対策はきつと万全だろう。

個人的にはこんな面倒な課題にした罪を償ってもらったために一度病院送りになって貰いたい。



「名づけてレオリオスペシャル！ さあ、食ってくれ！！」

こんな声が調理場中に聞こえて視線を向けてみれば、今レオリオがメンチさんに審査してもらった所だった。

そして出てきたのはお米の塊から顔を出してパクパクしている生きた魚達。

いや、それは流石に問題外でしょ。

「食えるかああっ！！」

やっぱり皿を背後に放り投げた。

当然だ。抗議しているレオリオが信じられない。

まあ、以前の俺ならあんな最低料理でも喜んで食っただろうけど。

そしてゴンや自信満々だったクラピカを初めとする受験者達が悉く玉砕されていく。

つーか二人はレオリオの料理？を見ていなかったのだろうか。

「良い！？ 見た目が違うものは審査の対象にもなりはしないわよ  
！！」

そんな厳しいお言葉を受けながら俺の試作品第一号は完成。

これで見えた目がバッチリなら、俺のもう一つの能力もあるし多分合格出来る筈。

俺は意気揚々と長蛇の列に並ぼうとしたのだが、

「小エビのカクテル。マスのマリネの辛子ソース和えとライス。スシのブルゴーニュ風」

「気色悪いわあああああ！！」

一足早く並んでいたキルアの料理が捨てられるのが見えた。そのやり取りを見て俺はショックと共に石化する。マジですか。

「どうしたのケイタ？」

「これは……ッ！！」

「ああ、こりゃ納得だな」

いつの間にか集まって相談していた400番台仲良しコンビが俺の手元を覗いて納得している。

そう、俺の手元にはキルアの料理と殆ど同じ物が存在していた。

同じ場所で獲ったためか材料が重なり、カンニングした訳ではないのだが完成形までそっくりになってしまった。

しかしダメだったのは仕方が無いと割り切るにしても、納得出来ないことがある。

「これ、気色悪いのか？」

超人的な美的センスを発揮して作り上げた究極品だと自負していたのだが、そんな評価を受けたことがショックだった。

「ハア……そんな落ち込むな。どれ、俺が食ってみてやるからよ」

こうして救世主と化したレオリオが一口食べ、そして泡を吹きながら仰向けに倒れる。

どうやら俺の腕は未熟なまもらしい。

（ハア……またダメか……）

確かに料理は好きだがそれが美味いかどうかは話が別だと俺は思います。

愛情が最高の隠し味というのは嘘だ。

何故俺が普通に作ると皆が倒れるのか未だに不思議。

練習はしてるんだぞ。

「レオリオ!？」

「おい、しっかりするんだ!!」

倒れたレオリオをゴンとクラピカが介抱している。

騒ぎを聞きつけてキルアも審査から戻ってきたので、俺の信用回復のためにもキルアにコレを食して貰おうと思う。

ほらキルア、あ〜ん。

「お、やっぱり美味しいじゃん。何だよあの試験官、食いもせず判断しやがって」

「だよ〜。一度食ってから文句を言ってもらいたいよ本当」

ゴンとクラピカがキルアを化け物のように見ているが、このままだとキルアの信用まで落ちそうなので、開いた口が塞がらない状態の二人の口に一口サイズの料理を投擲する。

最初は吐き出そうとしていた二人だが、次第に顔が綻んでいくからアラ不思議。

「あれ? これすっごく美味しいよケイタ!!」

「ああ、この絶妙な味付け。これほど美味しいものを食べたのは初めてだ」

よし、これでレオリオが味オンチということで話は終了した。

変人扱いされるのが少し可哀相だがレオリオだし別に構わないだろう。

内心苦笑い、表で笑顔を作っている俺である。

(助かった……改めて考えると念って凄いや、やっぱり……)

勘の良い人なら分かると思うが、今が俺のもう一つの能力。

その名も【万人受けする味】ベテンドイスト。

念を俺の理想通りの味を持つオーラに変化させ、俺の念が込められた料理の味を改変する能力である。

オーラの性質や形状を変えるのは変化系統に属する能力なのだが、変化系は具現化系と相性が良いため俺にも作り上げる事が出来た。

こんな能力作る暇があるならダイニングツールの精度を上げる。

どうでも良い能力作って念の容量を圧迫するなとククロ口に怒られたのは覚えている。

けど俺にとっては死活問題だったんだ。

なにせ下手な料理を作ると問答無用で拳や念弾、銃弾に刀が飛んできて、首を糸で絞められたり拷問部屋へ連行。

更には人肉好きの念魚が部屋内を闊歩する始末。

完成させたのは一年半前だが、系統という存在すら知らない修行初期時代に無意識の内に作りだした能力で、生への渴望を体現させたこの能力は、文字通り俺の生命線なのでした。  
しかしコレにもデメリットはある。

それは、

「あれ、ケイタどこ行くの？」

「いや……ちょっと気分転換に歩いてくる。魚も無くなりそうだし。ゴンはそのままスシを作ってたなさい」

それはこの何とも言えない寂寥感。

しょせん実力ではない、味の誤魔化しでしかないこの能力は、使った後に猛烈な悲しみを俺の心に残していく。

料理好きには空しいだけだ。

笑顔で料理を食べていく人の顔を見るのが好きなのでお気に入り能力なのだが、それでも辛い。

……このジレンマどうするべきか。

「げっ……ヒソカ……」

川辺に到着したら先客がいた。

身体が反射的に逃げようとするが、傍らに寂しく置いてあった料理を見て俺は思わず立ち止まり、涙を流す。

なぜなら、

「……お前もか……」

そこには俺やキルアの料理と全く同じブツが置いてあった。

コイツも俺の仲間らしい。

今回ばかりは妙なシンパシーを感じ、他にも同類が存在したことを嬉しく思う。

そんな想いも振り返って満面の笑みを見せているピエロの顔を見た瞬間に払拭されたが。

ああ、仲間と違ってしまった過去の俺を殺してやりたい。  
念でデロリアンを具現化したらタイムリップ出来るかな。

「うわ、高っけえー」

こんな月並みな感想しか言えない俺がいる場所はマフタツ山の頂上。

その名の通り中央が割れて断崖絶壁になっている場所を上から覗いている訳だが本当に高い。

しかし、何で俺を含む受験者並びに試験官がここにいるかと言われれば、答えは簡単。

やはりスシを作るのは無理じゃね？つーかこれで合格者ゼロとか納得出来ねえー、いい加減な試験官にも問題がある、やり直しを要求するぞー！という受験者の意見が通ったからだ。

とは言えこれは又聞きで、301番に電話で教えてもらったヒソカが伝えてくれた情報。

……カタカタ言ってるだけの危ない人かと思っただら話せたんですね。

(……失語症じゃなかったんだ……まあ健康なのは良い事だけど)

確かに301番は危険人物だが、だからといって病気や怪我をしるなどと考えるような外道になったつもりはない。

ヒソカなら諸手を上げて喜び、クロ口達と祝杯を上げているだろうけど。

とにかくネテロという会長直々の判断でやり直しが決まり、俺達はこうしてゆで卵を作りここに来た。

ザバン市には陸路で来たから飛行船に乗るのは初めてで楽しかった。

これで合格したら次の試験会場までは飛行船で移動ということなので、頑張って合格しようと思う。

……それにしても卵はどこだろう。

「安心しなさい。下は深い河よ。流れが早いから落ちたら数十km先の海までノンストップだけど」

メンチさんが見事な<sup>つんちく</sup>蒞蓄を披露する。

ならここにいるのは危険、落ちたらヤバイので早々に後ろに下がることにする。

しかしここで何かが起こるのが俺クオリティ。

『あ』

「……へ？」

何故か靴を脱いでいたメンチさん。そしてゴンを始めとする受験生に会長達の視線が俺に集中する。

そう、急に足場が崩れて崖に転落した俺にへと……

「嘘でしょおおおっ!？」

パラシュートも紐も無しにバンジーをすることになった俺は、当

然のことながら頭から下に真つ逆様。

下は深い河らしいけどこんな高さから落ちて無事で済む筈が無い。普通なら死亡だ。

しかし俺は念能力者。

特大サイズのフォークを具現化して崖に刺せば問題無い。

もう秘密保持なんて知るかという意気込みでツールを発動しようとしたら、天の恵みと言わんばかりに目の前にロープが現れる。

「キャッチー！」

崖との間に何本も掛かっている粘着性のある妙なロープになんとか掴まり、転落死を回避した俺。

そして、宙ぶらりんの状態でふと横を向けば、そこには卵が纏まってぶら下がっていた。

どうやら俺の落下は他の受験生も通る道だったらしい。

結果オーライという言葉が脳内を占める中、卵を一つ掴み、崖までナメケモノのようにぶら下がって移動。

そして凹凸の激しい壁を登り、なんとか無事帰還した。

『……………』

「……………ほいつ！！」

手を高々と掲げ、皆に手にした卵を見せ付ける。

痛いモノを見る目がそろそろ辛いから、こっちに集中してもらおう。

「……………とまあ、こんな風に卵を捕ってくるのよ」

しかしそう都合良くこの空気は解消されなかった。



……何故だろう。試験合格なのに感動が微塵も無い。  
しかもトップ合格な筈なのに。

「こ、こういうのを待ってたんだよね！」  
「お、おう！ 走るのやら民族料理よりよっぽど分かりやすいぜ！」

必死にフォローしようとするゴンやレオリオの心遣いは嬉しい。  
その分めっちゃ辛いけど。

しかしレオリオはちゃんと復活したようで良かった。  
フィックスなんて二日寝込んだのに。

そして言々として落ちるゴンやレオリオを筆頭に崖から飛び降りて行く受験生を体育座りで眺めながら、俺は卵獲りタイムが終了するのを待った。

いや違う。待とうとした。

「ちよつと300番。大釜置くのに邪魔。いじけるなら他所でやって頂戴よ」

俺には好きな場所で落ち込む権利も無いらしい。

この鬱憤はゆで卵の自棄食いで晴らすことにしよう。

この数分後にゆで卵ですら不味く出来てしまい、ペテンティストを使う羽目になって更に落ち込むことになるのだが、この時の俺には知る由も無かった。

第二次試験合格者42名

第三話 友達×料理×能力発動（後書き）

誤字誤用脱字、御意見や御感想がありましたら是非ご連絡ください。

#### 第四話 飛行船×電話×自己紹介

また精神的に一回り大きくなる要因であり、同時に神経をすり減らすことになるハンター試験も二次試験まで終了した。

404名も受験したのが現時点で42名まで減ったのだから、サトツさんと美食ハンターコンビがいかに鬼畜かを物語っているだろう。

いったい今日だけでどれだけの方が天に召されたのだから……天国に逝けるようご冥福をお祈りします。

「やったねキルア。次の集合時間まで自由だって」

「だな、飛行船の中探検しようぜ！」

「うん！ ケイタも行くよね!？」

メンチさんが言うに次の目的地に到着する時刻は朝の8時。

それまで自由時間だし、俺としてはヒソカと301番がいるこの休憩所に長居するのは得策ではない。

願っても無い提案だ。断わる筈が無い。

こうしてレオリオの『元気な奴ら……』という褒め言葉を戴き、俺達の飛行船探検が始まったのだ。

「うわ、凄えー!! 宝石みたいだねー」

「夜景ヤベー!!」

機関室や操縦席、ブリッジやカフェテリア等の飛行機内をあらたに搜索し終わった俺達は、現在こうしてベンチに座って外の景色を眺めている。

今のハイテンションな感想はゴンと俺によるもの。

キルアはすまし顔で景色を眺めているので、おそらくこういう景色は見慣れているな。

羨ましい奴め。

「キルアの家族ってさ、どんな人？」

「殺し屋」

ゴンの問いにキルアは即答。

やっぱりか。

隣を歩いていても凄く気配が薄い。

マラソン中に軽く手合わせした時も人体急所ばかり狙うからそうだと思うっていた。

「両方とも？」

「だからそんなに強いのか。納得」

「あははははは、面白いなお前ら。マジ顔でそんなこと聞き返してきたのお前達が始めてだぜ？」

それはそうでしょう。

でも俺の答えは極一般的でゴンのだけが特殊ケースだと思うぞ俺は。

そして始まるキルア君の独白タイム。

何でもキルアの家族は一族代々暗殺を生業にしている家系らしく、その中でもキルアは歴代トップクラスの才能を持ち家族からも期待

大。

そのため物心付いた頃から暗殺技術ばかり磨く日々で、そんな日常に嫌気が差したのと親にレールを敷かれた人生が嫌で家出。

暇つぶしにハンター試験を受験したらしい。

その点ゴンの志望動機の方がまだ真つ当だ。

父親もハンターをしているから気になって受験。

こういう流れだと当然俺の身の内話になるのが世界のお約束だろう。

「俺も大体キルアと同じ。育ての親に五歳の頃拾われて、今までずっと戦闘訓練。受験したのはその育ての親に言われたから」

そう、俺がハンター試験を受験したのはクロ口の一言があったからだ。

念の基礎訓練はこれで終了したし、俺達はこれから忙しくなり面倒見られないから修行は一時中断。その間にハンター試験受けてライセンスを手に入れろ、持っていると便利だしお前のためにもなる。という珍しく過保護的な発言があったから、こうして受験している。

修行中断ラッキーと思って浮かれていたらシャルの集めたハンター試験情報でルーキーが合格するのは三年に一人、そして許容出来ない死亡率を見て受験を拒否したら最後の修行量を倍増されて死にそうになったのは記憶に新しい。

「つーかさ、やっぱりありえないってお前ん家の仕事。信じられるかゴン、コイツの家って雑技団らしいぜ？ 何で雑技団なのに戦闘訓練すんだつーの」

「いやでもさ、奇術師のヒソカが数年前に入団したんだ。そんな変人集団だったら戦闘訓練させてもおかしくないでしょ」

「……それって客来るのか？」

やっぱりヒソカは疫病神という意見はキルアも同じらしい。

それはそうだろう。

あんな化け物がいる雑技団など客が来る訳が無い。

しかし何故か金の回りが異常なほど良いのが俺としても疑問。今回の旅の費用として渡された金は膨大だし。

「へえー、ケイタの家って凄いなだね。ねえ、何て名前の雑技団なの？」

「……そういえば何だろ？」

何だか重要なことを今まで訊いていなかった気がする。

今度誰かと会話する時に訊いてみよう。

「……つかゴン君、貴方様はヒソカが入団してるところにツッコ  
ミ無しか。」

そうどうでも良い事を考えた瞬間、背後に強烈な気配を感じた。

「……………」

三人同時に振り返ったのだが誰もいなかった。

しかし、あんな気配は早々間違えるものでもないので、考えられる可能性は一つ。

「……どつかしたかの？」

一瞬で移動した癖に何惚けているんだこのジジイ。

現れたのはネテロ会長だった。

アクシデントも收拾したしさっさと帰れば良いものを、また何かあった時のためにと同行することになった最高責任者。

絶対ただの興味本位だと思います。

「あれ？ ネテロさん、こっちの方から誰か近付いて来なかった？」  
「いや」

ゴンは気付いていない。

しかしキルアは気付いて会長を警戒している。

それにしても今の動きと平常時のオーラの流れを見る限り、この爺さん相当デキる。

クロロ達以上の実力者なんて初めて見た。

俺の中では皆が最強だったので、そのイメージが崩れて少し悔しい。

どうやら俺はそれなりにクロロ達の強さに憧れを持ち、同時に彼らを神聖化していたみたいだ。

ちなみにヒソカは除く。

神聖なんて言葉はアイツに最も相応しくない言葉の一つだから。

「素早いね。歳の割りに」

「今のが？ ちょこつと歩いただけじゃよ」

キルアがイラついている。

微妙にプライド高そうだし当然か。

凄い睨みつけてる。

「そう邪険にしなさんな。 退屈なんで遊び相手を探してたんじゃ」



厄介な奴に目を付けられてしまった。

「どうかな？ ハンター試験初挑戦の感想は？」

「うん、楽しいよ！ 想像と違って頭使うパーティーテストみたいな  
の無いし」

「俺は拍子抜けしたね。もっと手ごたえのある難関かと思ってたか  
ら」

「俺はまともに受けてないからなんとも……」

寝過ごして落ち込んで転落しただけだし。

もう少しちゃんと受けられたら感想も言えるのだが。

「うむ。……おぬしら、ワシとゲームをせんかね？ もしそのゲー

ムでワシに勝てたらハンターの資格をやるう」

「お断りします！」

何をするか分からないが勝てる訳が無い。

ライセンスが賭け事にされるんだからそれ相応にキツイ無理難題  
を出されるに決まっている。

明日も試験があるし、勝ち目の無い戦いで体力を消耗するなんて  
ゴメンだ。

「え！？ やろつよケイタ！ 勝てたらハンターになれるんだよ！  
？」

「そうだよお前！ バカにされて悔しくないのかよ！？」

「眠いから遠慮する。二人とも頑張れ」

眠いなんて嘘です。

カフェでお茶してからどこか休める場所を探そう。

あの歩く危険地帯二人がいる時点で休憩所は立ち入り禁止だ。  
二人と会長に背を向け、俺はスタスタとカフェに向った。

「新人がいいですね今年は」

「あ、やっぱりー！？ あたし294番が良いと思うのよねー、ハゲだけど」

「私は断然99番ですな。彼は良い」

「アイツきつと我俣で生意気よ。絶対B型！ 一緒に住めないわ！」

「残念キルアはA型だ。」

「ちなみに俺は不明。」

「ブハラは？」

「そうだねー。新人じゃないけど気になったのが、やっぱり44番……かな」

「そういえば300番のあの子は、どうやらヒソカ氏と知り合いのようですね」

「ああ、あの子ね。44番と友達なんて随分変わった……というか、命知らずよね。あの子も未来の変質者候補、か……。見た目は可愛らしいのに」

「でもメンチ、あの子も嫌がっているみたいだったよ？」

「あら、そうなの？ じゃあ本当に運が無いわねあの子。まあ、崖から落ちた時点で分かりきってることだけだ」

「あの子は一次試験の時も寝過ごしたため脱落しかけていますからね。そういう星の下に生まれてきたのでしょうか。この先の試験も何

をしでかすか予想が出来ません。本当、今回の試験は目が離せませんね」

「ふふ、楽しそうねサトツさん」

「おや、バれてしまいましたか」

とまあ、こんな風に受験者を評価している会話を直ぐ側で聞かされた俺は、いったいどんな感想を持てば良いのだろうか。

この試験官達の直ぐ後ろの席しか空いていなくて座ったのだが、後悔しても後の祭り。

絶をして気配を絶ったのが裏目に出た。

彼らも俺の存在に気付いてくれたら聞いてて恥ずかしい討論会をストップしてくれたかもしれないのに。

(これ食べたらさっさと離れよう)

紅茶だけにしようと思っただら小腹が空いたので、現在はジャポ料理のチャーハンを食べている最中。

使っているスプーンはもちろん俺が通常サイズで具現化したもの。

これも修行の一つだ。

過度な修行は嫌いだがこのくらいなら楽しんでやれる。

ちなみに絶の応用技である隠を部分的に駆使してオーラの気配だけを絶ち、本物のスプーンに見せかけることも忘れていない。

別にそんなことしなくても一般人には普通のスプーンに見えるのだが、隠を使わないと勘が鋭い人はゴンとキルアみたいに本能で危険性を感じ取ってしまい不必要にビビらせてしまうので、それは少し可哀相という俺の優しい配慮だ。

俺にはあまり関係無いが、この手の技術は物体を常に具現化して物体を操る操作系能力者を装う具現化系能力者にはとても大事で必

須な技術らしい。

(……まあ、俺が絶や隠を使ってる一番の理由は不必要に注目を浴びたくないからなんだけど……)

色々が目立つ行動を重ねてしまったし、俺がヒソカと知り合い……あまつさえ友人関係などと勘違い(これ重要)されているのでここに来る間も受験者からの視線が少し痛かった。そんな俺が満員状態のカフェに来たら注目を浴びてしまいそうなので、こうして気配を消している訳だ。

そもそも絶をしているからイレギュラーがない限り俺の存在が誰かに気付かれることも無ければ、スプーンの危険性に気付く奴はいないと思う。

わざわざ隠までする必要は無いかもしれない。  
しかし用心するに越したことは無い。

人生何が起こるか分からないのだから。  
ほら、生きてるとこんな唐突にイレギュラーが発生することが多々ある。

「……電話？ 誰だろ一体……」

バックから鳴り響くのは携帯電話の着信音。  
マナーモードにしておかなかった俺のミスだ。

お陰で背後の試験官達は当然のこと、周囲の受験者にも気付かれ  
た。

流石にいくら絶で存在感を虚ろにしても、こんな大きい音は絶の  
範囲外。

「もしもし、どうしたのマチ？」

『別に。ただあまりにも暇だから、どんな調子が訊いてみようって思っただけ。特に用は無いから安心しな』

「暇？ 仕事の方はもう良いの？」

訊けばマチは連絡係。

世界中を飛び回っている団員達に接触して連絡事項を伝えるのが仕事らしい。

どうやら皆は個々で公演を開いて荒稼ぎしているみたいだ。

フェイタンがフレンドリーに客商売なんてこなせるとは到底思えないけど。

……そう考えるとシャルやパクノダ、クロロ以外ダメな気がしてきた。

見た目も言動も比較的まともなシズクは天然過ぎるし、フィンクスなんて拍手しなかったからって理由だけで客を殴り殺してもおかしくない。

……本気で心配になってきた。

『そんなことより、調子はどうなんだい？』

「試験は多分大丈夫。今んとこ二次試験まで終わったとこ。問題なのは試験よりヒソカ」

『ちよつと待ちな。何でここでアイツの名前が出て』

「残念なことにヒソカも受験してんの。あと見た目だけならヒソカ以上にヤバくて皆と同じくらい強い念能力者に目を付けられた。」

…何でこうなっただか……」

これで会話が止まった。

なんか電話越しに凄く長い溜め息が聞こえてくる。

そしてガラス製品がバリンと割れる音。

何で割ったかは怖くて訊かない。

お怒りモードなのは通話越しでも伝わってくるから。

『……チツ……だからアタシは団長に嫌な予感がするって言ったんだ。やっぱり私も付いて行くんだったね』

「気持ち嬉しいけど仕事放棄は流石にダメでしょ。それに一緒に来てたらヒソカにずっとストーキングされ」

『一人で頑張んな』

……ヒソカに会いたくない気持ちは分かるけど、過保護なのか突き放すのかどっちかにして欲しい。

まあ、マチは俺のことを気にかけてくれる方だから、どちらかと言えば過保護な部類だろう。

こんな風に度々電話してくるのもマチかシャル、それにパクノダくらいだし。

そういえば、

「そういえばさ、皆に連絡で思い出したけどアルドーンとギルの二人って今どうしてるの？　ここ数年、音信不通なんだけど」

二人とも俺の知っている雑技団の一員。

他の面子に比べて会う頻度は低かったが、一応俺にも修行をつけてくれた恩がある。

会う度に凶暴な念獣で俺を追い掛け回したりナイフで細切れにされかけて、感謝して良いのか少し判断に困るけど。

『……知らなかったのかい？　二人とも何年も前に死んだよ』

「マジっ!？」

「ああ。アルドローネはヒソカに殺られて、ギルの奴は仕事中に死んだ」

全然知らなかった。

そうか、二人はもういないのか。

ハンター試験が終わったなら墓参りくらいしようと思う。

墓なんて上等なものが存在するかは知らない。

無かったら『あじと』の片隅にでも作ってやろう。

死者を敬う気持ちは大切だ。

「まあ、ヒソカともう一人の危険人物には気をつけることだね。精々死なないように頑張りな」

そう一方的に告げてマチは通話を切った。

流石は変化系。気まぐれ具合がちょこちょこ見え隠れする行動です。

「……アルドローネがヒソカと問題起こして殺されたのは仕方が無いとして、ギルは何で死んだんだ? ……ナイフの曲芸中に事故死?」

よくベンスナイフとかいう危険な毒塗りナイフ数本でジャグリングしていたし、ありえないことではないと思う。

少し情緒不安定がよく分からない人物だったので、これ以上の考察は難しい。

会ったのだから片手で数える程度だし余計だ。

「あ、雑技団の名前聞き忘れた……」

少し後悔したが、急ぐことでもないし今度で良いだろう。  
携帯電話をバックに仕舞って食事を再開する。

そして、チャーハンの皿を持ち一定速で口に運びながら、俺は後ろを向いた。

「で、その野次馬試験官さん。見世物じゃないんだけど」

「いや、ヒソカと友達の奴の電話相手って気になるじゃない？ というかボウヤ、いったいいつからいたのよ？」

「そうだね、ちょっと失礼だったかも。でも、とても上手な絶だよね。俺、全然気付かなかったよ」

ありがとうブラハさん。そして謝罪が無いよメンチさん。  
サトツさんはいつの間にか消えていた。

そして飯を食うなら一緒に食おうということは無理矢理サトツさんが座っていた場所に移動させられることに。

ブラハさんは『一人で食べてもつまらないだろ』的なただの善意っぽい、この露出度が高い姉ちゃんは明らかに興味本位。

噂話が好物の井戸端会議大好きおばちゃんと化している。

「はあ、別に話すのは良いけど。その代わりデザート奢ってよね。タダでやる情報は無い」

ちょっと渋面を作られたが結局メンチさんは承諾してくれた。

ちなみに話したのはゴン達に話したのと同じような感じ。

ただ少しばかり念についても触れているが、簡単に修行風景を説明しただけなので大丈夫。

クロ口達についてはもちろん黙っている。

念能力者は早々手の内をバラさない。

それが他人の能力についてなら尚更。これは常識。



「なるほどねー。それにしても、5歳の頃から習得させるなんて随分スパルタな親御さんのね。うーん……悔しいけど能力者としてはそっちの方が先輩な訳か、アタシはまだ覚えて3年だし。そのスプーンはポウヤが具現化したものよね?」  
「まあ、食器を具現化するのが俺の能力だから」

別にこれはクロ口達が見せ技だから問題無い。

この食器は具現化という部分だけならヒソカで例えると【伸縮自在の愛】ハンジーガムと同じ。

知られても構わない。

俺とマチしか知らない【薄っぺらな嘘】トッキリテクスチャーみたいな隠し技は、各食器に宿っている特殊能力の方だ。

この程度なら知られて問題無い。

得意系統がバレるのは少々痛いけど、それを覚悟でこんな修行をしているんだ。

「食器ねえ……もしかしてポウヤって料理好き?」

「え、何でそう思うの?」

「試験中、料理に念を込めてたでしょ? ちゃんと見てたわよ。食器を具現化して料理に何かしてるくらいだから、料理に興味が無いってことはありえないって思ったの」

あんな審査をした癖に見るところはちゃんと見ているとは……意外と油断も隙も無い。

わざわざ凝をしてまで見るとは。

「で、アレはどんな能力なのよ?」

「メンチ、それはちょっと訊き過ぎだよ」

「……まあ、別に隠すような能力じゃないから別に良いけど」

こうしてペテンテイストについて説明したら、見事にメンチさんから説教を食らいました。

曰く、料理人としてのプライドを持って。念に頼らず自分の味に責任を持つてとのこと。

そこら辺は俺も同意だが、否定されっぱなしは悔しいのでペテンテイスト誕生秘話を簡単に説明した。

すると、

「……ゴメン」

見事論破に成功。

そして話の流れから俺の作る殺人的不味さの味に料理馬鹿が何故か食い付いてしまい、ブララさんも連れてメンチさんの部屋へGO。そこでクッキングタイムに入りその味を直に確かめることになった。

自分で言ってる悲しくなるが、命知らずも良いとこだ。

ちなみに俺は何度も警告した。

料理と味に興味があるのは美食ハンターの鑑だと思うけど死に急ぐな、とブララさんにも協力してもらって説得を頑張った。

しかし上手くいかず、ついに出来てしまったカニチャーハン。

見た目は及第点を貰ったのだが、結果は

「……だから止めとけって言ったのに」

床に倒れたメンチさんをブララさんがベッドに運んでいく。

残りはペテンティストを施した上で、ブハラさんが満足そうに完食してくれたから試食会は無事終了だ。

早朝に目覚めたメンチさんが包丁両手に復讐しに来たから、随分と理不尽な話だと思う

#### 第四話 飛行船×電話×自己紹介（後書き）

誤字御用脱字、御意見や御感想がありましたら是非ご連絡ください。

## 第五話 三次試験×近道×初戦闘

「ここが三次試験のスタート地点になります。さて試験内容ですが、試験官の伝言です。生きて下まで降りてくること、制限時間は72時間」

そつ豆の人に言われて十分が経過した。

俺達がいる場所はトリックタワーと呼ばれる石造りで出来た、およそ半径数百mのタワーの上。

階段がどこにも見当たらず、太い柱のてっぺんに置き去りにされたような現状にもそろそろ飽きてきた。

ちなみにここは途轍も無く高い。

一度下を覗いて高さを確認しようとしたら、

「うわー！ ケイタは端に来ちゃダメー！！」

「そつだ危険だ！」

「止めとけケイタ！ 落ちたら洒落にならねえぞ！！」

「まあ、それはそれで面白そうだけどもさ」

という三人組に阻まれて断念。

無責任な台詞を吐いたキルアには背後からのドロップキックをお見舞いしてやった。

お陰で初の犠牲者も人面鳥なる怪物を見る事もなければ、感覚的にしかタワーの高さが分からない。

しかし俺のトラブル体質を心配しての行動なので咎める気持ちにはなれなかった。

「隠し扉……隠し扉……どこ？」

偶然にも色黒受験生が回転扉で下に落ちるのが見えてこうして探しているのだが、他の扉が見付かる気配が一向に無い。

もしや数に限りがある早い者勝ちかと思ったりもしたが、流石にそこまで試験官も外道ではないだろう。

(でも一次と二次がアレだからなあ……)

やっぱり確証が持てない。

「ケイタ！ こっちこっち！！ あったよ入り口！！」

「でかしたゴン！ 流石は友達！！」

やはり持つべきモノは友達だ。

こういったやりとりは一生ヒソカに縁が無いだろう。

「そうだ！ あの要注意人物はどこに？」

今日はまだ一度も会っていない。

この記念すべき一時を汚されたくないのです、今後も近付かないために慌てて探す。

しかし嬉しいことにヒソカは発見出来なかった。

どうやらもうタワー攻略ルートに入っているようで、これで最長三日間の安息を約束されたかと思うと嬉しくて仕方が無い。

なんて良い試験だ。

「……って、そう思った途端にこれだもんな……」

既に集まっていたゴン達四人に合流すべく近寄っていたら、急に床が回転。

僅かな浮遊感と墜落感を感じ、気付いたら薄暗い部屋の中に落ちていた。

そこは非常に埃っぽくて眼も暗さに慣れるのに時間がかかりそう。そう心配していると、俺の悩みを感じ取ったかのように明かりが灯ってくれた。

そして俺の目に飛び込んで来た伝言板には、

《決闘の道。立ち塞がる敵を倒して地上を目指せ》

……面倒そうなルートだ。

「つまり障害物と化した対戦相手を倒して行けと」  
『その通り。君にはこれから一対一、都合二十戦してもらいながら地上を目指してもらおう。それでは、健闘を祈ろう』

三次試験官っぽい人の声がスピーカーから響き、目の前の扉が開く。

そこは長い一本道らしく、終わりが全く見えないので少し不安。

しかしまあ、こんな敵がいると分かっているルートを真面目に通るお馬鹿さんではない。

柔軟な発想が出来る俺って素晴らしいと自画自賛してみる。

「さっさと下に行こう。大人数と戦ってられるか」

モニター越しに見られているだろうが我慢する。

能力の本質まではきつと分かりっこない。

気合を入れるべくコキコキと首を鳴らし、腕を回して体操終了。

俺はダイニングツールを発動して等身大のスプーンを具現化した。

「よっと、ほいっと」

そしてザクザクと石床をスプーンですくい、俺は一直線に地上を目指す。

これが俺のスプーンの力。

制約と誓約と呼ばれる念強化の方法の一つで自分の能力にルールを作り、それを遵守することで力をアップさせる裏技により殺傷能力皆無、生物をすくえないが、他のモノは殆ど何でも『すくって取る』事が出来る、本来の用途である『すくう』という行為に特化したスプーン。

それがコレだ。

お陰で硬い床もプリンのようにすくい取ることが出来るので作業も楽チン。

すくえる範囲はモノを乗せる皿状部分の大きさまでだが、スプーンのサイズを大きくすれば必然的にすくえる量も多くなる。

ちなみにすくうのは固形と液体に限る。

気体は流石に無理。

「数時間あれば下まで辿り着けるでしょ。……よく考えたら工事現場で働くのもアリかもしれない」



料理人だけでなく作業員にもなれるとは、俺も中々生活力があるようだ。

『待ちたまえ。そんな方法は流石に認めるわけにはいかない』

更に張り切って作業に励もうと思つたら、こうして水を差す試験管。

……今何て言ったコイツは。

これでは能力の見せ損なので、不満をぶちまけて猛烈抗議のクレームに変身するのは当然の選択だろう。流石に酷い。

「何故！？ 生きて地上まで降りるのが条件でしょ！？ 念を使っちゃダメとか、床を掘っちゃいけないなんて一言も言っていないぞ試験管！！ オーボーだ！ 異議アリ！！」

そして訪れる長い沈黙。

俺の主張が正論だけに対処にお困りのようだ。  
更に時が過ぎ、やっと審判が下される。

『……………分かった。認めよう。ただし、それは一番最初の相手を倒してからだ。一人目を倒せたら好きにするが良い』

抗議して良かったと一安心。

昨日のメンチさんに引き続き今回も勝利。

気分を良くした俺は意気揚々と道を進み、五分くらい歩いた所で一つの部屋に辿り着く。

そこは大体25m四方の窓が無い殺風景な部屋。  
造りは今までと同じ石造り。

そして、中央に立つ全身フードに包まれた人物。

「来たぜ。外してくれ」

目の前の2m近い男はそうカメラ越しに伝え、手と足両方の枷が音を立てて外される。

フードを破るように放り捨てて現れたのは、ボディビルダーも真っ青な良いガタイに不細工な悪人面。

何となくけど分かった。

コイツはおそらく囚人だ。

「へっへっへ。お前みたいなガキを殺るだけで釈放とは、随分と気が良い所長だぜ」

いや、そんな司法取引を認めて良いのだろうか。

市民という無垢な子羊の群れに見る限り危険な狼を放り出すとは何て外道。

やはりハンター試験の試験官はまともじゃない。

ひいてはハンター全員かもしれないけど。

「……っーか、相手って能力者なの？」

フードを被っていた時から、目の前のスキンヘッドは纏をしている状態。

何気に身内以外とは初戦闘、しかも本気の殺し合いっぽいので、少なからず緊張してしまう。

回りが異常なくらい強い魔物ばかりなので俺の実力が分からないのも不安要素の一つ。

救いは俺よりも念の技量が低そうなお所だけだ。  
纏を見れば分かる。

「勝敗の決め方は？ おじさんを殺すしか無いの？」

「ああん？ まあ、どつちかが死ぬかギブアップ、もしくは気絶……といった所か。だが、そんなのはどうでも良い。お前は俺を倒さない限り死ぬしか無いんだからな」

これで会話は終わりと云わんばかりに男の殺気が肌を刺激し始め、同時にオーラも膨れ上がる。

それを冷静に見ながら、小刀サイズの食器ナイフを具現化した。

「だらああつー！！」

15m以上の距離がある場所から男が右手を袈裟懸けに振り下ろし、その線をなぞるかのように発生したオーラの塊が放射線状に放出される。

これで決まりだ。

コイツは十中八九、オーラを放出するのが得意な放出系能力者。

その曲刀のように弧を描いている独特な形をした念弾を目撃して、俺の顔に自然と笑みが生まれていた。

念弾系統の能力は俺の力モだ。

「なにっ！？」

とは言え初の実践。

コレを気に色々試したいことがあるので、俺はあえて攻撃を避けず念弾をその身に受けた。

結果は無傷。

現在俺は纏と練の応用技で堅と呼ばれる防御力上げの技を使っているのだが、その堅を破って傷を負わせるだけの威力が無かったのだ。

やはり俺とコイツでは念の基礎能力に差があり過ぎる。

能力者同士の戦闘で堅を維持するのは基本なのだが、コイツは未だに纏状態。

どうやら堅の存在を知らないらしい。

(まあ、堅が出来ても高が知れてるっばいけど)

堅を維持するのは大変高度な技術。

コイツならおそらく一分も維持出来ない。

ちなみに俺は調子が良くて一時間。

クロ口達は少なくとも五時間以上。

(っーかこれだと俺の実力が分からないじゃん)

コイツが相手だとあまり参考にならなそうなので、さっさと片付けて穴掘り作業に励むことにしよう。

「じゃあ、次はこっちの番だよね」

「なめるなガキ!!」

駆け出そうとした俺に再び放たれる念弾。

今度は拳大の塊。

どうやら先ほどの攻撃範囲拡大重視の念弾で、こちらが威力重視の念弾みたいだ。

しかし、これもまた好都合。

走りながらナイフを消し、等身大のスプーンを具現化し直した。

俺のダイニングツールは制約のため一度に一つしか食器を具現化出来ないからだ。

そして念弾が当たる寸前にスプーンを一閃。  
皿の部分には、先ほどの念弾がしつかりとすくい取られていた。

「貴様……ッ!?」

「返す!!」

殺傷能力皆無で鈍器にすら出来ない俺のスプーン。

しかし、このスプーンの最大の利点は、相手の念やオーラも楽々すくえることだ。

すくう時は対象の念とオーラの強さに応じてスプーンにオーラを余分に込めないといけない。例えば100程のオーラをすくうにはこちらも100のオーラを込めなければならぬといった感じだが、一応効果はクロロからもお墨付きをもらっている。

手加減されたものだがフランクリンの念弾だってスプーンですくってラクロスみたいに投げ返すことが出来た。

俺の潜在オーラ量は平均よりもかなり多いらしいので、皆クラス以外の能力者くらいの念なら充分対処出来るとのこと。

それが今まさに証明された。

「はああっ!!」

自らの念弾を食らって怯んでいる間に男の懐へ潜り、纏・絶・練・発・凝を全て応用した複合技、全　オーラを一点に集める硬を拳に施し、全力で腹を殴りつける。

易々と俺の硬は相手の防御力を上回り、決して人から発してはいけない類の重い打撃音を響かせ、その巨体がくの字に折れ曲がりな

がら宙を舞う。

俺の全力攻撃をその身に食らい、男は壁にめり込んで動かなくなった。

「……………生きてる？」

……………返事が無い。ただの屍のようだ。比喻無しに。

「あゝ……………ゴメン。加減が分からなかった」

別に人を殺めるのは初めてではないので、この程度で俺の心が動揺することはありえない。

人を殺した時の罪悪感なんて皆無。

そもそも倫理や道徳を教育されて育った訳はないので、そこら辺の感情が少なからず欠落している俺がナニ力を感じる筈が無いのだ。

「ねえ、これでもう闘わなくて良いんでしょ!？」

『……………ああ。掘削作業に励むが良い』

おそらくこの試験では今みたいな感じで囚人が邪魔をしに来て、その度に対処しながら進んでいくという状況判断能力と簡単な戦闘力を試す試験の筈。

しかし俺の方法では審査が出来ないから、おそらくラスボスである念能力者を急遽初っ端に持ってきて俺の実力を測りに来た。

掘るのを認められたということは、一応このタワーを攻略するだけの力があると認められたことに他ならない。

バックの中からシャルのお古であるMP3プレイヤーを取り出し、お気に入りのブラックプラネットという新入りバンドのアルバムを聴きながら、俺は休むことなく床を掘り進めた。

そして、

「……………」  
「くつくつく……これは予期せぬお客さんだなあ？ 本当、君はボクを飽きさせない」

まさか掘り進んだ先の通路でコイツとエンカウントする羽目になるとは。

確かに下に掘り進んで行けば別ルートの道に行き当たり、そのルートを進んでいた他の受験者と鉢合わせる可能性もあると思っ

た。  
しかし掘り始めて早五時間。

まさか一番遭いたくない生きたR18指定の顔を拝むことになるなんて。

……………神様というのはとことん俺が嫌いらしい。

『44番ヒソカと300番ケイタ、三次試験通過！！ 所要時間は六時間十七分！！』

「どうやらボク達が一番乗りみたいだねえ？」

「はは……まだ誰もいないとか嘘でしょ？ 俺には分かる。きつとあの自称忍者あたりが隠れているに違いない」

こんな奴と二人きりなど、通路をショートカットしないで地道に

二十人撃破する方が遙かにマシだ。

「円で確かめてみたけど、どうやら本当に誰もいないみたいだよ？」  
「分かってるよ馬鹿野郎！ 良いじゃんもう少し現実逃避しててもさあ！？」

あのあと悪魔の采配によりヒソカと合流してしまい、瞬時に逃亡を謀るため猛ダッシュを試みたが、いつの間にかゴムとガム両方の性質を持つヒソカの十八番　バンジーガムを貼り付けられており逃げ切れなかった。

しかし俺も無抵抗だった訳ではなく、バンジーガムは10m以上離れると極端に脆くなり千切れてしまうので、自由と安全を勝ち取るため必死に走った。

その情報がどこまで正しいか怪しいが、現状では信じるしか無いので盛大に走った。

だがヒソカもバンジーガムを収縮させる間に俺が範囲外に逃げられると悟ったのか、収縮などさせず自らの足で俺を追跡することに楽しそうに笑いながら追いかけるから恐怖以外の何物でもない。

このリアル鬼ごっこは復讐者を名乗る前試験官が現れる約三十分間も続けられた。

そしてそのナイフ四刀流という劣化ギルみたいな雑魚能力者をヒソカが秒殺し、今に至る訳だ。

ちなみに俺がスプーンでバンジーガムをすくい取らなかったのは、スプーンが念にも有効だということを知られたくなかったため。

この効果はクロロとマチ、それにシャルナークとフランクリンしか知らない俺の切り札。

早々バラすことなどしない。



断じて、テンパっていて忘れていた訳はないのです。

「へえ？ いつの間にか円まで習得したんだい？」

「誰が教えるかバーカっ！！」

「くつくつく……つれないなあ？」

…… 本当は流れに任せて叫んだだけで円など使えない。

厳密に言えば使えるんだけど範囲が狭いため使う意味が無いと言った方が的確だったりする。

ちなみに円とは纏と練の応用技で、普段は身体の周り数cmまでしか纏っていないオーラを数m単位で円状に拡大し、そのオーラ内にある物体を探る技術である。

達人は半径50mも拡大出来るらしいが、俺はノブナガと同じで円が苦手なため半径3mしか出来ない。

余裕で半径100m以上の巨大な円をしたコイツがおかしいのだ。

「それじゃあ暇だし、何して遊ぶ？ そうだ、ポーカーにしよう？」

「……ドッキリテクスチャーは無しだぞ」

紙みたいな薄っぺらいモノの表面をオーラで覆い、様々な質感を再現・装飾するなんて能力を使われたら勝てる訳がない。

その種を知らずトランプ奇術を見せられて感動した過去の自分を笑ってやりたいよ本当。

っーか、あの時の感動を返せ。

(……下手に断わって『じゃあ模擬戦しようか？』なんて言われたら死ぬし、仕方が無いよねえ……早く誰か来てくれマジで)

確かに俺は他にも人が来て欲しいと神に頼んだ。

こんな奴と二人つきりは色々と無理がある。

体力面と精神面両方から見ても対応出来る俺のキャパシティを超えているので、早く新しい風が吹いて欲しいと確かに願った。

しかし、

「さあ、次はケイタの番だよ？」

「カタカタカタカタカタ」

「……ジョーカーか」

こんな針顔男の301番を待っていた訳ではない。

ヒソカと二人きりという鉄火場よりも更に状況が悪化するなどが想像出来るだろう。

今は大人しくババ抜きをしているが、いつ血生臭いスプラッター映画並みの展開になってもおかしくないのだ。

何故導火線に火が点いた爆弾を二つも抱えなくてはならない。

タワーから出るのを禁止にした試験官、アンタは絶対タワーを穴だらけにしたの怨んでいるだろ。

イジメはカッコ悪い。

「ねえ、ヒソカとこの子はどっいう知り合い？」

極度のストレスと25時間以上続けているトランプ地獄の所為で憔悴していた俺は、突如301番から発せられた言葉に直ぐ対応出

来なかった。

その声がイメージとかなり違うという現実もあり混乱しているよ、その質問待っていましたと言わんばかりにウキウキしている変態ピエロが言葉を発す。

「つーか、そんなことがどうでも良く感じるほど眠い。怖くて寝れないけど。」

「友達だよ？ クロロに育てられている子供なんだ」

「そっなの？」

「友達という部分を抜いて正解。つーか、クロロを知ってるの301番？」

本当にマシな知り合いがないなクロロ。

交友関係が壊滅的過ぎる。

「イルミ。俺の名前。でも今はギタラクルって名乗ってるから、呼ぶ時はそっちにして」

「あ、ハイ」

こう話してみると意外とまともな人みたいだ。

フランクリンやボノレノフと同じで、見かけで判断してはいけない人カテゴリーに入れておこう。

「暗殺者なんだよ？ 彼にとってクロロはお得意様なんだ？」

……広い世界には暗殺を依頼する雑技団も沢山あると思う。訂正、他にもあつて欲しいという願望です。

しかし何で暗殺なんか依頼しているのだろうか。

(商売敵を抹殺？ ……ありえるな)

そんな外道行為をしていると言われても全く違和感が仕事しないのが素晴らしい。

しかしクロ口達なら依頼せずとも自分達だけで始末出来そうだが、やはり社会的立場から公になるとマズイから、こうしてプロに依頼しているのかも自己分析を試みる。

どの道ろくでもない話だ。

「そういえばさ、クロ口達の雑技団って名前何て言うの？」

「雑技団？」

出会った当初から顔が揺るがないギタラクルが盛大に首を傾げている。

そんなギタラクルにヒソカが耳打ちして何かを話すと、納得したように彼は頷いた。

なんだか視線の意味が疑問から哀れみに移行したような気がするのは、きつと俺の被害妄想だろう。

「幻影旅団だよ」

「幻影旅団……幻影かあ……」

告げられた劇団名を繰り返す。

幻影のように謎に満ちた不思議世界を見せるために旅する一団とは、中々ファンタジックな名前だ。雑技団とマッチしていると思う。

このネーミングセンスから言って名付けたのはクロ口だろう。悔しいが良いセンスだ。

「……この子変わってるね」

「面白いだろう？ だからボクのお気に入りなんだあ？」

「頭をポンポンするな変態魔神」

早くシャワーを浴びなくては変態菌が俺の身体でバイオテロ又はパンデミックを起こす。

由々しき事態だ。

「でもさ、どういう経緯でヒソカとギタラクルは友達にギョえらあ  
あっ!?!」

「友達じゃない」

「おや、君も酷いなあ?」

お怒りと共に投げられた針が俺の右腕に突き刺さり、腕がどんどん異形と化していく。

どうやらギタラクルなる暗殺者さんは針で刺したモノを操作する能力を有する操作系能力者みたいだ。

幸い性質の悪い制約も無く、又は本人にとってはツツコミの域を出ない手加減攻撃だったらしく針は簡単に抜くことが出来て形も戻ったが、認識を改めさせられた。

やはりコイツも関わってはいけない危険人物の一人だ。

(早く……早く誰か来てくれ!!)

この願いが通じたのか、一時間もしない内に294番の御八ゲ様が登場して俺が感涙したのは言うまでも無い。



## 第五話 三次試験×近道×初戦闘（後書き）

次はアニメオリジナルストーリーの軍艦島。

あれは色々なアニメのオリジナルストーリーの中でも完成度が高く内容も濃いと思うのは自分だけでしょうか？

誤字御用脱字、御意見や御感想がありましたら是非ご連絡ください。

## 第六話 休暇×部屋割り×不穏な気配

「お待ちください。宿泊時前金として1000万ジエニー頂きます」

そうホテルの支配人夫婦の片割れ、妻のバーナーさんが言った瞬間、世界が凍りついた。

三次試験も終了して俺達合格者35人が連れて来られたのは軍艦島という自称由緒正しき高級ホテル。

青くて綺麗な海に囲まれた、廃船と化した巨大な軍艦をホテルに改造した素敵ホテルに宿泊し、三日後の四次試験を万全の体勢で望むことが出来ると思った者は出鼻を挫かれることになっただろう。

法外な値段を要求されて全員が言葉を失っている。俺以外。

「ほい、カードで大丈夫？」

「構いませんよ。……はい、確かに入金を確認出来ました。一等船室へどうぞ」

クロロから渡された金を大分使うことになったが構わないだろう。余ったら返せって言われているので存分に使って残高をゼロにしてやる。

鍵を受け取り、早くシャワーを浴びて寝ることにする。

三日もまともに寝てないから流石に死ぬ。

子供にこれは拷問だ。

「待て待て待てえっ！！ ケイタお前、なんつー大金をポンと払ってんだあっ!？」

「何だよレオリオ!？ 早く俺の手を放して野宿する場所でも探し



てなよ！？　いくら友達といえ立替は無理！　水と食料くらいは皆の分を確保するから諦めなさい！！　俺は早く休みたいの！！」

もう俺の体力はゼロに近い。

それでもごちゃごちゃ言っているレオリオが煩いので鳩尾に軽く一発かまして無力化し、バナーさんから鍵を受け取って俺は桃源郷へと羽ばたいた。

眠気がピークに達しており若干情緒不安定気味なので、正直最低限の手加減しか出来なかった。すまんレオリオ。

しかし、ふかふかベッドが俺を待っていると思うと笑いが堪えきれない。

断言出来る。今の俺は幸せです。

「ヤバイ……幸せ過ぎる」

貸し出された部屋のシャワーで汗を流し、ベッドにダイブしてから数時間が経過した。

今ふと目が覚めて窓の外を見てれば真っ赤な夕日が輝いている。

随分と寝てしまったみたいだ。

「さて、そろそろご飯食べに行こう。ゴン達四人の分も確保しないといけないし」

個人的には好印象の16番にも何かあげたい気もするが、それは頼まれたらにしようと思う。

これを皮切りに他の有象無象からも頼りにされたら困るし。

ヒソカとイルミは救済対象に入っていない。  
アイツらなら一ヶ月絶食でも生きていられそうだし、死んだら死  
んだで世界の幸福値が急上昇すること確かだから。

「やあ？」

バタン 扉を閉める音

フルフル まだ疲れているんだと頭を振って少しだけ現実逃避  
カチャ 気を落ち着かせ、改めて開錠

「良く眠れたかい？」

「カタカタカタカタカタ」

……なんか現状が悪化した。

何故、不気味生物が増殖している。

幻覚と幻聴が同時に起こるなんて俺も末期だと再度絶望していた  
ら、どうやらこれは現実らしい。

もしくはまだ夢を見ているんだと期待したらこの様だ。

状況を理解して直ぐに離脱。

しかし御馴染みのバンジーガムで捕獲された。

本当に何なんだこのストーカーは。

「嫌だなあ？ ここで出会ったのは偶然だよ？ ボクの部屋、ここ  
の右隣なんだ？」

「左隣」

「はあ！？ 何でお前らまでホテルに泊まれるんだよ！」

とりあえず逃げないからと約束してバンジーガムを解除して貰い、  
それから説明された内容を簡潔にすれば、別に現金じゃなくても現

物支給で良かったらしい。

渡した物品に応じて部屋は貸し出してくれたようだ。

こうして俺以外の受験生は周囲に転がっている難破船からトレジャーハントを試みて、今に至る。

どうやら俺の僅かながらの優越感は直ぐに空しいモノへとチェンジするらしい。

大金払ったのになんか納得いかない。

コイツに部屋がバレた時点で、さっさとこの高級部屋を放棄することになってしまったし。そもそも危険人物ワン・ツーに部屋を挟まれるなんて運が無さ過ぎる。

運が良いと思ったら直ぐコレだ。

「じゃあ俺、ゴンやキルアを探すから」

「ああ？ また遊びに来るよ？」

「……………」

無言で睨み付けてくるイルミが気になるがとりあえず無視。

爽やかに別れを告げ、ヒソカとイルミが見えなくなった所で脱兎の如く駆け出した。

幸い貴重品が入ったショルダーバックは常に携帯しているから、このまま退避するのに支障は無い。

一人部屋という餌で誰かを釣らなければ俺の命は無いだろう。精神崩壊という意味で。

「おお、やっと見つけた」

とりあえず人が集まっていそうな食堂に向おうとしたら背後から

声を掛けられた。

振り返って確認するが初めて見る顔だ。

歳は中年。

頭にターバンを巻いてゆったりローブを着ている103番は安心したような顔で俺に近寄って来る。

初めて見る蛇に少し興奮してハシャいってしまったのは内緒。

「おじさん、何か用？」

「ああ、実はお願いがあつて君に声を掛けたんだ」

何でもこのバーボンという蛇使いさんは俺と部屋を交換して欲しいらしい。

バーボンは二人部屋で相手はポンスという名の女性。

女性と相部屋というのは紳士道に反するから、子供である俺・ゴン・キルアに女性である80番を探して歩き回っていたそう。

まとも過ぎる理由にビックリです。

逆に良識人過ぎるから本心はどうなんだと疑ってしまった辺り、俺も軽く人間不信に陥っているらしい。

100%俺の周囲に群がる変人共の所為だ。

筆頭はもちろん変態奇術師。

しかし部屋割り交換は願っても無い。

こんな良い人をヒソカに生贄として差し出すことになるかもしれないのは罪悪感を覚えるが、俺は自分が一番可愛いので交渉成立。すまんバーボン。強く生きてくれ。

「おお、すまない」

「いえいえ。こちらこそ」

鍵を交換し、直ぐに教えられた部屋に移動。

ドアをノックし、若干警戒しているような返事が聞こえてから、部屋に入り込んだ。

中にいるのはピンクの服を着てチエスのポーンみたいな帽子を被っている可愛い系の美人。

でも軽く身体から薬品の匂いがするので、もしかたら毒女かもしれない。

薬に関しても一通り勉強していたが、まさかここで勉強成果が発揮されることになろうとは。

「さつきバーボンに部屋を替わってくれて言われて、承諾したから俺が新しいルームメイト。名前はケイタ、よろしくね」

ただでさえヒソカとイルミの所為でいらん噂が立っているので第一印象は良くしなくてはならない。

大変不本意だがパクノダ曰く俺は可愛いらしい外見らしいので、笑顔でいれば大抵の女性は警戒心を持つことは無いとのこと。

これで大丈夫だろう。

ちなみにクロロからは『それで女を誑し込めるなんて便利だな。

自分の都合の良いように相手を操作出来る顔なんて』と評価されたことがある。

心が腐っている発言だ。

「……………アンタ、あのヒソカと友達なのよね？」

「アレは不本意ながらも知り合いになってしまっただけでストーリーの変人。断じて友達ではない」

「苦労してるのね」

こんな台詞を毎回言っているのが悲しくなり、少し涙目になっていたら同情された。

俺の洗面を見て悼まれなくなったらしく、ベッドに座りながらポンスももらい泣きしている。

どうやらポンスもここに来る前はヒソカと同室で心に傷を負っていたらしい。

しかも部屋を交換してくれたのは16番。

無謀と言つ名の勇者だな。無事を祈っています。

かなり望み薄だけど。

それはともかく、こうして気が合いそうな良い人と同室になってので、今夜はヒソカに対する罵詈雑言と傷の舐め合いを肴に楽しく過ごそうと思います。

夜の帳が完全に降り切った二十時過ぎ、俺は一人でベッドに座り座禅を組んでいた。

これは燃<sup>ねん</sup>と呼ばれる念を使うための精神修養のことで、簡単に言えばただの精神統一。

やはり土台作りは大切だと思うから定期的に行っている。

俺は勤勉君なのだ。

特にここ数日は精神的に不安定だったので、ここらで一度心を落ち着かせようと思う。

ちなみにポンスは現在食堂に行つて食事中だ。

俺はこの部屋から一步でも出るとヒソカと遭遇する気がしてならないので引き籠もる。

円があるからどれだけ隠遁生活を遅れるか知らないが、地獄の襲来は出来る限り先延ばしにしたい。

本当はゴンやキルアの部屋を探して突撃をかましたいのに、どこまでも俺の邪魔をする奴だ。

「……また電話か」

マチからはこの前着たのでパクかシャル辺りかなと予想していたが、携帯電話のディスプレイを見て少し驚愕する。

着信主は意外な人からだったからだ。

「電話するなんて珍しいね。どうしたのクロロ？」

「ヒソカがいるというのは本当か？ それと、厄介な能力者に目を付けられたとマチから聞いたが」

心配してくれたのか現状確認をしたいのか、又は俺を苦しめる鬼畜命令を出すためのサツパリ分らない。

もう少し口調に抑揚を付けて感情を込めてくれたら判断出来るものを。

冷静沈着にもほどがある。

「……本当勘弁して欲しいよアイツには。そうそう、その厄介な奴はイルミって人だから大丈夫。クロロの知り合いなんですよ？」

「そうか……なら大丈夫そうだな」

そう、俺がクロロの養い子だと知られてからは unnecessary 殺気を向けるのを止めてくれた。

それ所か誰か殺したい奴がいたら連絡しろと名刺まで貰う始末。

俺からしても予想だにしない意外な展開で、しかも値段は特別に半額で良いらしい。

何でそこまでしてくれるのか訊いたら、クロ口の養い子だという事実とヒソカにストーリーキング紛いのことをされている現状に同情したかららしい。

現在ヒソカを抹殺して貰おうか本気で考えている俺がいます。

『それで、今はどこにいる？』

「今は三次試験が終わって、三日間の休息で軍艦島ってホテルにいる」

そのあと愚痴も続けようとしたらクロ口の呟きが聞こえてきてストップする。

『あそこか……確か今、その海域は……』とかブツブツ呟いて自分ワールド展開中。

これだけ聞くと不審人物みたいだ。

元々怪しいので今さらかもしれないが。

服のセンスは良いとしても上半身裸に直接コートはファッション的にも狂ってる。

やっていることは夜道に出没する露出おじさん一歩手前状態だし。

『俺を馬鹿にするとはいい度胸だな。帰ったら堅の修行だ。ウボオ

ーの【超破壊拳】を十発耐える』

「アンタは何回俺を殺すつもりなんだよ!? あんなの一発でも無理に決まってるじゃん!!!」

強化系を極めた奴の右ストレート（硬も施されたオマケ付き）を堅如きで防げる訳が無い。

数字で例えるなら堅は攻防50と呼ばれる状態で、硬は攻撃1



00に防御力0。

ただの堅では50ものダメージを受けてしまい身体は即破壊だ。元々の実力差もあるし、硬で防いでもダメージを負うというのにこの鬼畜イケメンは……。

それに何故考えていることがバレた。

声には出してないぞ。

もしやスキルハンターには読心の能力も保管されているのだろうか。

もしそうなら厄介過ぎる。

『まあ、その件は一旦保留にする。      ケイタ』

「な、なに？」

ここで少し間を置くクロロ。

嫌な空気がビンビンに伝わり、俺の危険レーダーがナニかをキヤツチしている。

とんでもない爆弾を投下されそうな気がして唇も乾いてきた。喉もカラカラ。

『死なないように気を付ける』

「はい！？    何でそんな不穏ワードが……って、切るなよ馬鹿！

不吉な言葉を残すな！    つーかさ、何か知ってるなら教えてくれたって良いじゃん！」

再び通話を試みるも電源が落ちていてかからない。

これでは心配して忠告したのか不安を煽りたかったのか分からないぞクロロ。

この暗い気持ちをどうしてくれる。

俺は三日間バカンスを楽しむ予定だったのに、これでは休息もま

まならない。

必ず何かしらの傷を残していく、まるで嵐みたいな奴だ。

「ちよつと、外まで怒鳴り声が聞こえてきたわよ!？」

「何でもないっス……」

食事から帰ってきたポンスが少しビビリ顔。

そして、その手にはバスケットが握られていた。

おお、まさかこれは。

「はい、これ。厨房に行つて少し貰つてきたわ。お腹空いてるでしょ?」

「……ヤバイ。随分久しぶりに人の優しさに触れた気がする」

この目尻に溜まる熱いモノは、きっと俺の感謝の気持ちだろう。

損得無しで優しさを施されるなど滅多に無いから俺の中でポンスの株価がうなぎ上り。

もう少し歳を食つていたら求婚していたかもしれない天使っぷりに惚れてしまいそうだ。

パンとローストチキンにシチューが死ぬほど美味かった。

「オーバーね。まあ、流石に空腹の子供をほつといて私だけっていうのも気分が悪いし。それに、食堂に行つたついでよついで」

そう照れたように明後日の方向を向きながら、慣れない手付きで頭を撫でてくるポンス。

同じ行為でもヒソカの頭撫では雲泥の差だ。

いや、比べること自体が女神（もちろんポンス様）に対する冒瀆だろう。

若干の恥ずかしさ、そして人情って良いなとしみじみ感じる。

……こうして一抹の不安を胸に抱えながら、今日も夜は静かに更けていく。

クロロの言葉の意味を知るのは、この十数時間後のことだった。

穏やかな眠りをフライングボディアタック+エルボーで叩き起こされた場合、一通り悶絶したあとにすることは一つだろう。

こんなことをやらかした馬鹿を殺す。

スピード裁判も真っ青な速さで死刑決定。

弁解する機会など与えない。

ここで殺してもハンター試験中だからという理由で不問に処されるし、それ以前に殺しても合法的な筈。

だからこれは正義の鉄槌だ。

俺は正義のヒーローでコイツは秘密結社の怪人。

「待つてケイタ！ それ以上やるとキルアが死んじゃうから！！」

「ゴン、俺だつて鬼じゃないって。謝罪の一つでもあれば軽く爪を剥ぐくらいで許すけど、それすら無いんだ。このお仕置きは仕方が無いことなんだよ、うん」

「首絞めてたら謝れる訳ないじゃん!？」

「……こ、この……あと、で……殺……す……」

「よし、その前に殺つてやる」

「だから待つてつてば！ キルアも喋る余裕があるなら謝つてよ！」

しばらくお待ちください

三途の川を渡りかけたキルアが数分後に復活して第二ラウンドを開始しようとしたらゴンがブチ切れて、その迫力が凄まじくキルアと共に冷や汗を掻き、心を一つにして停戦協定を締結。

それから十分が経過した。

現在はもう昼らしい。

昨日のボンズとの夜の会話が楽しくて夜更かししてしまったのだが、その影響がモロに出ってしまった。

現在は起こしに来てくれたゴンとキルアの案内の下、皆が居るといっブリッジに向っている最中である。

「え、支配人がどっか行っただ？」

何だか忙しそうなお人達と擦れ違ったり空気が緊張でピリピリしているのを訊いてみたら、かなり意外な返答が来てビックリ仰天。

それにキルアは呆れ顔。何故だ。

「そっだよ。三時くらいに飛行船でどっかに飛んでっちゃったんだ」「ケイタは気付かなかったのか？」

その頃はおそらく夢の中でフェイタンの【許されざる者】ペインバッカーを食らっていた頃だ。

そう、『あじと』で初めて料理を作り、それを食べた際の腹の痛みで激怒したフェイタンが暴走した時の幼い記憶。

一緒にいたウボオーとマチが俺を庇って外に連れ出してくれなかったら今頃俺はお星様の仲間入り。

四階建ての廢ビルである『あじと』が半壊していたし死亡は免れないだろう。

ちなみにその時の威力は『なかなかの威力だたよ』とフェイタンが自分の力に惚れ惚れしたほど。

受けた痛みとキレ具合で威力が変わるペインパッカーだが、思わず『ただけだよ』と呟いてしまったのを鮮明に覚えている。

その後には責任を取らされて『あじと』の掃除をさせられ、皆から懲罰を食らったのも。

よく考えれば、これがおそらくペテンティストを生み出す一番のきっかけだったと思う。

「……ケイタ、大丈夫？」

「顔色が悪いぜ？」

ここで声をかけられなかったらトラウマスイッチがオンになっていたろうから、素直に二人に感謝だ。

こうしている内にブリッジに辿り着き、そこではレオリオとハゲ様が真剣な顔で話し合っている。

クラピカの姿は無い。

「やっぱりそうだ。ここは危険な匂いがする！」

「危険？」

クロコの言葉もあるし、首を傾げているレオリオには悪いが俺もハゲ様と同意見。

しかし俺はさっきまで寝ていたため判断材料が欠けている。

これでは推理するのは無理だ。

「おお、やっと起きたのかケイタ」

「たくよお、こんな時に暢気なお子ちゃまだなチミは」

「頭を小突く暇があるなら今の状況を説明してよレオリオ。俺もハゲ様と意見は同じだから」

剃ってるんだ！というハゲ様の叫びは聞こえませんが。

ちなみに俺が敬意を込めて様付けして呼んでいるのはトリックタワー内で話し相手になってもらい、あの魔の巣窟から逃げ出すきっかけを作ってくれた恩があるから。

その時かなりのお喋りに付き合わされて別の意味で憔悴することになったが、あの状態よりは数倍マシだったので文句は無い。

そして簡単に説明して貰い、分かったのは計四つ。

一つは人数分のコンパスと次の試験会場であるゼビル島への地図が発見され、これを試験だと考えた受験生達が徒党を組んで廃船を修繕し、島に向おうとしていること。

二つ目はクラピカとハゲ様を筆頭に何人かが現状維持を決め込んで様子見。

更にポンズと53番が無線機の調子を見ており、何か受信出来るかもしれないということ。

そして一番重要なのは、宝物は全て置いていかれているという事実。

そこまで聞かされ、俺は直ぐに携帯電話を取り出した。

「ねえキルア、ケイタはどうしちゃったのかな？ 携帯電話を見詰めて固まってるけど」

「ああ、多分アレだ。まあ、もうすぐ分かるって」

そんな二人の会話が聞こえるが、今の俺は構っていられる精神状態ではない。

なぜなら、

「何で……何で宿泊料が返金されてないんだよ!?!」

こんなの絶対間違っている。

これでは本当に払い損だ。

絶対生き残って老夫婦またはハンター協会に抗議してやると胸に誓い、拳を天高く突き上げる。

この決意と想いは金が戻って来るまで絶対に忘れないぞ。だって、あんな大金をネコババする機会を得たのだから。

「……あれ、じゃあこの状況は逆に感謝すべき?」

クロロの所に戻る前に口座を作り、そこに送金させれば10000万丸々ゲット。

金がホテル代に消えたのはクロロも知っているため、きっと誤魔化せる。

ヤバイ、考え付いた俺は天才だ。

「……なあレオリオ、コイツって……」

「言うなハンゾー。きつと、まともな教育を受けられなかったんだ。

なにせコイツの親はヒソカと仕事仲間って話しだしな。気の毒なこ  
った」

そこ、うるさいよ。

「そういえば嫌な感じがするって言ってたけど、ケイタにも音が聴  
こえたの？ ほら、この音だよ」  
「音？」

ゴンに倣って海の方に耳を澄ましてみるが、穏やかな波の音以外  
何も聞こえない。

それはキルアやレオリオ、ハゲ様も同じ。

元々俺はゴンみたいな野生児ではないから五感是一般人より少し  
良いくらいなので、常識外れな五感を持つゴンと一緒にされては困  
る。

まあ、俺もある意味野生児だったが意味合いが若干違う。

結局、その音の意味を知るのは今から数時間後だ。



**第六話 休暇×部屋割り×不穏な気配（後書き）**

描写不足でアニメを見ていなかったら分からない所があるかもしれませんが。もしそうだったら申し訳ないです。自分の力不足です。

内容はアニメ18話から20話の内容になります。

軍艦島は次で終了予定。

誤字誤用脱字に御意見や御感想がありましたら、是非ご連絡ください。

## 第七話 災害×修繕×四次試験

「うお、竜巻なんて初めて見た！！ レオリオ！ カメラ持ってない！？」

「暢気に感想言ってる場合かつ！？」

昼の穏やかな海とは打って変わり自然の驚異を存分に見せ付ける姿に豹変した超大シケに、夜で視界が薄暗い中、ブリッジに出て海の状態を確認している俺達の眼前数kmの所に現れた大竜巻。

ゴンが昼間に聴いていた音は、この10年に一度の天体現象異常気象による大気の変化と水位の上昇を予知したものだのだ。

そして、今まさに一足早くゼビル島に向おうとしていた数人が竜巻に飲み込まれた。

確認するまでもなく生存は絶望的。

……まあ、それはどうでも良いとして、ツッコミをするついでに頭を叩いてくるレオリオの攻撃を最近避けられなくなっているのは何故だろう。

なんだか身体が避けることを拒否しているみたいで、自分のことながら少し恐ろしい。

心境に変化があるみたいだ。

「ケータイにカメラ付いてんじゃないの？」

「おお、ナイス助言」

「だああっ！ おいキルア！ なにお前まで悠長に構えてんだよ！？」

レオリオの叫びはほつといて、携帯電話を取り出して早速数枚をデータとして保存。

流石はシャルの手作り、中々の画質だ。

「別に大丈夫だって。見た感じ竜巻はこっちにこないし、ここなら安全じゃん。だからケイタも楽しそうに撮影してんだよ」

そう、この巨大で頑丈な軍艦なら大嵐も耐えられる。

幸い竜巻はこちらにこないなので、俺もこうして平常心を保っていられるのだ。

レオリオはそこら辺の状況判断力に欠けている。

まあ、その分コンビを組んでいるクラピカの知力、ゴンの発想力がズバ抜いているから、あまり心配はしていないが。

「ゲレタ！」

唐突に叫んだ118番の猿使いソミーの視線を追えば、小型のモーターボートが波に攫われている。

乗っているのは384番の黒人受験者ゲレタ。

必死に抗っているが舵は利いていない。

アレはもうダメだ。現に受験生全員が諦めている。

その時だった。

ゴンがゲレタを救出するために海へ飛び込んだのは。

「ゴン！」

「あの馬鹿……ッ……！」

思わずキルアと共に悪態を吐いてしまい、追おうとするもハゲ様やクラピカに止められる。

同時に、ブリッジにも少し被害が及んで来た。

「海面が甲板を超えるぞ！」

「全員艦内退避！急げ！！」

ホテルに残った俺も含めて二十五人のメンバーで決めた副リーダーのクラピカ、そしてリーダーであるハゲ様の命令に従って艦内に皆が逃げ込む。

しかし俺は逃げられない。

友達がピンチなのだから。

「ハンゾー！ ボートだ！！」

「行くぜっ！！」

クラピカ達と備え付けのボートに向かい、一足早くキルアとハゲ様がボートに乗り込む。

それに飛び込もうとして、俺よりも早く乗り込む二つの影があった。

銀髪を後ろに括ってまとめている洪めのおじさん、191番のボート。

槍を所持している黒髪セミロングのおじさん、371番のゴズ。

共に体力自慢の武道派コンビで、オール漕ぎを買って出てくれたのだ。

なら、残された俺にもやるべきことがある。

「クラピカ！ ロープってどこにある！？」

「安心しろケイタ！ ほらよー！！」

「よし。キルア、ロープだ！」

珍しく冴え渡っているレオリオが数百mはありそうなロープを一抱え持つてきて、クラピカがそれをボート組に伝える。

こうして救助用のロープを積んだ救助船は大海に身を投じた。幸いなことにブリッジまで到達している波は足首ほどまで。

今が絶好の時。

「俺、人を呼んで来る！」

これから綱引き作業に入るのに、三人では数が足りない。

だが艦内に向おうと踵を返す寸前でレオリオとクラピカの二人に肩を掴まれる。

意味深な笑みを浮かべている二人の言いたいことが伝わり、自然と俺も微笑んでいた。

二人が指差す方向にいたのは艦内に避難したメンバー全員が立っていたのだ。

いや、ヒソカとイルミの姿は見えない。

しかしあの異常者コンビが来てもチームワークを乱すだけなので、これはこれでOK。

とにかく皆がピンチに駆け付けてくれたのが嬉しい。

周囲は皆ライバルなのに一致団結しているこの仲間意識。人間の美しさが感じられる光景だ。

こうして救助船とモーターボートが上手く合流したのを見計らい、大自然を敵にした決死の綱引きが開始された。

あのあとゲレタの救出に成功した俺達は操舵室に集まり、強風と荒波が波状攻撃を繰り返す中、軍艦内で嵐をやり過ごして夜を明かした。

夜の荒れ模様が夢と疑ってしまうほど海は穏やかで、窮屈な思いをしていた俺達は青天の下、一度ブリッジに足を運んで伸びをする。

皆が危険な夜を生還したことに安堵している中、暗い表情をしているのはクラピカただ一人。

その手に握られて読んでいるモノは、ゴンが見つけた館長の航海日誌。

「安心するのはまだ早い。二十四時間後、第二波が来る。しかも今度は……」

不穏な言葉を口ずさみながら視線を上げ、見詰める先は軍艦のてっぺん。

見れば艦壁にはフジツボが付着している。水位が上がるってレベルじゃない。というか試験官。マジで殺す気か。

「こ、こんなところまで来るってのかよ？」  
「マジですか」

レオリオと一緒に呆れ声を呟いてしまう。しかし、クラピカは首をゆっくりと振った。

「いや……二十四時間後、この海域から全てが消える……」

……どうやら、俺達に安息はまだ訪れないらしい。  
今になってクロロの言葉がじわじわと心に浸透していった。

第二波が来るまで二十時間を切った。

それまでにこの海域から脱出してゼビル島に行かなくてはならぬのに、昨日の嵐で船は全滅。

仮にあったとしても、ここから一日あれば行ける距離に位置するという島に今から向ってもタイムアップ。大シケ中に航海する羽目になり転覆するのは明白。

一つしか無かった気球もアモリ三兄弟という三人コンビが昨日の嵐でダメにしたらしく、空から向うのも無理。

八方塞とは正にこのことだ。

しかし、こんな絶望的な現状の中、まだ諦めず未来を見据えている者がいた。

「船ならあるよ！ この船があるじゃない！！」

そう言ったのはゴンだった。

何でも完全にボロ艦だと思っていたこの軍艦は、ゴンとキルアによればまだエンジンが生きている状態らしい。

機関部のメインエンジンを修理し、各部の動力ユニットに電力を供給すれば、この軍艦は息を吹き返す。

これが、俺達に残された最後の希望だった。

生き残ったメンバーで一時間かけて艦内を搜索し、問題点をあげていくことで大体の方針は決まった。

この軍艦は先頭部が岩壁に突き刺さっているし、島との連結部分も外さなくては動くことが出来ない。

しかしそれは、この艦の主砲と四十cm砲四門による一斉射撃で岩壁を破壊し、連結部分は保管庫にあった未使用の火薬で爆破することで問題はクリア。

ちなみに主砲の弾はレオリオがお宝探し中に海底で発見したとのこと。

潜水服もあるので都合だ。

そしてあとの問題は、ホテル用に改造された軍艦なため幾つかの部屋や浸水部分も爆破し、所々に海水を送ってバラスト代わり。つまり重しにしてバランスを調整することと、スクリューに絡み付いている海藻類の除去。

あとは主砲や各部の簡単な整備。

以上のことを何とか出来れば、俺達はこの軍艦に乗ってゼビル島へ旅立てる。

「……つまり日没に作戦決行。波が荒れてきて、水位が上昇するのを見計らって岩壁と連結部分を破壊。その反動とメインエンジンで推進して、岩礁地帯を一気に切り抜けると」

「その通りだ」



我ながら簡潔なまとめ方だ。

クラピカもよくまとめくれた的な表情をしているので、煌びやかにサムズアップをしておこう。

……無視された。

「メインエンジンは私とポツクルがやるわ」

「爆発物は俺に任せてくれ」

機関部に向う事になった53番のチビ狩人ポツクルと、俺の女神ポンス様。

105番で赤っ鼻のキュウをリーダーにした爆破部隊。

砲弾を回収するレオリオや、操舵方法などを理解するクラピカ。

ハゲ様中心で各場所を整備するグループなど、スムーズに役割が決まっていく。

あと役割が無いのは俺達子供三人衆と、ここにはいない変人コンビくらいだ。

「スクリユーの方は俺達三人が担当するね」

「ええ〜!? ダリいよそんなの!」

「良いじゃんやろうよ! ねえ、ケイタは良いよね?」

「おうよ」

キルアは不満たらたらという顔をしているが、ニートは嫌なので俺は文句無い。

自分だけ何もしないというのは目覚めが悪いし、肺活量には自信があるので適任だと思う。

これで全員がやる事が決まった。

さあ、あとは時間との勝負。

しかし、やる気を出した俺に待ったをかける人物が一人。

「ああ、すまんがケイタには別にやってもらいたいことがある」

「……特別任務？」

「そう思ってくれて構わない。お前にしか出来ない仕事だ」

リーダーから直々の任務がこれほど心を躍らせるものだとは思いませんでした。

誰かに頼られるのは気持ちが良い。

そんな期待に胸を躍らせている俺にハゲ様が告げた任務とは、

「お前さんには、ヒソカとギタラクルへの協力要請の勅使になってもらう」

「……意味分かんない……」

……いや、意味は凄く分かる。

猫の手も借りたいだろう状態なので変人達にも手伝うよう協力を要請する交渉人は、大変不本意ながらも俺が一番適任だ。

しかし、必要性は分かっているにもかかわらず二人の下へ向きたいと思う変人になつた覚えは無い。

……それよりも俺の周囲は気軽に死刑宣告する馬鹿が多すぎる。

何故、毎回毎度俺が被害に遭わなくてはならない。

「いやいやいや！ 良いじゃん二人はほつといても！！ つーかアイツらが来るとチームワークが乱れると思います！！ 一緒に行動する人のことも考えてあげてよ！！」

「大丈夫だケイタ。もしあの二人が協力してくれる場合、一緒に行動するのは君なのだから」

「クラピカまで俺を生贄扱い!？」

何たる裏切り。

初対面の時に女性と勘違いしたのをまだ根に持っているのか。嵐で死ぬ前にシヨツク死または変死する確率大だぞ。

俺は老衰で逝くと決めているのに。

「……そうだ! 俺には汗水垂らして働く皆の食事を作るという重要任務があるじゃん!」

やはり忙しい時こそ食事を欠かしてはいけないだろう。

ちゃんと食べて体力を付けなくてはいざというとき動けない。

幸いな事に食堂にはまだ食材が残っているので、片手で食べられるものくらい沢山作れるのだ。

俺以外に料理が出来る者もないし、この意見は通る筈。

「そうだな。それじゃあ食事も頼む」

「大変だろうが皆のためだ。すまないが宜しく頼む、ケイタ」

……藪蛇だった。

更に仕事を課すとは悪魔か己ら。

ハゲゾー（もう様付けなんて必要無し）もクラピカも酷過ぎる。

「行くよキルア!」

「ああ! 俺達にはやらなきゃいけない仕事があるしな!」

「おし、さっさと大砲の弾を拾いに行かねえとな。おいゴン、潜水服はどこで見たんだ!？」

「時間が無い。皆、急いでくれ!」

助けを求めようとした瞬間に視線を逸らして操舵室から退室する

仲間達。

五秒もしない内に残るは俺一人となった。  
ちようど吹いた隙間風が冷たいし、心も寒い。

「……友達つて何だろ？」

涙を流しながら艦内を放浪する子供というのは中々シユール……  
ではなく、端から見ればただの迷子。

まあ、ここにいるのは事情を知っている外道共だけなのでツッコ  
ミを入れてくれる人もいないけど。

こんなどうでも良いことを考えるくらい俺の心は乱れているよう  
だ。

それでもしつかりと二人を探すのだから、なんという自己犠牲精  
神。自分のことじゃなければどんなに良かったか。

こんな風に錯乱しながら放浪すること数十分。

幾つかある甲板でなんとか二人を発見。

ああ……見つけてしまった。

「どうしたんだい？ 随分、艦内が騒がしいようだけど？」

「カタカタカタカタ」

「皆このボロ艦を修繕するのに大変なの。だから二人とも手伝って  
よ」

表ではちゃんと交渉人になっている俺だが、もちろん裏では断れ  
と念じ続けている。

断わってくれれば一人で行動出来るという素敵タイムが待ってい  
るのだ。

安息のためにも断わってくれ。

「いいよ？ 他ならない友達からの頼みだからねえ？」

「カタカ……まあ、良いか。暇だし」

「何でそこで善人になるんだよアンタら！？」

そんな協調性はいらぬ。

無茶だと思うけどここでのチームワークを理解してほしかったです。空気を読めないのかこの二人。

それに、コイツらの善意が悪意にしか見えないのは何故だろう。失礼だと思いがそう思えてならない。

「ああ、クラピカ？ 二人とも協力してくれるってよ。どこの援護に行けば良い？」

艦内の至る所に設置されている連絡管で操舵室のクラピカに連絡を取る。

幸いなことに返答は直ぐにきた。

他の所からの連絡と一緒に。

「キユウだ。こちらに来られても俺達が作業に集中出来な……いや、人数は充分足りているから、是非他の所に回してくれ」

「こちらハンゾー。俺んともキユウと同じだ。……ゴンとキルアのところは二人で大丈夫だし、潜水服は一つしか無いからレオリオの作業も手伝えない。ここは機関部に」

「絶ツツ対に嫌！ ここは私とポツクルで充分よ！！」

「……とのことだ。ちょうど昼時だから、ケイタ達は昼食を頼む」

「……………俺、探す必要無かつたじゃん」

理不尽。

この一言で世界を表現出来るとは、なんと酷い世の中だ。

だからチームワークを乱すだけと忠告したのに。

皆に裏切られて十数時間が経過した。

あのあと俺が作ったオニギリ各種を数個ずつ皆に運んだり、ヒソカとイルミに不必要なちよっかいを出されて軍艦内を鬼ごっこする羽目になったり、海底でトラブルが発生してゴンがレオリオを救出しに行ったり、岩礁に乗り上げた衝撃でクラピカが転倒、気絶したのでイルミが舵を取ったり、波に攫われたゴンをヒソカが救出したりと、様々なことが発生した。

話すと長いので割愛させてもらう。

しかしチームが一丸となって大自然に勝負を挑んだ結果、今俺達はこうして朝日を拝んでいる。

あの嵐を乗り切り、俺達は海域を脱出したのだ。

変人達に最後美味しいところを持っていかれたのは凄く腹が立つが、こうして無事だったのだから今は忘れよう。

ハゲゾーもリーダーとして礼を言う綺麗にまとめたことだし。

「見るよ。お迎えだぜ」

キルアの見る方向にはハンター協会の飛行船。

どうやら俺達は無事に合格したらしい。

とにかく、一人も死傷者を出さずに済んで良かった。

やはり人死には無いにこしたことは無いのだから。

「さて、これで残すはあと四次試験と最終試験を残すのみとなったが、その前に君達にはクジを引いてもらう」

「はいはい質問！ ゼビル島でやるのが四次試験だったら、あの休暇は何だったん！？」

無事試験官達と合流し、島に到着するまで一時間と迫った今、俺達受験生は未だに乗船している軍艦のブリッジで四次試験の説明を受けていた。

俺の質問に賛同の声上がるのは当然だろう。

まさか本当のトラブルだったのかと一瞬思ったが、老支配人二人が避難したのでそれはない。

ならあの試験もどきが意味不明だ。やる必要性が感じられない。

そんな質問に、パイナップルみたいな髪型をしているチビ試験官リッポーさんは大きく溜め息を吐いた。

「……三次試験でどっかの誰かが地上近くまで穴を掘ってショートカットを強行してしまい、その穴を通って予定より多くの受験生が合格したため、人数を減らすために急遽ボーナスステージを用意する必要があったのだ」

……ここにきて俺の所為というオチは考えていなかった。

っーかマジかい。

周囲が色々とぼやいている謎の人物Xに対する罵詈雑言が耳に痛

いいし、まったくなんて展開だ。

それとヒソカ、お前は笑うな。

「さて、ではタワーをクリアした順にクジを引いてもらう」「では、ヒソカさんからどうぞ」

そんな雰囲気打ち消す笑みを浮かべているアシスタントのカラさんの指示に従い、ヒソカが箱の中からクジを引いていく。次は俺そしてイルミ。

こうして数分間に受験者二十五人全員が引き終わり、試験内容が説明された。

その内容とは一言で表せば人間狩り。受験生のナンバープレートを奪う争奪戦だ。

合格に必要なプレートは六点分。

引いたクジに書かれた番号が自分のターゲットで、これは一つで三点。

自分自身のナンバープレートも三点。

それ以外のプレートは全て一点にしかない。

つまりこの試験は、クジに書かれた番号のプレートを受験生から奪い、自分のプレートを死守するのが一番手っ取り早く、合格への近道ということだ。

ちなみに試験時間は一週間の長丁場。

……ターゲット以外のプレートも点数になるので、かなり死人が出るだろう。

主に変態奇人の所為で。



「では、島に着くまで各自自由時間とする」

解散を言い渡され、各々が好きな方へ散らばっていく。  
パツと見渡したところ、もう全員ナンバープレートは隠し済みで  
仕事が速い。

「まあ、俺は誰だか分かってるし良いんだけど」

クジを手の中で弄びながら歩き、ゴンとキルアを発見。

ちようどターゲットを教えあったところらしい。

俺も情報交換しようと思う。

「あ、ケイタのターゲットは誰だった？」

「ゴンのターゲット、あのヒソカなんだぜ？ホント、クジ運悪いよ  
な」

「悪い事は言わないから他の奴を三人狩りなさい。絶対そっちの方  
が難易度低いから」

ちなみにどのくらい低いかと言うと超が五個付く簡単と、超が十  
個付く難関くらい差がある。

しかしゴンは出来るだけ頑張ってみる。奪うだけならチャンスが  
あるとポジティブ思考を爆発させている。

このままだとゴンまでヒソカとイルミに次ぐ変人カテゴリに分類  
しなくてはいけなくなりそう怖い。

一人の友として、頑張っていていつか軌道修正しようと思うが、どう  
しても成功するビジョンが思い浮かばなかった。

キルアはとうに諦めているのか首を振っている。

お前も苦労しているな。

「で、キルアは誰？」

「知らねえ。いちいち番号なんて覚えてる訳ないだろ」

適当に三人狩る気であるのか、キルアは興味が無そうにクジを俺に放ってくる。

書かれている番号は199番。

「これ、あの三人兄弟の誰かだよ」

「……お前、まさか全部覚えてんの？」

「軍艦中を走り回って色んな人に配膳してたから、なんとなく頭に残ってんの。兄弟っていうのも印象強かったし」

「へえー、凄いよケイタ！」

そう言っただけキラキラと尊敬の眼差しを向けるゴン君。今の姿を見れば変人候補なんて誰も思わないだろう。そのくらい純粹少年と化している。

少し羨ましい。

俺は少し汚れていると自覚があるから。

「で、ケイタはいつたい何番引いたんだよ？」

自分だけ教えないのはフェアじゃないのもちろん見せる。

俺の引いたクジに書かれていたのは384番。

ゴンが嵐の中助けた黒人受験者ゲレタだ。

印象深い個性的な髪型もしていたしよく覚えている。

武器は棍棒と吹き矢を兼ねたものらしいが、あれくらいなら念無し俺でも余裕。

正直この試験、俺はあまり心配していなかった。

それよりも心配なのはゴンだ。  
下手したらこれが今生の別れにもなりえる。  
無事に生還してほしい。

「まあゴンよりは楽勝。それにしても、ゴンってクジ運が破滅的に悪いね」

「ゴンよりも悪いのは、ヒソカのターゲットになった奴だけだろうからな」

「あはは……でもさ、ヒソカのターゲットって意外とケイタだったりして？」

「恐ろしい死亡フラグ立てるのやめてくんないっ!？」

こんな話をしたらその通り現実になるという世界の法則を知らないのか。

あんな奴に狙われるなど命がーダースあっても足りはしない。

他人の言動で立てられる死亡フラグなど勘弁だ。

日常生活でも半ば獲物と化しているのに試験でもターゲットにされるなど、想像するだけで発狂しそう。

「……ダメだ。なんか悪い予感しかしない」

「くつくつく……本当、君はボクを退屈させない？」

ちょうどその頃、そう呟いたヒソカの手には300番と書かれたクジが握られていたのを俺はまだ知らない。



## 第七話 災害×修繕×四次試験（後書き）

そんな文章力で何言ってるんだ貴様と思うかもしれませんが、少しスランプ気味です。

すみません。アニメの内容だから知らない人も多いと思ってちゃんと描写しようと思っていたのですが、かなり必要最低限の描写しかしてませんでした。

軍艦島の話は少し省略し過ぎたかなという自覚はあります。今すぐではありませんが、もしかしたらこのストーリーだけ加筆修正するかもしれません。

別に読み返すほどの内容にするつもりはありませんのでご安心を。しかし、分かりにくくて本当に申し訳ありません。

次からは気をつけます。

では、誤字誤用脱字、御意見や御感想がありましたら是非ご連絡ください。

## 第八話 遭遇×不運×サバイバル

ついに始まった四次試験、ルール無用のプレート争奪サバイバル戦。

一週間にも及ぶ長期戦で最初の行動は、いったい何が一番効率的で未来を見据えている作戦だろうか。

食料の確保。ターゲットを待ち伏せ。

行う事は多岐に亘り、最善と思われる選択肢は幾つもある。

断じて、

「待っていたよ？」

断じて、目の前の変態奇術師から逃げることはない

「ちつくしよおおおおっ！！」

しかしそう言っている場合でもなく、島に上陸して十秒後。

俺は目の前の絶望から逃避するため風と化した。

俺が島中を走り回って一時間が経過した。

あの化け物から逃げるため敢えてブッシュや木上を移動し、少しでも姿を隠せたら絶で気配を消す。

それをひたすら繰り返し、機会を見計らって大きなブッシュの中に身を屈めて息を殺す。

そのまま全神経を気配絶ちに努めて長時間過ごし、空が夕闇に染まり始めた頃。やっと逃げ切った確信を持って心の底から安堵の息を吐けた。

ブツシュから身体を出し、数時間身動きしなかったためガチガチに固まった筋肉を解すため、大きく伸びをする。

好きに動けるのが心地良い。

心は晴れてないが。

「くっそ、あの変人が待ち伏せしてた所為で計画が台無しだ」

島に上陸する順番はトリックタワーを攻略した順なので、俺はヒソカに次いで他の皆より早く島に降り立った。

その絶対有利な状況を最大利用するために身を潜め、後から上陸するゲレタを待ち伏せしようと思っただけならこの様だ。

そう、ヒソカも待ち伏せする可能性があるのを考えなかった俺のミスだが、何もわざわざ待たなくても良いだろ。

「しかもからかい半分で……ホント、害しかよこさないよアイツ」

もしヒソカが俺を本気で追う、もしくは逃さない気でいたのだとすれば、今こうして逃げきれている筈が無い。

戦闘・身体能力・念、全てに於いて俺はアイツより劣っているのだから。

アイツと最後に会ったのは一年ほど前なので、少しは実力も追いついたと思ったら自惚れも良いところと思いきらされた。

別にアイツをライバル視している訳では無いが、何度もボコされて死にそうになった身としては勝てないことが悔しい。

復讐と迎撃の力を身に付けたいと少しくらいの意欲はある。

男として、最強を求めるのは男のロマンでもあるし。

……まあ、最凶家族というバグキャラが存在するため最強計画は修行初期で頓挫することになったけど。

お陰で堅実的な夢しか見ない冷めた子供になってしまった。

やはり幼い内に世界の真実を知りすぎるのは教育的に良くない。

クロロの下で育つという時点で道徳に喧嘩を売っている状態だから、考えるまでも無く当たり前前のことだが。

「とりあえず、動くのは明日からでいいか。寝る場所確保しよう。それで、明日は水場を探しながら人探し」

水を確保しつつゴン達と変人生命体以外の誰かと出会えば即戦闘と方針を決め、市販されているクッキータイプの携帯食料を一齧り。

ヒソカとイルミに出会わないようにと神に祈り、円の重要性を思い知らされながら、俺は適当な木の幹に背を預け、明日のために少し早めの就寝タイムと洒落込んだ。

初日は逃げ回るだけで一日が終わってしまったが、無事サバイバルも二日目に突入した。

日の出が大分昇った頃に目を覚まし、途中で食べられそうなキノコを幾つか採取して水辺と人を探す。そうして歩くこと一時間。

そろそろ朝食兼昼食を作ろうかと思って薪を探し、ついでに待ち望んでいた音が聞こえて喜んでいたら、ついに俺は受験生の姿を目撃することになった。

「あれって……確か80番のスパークだったよね？」



前方数十m先にある樹木に登り、愛用のスナイパーライフルを構えているクール美人の名はスパー。

軍艦島では砲撃を担当していた狙撃のスペリヤリストで、針の穴狙いで軍艦が刺さっていた岩壁の破壊をしていたことから腕前は折り紙付き。

そんな生粋のスナイパーの構えているライフルの銃口は、俺の方を向いていない。

「……か俺の存在にも気付いていない。」

「まあ、気付かないのは当然か。絶してるし」

水の流れる音が聞こえて来てみれば、なんとという棚からぼた餅。早くも一点ゲットだ。

「……今っ!!」

スパーは誰かを狙っている。それはこちらが攻撃する最大の好機。スパーの動きに集中し、引き金にかけた指に力が入って殺気が生じ、島中に浸透するような銃声が轟いた瞬間、木の真下まで移動していた俺は垂直に跳んだ。

足に全オーラを集中すれば20mの跳躍など造作も無い。弾道ミサイルの如き速さで跳躍した俺は、一瞬でスパーとの距離をゼロに縮めた。

そして相手が気付く暇も無く、俺の拳はスパーの腹にめり込んでいる。

ちなみに念は使っていない。

しかし基礎体力作りと筋トレを欠かしていない俺の攻撃でも、スパークらしい意識を奪うには充分過ぎるほどの一撃だ。

「これで一点ゲット……って、によわっ!？」

急に殺気を感じて振り返れば、そこに現れたのは丸い持つ場所が付いた数本の針という悪夢。

物凄く見覚えがある針に全身から冷や汗が噴出した。

その本能から湧き上がる危険信号を押し殺しながら顔を逸らし、身体に当たる部分は具現化したスプーンですくい取って攻撃を回避。投げた先にいるのが俺だとは思わなかったのか、周しゅうと呼ばれる物品に念を込めて強化する纏の応用技を使われていないのは幸いだっ  
た。

念の込められていない投擲武器など脅威になりはしない。

「待ってイルミ! ……って、待ってって言ってんじゃん! 聞けよ人の話っ!！」

どこから跳んで来たのかは知らないが、俺を目視したにも関わらず針を持ちながら離れた木の枝に着地し、殺気に向けながら一直線にこちらへ跳んでくる。

その弾丸みたいな洒落にならない速度で迫ってくる変態から逃れるため、イルミの突きが俺の身体ごと木を貫く前に、スパーを抱えて枝から飛び降りた。

ちなみに再度放たれた針をスプーンで迎撃しながら。

そんな俺に感情の読めない表情を向け、手を木から引き抜いてから華麗に地上に降りて来る暗殺者。

ぶっちゃけ噴出しているオーラとかが怖くて、俺の膝も恐怖で笑い出す一歩手前。

「何で攻撃してくんの!？ 俺ってイル……じゃなかった、ギタラクルのターゲット!？」

「……何で？」  
「質問に質問で返すなよ！！」

ダメだコイツ。俺の話術では言葉のキャッチボールを成立出来ない。

質問の意味が分かっていない俺に対し、イルミは針を持っていない右手で指を指す。

その方向にいるのは、俺の抱えている気絶したスパークだった。

「何でソイツを助けたの？」

「……あー、何でだろ？」

正直自分でもよく分からなかった。

しかし推測は出来る。

おそらくポンズの影響だ。

初めて女性らしい女性を見て、俺の中に困ったりピンチに陥っている女性を見捨てておけないフェミニスト魂が生まれているのかもしれない。

優しさに触れて人に懐くなど自分でも予想外だったので、多分イルミよりも俺の方が驚いている。

そんな答えになっていない答えに一応納得したのか、イルミから疑問が解けたという空気が伝わってくる。……相変わらず殺気は解かれていないけど。

そして円を発動して周囲に人がいないことを確認してから、イルミは顔に刺さった針を抜いて……って、

「何その顔！？ え、もしかしてそれが素顔……えー……？」

顔の針を全て抜いたらビツクリ仰天。  
不気味モヒカンが素敵キューティクルな黒い長髪を持つ、猫みた  
いな眼を持つ美系顔にチェンジしていた。  
これなら地声にも納得だ。

顔を変えたのは変装のためだろう。  
暗殺者だし顔をバレないようにするのは良く分かる。  
しかし、顔をチェンジ出来るのにモヒカンをチョイスするセンス  
はクロロと同じで破滅的。

類は友を呼ぶとは上手い言葉だ。

……俺は違う、類じゃない。誰が何と言おうと全否定します。

「で、何で襲ってきたの？」

「別に。たまたま攻撃した方向に君がいただけ」

「なら俺を確認した時点で攻撃止めてよ！ 心臓に悪過ぎるわ！！」

ターゲットでも無いのにイルミと戦闘など死んでもゴメンだ。

もしこれがヒソカと同じで自称ただの茶目っ気行為だとすれば色  
々文句を言ってる。

反撃されたら怖いので手は出さない。

これはチキンではない、戦略的撤退というとても真つ当な理由だ。

頭の中で色々が悪口をピックアップしながら俺とスパイがターゲ  
ットなのか訊いたら、違うよと首を横に振る変人二号。

じゃあ何なのさ。

「ターゲットと対峙している時にソイツが俺を殺そうとしたからム  
カついてね。ターゲットにも逃げられたし」

「……いやいや、じゃあ俺にも殺気を向けてる理由は？ 腹いせに俺のプレートまで奪うつもりですか貴方様は！？」

そんな弱いものイジメは良くないと思う。

そう不満を胸中でぶちまけている俺を見ながら、イルミは右手を自身の顎に当てて凄く思案顔をしている。

ギタラクルフェイスと同じで表情が変化しないポーカークフェイスでいるが、世間一般的に知られている思案ポーズを取っているから辛うじて心境が把握出来た。

そして長いこと自分世界に入っていたイルミから、全く想像にもしていない場違いな質問が下される。

「ねえ、君は99番をどう思ってる？」

「キルア？ 一緒にいて楽しいし嫌いじゃない……軽い喧嘩友達って感じ？ 本当に軽くだけど」

あのホテルでの理不尽目覚まし以来、俺とキルアはよく冗談と本気混じりで技を掛け合っていることが多い。

よく考えれば最初に出会ったマラソンの時もそんな感じだったし、今後も同じ感じで俺達の関係は続いていくだろう。

ゴンが無茶を言っつて無謀な行動を繰り返し、基本的に良識人なキルアがストッパー役になって世話を焼く。それに俺がちよっかいを出したり一緒に馬鹿をやって楽しむ。

そんな関係がずっと続けば良いと思う。

キルアも友達がいなかったみたいだし、実力も近い所為か俺達は気が合った。

「……………」

至極真面目に考察して素直な意見を言った俺を無言で睨み、先ほどと比べて五割増しぐらいの殺気をぶつけてくる美系変人。

クロロ達との修行で浴びせられた殺気も相当だったが、これもまた心臓を握られたと錯覚してしまう程の凄まじい怖さだ。

いったいどこで死亡フラグを立てたんだ俺。何がお気に召さない。

「殺し屋に友達なんて邪魔なだけだから。ヒソカとクロロには悪いけど、危険な芽は摘んでおかないと」

「なんつーありがた迷惑!？」

しかも何故キルアのためにそんなことをするのか理解不能。

けど、とても訊ける状況ではないので黙っている。

それよりもこの危機的状況を何とかしなければ俺の命が無い。

やはり自分の命が一番大事だ。

そのためにも、なんとかしてイルミの殺害意欲を殺がなければ。

「つーかさ、何で殺し屋に友達がいたらダメなんだよ？ 良いじゃん別に。そういう付き合いつて大事だと思うよ俺は」

だから俺を殺そうとするな。

ほら、だから針を仕舞ってください頼むから。

「良くないね。友達の所為で仕事や心構えに支障が出ても困るし。それに、もし仕事で友達の殺しを依頼された場合、躊躇われても困る」

……その時は依頼を断れば良い、なんて訳にはいかないんだろ  
うなきつと。

それにしても、そう言われると否定するのがキツイ。  
特に前者の理由がネックだ。

ゴンと一緒にいたらキルアは多分モロに影響を受ける。  
それ程アイツは俺達裏の世界の住人にとって眩しい存在だし、ど  
こか人を惹きつける魅力もある。

現に俺がポonzの所為で考え方が変わったという事実があるし、  
元々キルアは殺し屋生活が嫌で家出したんだから、もう既に手遅れ  
な気がしてならない。

しかし口八丁で煙に撒かなくては俺が死ぬ。

10歳という短い生涯を終えることになった、なんて死亡ルート  
はゴメンだ。

「いや、俺は友達って言うてもライバルってルビが付いた友達だし  
！ ほら、念はともかく素の実力は拮抗してるからさ、キルアのた  
めにも切磋琢磨出来る相手って必要だと思っよ！？ 俺を完全に負  
かすために今まで以上にキルアも修行すること間違い無し！！ こ  
んな良物件は他にありません！！」

「……確かに、一理あるね」

鋭く尖った爪を携えた貫手が俺の眼前で停止する。

針を投げた隙を狙って接近とは……分かってはいたけど身体が反  
応仕切れなかった。

しかしどうやら金脈を掘り当てたらしい。

少し殺気が和らいだ。

後もう一押し。

「それにさ、一応クロクの下で生活してから裏社会についてもそれなりに理解あるし、そっちの領分を侵すような踏み込んだ行為はしないつもり。何事も節度ある付き合いって大事だよな、うん」

戦闘訓練以外にも色々勉強させられ、その中には裏社会についての講義もあった。

何故ただの雑技団が主なマフィアや権力者達の名前を知っていたかは非常に気になったが、全ては『クロク達だから』で説明出来る。改めて考えると便利な言葉だ。

変なことが起きたら全部その言葉で解決出来る気がする。

「……俺はゴンとは違ってる」

この言葉が決め手になったのが、イルミは殺気を消して手を下ろし、針も仕舞ってくれた。

うん、ゴンのフォローまで気が回らない。

自分のことは自分でやってくれ。

ゴンならコイツに何か言われた場合、ちゃんと言い負かせるって信じてる。

凄く頑固だし。

「……とりあえず殺す気は無くなった？」

「うん。保留にしようとしてあげる。攻撃して悪かったね」

そうマイペース口調で心の籠っていない謝罪を口にして、肩をポンポン叩いてくるイルミ。

こちとら寿命が十年縮むほど精神的負荷を負ったというのに軽い奴だ。

「まあ、ケイタはあの子と違ってちゃんと付き合い方が分かってる



みたいだし、キルとの付き合いを許しても良いよ」

「……そういえばさ、キルアのこと知ってたの？」

「弟だよ」

「お、弟おおおおっ!？」

なんとという爆弾発言。

ここまで似ていない兄弟というのも珍しい。

イルミは黒髪だけどキルアは銀髪。顔の系統だって全く違う。どっちが父親似的なだろう。

「そういえば名刺に書かれてたゾルディックって有名な暗殺一家の名前だし、キルアも家の皆で暗殺家業って言ってたっけ……あれ、じゃあ刺された兄弟って？」

「それは次男。俺が長男でキルが三男。俺達、五人兄弟だから」

……こんな兄弟がイルミの他に三人。

よくキルアもグレなかつたなと少し感心。

別にイルミと似たような性格とは限らないが、それでも一癖も二癖もありそんな性格なのは間違いない。

だってコイツの弟達だし。

「キルには俺がいることを秘密にしておいてね。もし喋ったら」

「言わない言わない！絶対に秘密にします!！」

黙秘するから針をチラつかせるな。

脅迫しか頼み方を知らないのか己は。

「……あれ？スパーのことはもう良いの？」

「うん。なんかどうでも良くなった」

針を再び顔に刺してギタラクルに戻ったイルミは、本当にスパークを殺すのはどうでも良いようでさっさと行ってしまった。

九死に一生を得たなスパーク。

眠っている内に全てが終わっているとは運が良い。

「それにしても……マジで殺されるかと思った……」

緊張の糸が切れたみたいで、足から少しずつ力が抜け、思わずその場に尻餅を着く。

思ったより疲労が激しく、しばらくその場を動けなかった。

まったく、まだ十年しか生きてないのに何故こんな頻繁に修羅場を潜らなくてはならないのか。平和は何処に。

その事を深く考えさせられる時間だった。

イルミと遭遇してから十二時間以上が経過し、現在はちょうど真夜中。

月明かりが優しく森を照らし、どこかでフクロウが鳴く声以外は、風による木々の擦れる葉音しか聞こえない。

場所によっては今まさに殺し合いをしているかもしれないのに、俺の回りは静かだった。

「結局、あの二人以外誰とも会ってないんだよね。あと二点。狩り終わるのはいつになるやら」

こうして夜も寝ずに歩いているが誰とも会わない。

尾行している気配も無いし、ここまで誰とも会わないと寂しいものだ。

小川の近くに転がしてきたスパーもそろそろ目が覚めている頃だし、一度会った人でも良いから会いたい。

そう思いながら昼間に汲んだ水を飲んでいた時だ。

背後から微弱的な気配を感じ、反射的に絶をしてブツシュの中に身を潜めたのは。

(……ラッキー。やっぱり正負の法則ってあるんだな)

悪いことがあった分、良いことが起こる。その逆もまた然り。

世界はそんなプラスマイナスゼロの法則で成り立っていると本で読んだが、どうやら本当だったらしい。

俺がブツシュに身を潜めて十秒後。一人の受験者が姿を現した。グラサンに色黒の肌。黒丸いもじゃもじゃの髪を二つ括り付けたような髪型に帽子を被っている者は、俺のターゲットである384番ゲレタだ。

俺の存在には気付かず、右手でプレートを二つ弄びながら嬉しそうに歩いている。

最初は月が雲に隠れていたため分からなかったが、晴れて直ぐ、そのナンバーを確認することが出来た。

それは、

(405番と44番っ!?! 何で持ってんだよ!?!)

持っていたのはゴンとヒソカのプレート。まさかな展開過ぎる。

しかしコイツ如きが変態鬼神からプレートを奪えるとも思えないので、きつとゴンがヒソカから奪い、それをまた奪うという漁夫の

利的な行動を経てゲットしたのだろう。

「フーか、どうやってヒソカからプレートを奪ったんだゴン。  
俺の中で完全に人外化したぞ。」

まあ、その後ゲレタに奪われているからダメダメだけど、あのヒソカから奪えたら誰だって浮かれてしまう。  
戦場では致命的だが、仕方が無いことだ。

「本当、世話が焼ける友達だなー」

苦笑を浮かべて、俺は絶を解きながらゲレタの前に飛び出した。

「こんばんは。プレート頂戴」

「……チツ………いっただいどこから湧いてきやがった」

まったく、こんな天使の生まれ変わりと言っても過言ではない善人の化身、ケイタ様に向って舌打ちとは何て奴だ。しかも虫みたいに言いやがって。

しかし即座にプレートを仕舞い、得物を構えながら戦闘モードに入るスピードは中々のものだ。

まあ、負けることなどありえないが。

「……ボウズ、この一枚で良かったらくれてやる。それで手を打たねえか？」

俺の強さを感じ取ったのか、ヒソカのプレートを差し出しながら妥協案を提示してくる。

しかし、運が無かったなゲレタ。

もし俺のターゲットじゃなかったのなら、もしゴンのプレートを奪っていなかったのなら、その案に乗っていたかもしれないのに。

「残念。俺のターゲットってアンタなんだ。それに、俺の友達のプレートも奪い返さないといけないっばいし。気の毒だけど、また来年頑張っ……ッー！」

言葉を途切れさせるしかなかった。

急に生まれた強烈な殺気に身体が強張り、吐き気を催すオーラが全身を突き刺す。

しかしこの場にいるのはとてつもなく嫌な予感がするので、恐怖で鉛のように重くなった身体を必死に動かして真横に跳んだ。

途端、刹那のタイミングで俺のいた場所を通過し、飛来してきた黒いナニカが直線上に立っていたゲレタに殺到する。

身体にトランプが何枚も突き刺さり、首も掻っ切られたゲレタは血泡を吹きながら崩れ落ちた。

血液という名の生命の息吹が流れ出るのは誰にも止められない。倒れてから五秒も立たない内にゲレタの命は尽きた。

……おい、残された俺にどうしろと。これでは共闘作戦も出来ない。

「……あゝ……ヒソカ？ ヒソカとゴンのプレート渡すから見逃してくんない？」

背後の木影から出てきたヒソカに顔を向け、同時に俺は絶望した。何故かコイツが興奮しているからだ。まるで盛りのついた獣。

多分ゴンはヒソカのプレートを奪う際に才能の片鱗を見せて、その成長ぶりに殺人ピエロが興奮したのだ。

お陰で今のヒソカはハイテンション。

その猛つてきた高ぶりを沈めるために攻撃してきた姿は、まさに死神。

いつにも増して気色の悪い笑顔が俺の教育に良くないです。

「ダメだったらさ、ゲレタと80番のプレートも渡すよ？ それでどうよ」

また三点に戻るの痛い、ヒソカとの戦闘を回避出来るなら安い対価だ。

だってコイツ『少しもつたいないけど、今ここで狩るのも良いかな？』的な雰囲気醸し出しているし。

しかし、顔を手の平で覆いながら声を殺して笑うのもいい加減にして欲しい。

トリップしてないで何か喋れ。麻薬中毒者がアンタは。

……そっちの方が普段より数倍マシな気がするけど。

「本当、青い果実って……直ぐに美味しく成長するんだねえ？」

「いや、さっきの提案に答えろって」

ゲレタを殺したことで少し興奮も収まったみたいで、良かったと心の中で安堵した。

表情も普段通りに戻ってる。

ゲレタ、お前の死は無駄では無かったぞ。

お前はきつとヒソカの問題解決のために今まで生きてきたんだ。

その絶望としか言い様がない人生に同情して、ちゃんと黙祷を捧げた上で手厚く地面に葬ってやる。

ここを生きて凌げたらの話だけだ。

「……ヒソカとゴンのプレートは置いてくから。じゃあそいつ」と

「待つてくれても良いんじゃないかな？」

「だよー……マジで勘弁してよ」

このまま逃げられるとは思っていなかったが、いざ止められると悲しくなる。

昼間に危険人物第二位に会っただけでも不運なのに、ここで全人類含めての堂々第一位と遭遇するなんて……何でいつも幸運値が底辺に位置しているのだろう。

正負の法則よ、明らかに不幸と幸運の天秤バランスが偏ってます。

神様、何かがおかしい事に早く気づいてくれ。

「実はボクのターゲット……ケイタなんだよね？」

「……神は死んだ」

こうなったのは絶対、甲板でゴンがフラグを立てたからだ。

どうやら戦闘は避けられないらしい。

本当、何で毎回こうなんだ。

(……ゴン、次会ったら百回ボコすっ！！)

五体満足で出会えるかは、クソツタレな神様次第だ。





**第八話 遭遇×不運×サバイバル（後書き）**

次回は戦闘。上手く書けるか分からないけど頑張ります。

では、誤字誤用脱字、御意見や御感想があれば是非ご連絡ください。

## 第九話 全力×バトル×試験終了

「あのさ……一応訊くけど無条件でプレート渡すの無し？ 俺の以外だったら全てあげるけど」

念のため訊いてみる。

万が一、億が一しか可能性が無いにしても、一兆分の一の確率で戦闘回避が達成出来るかも知れないから。

……希望的観測っていうのは重々承知しています。  
でも無駄だと分かっているが、このくらいの希望は見させて欲しい。

ああ、笑っている変態の顔が憎憎しい。

「ここでおあずけなんて……君も酷いなあ？ それじゃあボクの興奮は治まらないよ？」

「お前の事情なんて知らないって……」

マジでどうにかしてほしい。何でも運が無いんだ。この道を歩いていた俺の馬鹿。

そうだった世界の不条理を嘆く声と、数々の不満が俺の中で渦巻いている。

しかし、この危機的状況下でもコイツを粉砕し、合格を諦めていないポジティブ精神は自画自賛ものだと思う。

とは言つのも、ここで頑張らなければ更なる地獄が待っているから戦うしかないとかケクソになっているだけなのだが。

「それにクロロから訊いたけど、もし落ちたら訓練10倍なんだって?」

「……だから何だよ?」

凄く嫌な予感がし、第六感という警鐘がガンガン頭の中で鳴り響く。

そして、その予感は現実となった。

「と、いうことは? ここで君が落ちれば、君はもつと強く成長するってことだよな?」

こういふ勘だけは的中するのだから嫌になる。

だが、いつまでも女々しく不幸を嘆いている訳にもいかない。

現実がそれを許さないのだ。

とてもイイ笑顔としか言い表せない憎たらしい表情のヒソカに白い目を向け、全世界に響くような特大溜め息を吐いた後の俺の目に映るのは、ヤケクソと諦めの感情が頂点に達したことにより高まった闘志。

防御に徹してもヒソカは俺を見逃す気が無いのだから、攻撃に耐えても意味が無い。無駄にジリ貧になるだけだ。

なら攻めまくって勝機を見出すしか俺に選択肢は無い。

色々と絶望するのも面倒になってきたという理由もあるが、お陰でヤケクソ気味に戦う決心が付いた。

この逆行に真っ向から立ち向かい障害を排除するため、俺はヒソカ目掛けて全力で跳ぶ。

これが開戦の合図となった

力強く大地を踏み切り、眼前の敵に向う俺の手に具現化されたのは、全長2mを超す三叉のフォーク。

その悪魔が持つような禍々しい形状をした黒フォークと、疾走する俺を見て、思わずゾツとしてしまうほど強烈な笑みをヒソカは浮かべた。

「……良い？ その目、凄く良いよケイタ？」

「気持ち悪いんだよ馬鹿野郎っ！！」

目が軽くイッている変態の身体目掛けてフォークを突き出す。

しかも単発では終わらせず、可能な限りの連続突き。

フォークの残像が残り、まるで分身していると錯覚させる程の攻撃を浴びせるが、残念なことにそれでもコイツには全く当たらなかった。

身体を反らし、時には屈み、身体全体で動いて俺の攻撃を回避するヒソカは、笑うだけで反撃の兆しを一切見せない。

更に言えば、俺が堅を維持しているのに対してコイツは未だに纏をしているだけ。

それが俺をナメての行動なのか、実力差があり過ぎるため自らハンを背負い難易度を高くし、より楽しんでいるのかは定かではない。

しかしそれは俺にとって僥倖。

どちらにしろ堅をしていないのなら、俺の攻撃で大ダメージを与

えられる可能性がグツと高くなるのだから。

「驚いたよ？ 去年より大分強くなった？」

「余裕で避けてる奴に言われても嬉しくない！！」

絶対にその余裕を後悔させてやると気合を入れ、更に間合いを詰めるために一步踏み出し、同時に右手だけでフォークをヒソカに突き出す。

案の定ヒソカは横にずれ、その一撃を避けようとする。

だが、それが俺の狙い。

ヒソカが横にずれて避ける前に、俺は自らの手でフォークを消した。

そのためフォークを避けようとしたヒソカが驚き、一瞬膠着して動作が止まる。

しかし、それはコンマ数秒という僅かな時間。

それだけあれば充分だ。

直ぐに食器ナイフを左手の中に具現化し、下から思い切り振り上げた。

「……初めてだね、ボクに怪我を負わせたのは？ くっくっく、キ

ズモノにされちゃったなあ？」

「その言い方止めてくんない！？」

浅くだが右手の甲を切り裂かれ、流れた血を舐め取りながら恍惚の表情を浮かべるヒソカはやはり気色悪い。

そんなに余裕を見せられたら、人生初ダメージという快拳を達成した喜びも半減だ。

意気消沈する俺とは反対的にヒソカの気持ちは高まり、身体から

溢れたオーラが気持ち悪くて思わず距離を取ってしまった。

「逃げることに無いじゃないか？」

「逃げるに決まってるじゃん」

背筋がぞわぞわして、更に二歩後退。

ドスほどの大きさのナイフを握る左手にも力が籠り、右手も若干汗ばんでくる。

このままさり気なく後退して逃げ切れなにかと思ったりするが、その算段を立てるのは無駄だったみたいだ。

ヒソカが右手の人指し指を立てるのを見て、そのことを瞬時に悟る。

その指から細い念が伸びていたのを見た時の絶望感が凄まじい。

「しま……っ!？」

凝を怠ったつもりはなかった。

確かに凝より堅を維持することに神経を使ったが、バンジーガムの存在を知っているため凝を解いたりしない。

コイツの隠が非常識過ぎるのだ。

いつバンジーガムを発動、飛ばし、俺の頬に貼り付けたか分からなかった。

「ケイタ、カモ〜ン？」

「誰が行くかってんだ!!」

幸いなことにヒソカとは10mもの距離がある。

これ以上離れるとバンジーガムが千切れるため、ヒソカがバンジーガムを収縮させる前に力の限り後方へ跳んだ。

しかし、

「お前、あの説明は嘘かよ!？」

10m以上距離を取ったにも関わらずバンジーガムは健在し、直ぐに収縮されて俺の身体が宙を舞う。

よく考えれば能力の効果を自らバラす馬鹿はいないし、説明を信じて疑うべきだった。

自分の不甲斐無さに舌打ちせずにはいられない。

悔やんだ顔をしている俺を見て、ヒソカはそう考えた筈。

全ては俺の計算通り

「甘いんだよ変態星人!！」

焦ったのは演技だ。

バンジーガムで引き寄せた俺をヒソカが殴る寸前にナイフを消し、具現化したスプーンを自らの頬に突き立てる。

皿の部分が肌に溶け込むかのように音も無く、そして痛みを発せず頬に埋没し、バンジーガムの粘着部分を下からすくい取った。

そしてスプーンを即座に消し、目標を失ったバンジーガムは不発に終わる。

その光景を見てヒソカが楽しそうな笑みを浮かべたのは、きっと気のせいだと信じたい。

「今までの恨み晴らしてくれろ!!」

殴りかかってきた右手の下に身体を潜り込ませて攻撃をやり過ごし、全身全霊を持って右拳を無防備な身体に叩きつける。

瞬時に殴られる箇所を凝らして使ったオーラを集中させたみたいだが、それでも攻撃を防ぎきれない。

確かな手応えを感じながら、この好機を逃さないため畳み掛ける。腹パン、蹴り、右ストレート。

必要に応じて必要な量のオーラを身体に振り分ける凝の応用技、流を用いた俺の攻撃は、的確にヒソカにダメージを与えていく。

防御らしい防御を見せないヒソカの行動に懸念を感じ、上手く行き過ぎている攻撃が逆に恐怖心を煽るが、ふっと沸いてきた疑問と恐怖は心に無理矢理封じ込めた。

俺がダイニングツールを発動し、食器を具現化するスピードは速い。

一つしか食器を具現化出来ない制約上、食器の切り替えをスムーズに行うため速さを上げる必要があったからだ。

俺が食器を具現化するまで、約0.2秒。

その僅かなタイムロスさえも惜しみ、俺は素手での攻撃を止めない。

ヒソカの雰囲気が変わる前まで

「……くっそ……なんだよこのオーラ……」



気付けば後方へ跳び去っていた。

顔からは滝のように汗が流れ、寝ていた鳥も禍々しいオーラに充てられて飛び去っていく。

ここにいたくなかった。

これ以上ヒソカのオーラに充てられると、気が狂ってしまいそう  
だ。

そう感じる程、アイツのオーラは邪悪そのもの。

「……沈めなきゃ沈めなきゃ沈めなきゃ」

両手で自身の身体を抱え、『沈めなきゃ』と連呼しているコイツは誰がどう見ても変態。

……いや、それすら超越したナニカだ。

未だに意識を保ち、ここに留まっていられるのが奇跡に思えてくる。

本当、何故俺はこんな化け物を相手にしているのか。

「……参ったなあ……治める所か、逆に興奮してきちゃったよ？」

攻撃を受けたいだなんて思うんじゃない？ それにボクのバンジーガムを無力化するその能力……面白い？」

伏せていたボロボロ顔を上げたヒソカは普段通りに戻っていた。

あくまで表面上だけの話だが。

不気味さが一切損なわれていないオーラがゆっくりと、スローペースで陽炎のようにヒソカの身体から溢れてくる。

「行くよ、ケイタ？」

呟いたと思つたら、直ぐ前にヒソカがいた。  
初動が全く分からなかった。  
これが俺とヒソカの実力差。

その違いを思い知らされ、歯痒さに悔しがる暇も与えられない。  
次の瞬間、俺はアッパー気味に腹を殴られて宙を飛んでいた。  
しかし、これだけで終わる筈が無い。

殴られた際に貼り付けられたバンジーガムが発動し、俺の身体は  
再度ヒソカに引き寄せられる。  
やはり性質が悪い能力だ。

「こ、のっ！ バンジーガムなんて効か  
「遅い？」

確かにスプーンは具現化出来た。だが、すくい取る時間は無い  
すくい取る動作の隙を突いた攻撃で、今度は頬を殴られて身体が  
真横に飛ぶ。

一応殴られた箇所は全て凝でガードしたが、確実に俺の身体には  
決して無視出来ないダメージが着々と蓄積されていった。

これ以上殴られるのはマズい。正直ヒソカをナメていた。  
修行の時はまだ半分も実力を出していなかったのだコイツは。

だけど全ての力を見せていないのは俺も同じ。  
既に下準備は終えた。

今こそ全ての手札を切つて戦い、この変態怪獣に天誅を下す絶好  
のチャンス。

「やっぱりお前は最低最悪な変態野郎だ！！」

「ありがとっ?」

「今の言葉のどこに照れる要素がある!？」

バンジーガムを貼り付けられているのだから、引き寄せられる前にこちらからインファイトを仕掛ける。

走りながら右手に具現化されるのは俺の全力。

大きさが6mにも及ぶ巨大なナイフ。

「食らえヒソカ!！」

俺の限界である最大サイズでの具現化は、別に刃の部分が6m長くなるという訳ではなく、ナイフ全体がそのまま大きくなる。

よって今のナイフは、両手ですら柄を抱えられない常識外れな大きさ。

重量は適度に感じるベストな重み。

ヒソカの方に走りながら、槍投げのように投擲した。

それをバックステップで回避したヒソカの目の前にナイフが突き刺さり、巨大な傷跡を残して直ぐ消滅する。

俺の系統は具現化系なので遠隔操作は苦手。具現化物質は俺の手元から離れた途端極端に強度が下がり、上手く具現化出来なくなってしまう。

それでもヒソカが避けたのは、そのことを承知の上で投げた俺の行動を不審に思い、警戒したからに他ならない。

だがナイフが消える頃、俺はもうヒソカを射程内に捉えていた。

巨大なナイフは接近するまでの目隠しとして放っただけだ。

「貰ったっ!！」

スプーンでバンジーガムを取り除き、続いて具現化した等身大フォークをヒソカの心臓目掛けて突き放す。

しかしそれすらも超人的な反射神経で避けられたが、それでも構わない。

すると、俺のフォークの柄が2m程まで伸び、矛が軌道を変えた。矛先にあるのは先ほどナイフに切り裂かれた右手。

肉を穿つ感触は生々しく、三叉の中央の矛に串刺しにされた右手からは血が噴出した。

ナイフで傷付けた部分を自動追尾し、貫く能力。

これがフォークの力だ。

操作系の能力は最も苦手な部類だが、傷付けてから二分以内、対象が俺を中心に半径6m以内にいること、そしてナイフで傷付けるという条件で問題はクリア出来た。

使い勝手が微妙に悪いが、あともう一つ具現化したい食器があるし、スプーンの方に容量を割いているためこんな形になった。

だけど俺はこれで満足している。

使い辛さはテクニクでカバーだ。

しかし俺はヒソカの右手を行動不能にした喜びで気付いていなかった。

能力発動時にだけ柄を最大6mまで伸ばすことが出来る追跡フォークに貫かれているヒソカから、笑みが欠片程も失われていないことに。

「はいっ!？」

右手を貫かれたままフォークを掴み、左手を振りかぶったヒソカに驚愕の声を上げてしまった。

傷口が広がり、血が更に溢れ出すがお構いなし。まるで痛みを感じさせない表情と動きで、ヒソカは俺の顎を再度殴りつけた。

手がフォークから離れ、数mをノーバウンドで吹っ飛ば俺は木に当たることなく、それどころか森を抜けて海岸の砂浜を無残に転がる。

戦っている内はかなり移動していたみたいだ。

「普通あそこで掴むか？ ……流石変態」

口の中に広がった鉄臭い血と浜辺の砂を吐き捨て、ゆっくりと砂浜に歩いてくる変人大魔王に意識を向ける。

直ぐにバンジーガムを発動せず、俺にスプーンで取り除く時間を与えたのは単なる優しさか。それとも俺のオーラを消耗させる作戦か。

それは分からない。

後者なら悔しいが効果的だ。

現に俺は度重なる具現化と、バンジーガムをすくう時に消費するオーラ。そして堅の維持で疲弊仕切っている。

身体に溜まった鈍痛も拍車をかけた。

おそらく俺が全力で戦っているのは、あと二・三分あるか無いかというところ。

それまでに決着を付けなくては俺の負けだ。

「こんな攻撃が効くか！！」

牽制のつもりか投げってきたトランプ数枚をナイフで弾く。

スプーンですくわないのはトランプにオーラが込められているため、消耗するオーラを節約したいからだ。

砂の上で走りにくいのが、それでも全力で砂浜を駆け抜けて怨敵に向う。

途中バンジーガムを飛ばされたので、それをナイフで受けて具現化を解除。

最後の踏み込みを終えて射程内に入り、これで何度目になるかわからないダイニングツールを発動し、作り出した等身大ナイフを脳天目掛けて振り下ろした。

しかし、その攻撃は左手のトランプ一枚で防がれる。

ヒソカの身体が沈み、足払いを察した俺は上空に跳んで蹴りを回避。

そのままヒソカを飛び越え、再び距離を取って俺達は向き合った。

「ふん。ナルホドね？」

何に納得したのかこの時は分からなかったが、その直ぐ後に俺は一つの可能性に辿り着く。

理由はヒソカが上の服だけを脱いで上半身を晒したからだ。

正直キモイ。

視線を逸らす訳にはいかないからしっかりと見るが、ヒソカの身体を凝視するなどなんて拷問。

新手的な精神攻撃かと思ってしまった。

「……何で服を脱いでんだよ？」

「別に。ただ動き回った所為か暑くてね？ ケイタもどうだい？」

「もうお前死んでよ頼むからっ！！！」

……こんな奴を相手にしているかと思うと泣きたくなる。  
身体中痛いし、なんて不幸な一日だ。

しかし『暑いから』なんて嘘を信じる筈も無く、しっかりと凝で観察する。

特に陰もしておらず、疑う余地の無い真正銘の上半身裸だった。

「いつ気付いた？」

「君がトランプをナイフで弾いた時さ？ それに、今さっきボクを斬り付けようとした時？ お陰で分かったよ……ナイフは二種類存在するってね？」

そう、ヒソカの言う通り、俺の具現化する食器ナイフは二種類ある。

生物しか斬れないナイフと、生物以外しか斬れないナイフ。

その制約を課して切れ味を上げていたナイフを使い分けて、俺は今まで戦ってきた。

しかし何故バレたのか分からない。

ナイフのデザインは柄尻の小さな刻印を除けば二つとも一緒。

柄尻は見せていないし、識別するのは不可能だ。

「簡単だよ？ それぞれ微妙に具現化する際に消費されていたオーラ量が違ったように感じたからね。ボクを最初に怪我させたナイフとトランプを弾いた時のナイフ。共にサイズは同じだったのに、具現化される際に消費されたオーラ量は後者の方が多かった？」

「ハア……マジで化け物かアンタ。誰かビーストハンター呼んで来てよ、マジで」

確かに生物しか斬れないステーキナイフよりも、生物以外を斬る時に使うテーブルナイフの方が具現化する際に消費するオーラは多い。

だがそれは1%の違いも無い、ほぼ同じと断言出来るナイフだ。それを戦闘中という極限状態で見分られるなんて思わなかった。

「決定的だったのは、さっきの攻撃をトランプで簡単に防げた時？アレ、生き物しか斬れないナイフだっただろう？」

俺のステーキナイフは生物以外だと何も斬れないどころかダメーシすら与えられない最弱物質に成り下がる。

その弱さから制約内容まで推理するなんてどこの探偵だコイツは。

「さあ、そろそろ再開しよう？」

告げるや否やヒソカの右足が動き、爆音と同時に視界が砂で満たされる。

ヒソカが右足に硬を施した上で砂を蹴り上げたのだ。

離れていた距離は10mにも満たない近距離。

俺の視界を奪うには充分だった。

煙幕と目潰しなんて小癩な手を使いやがって。

「無駄だよヒソカ！」

いくら隠を使って気配を絶つても円だけは誤魔化せない。

確かに気配は微弱だが、砂煙の動きで大体の位置は把握出来る。

まさか俺が円に頼る羽目になるとは思わなかったが、なんとか限界ギリギリまで円を使って事無きを得る。



背後に気配と僅かながらの殺気を感じ、振り向き様に具現化したステークナイフをヒソカの心臓に突き立てた。

しかし、

「残念？」

俺のステークナイフがヒソカを貫くことは無かった

まるで見えない壁に阻まれるかのようにナイフはピタリと停止して、1mmも先に進ませることが出来ない。

コイツの肌を傷付けることすら出来なかった。

「まさ　ッ!？」

事態を察して全てを悟ったが、容認出来ない激痛を伴った衝撃が俺の身体を駆け抜け、思考を強制的に中断させられる。

左腕ごと脇腹を蹴られて骨が数本イッたと自覚して、漸く俺は地面に倒れていることに気が付いた。

ちょうどオーラも尽きる寸前。

左腕と肋骨も折れたし、これ以上の戦闘は無理だ。

しかし倒れたままというのはプライドが許さないの、震え出す足を必死に我慢しながら立ち上がった。

「……………ドッキリ……………テク、スチャァ……………」

「正解？」

俺のステークナイフが刺さらなかった理由、それはいつの間にかヒソカの身体に張られていたスカートの所為だ。

生物でないスカートに対してステークナイフは無力。鉄壁の守り。あの砂煙は姿を隠して煙に乗るのが目的ではなく、スカートをバンジーガムで貼り付け、ドッキリテクスチャーで肌を再現する隙を作るためのものだったのだ。

わざわざ服を脱いで仕掛けが無いと確認させたのは、全て俺の油断を誘うため。

またペテンに掛けられたかと思うと悔しさで憤死しそう。

「普通……そんな手、使わない、だろ……」

もし俺が心臓狙いではなく頸動脈とかを狙ったのだとしたら、下手したら即死。

そもそもナイフを使うとも限らない。

何でそんなリスクすぎる作戦を用いたのか疑問に思ったが、おそらくまともな理由では無さそうなので訊いても意味が無いだろう。変態の思考回路と感性を常人である俺が理解出来る筈が無い。

コイツもマチと同じで変化系だし、普段は計算で動くコイツも時には勘で動くのかもしれない。

「本当、今回は受けて良かったなあ？ 君の成長具合も確かめられたし、新しい玩具も二つ見つけた？」

玩具言うな。

それとヒソカに見初められた二人、不幸人生にようこそ。

本来はこんなことを考えてる暇は無いのだが、もうどうにもなら

ない事態に陥ると人間は開き直るものだ。  
そのことを身に染みて実感する。

胸から剥がしたスカーフが風に流され、視界から消えた。

「ボクの見込み通り、君はどんどん美味しくなる？ もう遊ぶのはこのくらいにしないと、うっかり喉下に噛み付かれそうだ？」

心底楽しそうに、まるで子の成長を喜ぶ親のように純粹で、どこか歪んでいる気持ちを語りながら歩いてくるヒソカがぼやけて見える。

意識を失いかけている証拠だ。

「でも、まだまだ？」

立っているのがやっとの状態の俺の下に辿り着いたヒソカは、左手を大きく振りかぶる。

「狩り時は大事にしないと？」

その言葉をかけられると同時に感じた頭部への衝撃で、今度こそ俺の意識は闇へと誘われていく。

負けた悔しさと自分の不甲斐無さに苛立ちを覚えた俺は、結局この四次試験中に意識を取り戻すことは無かった。

この瞬間、俺のハンター試験終了が確定したのだ。

## 第九話 全力×バトル×試験終了（後書き）

多分次でハンター試験編は終了です。

なんか躍動感も何も無い戦闘描写になってしまい、申し訳ないです。元々文才も無いほうですが、戦闘は凄く苦手で……

主人公を落とした理由は、H×Hの二次創作を読んでいるとオリ主が合格ってパターンが多いので、こんな形にしてみました。ターゲットがアモリ三兄弟の誰かってのもテンプレ展開ですし。

次回から旅団の誰かが漸く登場。

主人公設定を更新しました。

では、誤字誤用脱字の発見、御意見やご感想がありましたら是非ご連絡ください。

## 第十話 同情×理不尽×家族団欒

身体がゆらゆらと揺れていた。

まるでただっ広い海に一人浮かび、自由気ままに漂っている様で浮遊感が心地良い。

しかし辺りは真っ暗で、俺一人しか世界にいないような感覚は、少し寂しくて嫌だ。

そんな夢を俺は見ている。

気持ち良いと気持ち悪いが同居している奇妙な夢。

そんな夢を俺は見ていた

「……………海？ ……って、四次試験は……………っ!？」

ベッドの横にある窓からは見渡す限りの水平線が窺え、身体が揺れている現状から、今俺がいるのは船室だというのが分かる。

流星街から出たことが無い俺にとっては、一種の憧れすら抱いていた大海。

しかし四次試験中だったことを考えると、絶対に居てはいけな場所。

しばらくして俺はやっとヒソカと対峙した時のことを思い出し、四次試験で脱落したことを悟った。

……………ついでに怪我の具合も思い出しました、ハイ。

「痛……………ッ!! ……くそっ、あの変態ピエロめっ!! ……いつか復

「警してやる」

急に起き上がったため折れた肋骨に痛みが走り、無事な右手で左箇所を押さえながら決意表明。

だがその前に、これから訪れるであろう地獄を生き残らなければならぬ。

左のアバラ三本に輝き、左腕を複雑骨折していても、きっとあの悪魔共は手加減などしない。

逆に片腕が使えないことを良いことに、更に筋力アップが望めると過剰な片手腕立てを強いる可能性だってありえる。

これからのことを思うと気が重かった。

「その調子なら、どうやら大丈夫そうですね」

「え？……ああ！ 試験中に俺をストーキングしてた黒服！！」

「いや、その……せめて尾行と言ってもらいたいのですが？」

十畳くらいの殺風景な部屋にいたのは俺だけではなかった。

ドアの近くに立っていたのはハンター協会の役員さん。黒服にサングラスというヤーさんスタイルのお兄さんは、四次試験中に俺を監視していた人だ。

おそらく目的は審査のためだったのだろう。

体力や知力などの総合的な強さを評価して、最終試験の参考にする。

それが目的で受験生全員を尾行していたっぽい黒服の一人がここにいる理由など、一つしか思い浮かばなかった。

「状況説明してくれるの？」

「はい、それとネテロ会長からの言伝を承っております」

ここで数分間の説明タイム。

やはり俺はヒソカに負けて脱落したらしく、この船は四次試験脱落者を最寄の港に送るためのもの。

既に四次試験終了から一日が経過し、今は正午。港に着くのは二日後らしい。

それまでは傷を癒し、どうやってクロロから逃亡しようか作戦を考えることにしよう。

その他は専ら遊覧航行を楽しむことにする。

「それで、会長は何て言ってたの？」

「はい『軍艦島でのホテル代は元の口座に返金した』とのことです」

「……ソツスカ。いや、教えてくれてありがとうございます」

1000万ゼニー猫ばば作戦は失敗に終わった。

これで逃亡資金が望めないなので、どうやって金を集めるか考えなくては。

言っちゃ悪いがありがた迷惑だ。

「……腹減った」

ふいにお腹が鳴った。

何日も飲まず食わず、今はベッドに寝ながら点滴を受けていたが、そんなもんで満腹になるなら世界中で餓死者が激減している。

腹の虫の鳴き声を聞いた黒服は苦笑して、食堂の場所を教えられた。

どうやら配膳時間が決まっているらしく、ちょうど他の皆も食事を摂っているとのこと。

流石にここまで残った将来有望な受験生達を無碍には出来ないという協会の優しさ具合が窺えます。



早速向うために草鞋を履いて右腕から点滴の針を抜いてもらい、シヨルダーバックを携えて部屋から出た。

歩く度に脇腹が痛むが、我慢出来ない傷みではない。

吊っている左腕も包帯の所為で暑苦しいが、我慢するしかない。

疲労と怪我の回復を促進させるために絶も行っているし、港に着く頃にはある程度治っていると思う。

昔から怪我には耐性があるし、身体は丈夫な方だ。

「うわ、やっぱり皆いない」

目的地に辿り着き、食堂を見たがゴン達仲良し四人組の姿が無い。ゴンくらいはいるかと思っただが、あのピエロはゴンに405番と44番のプレートを渡したようだ。

だからヒソカはターゲットの俺のプレートと他二枚が必要だったのだ。

ああ、恨めしい。

「あら、目が覚めたのね」

「ポンズも落ちたんだ。何でまた」

「アイツらの所為よアイツらのっ！」

食堂に居たのは十一人。その内のポンズのいるテーブル席に座ったのは間違いだっただかもしれない。

お陰でゴン達の騙し討ちに遭ったというポンズの愚痴を聞くことになった。

それにしても、ポンズのターゲットのプレートを渡して協力を仰

ぎ、ポンスが寝ている間にプレートを奪ってトンスラとは中々やる  
ことが黒い。

確かに約束は守ってるけど、ゴン達もやる時はやるんだな、と思  
わず感心。

あと死んだバーボンの冥福を祈るところ。

それにゲレタとイルミのターゲットさん。誰だか知らないけど多  
分死んでると思うし。

スパーが生きてるのは素直に嬉しい。

折角助けたんだから、もし死なれていたら助け損だった。

「と、言う訳なのよっ！ アンタからも私からだって文句の  
十個や百個言つといてよね!？」

「いや、俺ってゴン達の連絡先知らないし。っーか文句百個なんて  
思い浮かばないって」

そう、よくよく考えればゴン達の連絡先など知らない。

この試験で得たものはイルミの名詞だけだ。

……そうか、イルミはキルアの兄貴だから、キルアには連絡が着  
くかもしれない。

キルアに会えば他の三人のアドレスも芋づる式に手に入る。

初めてイルミに感謝した瞬間だった。

これで初めての友人達とまた会えると思うと嬉しくなる。

「何!? くそっ……それじゃ俺達の計画が……っ!！」

「どうする兄貴、アイツに迷惑電話を掛ける手段が無くなったぜ？」

「どうすんだよ兄ちゃん! っーか、お前も友達の連絡先くらい知

つとけよな!!」

俺達の会話を盗み聞きしていたらしい隣のテーブルの三兄弟が勝手に困り、勝手な文句を言ってくる。

キルアにやられたのが悔しくて逆恨みする気持ちは判るけど、やるのがセコ過ぎるぞアンタら。

「なんだよ、クラピカとレオリオに報復出来ないじゃないか……くそっ」

考えることは皆同じなのか、窓際に座っていた猿使いソミーの愚痴も聞こえた。

……どうでも良いが、中指を立てる芸なんて猿に仕込むな。

もし芸などではなく、自発的な行動だったらと思うとムカついたので、生意気な猿に殺気混じりにオーラを出して威嚇してやった。

見事に混乱して叫んでいる。

「つーかお前さん。何で落ちたんだ？ 何となく……としか言えないが、サバイバル戦くらいで落ちる実力じゃないだろ？」

下等生物ざまあみろと思っていたら、鼻にガーゼを張っている16番のトンパさんが近付いてきて、俺に疑問顔で訊いてきた。

トンパさんの接近に露骨に嫌な顔をしたポンスに少々引く掛かりを覚えるが、とりあえず答えておこうと思う。

皆が俺に注目しているので、どうやら結構気になることらしい。

……まあ、どんな反応されるか予想出来るけど。

「俺、ヒソカのターゲットだったんだ、あははは……ハア……」

「……すまん。訊いちゃ悪かったな」

「まあ、その……元気出さない。きつと良い事あるから、ね？」  
予想り同情の視線と哀れみの感情を皆から注がれて、なんだかやるせない気持ちになってきた。

スパーなどサングラスを外してハンカチで目元を拭っている。

先ほど俺に文句を言ったイモリも小さく謝罪してきたし、皆がヒソカをどう思っているかよく分かる光景です。

ついでに俺も可哀想な子供という地位を揺ぎ無いものにしてしまつたらしい。

……何でこうなつたんだか。

「……まあ、もう終わったことだし忘れよう！ 何事もポジティブに……！」

そつだ、あんな奇人を気にしても意味が無い。

あんな奴について考える暇があるなら、今こうして運ばれてきた昼食を食べる方がとても大事。

ああ、美味そうなシチューが俺を待っていると思うと、自然と笑みが零れてしまう。

「……ねえ、電話が鳴ってるわ」

「気のせいだよ、ポンス。電話なんて鳴ってないし」

「今アンタ携帯電話を確かめたじゃない!?」

机をバンツと叩いたポンスを軽くあしらって、コップに水を注いで食事の準備を進める俺。

全く、ポンスも何を言っているんだか。

俺は着信音なんて聞いていないし、誰から電話が着たかなんて確かめてもない。

ケータイのディスプレイに養い親の名前なんて映ってません。  
……映ってないっいたら映ってない。

『 居留守を使うならそれでも良い。フエイタンが新しい拷問を試す実験体を探していたし、お前を推薦 』  
「もしもし!? ゴメンゴメン、ちょっとトイレに行つて出るの遅れちゃったよ!」

留守番メッセージの内容を聞き、それを中断して即座に着信に応じる俺を冷やかというより、とても可哀想なモノを見る目で見ているポンズやその他をほっといて、俺は泣く泣く席を立った。

どうやら数日ぶりの食事はもう少しお預けらしい。  
今度はどんな死刑宣告を受けることになるのやら。

……ストレスで胃に穴が空きそうだよ。

ついに運命の日がやってきた。

鬼畜集団から逃げ切つて天国気分に戻るか、捕らえられて地獄を見るかの二つに一つ。

幸せつていうのは待っているだけでは手に入らない。自ら掴み取るものだ。

だから俺はやる、やってやる。

「それじゃあね……生きてたらまた会いましょう?」

「不憫そうな顔向けて不吉な別れ方しないでくんない!」

そこは『縁があつたらまた会いましょ』という台詞じゃないんですかポンスさん。

そしてアモリ三兄弟、おのれらは揃って合掌するな。

三日間の航海を終えて港に到着し、いざ上陸するって時までそれかい。

他の皆も似たり寄つたりな空気出してるし。

まあ、俺に対して哀れみの感情MAXな理由はよく分かる。

食堂でのクロ口の発言を聞けば、俺の家族がどんな非常識外道集団に分かる筈だ。

この航海中、皆からの優しさで嬉しさと悲しみが半々でした。

「……さて、問題はこつからだ」

時刻は正午。

皆が豪華客船を降りて帰宅しているのに、俺は未だ船内にいた。

理由は一つ。雑技団の誰かが港に迎えに来ているからだ。

あの地獄からの誘いは、俺の不合格確認と逃亡防止要員を派遣するという旨を伝えるものだったのだ。

ちなみに何でクロ口が俺の不合格を知っているかについてだが、それはいつも通り変態野郎が余計な報告をマチにして、マチからクロ口に伝言ゲームされたから。

マジで余計なことしかしやがらない。

そんなに俺を奈落に突き落としたいのか馬鹿ピエロ。

ということ、俺は現在全力で絶をしつつ身を隠している。

最初は救命ボートを一つ拝借して別の港に昨日の時点で向かおうと思ったのだが、クロ口のことだから俺が昨日の内に逃げることを想定済みで、周囲の港に団員を配置しているに決まっている。

伊達に五年間育てられてきた訳ではない。クロ口達の行動パターンなど把握済みだ。

これもまた鍛えられてきた危険察知スキルの成果である。

だから俺は時間をずらし、夕方頃になってから船を降りるつもりだ。

まさかクロ口も俺みたいなチキンが死地から即離脱せず、辛抱強く船内に留まっているとも思っまい。

今回は俺の読み勝ちだ。

「まだアバラが痛むけど、最低限動けるまでに回復したし、絶対に逃げ切つてやる」

この航海中、絶で治療に専念し、小魚などのカルシウム分を多く摂取した甲斐があった。

左腕は全治一ヶ月と診断されたのであと一週間くらいかかるが、逃亡するだけなら支障は無い。

GPSが付いていそうな携帯電話の電源は落とし済み。

準備はバッチリだ。

こうして俺は運命の夕刻を迎えた

「よお、チビ。待ち合わせに五時間遅刻とはな……何だ？ 重役出勤のつもりか？」

肩を叩かれて声を掛けられたのだが、当然のことながら怖くて後ろを振り向けない。

船を降りてまだ一分も経っていないのに絶体絶命の危機的状況に追い込まれるなど、流石の俺も予測不可能だった。

確かにコンテナが多いので死角も多々あるが、まるで接近に気付けないとは。

相変わらず凡人に喧嘩を売っている、非凡さを感じさせる技量だ。

「あ……何でここにいるのフィックス？」

背後に立って青筋を浮かべているのは我らがヤンキー、たまにゼンスの悪い帽子を被っているジャージ姿のフィックスだ。

……よりもよって最悪な奴を迎えに寄越しやがって。

「ああン？ 団長に言われたからてめえを迎えに来たに決まってるだろうが。何やってたか知らねえが、連絡もせずにこんなに待たした覚悟は出来てんだらうな？」

つまり隣の港に人員は送ってなく、ここに俺がいると一点読み。

見事に裏の裏をかかれた訳だ。

何だかクロ口達に作戦は無く、ただ本当に待ち人である俺を待っていただけって気もするけど、きつとそれは俺の気のせいに違いない。

「くそっ！ 策士、策に溺れるっていうのはこういうことか……ッ



「!!」

「策士じゃなく、ただ馬鹿が愚策に溺れただけね。こんなに腹が立たの、実に久しぶりよ」

「……この『っ』を抜いた独特の言葉を話す奴を俺は一人しか知らない。」

フィックスだけじゃなく拷問大好きサディストのフェイタンまで寄越すとは……どうやらクロロは本気で俺を殺しに来てるらしい。

トラウマ三人衆の暴力コンビにお出迎えさせるなど、俺をショック死させたいんですかパパさんや。

「ははは……ごめんなさい」

弁解してもダメそうなので素直に諦める。  
しかし、それでコイツら手を緩める訳が無い。

『安心しろ、アレでもフィックス達はお前を気に入ってる』と以前ノブナガが言っていたが、そんなの絶対嘘だ。ほら、怒りをパワーに、こんなにオーラ練ってるし。

車で待機していたシャルナークが様子を見に来なかったのなら、俺は冗談抜きで天国に旅立っていたと思う

「とまあ、以上が試験の一部始終。……ねえ、俺が怪我人っ

て分かってる？ もう少し人を労わる気持ちがあっても良いんじゃない？ 人としてさ」

所々骨折し、更に極悪コンビの所為で身体中に湿布と包帯を巻いている俺がフローリングに正座で、他の面子がソファや椅子に座っているなんて、どこか心が痛まないのかアンタら。

良心はどこに捨ててきたんだ。

「逃げようとした罰だ」

「……まあ、流石に自業自得だね」

ソファと椅子に座って、そう無情にも告げる男女はクロロとマチ。

怒っているというよりは呆れの感情の方が多ippく、そんな心情が見て取れる。

それはマチの隣に座っているパクノダにも言えることで、パソコンの置いてあるテーブルの前に座っているシャルは笑っていた。

ウボオーギンは壁際に立ち腹を抱えて大爆笑。

フィックスはクロロが座っているのとは別のソファに腰掛けて、不機嫌そうな顔で頬杖を付いている。

その隣でフェイタンは『世界の拷問器具全集』という分厚い本を開いて読書中だ。

ちなみに説明が遅れたが、ここはあの虐待現場から車で数時間の所にあるフラマという小さな町の一軒家で、今は二十畳ほどのリビングに家族が集合している。

ここも流星街の『あじと』と同じく活動拠点の一つで、『あじと

「？』と言つべき所らしい。  
こういつた活動拠点は世界中に幾つかあり、俺も好きな時に適当に使えとのこと。

ただ注意事項としては、絶対に他人に位置をバラさないことと、ついでに自分が幻影旅団と関わりを持つことは秘密にするよう厳命された。

きつと『あじと』には講演に使う器具や、それに伴うネタなんか満載だから秘密にしたいのだろう。

まあ、家族が幻影旅団というのはバラすつもりは無い。  
なにせ暗殺一家のお得意様だ。

色々と他人から恨みを買つてるかもしれないし、関係無い俺にまで飛び火が来るのはご勘弁。

『なに！？ アイツらの身内だと！？ あの時の恨みいいいい！！』  
なんて展開でフルボッコは嫌だ。

もしゴン達に訊かれたら適当に誤魔化さないと。

「でもさ、何で皆ここにいんの？ もしかして俺を心配  
「自惚れんじゃねえよチビ助。んな訳あるか」

……えらいバツサリ切つてくれますなフィンクスさん。  
照れ隠しつて訳でもなさそうだし、じゃあ何で来たんだよ。  
お陰で俺はこの有り様だ。

「皆ケイタが合格するか賭けていてさ、とりあえず近場にいた俺達が勝者の団長の下に集まったんだよ。あゝあ、結局団長の一人勝ちか」

大損だと嘆くシャルだが、いったいどのくらい賭けたのだろうか。まあ、血も涙もないコイツらなら人の生き死にすら遊びにしそうだし、このくらいにして当然。

納得はいかないけど、この程度で目くじら立てたらキリがない。一人だけ不合格に賭けてるところもクロロらしいよ、ホント。

「……この落とし前はしかり付けさせてもらっよ」

「だな。ケイタのせいで大敗したし、そんなくらいしてもらわなきゃ割に」

「合わなくないからねウボオー！？ つーかさ、まだこれ以上痛めつけるつもりですかフェイタンさん！？ ……て、そののヤンキーも準備運動みたく骨をパキポキ鳴らすな！！」

鬼かおのれら。

……いや、まだ鬼の方が優しい気がするから不思議だ。

アンタら人の身体をなんだと思っている。

「ちよつと三人とも、それ以上は流石にマズイわよ。後でにしときなさい」

「パク、拳銃を具現化してから言っても説得力無いよ。少しはアタシみたいに」

「そう言うマチもケイタの首に念糸巻き付けるの止めてあげたら？

少しは俺を見習って」

「ならシャルもアンテナ取り出すなよ！？ 腐乱死体の山に全身ダイブさせられたのトラウマなんだからねっ！？」

何で俺の家族達は発想がこうも過激なんだ。

もう少し平和的な制裁は無いのか。それじゃ制裁にならないかもしれないけど、そんなもん知りません。

そしてクロロさんや、事態を収集せず一人読書に励むとは中々のスルースキルですね。

俺には無理だ。だから心の中で盛大にツツコミを入れさせてもらう。

『反抗期の子供との接し方』なんて本を熟読するな。

誰が反抗期だ誰が。

グレないだけマシだと思え。

さて、何度も言うが俺は怪我人だ。

唯でさえ常人なら数週間ベッドの上を余儀無くされる程の怪我を負い、更には凶悪コンビに追い討ちをかけられた。

そんな俺に夕食を作れなんて戯れ言を言う馬鹿共は、正真正銘のろくでなしだと思えます。

児童相談所に喧嘩売ってんのか。

「……という風に文句を言いながら作ってしまう俺でした。出来たから誰か運ぶの手伝えー!!」

流石に料理を運ぶのは無理。

だから俺は勝手知らない新品同様の台所から隣のリビングに顔を出す。

ちなみにメニューはうどんだ。

冷蔵庫にあった大量の食材から、片手で作れそうなのはこのくらいしか無かった。

麺を湯で温め、ネギを刻んで卵をぽつとん。お汁を入れて、はい出来上がり。

片手なんだから多少の手抜きは多目にみてもらう。

皆がそれなりに大食いだし、ウボォーなんて大食漢もいるから麺の量は膨大だけど、作るのは大して難しくない。

一番難しかったのは雑巾を絞って汚水を器に入れることだった。

対象はもちろんヤンキー拷問コンビ。

ペテンテイストのお陰で味からバレることも無いし、俺の細やかな復讐だ。

度々実行するも鉄の胃袋を持つ二人には効果が無いようで、毎回妙な敗北感を味わうのは内緒。

「お、今回はうどんか。良いねえ。ケイタの料理は美味いから好きだぜ」

「そついやウボォーに作るのは半年ぶりだっけ？」

トレイに器を人数分乗っけながら考えてみる。

最近会ったのはクロロとシャルで、これが試験の始まる一週間前。その三日前にノーブラ派代表のパクが来て、その二週間前はノブナガとフェイタンだ。

ノブナガは俺のためにジャポンから服を仕入れてくれたからという真っ当な理由なのに対し、鬼畜チビは不定期に開かれる拷問講義のため。

その前は二ヶ月ほど一人で、マチやシャル、パクノダとの電話が

唯一の繋がりだった。

シズクやフランクリンが来た時もあったけど……うん、確かに半年ほどウボォーとは会ってない。

「おかわりあるから沢山食べなよ」

「おうよ！」

どっかの変態ピエロが浮かべる笑みとは何もかも違う、とても煌びやかな笑いが隣の巨人から発せられる。

ウボォーは多少馬鹿で常識知らずなところもあるが、まだ辛うじて家族の中ではまともな存在。ムードメーカー的なポジションにいる筋肉馬鹿。

それがウボォーだ。

変な意味で言うつもりは無いが、家族と言うよりも友達と言った方が正しいかもしれない。

そんな接し方を俺達はしていた。

「へえ、今日はうどんなんだ。ケイタ、七味は？」

「手抜きだな」

「はい、マチ。クロロは文句があるなら食つな」

マチに七味を手渡して、定位置であるクロロの隣に座りながら当の本人を覗む。

過度な期待するな馬鹿。

怪我人と言ってるだろ。

作ってもらえるだけありがたいと思え。

「それじゃ、いただきまーすー!!」

俺の声を合図に全員が復唱し、家族の団欒が始まる。  
若干ウボォーとフィinksがフライング気味だったが、こんな人数で食事を共にするのは久しぶりなので大目に見てやる。

折角の至福の時なのだから。

「そついえば団長。ケイタのために盗つたつていう念は？」

食事もしばらく進み、おかわりを狙つての第一次うどん争奪戦がクロロを除く男性陣で開かれようとしたその時、シャルがクロロにそう言った。

……何だその不安を駆り立てる言葉は。

「そのつもりだったが……よく考えれば今は必要無い。今後も使う機会が無いことを祈る」

珍しく渋面を作っているクロロは、ちやつかり戦争の品である残りの麵を箸で掴みながら、心底嫌そうな顔をしていた。  
多分、よつぽど難関な発動条件なのだろう。

どうやら魔の10倍訓練とは関係無いみたいで、俺としては一安心。  
寿命が十年長くなった気がする。

「そつだケイタ。お前に今足りないモノは何だと思う？」

このクロロからの脈絡の無いいきなりのマジ質問に、少し面を食らうてしまつ俺。



食事中に訊かなくても良い気もするが、一応答えておこうと思う。  
後が怖いから。

「……やっぱり経験かな。実戦の」

ヒソカと戦ってみて思ったのが、やはりそれだ。

念の基礎と応用は大体学んだが、その他は全くと言って良いほど  
ダメ。

色々と経験を積まなければ、判断力や分析力　すなわち、瞬時  
にあらゆる可能性を考え、それに対処するといった戦闘時の思考力  
が身に付かない。

クロコ達といった身内との戦闘訓練ではなく、本気で俺に害を齎  
そうとする無礼者と闘わなければ、強くなれない気がした。

その答えに満足したのか、クロコも鷹揚に首肯する。

「そこでだ。お前にある課題を出す。期限は九月一日までだ。修行  
の場への出発は三日後だから、それまでに傷を直せ」

「いやいやいや、俺の身体見てから言ってる？　無理に決まってる  
じゃん」

そんなカップラーメンの延長上みたいな期間で骨折を直せるか馬  
鹿野郎。

「つか、実戦式で戦うってことは、もしかして10倍訓練免除な  
のだろうか。」

「だとしたら思わず喜びの舞を踊ってしまいそうだ。指導はもちろ  
んボノレノフ。」

「だらしねえなケイタ。んなもん唾付けとけば直るだろ」  
「ウボォー、傷じゃないんだから唾をかけても汚いだけよ」  
「そんなので直るのはお前くらいだよ、馬鹿」

その通りだパクノダとマチ。  
もつと言つてやれ。

「シャル、飛行船のチケットを予約してくれ」  
「了解。飯食つたらやっつくよ」

「……って、本当に三日後に出発させるつもりかい！！ つか場  
所はどこだよ!？」

空になった食器を集めてもらいながらクロロに怒鳴る。  
すると珍しくクロロは笑った。

「ニヤリという擬音が聞こえ、不敵な笑みを浮かべながら。」

「場所は 天空闘技場だ」

……どこだよいったい。

## 第十話 同情×理不尽×家族団欒（後書き）

ここ最近忙しくて、毎日大学の研究室に夜まで居残っていました。もう試薬作りとピペット操作は飽き飽きです。

次からは天空闘技場編。原作介入ものとして、やはりスルー出来ません。オリジナル200階闘士も出す予定なので頑張ります。

パクとマチの口調がイマイチ掴めません……難しい。

では、誤字誤用脱字の発見、御意見やご感想がありましたら是非ご連絡ください。

## 第十一話 修行×戦闘×200階

天空闘技場。

その名の通り空に存在して雲の上に立つオリンポスコロシウムを想像してしまっただが、それは超高層建築術によって実現した巨大な塔だった。

251階建てで高さ991m。世界で第四位に位置する高さを誇るその姿は、まさに天空闘技場の名に相応しい。

……耐震強度と地震対策が物凄く心配だけど。

「ねえクロロ、コレ……本当に並ぶの？」

あの家族の団欒から三日経ち、更に飛行船で一日過ごしてやっと辿り着いた午前八時現在。

1階の受付ロビーは長蛇の列でこった返していた。

その数ざつと百人……いや、それよりも多い。

一日平均四千人がここを目指してやって来るといふ話を聞いていたので不思議は無いが、感想と心情は別問題。

こんなのに並ぶのは誰だって面倒で嫌だ。

「ケイタ。登録の順番が近付いたら呼べ」

「俺だけに並ばせる気かアンタはっ!?! ……って、逃げるなよ馬鹿クロロ!?!」

十歳以下の子供は登録に保護者の同伴が必要なので付いて来たクロロは、見事に俺の言葉を全無視して人混みに消えた。

絶までするその徹底ぶりは何なんだ。

「……か保護者の務めを果たしてください頼むから。」

俺に修行を付け、衣食住を完備してくれているだけありがたいし、家族の温もり？も与えてくれたのは感謝しているが、もっと+的なことをしても罰は当たらないぞ、きつと。

「……音楽でも聴こう」

納得いかないが反論を聞いてくれるとも思えないので、早々にクロクの説得を諦めてカバンから音楽プレイヤーを取り出して耳にセット。音楽に癒されることにする。

ちなみに今の俺は動き安さを考慮した紺色のジャージ姿で、左腕は下にダランと垂れ下げながら包帯とテーピングでガチガチに固定して、骨折を隠している状態だ。

だってギプスだと大き過ぎてジャージの下に隠せないし、怪我をしていると怪我が治るまで登録を断わられる可能性があるから。

何だかんだ言っただけでヒソカと闘ってからもう直ぐ二週間になるし、腕に気を付ければ多少の戦闘はこなせるくらい回復した。

きつとこの異常な回復力は修行時代に散々大怪我をしたことによる影響だと思う。

慣れとは恐ろしい。軽く肉体改造に近い気がするぞ。

「……便利だけど、特に感謝する気持ちにはなれなかった。」

「それではこちらに必要事項をお書きください」

「ああ」

あの長蛇の列に並ぶ中、好きな音楽を聴いて延々と時間を潰していた俺は、クロロが登録用紙に記入している間に闘技場のルールを受付のお姉さんから聞いていた。

この塔は200階まで10階単位でクラス分けされており、一勝する毎にクラスが一つ上がり、負ければ一つ下がる。

それを延々と繰り返し返して最上階を目指す修行の場。荒くれ者の聖地。

それが天空闘技場。

ちなみに武器は200階に到達するまで使えない。

純粋に己の力で勝ち上がる必要があるのだ。

それと100階クラスをクリアすれば専用の個室を貰えるらしいので、頑張つて早くそこまで到達しようと思う。

ここら辺、何故か異様なほど宿代が高いし。

世界有数の観光名所だからって足元見すぎだぼったくり店主め。

「はい。登録者をご確認させて頂きます。貴方がケイタールシルフル様ですね？」

「あ、はい」

聞き慣れない名前に少し面を食らったが、どうやらクロロは自分のファミリィネームを俺に与えたようだ。

……それならそれで教えるよアンタは。

「了承しました。それではこれで登録を終了させて頂きます。天空闘技場へようこそ」

見事なお仕事スマイルで送り出され、俺とクロロは闘技場に入場する。

オールバックではない髪を自然に垂らしたクロロには熱を込めた視線も送っていたが、それでもスルーして入場する。

普通にしていればイケメンだからねクロロは。

……なんかムカつく。普段は裸コートの癖に。

とか考えていたら、頭を衝撃が襲った。

「痛っ！！ いったい何すんのっ!？」

「いや、何となくムカついてな。どうせ俺に対しての悪口だろ?」「ただの勘と憶測で攻撃するなよ!？」

しかし当たっているから性質が悪い。

っ！か普通の拳骨なのに凝をするな。

頭に凝をしなかったら、下手したら潰れたトマト状態だぞ。

「うわ、すっげー」

だけどその怒りも直ぐに忘れて目の前の光景に意識を集中させてしまう俺は、もしかしたら単純な性格なのかもしれない。

そこは活気と熱気に溢れ、中央にある幾つかのリング上では激戦が繰り広げられていた。

しかし、ここはまだ入り口に過ぎない。

ここで審判に実力を見せ、最初にどの階に入るか決めるのだ。

だが、それにしても人が多い。  
流石は年間観客動員数が十億人というだけの事はある。

中央で戦う利用者の姿も、その周囲で歓声を上げている観客も、  
実に凄まじい光景だ。

「お前の番号だ。無くすなよ」  
「無くさないって」

しばらく圧倒されていた俺にクロロから手渡された札には、しっかりと1093番と書かれている。……うん、その番号通りの順番で事が進まないことを祈る。

「それでは、俺はもう行く。修行と課題、それと集合日時と場所を忘れるな」

元々クロロが忙しいというのは知っていたので特に疑問は無い。  
少し寂しいと思ってしまう辺り、大変不本意ながらクロロを親代わりと認めているらしい。

絶対にこの感情を表に出さないし、口にもしないけど。

「あいよ。九月一日にヨークシンシティでしょ？ それじゃクロロ、  
また半年後」

「ああ。たまに人を寄越すから、そのつもりでいる」

実にあっけなく、これで一応の保護者は去って行った。

その方向をしばらく見つめて余韻を感じた後、観客席の方へ移動して空いているところに座る。



そして順番を待っている間に考えるのは、ここでの生活のことだ。

「それにしても……フロアマスターって何？」

クロロに出された課題。それは九月一日までに……いや、ヨークシンに着くのが九月一日だから、それまでにフロアマスターになることがクロロからの課題だった。

名前からしてどつかのトップらしいけど、そんな簡単になれるものなのか少々不安だ。

クロロのことだし、充分無理ゲーな厭らしい条件を出している可能性が高い。

一段落したら情報収集から始めよう。

『2531番・1093番の方、Aのリングへどうぞ！』

アナウンスで俺の番号が告げられる。

想像以上に順番が早くて嬉しい限りだ。

「ここ一階のリングでは入場者のレベルを判断します。制限時間三分以内に自らの力を発揮してください」

審判の言葉を聞きながら、俺は対戦相手であるアフロの実力を目算で測る。

結果発表 雑魚の一言に尽きた。

「おい坊ちゃん、お前結構強そうだな。いいぜ、初っ端から強い奴

と出会えるなんてラッキーだ」

そう嬉しそうに言ってファイティングポーズを取るアフロのボクサーは雑魚だが、人を見かけで判断しない中々の観察眼を持つ人だったらしい。

そういう人には好感が持てる。

純粹に強い奴と戦いたいただけらしいので、礼儀として本気でいこう。

……殺さない程度に頑張つて。

「では 始めっ!!」

審判が手を振り下ろすと同時に俺は跳ぶ。  
相手の初動を許さないまま。

「おりゃあっ!!」

「へブツ!?!」

ちゅくん、ずつどーん!

擬音で表すならこんな感じだと思つ。

俺のドロップキックを正面から食らったアフロはそれはもう見事盛大に数十m吹っ飛び、壁に激突して戦闘不能に追い込まれた。

試合時間一秒。中々のタイムだ。

弱い人だったので自慢にはならないが、このタイムはちょっと嬉しい。

そういえば、力を出し切る前にやられた人は一体どうなるのだろ

うか。

「……1093番。キミは50階へ行きなさい」

俺の弱い者イジメっぷりを見て周囲が若干静かになっているので、審判の声は耳を澄まさなくてもよく聞こえた。

ただ観客席から漏れる『化け物』やら『怪物?』といった発言はいただけない。

悪口は良くないと思います。

ああ、ヒソカへのあれは悪口ではない。

だってヒソカ自身が悪口と感じていないし。

悪口っていうのは、言われた人が不快に思ったら悪口なんだ。

「では、頑張ってください」

「ありがとう」

この戦いの結果を記録したチケットを貰って50階に向つ。

しかし、

「……50階に行ったらどうするんだよ?」

正直、これから何をしたら良いかサッパリ分からない。

俺にこれからどうしろと。

とか思っていたらエレベーターで上がった直ぐ近くに受付ロビーがあったので、そこでこれからどうしたら良いか訊いてみようと思います。

ここに受付を作った人、グッジョブだ。

「すみません。一階で勝ってここに来たんですけど、これからどうしたら良いんですか？」

「はい、チケットお持ちですか？」

俺みたいなお子供が来たので少々意外だったのか、目を丸くして驚きを露わにしたお姉さんは、俺からチケットを受け取ると引き換えに封筒を差し出した。

中に入っているのはファイトマネー。

どうやらここは勝者と敗者で差があるものの、勝った階に応じてファイトマネーをくれるシステムらしいので至れり尽くせりだ。

次期に個室も貰えて金も手に入るし、一生ここに居れば生活に困ることは無さそうです。

こんな良い場所なら人も集まるな、と納得してしまう。

「これからは勝利する毎に各階の受付フロアに行き、今と同じようにファイトマネーを受け取ってください。200階まではこちらで対戦カードを組ませて頂きますので、次の対戦日時もその時にお伝え致します。ケイタ様の次の試合は約一時間後です」

「それじゃあ、その時に選手控え室にいれば良いわけ？」

ニッコリと笑顔で返され、それが正解だったことを悟る。

さて、次の対戦までに腹ごしらえだ。

もうお昼は過ぎていりし腹ペコ具合がヤバイ。

自分でも心配になってしまっ程、中々の好スタートぶりだった

『ケイタ選手！ 怒涛の勢いで190階も一発クリアー！！』

天空闘技場を訪れて二週間が経過した今日、俺はこうして無事200階に到達した。

それまでの戦闘は修行にもならない消化試合の連続だったので内容は割愛させてもらう。

とにかく、やっと俺はスタートラインに立てる訳だ。

なにせ聞いた所によるとフロアマスターとは二十一人の最高位闘士のこと、200階で十勝してフロアマスターに挑戦、勝つことで始めて名乗ることを許される大変名誉な地位だそう、フロアマスターになることに生涯を賭ける人も存在するほどだ。

そんなものに半年足らずでなれと言うのだから、やっぱり無茶を仰ったクロロには馬鹿野郎の称号を送っておこう。

ちなみに何で無茶かと言うと答えは簡単。200階の闘士全員が念能力者だからだ。

まあ、試合を幾つか見てみたがパツと見て強いと感じる者が少なかったのは幸いだけど、それでも油断は禁物。

能力者同士の戦いで絶対はありえないし、中にはヒソカクラスの力を持ちつつ実力を隠している奴だっているかもしれない。

クロロが修行の場を選ぶ程だ。

悔るのは宜しくないです。

「200階クラスによつこそ。では、こちらに登録の署名をお願い致します。さつそく試合を希望なされますか？」

「俺が決めて良いの？」

何でもここでは戦闘は申告制。

しかも対戦相手だつてお互いの同意が条件で指名することだつて出来る。

そして一度戦えば準備期間として三ヶ月の猶予が与えられ、その九十日間の中に戦いさえすれば、また同じ猶予が与えられるのと。

タダでホテルのスイートルーム並みの部屋に住めるし、ここまでのファイトマネーで普通に暮らす分には数十年遊んで暮らせる金も手に入った。

そうか、ここが理想郷というやつか。

フロアマスターになつたらここを拠点にするのも良いかもしれない。

200階からファイトマネー制度が無くなるらしいが、それでも充分過ぎる程の好待遇だ。

正直、笑いが止まりません。

「どつしよっかな……」

傷はもう癒えたので直ぐに戦うのも吝かではないのだが、個人的にはそろそろ本格的に念の修行を開始したい。

コレに関してもククロクから課題を出されたので、もし九月一日ま

でに出来なかつたらその時が俺の命日だ。

そんなのは勘弁。

「うーん……あ、おじさん達って戦闘の申し込みする？ そうだつたら先に譲るけど」

ずっと悩んでいるのもアレなので、背後の廊下から現れた三人に優しさを見せる俺。

しかし、その内の二人は何がお気に召さないのか憤怒の表情をしている。

何故だ。

「おじ……ッ!？」

「おい、俺達はまだ二十台前半だぞ!？」

「落ち着け二人とも」

能面みたいな顔で左腕が無い人と車椅子の人を窘めているフードの人は良い人っぽい。

上手くそのままストップパーになってくれ。

そういう人の存在って凄い大切だから。

「で、お兄さん達は戦いの申し込み？ ……それとも、俺に用でもあるのかな？」

カウンターに背を預け、ニヤリとクロロの真似をして不敵に笑ってみせる。

三人がギョツとしている所を見ると、どうやら想像通り、新入り専門弱い者イジメ集団みたいだ。

大方ここまで上がってきた非能力者や、勝手のよく分かっていない新入りをカモにして勝ち星を稼いでいるのだろう。

俺は今まで念を使ってきてないし、治療のため常に絶状態だったから、俺が念を知らないと勘違いしてもおかしくない。現に今も絶だし。

又は俺が子供なので能力者だとしても強くないと判断したから近付いたのかもしれないが、どっちにしろ、何となくカマを掛けてみたら大当たりだ。

だけどその方法に関しては特に否定しない。

弱い者を狙っていくのは戦術的には正しいし、これは確実に勝ちを拾える賢いやり方だから。

個人的にはカッコ悪くて好きくないけど。

「俺はいつでも良いよ。誰が相手でも受けるから」

「くっくっく、威勢が良いなボウヤ」

そう能面顔が言ってくる。

バレているとはいえ、計画通りという雰囲気をもう少し隠せ。

「これで良いんだよね？」

「はい、確かに承りました。これがケイタ様がお使いになられる1623号室の鍵となります」

受付嬢に『いつでもOK』と記入した申し込み票を渡し、早速部屋に移動する。



込み上げてきた笑いを必死に堪えながら

(馬鹿な奴ら、アンタらがカモだよ。俺ってラッキー)

弱い者専門ということは自分の力量が低いと教えているようなもの。

念能力者との実戦経験が少ない俺にとって、これ以上都合の良い相手はいない。

勝ち星を稼げる可能性が高く、ついでにリハビリも出来るし良い事尽くめ。

幸先の良いスタートだ。

「へえ、前の個室よりも結構良い部屋……って、決まんの早っ！」

これからお世話になる部屋に入って荷物を置き、ふとテレビに視線を移せば目に飛び込んできたのは対戦表。

こんな風に伝達されるとは思っていなかったので少々驚く。

ついでに対戦日時が決まる早さにも。

「219階闘技場で明日の十一時に試合か」

さて、相手は三人の誰だろう。

## 第十一話 修行×戦闘×200階（後書き）

今回はちょっと文量が少なめですが、次回から元に戻ります。とは言つのも読者の皆様方々に少々お願いがあったからです。

実は念能力を結構考えているのですが、ふと他の人ならどういふのを作るのだろうと思ってしまったので、作中で出すオリジナル能力を募集したいと思います。

ちょうど200階闘士やG・I編で出せると思いますし。

作者の嗜好と独断に身を委ね、更には多少のアイデア改変も許し、作中でどんな扱いをされても良いと思う人だけ、是非感想ではなくメッセージにて気軽にご連絡ください。

期限はとりあえず2011年5月31日までです。

選ばれなかったからって恨まないでください。お願いします。

では、誤字誤用脱字の発見に御意見やご感想があれば、是非ご連絡ください。

## 第十二話 初戦×再会！×再会……

『さあやってまいりました本日一番の注目カード、ケイタVSギド！  
まもなく試合開始です！！』

俺は今、観客の大歓声と熱気に充てられながらリングの中央に立っている。

そして目の前にいるのは灰色のフードを被り、一本足の独特な形をした義足を腰から下に付けている人物。昨日受付前で出会った三人衆の一人、ギドさんだ。

『200階クラスのベテランであるギド選手はここまで四勝一敗。まずまずの成績を残しております。対するは怒涛の勢いで順調に勝ち進み、今回が200階クラス初戦闘の期待の新人。最年少選手、ドロップキックのケイタ選手であっ！！』

実況姉ちゃんの紹介で更に観客のボルテージが高まる。

……テンション高いツスね。

それと実況さん、その安直な二つ名は止めてください。観客の『ドロップキックう？おいおい、見た目通り可愛らしくて子供っぽい名前じゃねえか』みたいな空気が恥ずかしいし、そんなアダ名を付けられたら最後はドロップキックで決めなくちゃいけない。

空気読めと言われるのは心外だ。

相手が念能力者なんだから、そんな余裕はもう無いんだ。

「ポイント&KO制。時間無制限……良いね？」

今審判が言ったポイント&KO制とは、この天空闘技場で戦う上

での基本ルール。

クリーンヒットとダウンがそれぞれ1ポイントで、クリティカルが2ポイント。

攻撃を相手に当て続けて合計で10ポイント先取するか、相手を殺すか気絶させた方が勝利だ。又は審判が戦闘続行不可能と感じた時。

まあ、その時は死んでるか気を失ってるかのどちらかだと思っけど。

「では 試合始めっ！！」

更に歓声が闘技場内で木霊した。

始まると同時に俺は後ろに跳び去る。

まずは様子見だ。

「悪いなボウズ。言っている意味が今は分からないと思うが、知らない奴に洗礼するのがここの不文律だ。生きていれば、更に強くなれるぞ」

口に付けているガスマスクもどきからぐもった声が飛び出し、15m離れた俺の耳に正確に届く。

そしてギドさんがフードの中から取り出して俺の周囲に展開したのは複数の独楽。

これでこの人の能力系統がほぼハッキリした。

見た感じ普通に市販されている独楽だし、元の系統は知らないが多分操作系に属する能力の筈だ。

『出ましたギド選手の舞踏独楽！十個の独楽を自在に操り攻撃する、

彼独特のスタイルです！！ 何度も戦闘を見ている私ですが、未だにどんな原理で長時間回し続けているのかサツパリ分かりませーん！！」

そりゃそうでしょ、一般人は念の存在知らないし。つーか秘密保持は良いのだろうか。

折角ダイニングツールの具現化を誤魔化すために、邪魔になるけどショルダーバックを持参したと云うのに。

「食らえ【戦闘円舞曲《戦いのワルツ》】！！」

周囲を縦横無尽に走り回っていた独楽達に込められた念が活性化し、突如その内の二つが俺の方向に弾かれた。

場所は背後と右側面。狙いは腰と側頭部。

しかし、

「甘い！！」

直ぐ様バックに手を差し込み、引き抜くと同時に1m大のスプーンを具現化。

片足を軸に身体を一回転させながらスプーンも片手で旋回させる。側頭部への独楽はすくい、腰への一撃は柄先の部分で弾き返した。一応だが円もしていたので、このくらいの芸当は容易い。

ああ、もちろん皿と柄の部分に凝をしている。だって念が込められているし。

「悪いけど、洗礼は必要無いみたい」

手首をスナップさせて皿に乗った独楽を捨てた途端、観客が沸いた。

『鮮やか！ まるで背中に目があるかのような動きで見事舞踏独楽を弾き切ったああ！』というより、そのでかいスプーンは何だ！？  
『いったいどこで売ってるんだコンチクショー！！』』

無駄にテンションが高い実況と観客とは対照的に、ギドさんは介助杖を握り絞めながら動揺している。

疑ってもいなかったって顔だ。

……顔が見えないからあくまで予想だけだ。

「そうか……念能力者だったか。なら遠慮はいらない！  
【散弾独<sup>シヨットガ</sup>楽<sup>ンブルス</sup>哀歌】！！」

フードの中から飛び出した無数の独楽が俺目掛けて殺到する。

同時に周囲の独楽も数個弾かれた。

正面と周囲からの同時攻撃。

さつき弾いた独楽の威力と飛ばされてくる独楽を見るに、どうやらこれらは強化系と操作系の複合技っぽい。

この二つは相性が悪いので、この能力の完成度は少しイマイチ。  
なら大して脅威に感じる筈も無かった。

ヒソカほどの実力者ならいざ知らず、平均的な力しか持たない実力者でこの使い勝手の悪そうな能力を使いこなし、相手に脅威と評されるレベルにまで昇華させるのは難しいのだから。

『ああー！ 避けています！ ケイタ選手ひたすら回避し続けてい

ます！！ その避け方はまるでダンスを踊っているかの様！！  
くうう、その強さで可愛いなんて反則だぞ少年！ お姉さんを悶死  
させたいのかー！？』

「うるさいよ実況っ！？ 可愛いじゃなくてカッコ良いって言えっ  
！！」

身体をクネクネさせている実況にちゃんとツッコミを入れつつ、  
しっかりと独楽は回避する。

時にはバックステップで着弾場所から遠ざかるかその場で身体を  
反らし、時にはスプーンで弾き返しながら隙をみて独楽をすくい取  
り、俺は数十個の独楽を防御し続けていた。

別にこの程度の念なら練さえしていれば当たってもダメージは無  
い。

けど俺はここに修行の一環で来ているので、どうせならというこ  
とでスプーン捌きの訓練をすることに決めていた。

俺のスプーンは対象をすくい取る。

それは独楽に込められたオーラだって例外ではない。

すくった独楽を放り投げる際に皿状部分にオーラだけを残すよう  
にすくう事だって出来るのだ。

（まあ、すくい取ったオーラは直ぐ勝手に自然消滅しちゃうから、  
念弾とかじゃない限り再利用し辛いんだけどね！）

すくい取った独楽に込められたオーラが消失して無残に転がって  
いるのを見れば、勘が良い者ならスプーンの本質に気付くかもしれ  
ない。

けど別にバレても対策の仕様が無いので特に気にしない。

まだフォークやナイフといった手札も隠していることだし、一つ

くらいならライバル達にも見せてやる。

どうせフロアマスターに近付けば近付くほど、出し惜しみ出来ず手札は公開していくのだから。

「これで終わりだ!!」

俺の周囲で未だに回り続けているのは僅か四つ。それ以外の四十六個はリング外で山積みになっている。

どうやら同時に操れる数の制限は五十までだったみたいだ。

独楽に命じたのは邪魔者か近くにあるのを弾けという類のものっぽいし、少数では上手く機能しない。これでギドさんは裸も同然。

独楽は無視して、初めて俺は自分から攻撃に転じた。

「ふん、直接叩きに来たか！　だがそんなものは想定済みだ、ボウズ!!」

俺が跳躍の体勢に入った途端、ギドさんは義足を支点に猛スピードで回転する。

カウンターだ。

『出ました！　ギド選手の攻防一体の奥義、竜巻独楽!!　ケイタ選手、万事休すかー!?!』

もう俺は跳躍してしまったのだから攻撃を止められない。

このままだと竜巻の如き回転を見せ付けているギドさんと衝突だ。



だけど、そんなものは関係無い

「どりゃあああっ!!」

限り無く硬に近い凝を両足に施して突撃力を増大させる。

集められたオーラの量に気付いて練をしたギドさんだが、その程度  
の練では役不足だ。

容易く防御を貫かれて腹に蹴りを食らったギドさんは、ライフル  
弾のように回転したまま宙を飛び、やがて壁にぶち当たって動きを  
止める。

ちなみに手加減はしたから多分生きてると思う。

トリックタワーの一件で俺の力は大体分かったし。

「ギド選手、戦闘不能！ 勝者ケイタ選手!!」

審判の声と同時に高らかと拳を上突き出す。

その瞬間、確かにこのフロア全体が歓声で揺れた。

『出ました！ ケイタ選手の伝家の宝刀ドロップキック!! 僅か  
一撃、しかも一撃も食らうことなく無傷でのKO勝ちです!! こ  
いつあともない新人が登場しました!!』

歓声のシャワーを浴びながらリングを下りてギドさんに近付く俺  
気絶した彼はちょうど担架に運ばれる所だった。

胸も規則正しく上下しているし、救護班に慌てた様子も見られな  
い。

よって命の心配は無さそうなので一安心。

人の行動を抑制出来るストッパーは世界の宝だから、死なせてしまうのは勿体無い。

ホント、死なないで良かった。

「……クロ口達のストッパーも現れてくんないかな……」

そのことを切実に望みます。

誰か俺への被害を減らしてくれ、マジで……。

俺を絶望のどん底に叩き落す緊急事態が発生したのは、ギドさんと試合をした数日後の夜のことだった。

あの日以来俺は自ら戦闘を申し込むことはせず、運営側からお呼びがかかるまで部屋に閉じこもり、ひたすら念の具現化修行に努めていた。

今も新しく具現化したい食器を観察しながら、イメージ修行のために何枚もスケッチをしていたところだ。

具現化修行には沢山の時間と手間が掛かり、且つ集中力もいるため他の念修行は纏と練以外全てストップ。

……うん、具現化したい食器とその効果についてプレゼンを行い、罰である訓練10倍修行よりも具現化修行を優先させたいとクロ口を説得出来た俺の話術を褒めてやりたい。

その代わり集合までに能力を形にするよう約束させられたけど、地獄の訓練より数億倍マシだ。

そんな修行を俺の部屋でやっている最中だった。  
次の対戦相手が決まり、ギドさんの時と同じくテレビに対戦カ  
ドが表示されたのは。

「……………う、そ……………でしょ？ ……え？ え、ええええええっ！？」

あの時とは違ってテレビにはちゃんと対戦相手の名前が出ている。  
試合のあと俺がそうするよう運営側に進言した。

その結果、

『戦闘日決定！二月二十四日午前九時、203階闘技場にてスタ  
ー……………』

ここまでなら文句は無い。  
問題は……………

『対戦相手 ヒソカ』

……神様、本当に俺が嫌いなんですネ。

俺の気分とは正反対で、空は思わず八つ当たりをしたくなるほど快晴だった。

今の時刻はちょうどお昼時。

もう変態魔人との一戦は終わって本来ならウキウキしながら人生を謳歌している筈の時間帯でも、俺の心は一向に晴れていなかった。

何故なら、

「ボクはこのAランチセットを貰おうかな？ ケイタは何が良い？」

「……………ハンバーグセット」

「はい、かしこまりました」

理由は、何故かレストランで俺と相席している変人野郎の所為だ。折角コイツと会わないために試合をボイコットしたというのに、まさかこんな所で出会う羽目になるとは……人生とは辛すぎる。

ちなみに出会い頭に逃げようしたらバンジーガムで以下省略。

「それにしても、会って早々に逃げるなんて相変わらず酷いなあ？  
試合だつて出てくれなかつたし？」

「お前だつて出てないじゃん。両者共に棄権して負けるなんて前代未聞だつてよ」

そう、コイツは九十日間の戦闘準備期間が切れそうだったから申し込みをしただけで、元々出るつもりは無かつたらしい。

対戦相手が俺だというのもついさつき知つたそうだ。

ここではそう簡単に勝ち星を取らせないため、両者が同時に棄権した場合はお互いが一敗するというシステムを取っている。

お陰で俺は一勝一敗。今サラダをフオークで突いているピエロ野郎は八勝三敗。

くそつ、こうなるんなら出てれば良かった。

お客さんだつてチケット代払い損だ。まあ、ちゃんと払い戻しされたらしいけど。

「つーか何でここに居るんだよ？ まさかクロロやマチに聞いてここに来たつて訳無いよね？」

いや、その二人に限らず団員の誰かに教えられたのなら、情報提供者には盛大に文句を言つてやる。

自分の首を絞める結果になるうとも、今度料理を振舞う時はペテンティストだつて使つてやるもんか。

「嫌だなあ？ 君がここに居ることにボクも驚いているんだよ？」

それに、ボクはこの常連さ？　ここなら戦闘に事欠かないしね？  
ボクにとって、ここは天国そのものなんだよ、君もいることだし  
？」

「ああそうだね！　俺にとっては天国から地獄に即チエンジだよバ  
ーカッ！！　……っーかそんな目で俺を見るな！　絶対戦わないぞ  
！！！」

背筋がゾワゾワしてハンバーグを食べるところでは無くなってし  
まう。

なんて食欲意識を殺ぐ視線なんだ。  
精神的負荷がハンパないっス。

さっさと食べて帰ろう。

ちゃんと要求通り昼食を共にしたんだから、この髪を水色からオ  
レンジにイメチェンしたキ　ガイ馬鹿も満足な筈だ、きつとね。

「安心しなよ、ここでケイタとやる気は無いし、修行の邪魔もする  
気は無い？」

「え、マジ？」

ならここに一生居続ければ俺は安泰かもしれない。

やはりここは俺にとっての理想郷だったのか。

フロアマスターになってしまえば永遠の富と名声が手に入るって  
訊いたし。

「……君とは、ルールで縛られない外の世界で戦いたいからね」  
「「ちそうさまっ！！」」

ゼビル島での戦闘を思い出したらしいコイツがまた高ぶってきた

っぱいので、まだ半分も食べてないけど席を立つ。

こんな心臓に悪い空気を発しているヒソカと一緒にいるなんてゴメンだ。

しかも貫かれてうつすらと傷になってしている手の甲を見て、舌舐めずりしている姿がまたなんとも……もう色々と限界です。

「もう良いのかい？ ああ、再開を祝すってことで、ここはボクが持つよ。修行、頑張ってね？」

「おうよ！」

ここまで心理状況と顔が一致しない状態というのも珍しい。  
よく笑顔で対応出来るな俺。

……ヤケクソになっている証拠だろうけど。

222

「ここは私が奢るから遠慮しなくて良い。好きなものを頼んで良いよ」

「それじゃあ遠慮なく」

ここまで誰かと同席するというのも初めてだ。  
それが初対面の人となれば尚の事。

まあ、一人よりも誰かと一緒の方が食事も楽しいし美味しいから、全く文句は無いのだが。

……ちなみにヒソカは除く。

「それで、カストロさんは何で俺を誘ったの？」

「おや、光栄だね。期待の新人君に名前を覚えてもらっているとは」

俺の対面に座っているロングヘアのイケメン野郎の名はカストロ。

200階クラスの闘士で、この前の試合で九勝目を勝ち取った上位の実力者だ。

この人の試合を見たのは一度だけだが、それでも大分強いのは直ぐに分かった。

まず他の人とはオーラが違うし、その試合も予定調和みたいにするなりと鮮やかに勝ちを拾っていった。発も使わずにだ。

おそらくこの人が、ヒソカを除くと200階クラスでの最大の強敵。

それだけのポテンシャルを秘めていると思う。

そんな有名人に夕食を誘われたのだから、少しというかなりビツクリ。

だってマジで接点無かつたし。

「いや、あのヒソカが君と昼食を共にしているのを目撃してね。少し気になってしまったんだ。迷惑だったかい？」

こんな高級ダイナーを奢ってくれるんだ。

迷惑な筈が無い。

けど何でヒソカに拘るのか気になったので、食事中の話題として訊ねてしまった。

まあ、大体予想は付くのだが。



そして案の定、彼はリベンジャーだった。

200階に上がった初戦でヒソカと戦い、洗礼を受けて彼は念を習得した。

言わばこの人も俺と同じで、青い果実認定を受けた人。

ただ俺と違うのは、しっかりとヒソカを倒す事を目標にして修練を積んできたという点だ。

だからヒソカと知り合いである俺から能力でも聞き出したいのかと思つたら、そんなフェアじゃないことをする気は無いとのこと。ただ純粹にヒソカと友達（言われた瞬間にすっかり訂正させてもらった）の俺に興味を持ち、こうして夕食に招待したというのだ。

うん、そのフェアプレイ精神は中々好印象だ。

……けど、俺からしたら死にたがりにしか見えません。情報収集も立派な戦いだし、恥では無いと思うのに。

だが当然の事ながら頑張れとエールを送る。

もし倒せたその時は、確かに世界が一步平和に近付いたという事だから。

その時は大魔王を倒した勇者として、永遠に俺の中で語り継がれる事だろう。

「頑張つてヒソカを倒してね。どうせなら再起不能にでもしちゃつてよ。マジで応援するから」

ついに俺を地獄から解放してくれる救世主様が現れたかと思うと嬉しくなった。

フロアマスターに最も近い男カストロ大明神。  
頑張ってください。

「ありがとう。あと数ヶ月したら戦闘を申し込むつもりだ。もう少し完成した能力を煮詰めていきたいからね」

さて、カストロさんはいったい何系なのだろうか。

見た目は爽やか系なのに熱血漢だし、おそらく強化系だと辺りを付けてみる。

試しに訊いてみたら当然のことながらはぐらかされた。

……当然ですね。

以前にも話題に出したが、世の中には正負の法則というものがある。

良い事があつた分悪い事が起こり、その逆も発生するというプラスマイナスゼロの考え方だ。

圧倒的にマイナスな出来事に遭う事が多い俺としては、この法則を信じていたりする。そうじゃなきゃやってられません。

だからこの前ヒソカと遭遇した俺には、今度は幸福なことが待っている筈だ。

そう思い続け、ヒソカと昼食を共にして三日経った今日、その時がついに訪れた。

「ねえ！　ここで俺以外の子供見なかった！？」

70階フロアに到着した俺は近くの人に訊いてみる。

何で俺がここまで来たのかと言うと、さっきヒソカから連絡があったからだ。

俺が会いたかった人達が昨日50階クラスをクリアして早々に60階に上がり、今日中にも70階まで上がってくるだろうと。

今までプチ引き籠もり生活をしていたから彼らの来訪に気付かなかったので、その情報はとても嬉しかった。

思わずヒソカに礼を言ってしまったのはアレだが、そんなことがどうでも良くなるくらい今の俺は浮かれている。

もし本当に居たのなら、その功績を称えてヒソカへの好感度をほんの少し上げてやろう。

—ミクロン程だけ。

「ああ、噂の二人ならさつき受付の方に行ってたぜ」

「ありがとう！！」

いかにも荒くれ者って感じの人相最悪なスキンヘッド兄ちゃんにお礼を言い、即座に受付目掛けて突っ走る俺。

人が邪魔だから壁やら天井を足場に駆け抜ける。

今は一分一秒でも時間が惜しい。

そして、

「ゴンっ！　キルアああっ！！」

これ以上の幸福は早々訪れない。

俺は、初めて出来た友達と再会出来たのだ

第十二話 初戦×再会！×再会……（後書き）

早くゴン達と再会させたかったので、少し駆け足な気もしますがテンポを速くしました。

ちなみに実況の人は念を知らない設定で宜しくお願いします。アニメだとエレベーターガールが念を習得していたので、本当は実況の人も念を知っているのかもしれませんが。

ですがここでは、知っている人と知らない人がいると考えてください。

能力を募集して数日経ちましたが、数々のユニークな能力を提供して頂き、まことにありがとうございます。

教えていただいた能力は全て目を通して保管しております。本当、感謝感激です。

感謝のメッセージの送り損ないは無いと思われませんが、もしあった場合は大変申し訳ございません。

この場でもう一度、感謝の言葉を述べさせていただきます。本当にありがとうございます！！

まだ能力は募集しておりますので、何か良いアイデアがあった場合はどうか宜しくお願い致します。

では、誤字誤用脱字の発見、御意見やご感想がありましたら、是非ご連絡ください。



### 第十三話 スシ×ウイング×お節介

運命。

もうこの一言を使っても差し支えないような、とても奇跡的な出来事だと思う。

この無駄に広い世界の中、こうして偶然再会出来るなど思いもしなかった。

物心付いた頃から罵詈雑言を浴びせてごめんなさい。

クソツタレ神様改めお優しい神様、今の貴方様はめちやくちゃ輝いております、はい。

「ケイタ!? お前生きてたのか!?!」

「うわぁ、久しぶりだねケイ」

本当に驚いた顔をしているキルアは別として、ゴンの言葉は途中で中断させられた。

理由は俺が炸裂させた必殺リアットにある。

見事首に攻撃されたゴンは盛大に吹っ飛び、床をゴロゴロ後転しながら壁にぶち当たって沈黙。

今すぐプロレスラーとしてデビュー出来る程の華麗な技だ。

だから俺は真正面から両手で襟首を掴み、身体全体をグラグラと揺さぶるキルアの行動が理解出来ません。

「お前、出会い頭にいきなり何やってんだよっ!? ゴン、大丈夫か!?!」

「痛ったあ〜！ いきなり何すんのさっ!?!」  
「うっさい馬鹿！ おのれが甲板で変なフラグ立てたから、あんな馬鹿野郎のターゲットにされたんだ!! こんくらい甘んじて受けられるくらいの寛容さを見せろ!」

俺はゴンに会ったらずまず文句を言うと思って決めていたんだ。  
有言実行って大切だと思う。口先だけの男になりたくないんだよ俺は。

「何その暴論!?!」

いや、無茶苦茶なのはゴンだろ。

だって俺に一撃食らわされた首ではなく、壁にぶつけた後頭部を押さえて痛がるなんてどんな身体をしているんだと言いたくなる。

相変わらず変わった奴だ。

「ケイタに俺を変人呼ばわりする資格無いからね!?!」

「もうとっくにお前はヒソカと同じで変人カテゴリーに区分されてるっつーの……って、痛えよ馬鹿！ 今の腹パンは常人なら死んでんぞ!?!」

「喧しい！ こんな真人間筆頭の俺を変人呼ばわりとは神への冒瀆に等しい行為と知れ!」

うん、出会って数分で大乱闘が勃発してるけど、やはり二人と話すのはとても楽しい。

これが噂に聞く喧嘩するほど仲が良いって事だろう。

周囲で始まった誰が勝つのかというトトカルチョは一先ず考えない方針にして……ホント、楽しくて幸せな一時だ。



とりあえず気の済むまで暴れて係りの人に叱られてから俺達が来たのは、闘技場一階にあるレストラン。

訪れたのはもちろん昼食という理由もあるが、本当の目的は再開を祝してのパーティーと、怒られてまだ落ち込んでいるゴンを元気付けるため。

ポンズを罫にかける図太い神経している癖に変な所で繊細なゴン君でした。

「元気出せよゴン」

「そうそう、過去には戻れないんだからさ。落ち込んでてもしょうがな」

「お前が言っつな!!」

慰めているのに対面のキルアがテーブル下で脛を蹴ってきたのだが、それはまあ我慢してやろう。少しは罪悪感を感じていることだし仕方が無い。

仕方が無いが……

「痛っ!? ちょっと本気で蹴りすぎでしょ!？」

さっきの腹パンを気にしているようで容赦が無かった。常人なら骨が折れてるぞ。

ああ、その飲み干したクリームソーダのストローを啜ってニヤついている顔が憎たらしい。

「うん？ どうしたんだよゴン」

いきなりクスリと笑いだしたゴンを不思議に思ったキルアがいくぶかしそうな目で見ている。さっきまでこの世の終わりのように暗かったゴンも、今はとても笑顔だ。

「やっぱり二人が絡むと面白いよね。本当、ケイタが生きていて良かったよ」

「そういえばさ、何で俺って死んだことになってんの？」

今のゴンみたいにキルアも少し前にビククリしていたし、その事が物凄く気になる今日この頃。

俺がアイツのターゲットだったから、ヒソカが最終試験に進んだ時点で俺は無事では無いと思われていたのかもしれない。

うん、訊いたらそれで正解。二人揃ってコクコク頷いている。

「つかやっぱりヒソカはゴンにプレート渡したんかい。」

「で、結局二人は受かったの？ ああ、あとクラピカとレオリオも」

「俺達はね。でも……」

「……俺は落ちた。別に悔しくも無いけどさ。あんなの、ただの暇つぶしだったし」

本当にどうでも言い様に見えるが、どこことなく暗い影がチラホラと見え隠れしている。

……もしかして空気読めない発言だったのだろうか。

けど気になる事だったので訊かない選択肢など無い。クラピカとレオリオの合否も気になった所だったし。

「でも何でケイタもここにいるの？」

「修行の一環。お前は実戦経験少ないからってさ。二人こそ何でここにいんの？」

運ばれてきた熱々ハンバーグを口に運び、その肉汁を堪能しながら訊いてみる。

まあ、理由も何も小遣い稼ぎや修行くらいしか来る意味がないとは思うが。

でもこの二人だったら別の想像も付かない理由でここを訪れても可笑しくない。

友達だけど、コイツらも世間一般からすれば変人以外の何物でもないのだから。

「俺は小遣い稼ぎと……ちょっと知りたいことがあるんだよね。ま

あ、ゴンはヒソカと戦うための武者修行って意味もあるけど」

「……また何で死に急ぐような真似を……」

もうゴンが何を考えているのか理解出来ません。

触らぬ神に祟り無しという言葉を是非ゴンに教えてあげたい。

しかし、その事を伝えようと思って口を開きかけた瞬間、頭の中で何か弾けて素敵アイデアが溢れ出してきた。

それはまるで閃光のよう。

めまぐるしいスピードで脳を駆け巡り、様々な考えが取捨選択されていく。

(……待てよ。これでヒソカの関心がゴンに向けば俺に興味を無くすかも!?)

そう考えると急に世界が明るく照らされていると思えるから不思議だ。

世界はこつも素敵に輝いているのだと理解させられる。

だとしたら俺はゴンのその無謀なチャレンジを応援しなくてはならない。

ほら、やっぱり友達だしね。

(アレ? ……でも、もしかしてマズい?)

興味を無くす!!俺はもう用無し!!飽きたから古い玩具はもういらない!!廃棄処分

なんて方程式が成り立ったら俺の人生は終わったも同然だと気付き、今までの幸福感が何だったのかと思うほどの絶望が襲い掛かる。

理解不能な思考回路をしているヒソカの行動を予測出来る筈も無く、何でこつも毎回毎回ヒソカのことと頭を悩ませなければならぬのか。

俺の悩みの七割はヒソカに関してだ。残りはクロ口達。

(……悩みの種が知り合いだけって何よ?)

……神様、貴方様はどれだけ俺に試練を与えるのですか。

「ねえキルア。ケイタってば急にテーブルに頭を打ち付けてどうしたんだろ？」

「ほつとけよ。飯が冷めちまうぜ」

ダメだ。コイツらからも優しさが感じられない。

キルアもパスタにパクついてないで、ゴンみたいに俺にもう少し感心を示しても良いと思うぞ。

テーブルに顎を付けてジト目で見る。

すると、急にキルアは食事を止めて俺を見た。その顔は何故か少し戸惑い気味。

まるでとある可能性に気付いたかのように、キルアは軽く目を見開いていた。

「そつえばお前さ、もしかして」

「ゴンさん！ キルアさん！！」

俺達にとって後に重大な問題となる、今の関係をぶち壊しかねない発言をしかけた所で、二人の名前を呼ぶ少年の声がレスラン内に響き渡った。

つい視線をそちらに向ければ、目に入ってきたのは柔道着。見るからに健全で修行熱心そうな同い年っぽい少年が、俺達のテーブルにやってくる。

ついでに保護者みたいなメガネお兄さんも一緒。

そして二人を見た瞬間、俺は少しかり警戒する雰囲気を出してしまった。

何故なら二人が念能力者だと分かってしまったからだ。

ただの一般人なら自然に溢れ出すオーラをこんな綺麗に留めておくことなど出来ない。

一般人ならもう少し弱々しく、漏れていると表現した方が正しいくらしいのオーラしかたれ流されていないからだ。

俺達念能力者は目の精孔も開けているため、このくらいなら凝をしなくてもオーラ量を感じ、だいたいの状態も手に取るように分かっ  
てしまう。

「ズシ！ ウイングさんも！」

「おう。ズシも昼飯か？」

「押忍！ ゴンさんキルアさん、そちらの人は？」

見た感じズシと呼ばれた少年は俺のことに気付いていない。  
ただウイングさんと呼ばれたシャツ出し兄さんは、明らかに俺の警戒空気に気付いて目を瞠っていた。

キルアにも察知させない速さで警戒を解いたというのに……この反応の速さから、この人の技量が推測出来る。

通常のオーラしか見えていないから判断に困るが、強さと言えばギドさん達よりは強そうという印象を与える人だ。

見た目は地味な優男なのに。

「……………ケイタ？」

「え？ あ、ああ。よろしくね」

「押忍！ よろしくっス」

……………見た感じ危険は無さそうだし、友達候補三人目発見と考えれば

嬉しくない筈が無い。

しかも同じ念能力者。クロコ達以外で念について語れる貴重な人材だ。

（そういえば、二人が200階まで到達したらどうしよっか？）

この二人なら近日中に200階まで上がってくる。

そうすれば、二人を待っているのは念能力者による洗礼だ。

念に対抗するには自身も念能力者になるしか対策が無い。

念を発現させる方法は、オーラを当てて無理矢理精孔をこじ開けるか、瞑想などの長い年月かけてゆっくりと精孔を開けるか、二つに一つ。

洗礼とはつまり、念による攻撃で精孔をこじ開けることを言うのだ。洗礼という名が付いたのは、あくまで攻撃なので激痛を伴うからに他ならない。

ちなみに俺が念を習得した経緯は、言うなればこのこと同じ洗礼です。

（いざとなったら俺がこじ開ければ……いや、それよりも適任がいるし、俺はノータッチにしとこう、うん）

ズシがウイングさんを師範代と呼んでいるし、念の講師としては充分及第点な筈。その指導力はズシのオーラの状態を見れば推測出来る。

今でも修行中の俺より念について詳しいだろうし、教えるのも上手い筈だ。

きつとこの人がこじ開けてくれると信じてる。

オーラを当てるのは危険な行為だが、害意さえ無ければ危険度は格段に下がるから。

「初めまして、ウイングです……見た所、君も相当の実力を持っているようです。ゴン君達にも言いましたが、くれぐれも無茶はしないよう自分の身体を大切にしてください。相手の身体も気遣うように」

「押忍!!」

……ズシのが移ってしまった。まさか俺に体育会系のノリがあるとは思ってもいない。

実は流されやすい性格なのかと今までの自分を否定してしまいそうだ。

「そっぴえはケイタってさ、今何階にいるの？」

「200階」

ゴンに訊かれたので間髪入れず答える。

それに対する皆の反応は様々で、ズシなんかは俺の事を凄いと褒めちぎったあと少し落ち込んでいた。

俺とは同じ年だし、自分がまだ50階で手こずっている事実にも劣等感を抱いているのかもしれない。

ウイングさんのフォローに期待しようと思う。

心身のケアが出来てこそ、良い師匠だと思っから。

「落ち込む事はありませんよ。彼方の上達の早さは並じゃない。10万人に一人の逸材です」

「押忍！ 自分、もっともっと精進するっス、師範代!!」

「ただ、ケイタ君が100万人に一人というだけの事です。気に病



む事ではありません」

「……………押忍……………」

上げてから落とすとは中々非情な高等テクニクをお使いになられる。

ククロでもやらないぞ。まあ、褒められた事無いから当たり前なのだが。

(……………そう考えると、初めて修行の成果を褒められたのってゼビル島が初めて?……………よりもよってヒソカっスか……………)

気付けば俺もズシと同じように心の涙を流していた。

「ねえキルア、二人が」

「ほっとけよゴン。飯が冷めちまうぜ」

「おのれはそればっかだな!？」

ゴン達と再会してズシやウイングさんとご対面してから数日、いつものように自室で具現化修行をしている時に二人は訪れた。

「……………レン?」

「ああ、何でも良いんだ」

「ケイタはレンが何か知らない?」

部屋の中央に座って適当に寛いでいるキルアとゴンにジュースを渡しつつ、俺も二人に習って円を描くように胡座をかく。そして少し

だけ考えてしまった。

(レンって練だよ、きつと……何でまた?)

二人は今さつき140階をクリアして150階に上がったばかり。普通なら念の存在は知らない筈だ。

しかしよくよく考えてみればキルアの兄貴であるイルミが念能力者だし、他の家族も何人かが能力者だと仮定すれば、キルアだけは触りくらい知っていても不思議じゃない事に気が付く。

念に関する会話を偶然立ち聞きしたという可能性は充分あり得た。

「それがこの前言ってたキルアの知りたかったこと?」

「まあな。以前ズシがウイングさんと話してたんだよ」

そのあとキルアの体験談を簡単に教えられた訳だが、一つだけ言いたい。

ズシ、負けたくないのは分かるけど練はやりすぎ。ウイングさん、秘匿という言葉の意味を知っているのか。

……訂正、二つだった。

「……その顔だと何か知ってそうだな」

「ケイタ、教えてよ」

目敏い二人に目を付けられた時点で逃げるのは無理だし、偽証も直ぐバレる気がしてならない。なら教えてやろうと思う。

この天空闘技場で上を目指す限り、遅かれ早かれ知ることになるのだから。

ヒソカやイルミという二大変人と知り合いな訳だし。

「レンは四五行の一つだよ。纏を知り絶を覚え練を経て発に至る。これ即ち念の修行也」

「分っかんねーよっ！！」

ドヤ顔を向けたら盛大にツッコミを入れられ、不意打ちを食らった俺の身体が宙を舞う。

体感では長く、しかし実際は数秒という短い滞空時間の果てに、身体は部屋の隅に積んでいた紙束に突撃した。

お陰で俺が描いた力作達が皺くちやだ。

「ちゃんと教えたのにこの仕打ち！？　そういう暴力的な所って本当に兄弟そっくりだよな！！　やっぱりお前はイルミの弟だ！！」

「何でお前が兄貴を知ってんだよ！？　っーかお前、ぜってえ教える気ねえよなっ！？」

「だから落ち着いてったら！！　……ていうか、何で俺が毎回毎回二人を止めるんだよ！？　もう、いい加減にしてよ二人共さあ！？」

こうして場は混沌としていき、俗に言うカオスの場へと変貌していく。

しかしそれも激闘の末に壁が崩壊し、隣の200階闘士に怒られるまでの短い間に過ぎなかった。

その際俺に罪を擦り付け、運営側から苦情を聞かされる前に逃げ出した二人に再び報復を誓ったのは言うまでも無い。

ウイングさんが借りている部屋で二人が『燃』を教えられ、非能力者を除いた三人でちよつと会議を繰り広げて数日経った訳だが、ついに二人が常識外の世界へ　俺達能力者が蔓延る世界の裏側へ一歩踏み入れる日が訪れた。

『それは本当ですか？』

「そう、今日二人が200階に到達すると思う。今190階で対戦中だから……訂正、今二人が勝った」

電話越しにウイングさんのため息が聴こえてくる。

しかしため息といっても悪い意味ではなく、含まれるのは単純に二人を称賛・感嘆してしまう気持ち。

もし俺が200階エレベーター付近で二人を待ち伏せし、念に関して無知な二人が性質の悪い能力者に絡まれないようにしていなければ、焦りや戸惑いなども意味として含まれていたかもしれないが。

『分かりました。それでは登録を終えたら直ぐに私の下へ来るよう通達するのを願います』

「あゝ……その事なんだけど、多分ウイングさんが来る方が都合が良いと思う。つーか来てください。いやホントに」

本来なら第一回ゴン・キルア念修行育成会議で決めた通り二人の精孔をこじ開けるのはウイングさんで、200階で登録を済ました彼らを導くのが俺の役目だった筈なのだが、この段階にきてかなりの問題が発生してしまった。

もうこの先何が起こるか予測不能。

「つか俺一人じゃ頑固な二人を退けさせるのは無理だし、隣にいる元凶と二人きりは色々キツくて精神がバグリかねない。

だから俺はいぶかしげな雰囲気を出しているウイングさんに救援要請を送り、承諾してくれた事に一安心して通話を切った。

「君も大変だねえ？」

「七割近くがお前の所為っていうのをいい加減自覚してくんないっ！？」

肩に手を置かれ、それを荒々しく振り払った俺の隣にいるのは変態の代名詞ヒソカ。

この世を創った神最大の過ちにして人類を超越する変態達の中でも更に数歩進んで伝説を残している変態の神。それが彼奴だ。

「だいたい何で俺を拉致る！？ お陰で試合のチケット代が無駄になっただじゃん！」

二人は子供で実力者という事もあり、俺に次ぐ期待の新人として人氣はうなぎ登り状態。

だから花形である200階闘士バトルと同じくらい人氣がある二人の試合を見るには馬鹿高い金を払わなければならなかった。

それが全てパアになるとかなりやるせなくなる。

預金が数億あるので数万くらいノードメに近いけど、俺が金持ちになつたと知った家族という名のハイエナ共が揃ってプレゼントを要求したため、今後もたかられるのを想定すると貯金するに越したこ

とはない。

……つーかフエイタン、おのれはこんないたいけな子供に拷問器具を買わせようとするな。どこで買えと言うんだアンタは。

「そんなもの、ここで観れば良いじゃないか？」

「何が悲しくてお前と一緒に廊下のこんな小さなモニターで観なくちやいけな　っ!？」

唐突にヒソカから吹き出した不気味なオーラに当てられ、即座に臨戦態勢を取る俺の切り替えの速さは相当なものだろう。

これも『人をあまり信用するな』『いつ如何なる時も最低限の警戒を心掛ける』なんて人間不信も甚だしいクロコの教えを忠実に守っている成果だ。

今回ばかりはクロコ、グツジョブ。

「……そういうことか。……いやもうさ、本当に俺を連れて来た意味無くない？」

ここにきてヒソカの意図を正確に理解した俺は、現在ヒソカにバンジーガムにて連行中。

運営側のお姉さんが立っている曲がり角まで歩き始めた。

お姉さんが誰かにここでのルールを説明しているし、このタイミンで200階に来る人物など限られている。

ヒソカは主にエレベーターに向けてオーラを放出していたし、ほぼ間違い無い筈だ。

「ヒソカっ!？」

「……と、ケイタ!？」

予想通りというか確定事項というか、やはり推測通りエレベーター前でゴンとキルアがオーラの圧力に屈して進めなくなっており、曲がり角から現れた俺達を見て驚愕の声を上げる。

ゴンがリベンジ相手を見て驚くのは分かるが、キルアの叫ぶ俺の名に『この野郎、裏切りやがって!!』という仲間だった奴が敵として現れた、みたいなスパイキャラを彷彿させるニュアンスが含まれているのはスルーした方が良いのだろうか。

つーかこの劇的な登場に俺を敵サイドで連れ出す意味が分からない。……まあ、どうせ意味なんて無いだろうけど。

「なんてね? もちろん偶然なんかじゃなく君達を待っていた?」

ここで一つクエスチョン。

電脳ネットで個人のプライバシーを侵してまで行き先を突き止め、私用船で先回りした拳句に二人を待ち伏せ&尾行する奴を何と云うか。

答えは一つだ。

「……やっぱりお前はストーカーか!!」「」

当然のように俺達仲良しトリオの声が八モる。心なしかヒソカの犯罪を聞かされることになったお姉さんの顔も引き攣って見えたのは気のせいではない。

「というより、ケイタも何でヒソカがいるのを教えてくれなかったの!？」

「……言ってなかったっけ？」

「言ってるねえよ馬鹿!!」

冷や汗ダラダラの二人は今この場にるのが辛いにも関わらず立ち去ろうとせず、俺にツツコミを入れてくる。特にキルア。

その精神力は称賛に値するが、今は正真正銘の自殺行為だ。

そんな俺達のやり取りを見て笑い声を上げるのは、隣で腹を抱えている変態野郎しかいない。ちなみにお姉さんは空気。

「くつくつく? まあ、ボク達が何を言いたいのかといえば」

「俺の意見まで統合するなよ!？」

いや、念を習得していない二人に念を覚えさせてからここに来させようというコイツの優しさは評価してやっても良いが、何も登録前から脅す事はない。

登録さえしてしまえば九十日の戦闘準備期間が与えられる事だし、二人ならこの三ヶ月で基礎を全部習得出来てもおかしくない。それ程のポテンシャルを二人は秘めている。

だからヒソカのこれは完全なお節介で、九割以上が自分が楽しむためだけにやっているに違いない。本当にゴキブリ以下の存在意義かない疫病神だなコイツは。

「だからここの先輩として君達に忠告しよう」



ヒソカが右手を二人に向けると同時に、再び緊張とシリアスが場を支配した。

気温が零度以下まで下がったかと思えば、とても重く、息をする事すら憚れる威圧感が廊下に満ち始める。

「このフロアに足を踏み入れるのは　まだ早い？」

手に集めたオーラが解き放たれると同時に突風が生じ、二人は揃って後退させられた。

もし二人の立場なら俺だって後退を余儀無くされていただろう。

実際に向けられていないにしても、隣に居ても十分なほど感じられる禍々しいオーラ。

……そんなオーラを当てられても動じないお姉さん、アンタは流石に鈍すぎです。

「出直したまえ？　とにかく今は早い？」

「ざけんな！　せつかくここまで来たのに……ッ！！」

口答えしたキルアが一步踏み出そうとした瞬間、更に重圧が増した。

「通さないよ？　……いや、通れないだろ？」

念を習得しているからこそ分かる、今この場に満ちているオーラの邪悪さ。

しかし、思わず俺も逃げ出したくなってくるほど醜悪さが増したオーラの壁でも、精神力が桁外れの二人の歩みを止める事が出来ない。

「この馬鹿！　一端下がれ二人共！！　それは勇敢じゃなくて無謀

って言うんだよ！ 今ここに」

「うつせえ！」

「これが『燃』なんでしょ！？ ケイタにも出来るなら俺達にだってっ！！！」

俺に対抗心を燃やし、半ば自棄になっている二人が一步、また一步と、ゆっくりだが確実に少しずつ近寄ってくる。

やはり俺がこの場にいるのが裏目に出てしまい、二人は愚かにも無理矢理念を突破する気満々。

やはり俺では頑固な二人の説得は無理だ。

しかし頼みの綱であるウイングさんはまだ登場していない。

なら、

「ほう？」

「止める馬鹿ピエロ！！！」

ヒソカの注意を俺に向けるか、二人を威圧する暇を与えないよう、仕方が無いがちょっとかいを出すしかない。

本当はコイツに喧嘩を売るのは嫌だけど、二人のためだから仕方が無いと割り切る。

当然俺の不意打ちパンチはヒソカに軽く防がれたが、それでも二人に対する重圧は半分以上減少したので上々の結果だろう。

全て俺の計算通り。

ただ一つの誤算は、一触即発な空気を出した俺に加勢しようと、二人が更に距離を縮めようとした事だ。

「馬」

「止めなさい。彼の念に対し君達はあまりに無防備だ。これ以上、心身に負担をかけると死にかねないよ。……それに、彼の行動を無駄にはいけない」

このタイミングで登場したウイングさんは、正に救世主の名に相応しい。

お陰で二人は足を止め、長い説明と説得に応じると登録時間ギリギリの午前零時までには再び帰ってくるのを誓って去っていく。

それに俺も続こうとしたのだが、やはり行く手を阻むデカイ障害がある訳で、

「ダメだよ？ それじゃあボクが三時間以上も暇になる？ またポーカーでもやるのか？」

「この暇つぶしのために俺を巻き込んだのか！？ ……っつて、放せよ本当にさあ！？ さっき殴ろうとしたの謝るから！！」

しかし言動や行動でコイツから逃れられるのなら、俺はそもそも最初の時点で変態の魔の手から逃げ切っている。

よって今この段階でコイツのバンジーガムやら体術の嵐を掻い潜り、ゴン達に合流して念習得の歴史的瞬間に立ち会うのは無理というものだ。

……つーかトランプしようと言っていた癖に攻防戦が楽しくなったのか、次第にヒソカがエキサイトしてきて攻撃が苛烈なものに変わってきたし。  
流までするな。捌ききれないだろ。

「ゴオオオオン！キルアアアアア！カムバアアアツクウウツ！」

この時の俺を見るお姉さんの哀れみに満ちた表情が、しばらく頭に残りました。

つーかお姉さん、無理とは思っけど一応コイツの横暴を止めようとしてよ。

廊下で争っちゃいけないと思います

### 第十三話 スシ×ウイング×お節介（後書き）

実は一週間以上前から書き終えていたのですが、一週間以上パソコンを起動させていませんでした。

メッセージや感想等の返信に物語更新など、遅れてしまい本当に申し訳ございません。

時間が……時間が欲しい！！ここ数週間の平均睡眠時間が3〜4時間って何！？

そして旅団関係者で主に関わっているのがヒソカだけという驚愕事実は今更ながら気付いたので、そろそろで旅団を出します。ついでに次回は主人公の200階クラス三戦目を予定。

募集した能力を出そうかと思えます。選ばれなかった方は申し訳ありません。まだ機会があります。

ちなみにまだオリジナル能力は募集中なので、作者の独自改変を許すという寛大な心をお持ちになっている方はメッセージ等で是非教えてください。

では誤字誤用脱字、御意見や御感想がありましたら是非ご連絡ください。

## 第十四話 師匠×落胆×変人進化

「右腕、とう骨、尺骨が完全骨折。上腕骨亀裂。肋骨三ヶ所完全骨折。亀裂骨折が十二ヶ所。全治四ヶ月だとさ、このド阿呆」

「バーカバーカ」

さてさて、ベッドの上で小さく舌を出して謝罪している正真正銘のお馬鹿さんであり、世界でもトップクラスの命知らずだと証明してしまったゴンをキルアと俺で罵倒しているのには当然理由がある。

せつかく洗礼を受けないよう一昨日の夜にウイングさんが念を開発したというのに、その善意をご破算にしゃがったからだ。

基礎中の基礎である纏しかマスターしていない状態で基礎過程終了のギドさんと試合をするのはまだ許せる。

発に至っているギドさんに勝てる筈が無いのだが、そんなものは自己責任だ。

新しく得た力を試したいという欲求に負けた事を責めるつもりは無い。

しかし、試合中にわざと絶をしたのはいただけくない。

確かにまだ無意識下で纏を行えないゴンが回避に集中するために纏を解き、絶という背水の陣で回避に専念するしかないだろう。

だがそんなものは必ず終わりが訪れる。

ずっと回避し続けるのは物理的にも不可能だし非常にナンセンス。

攻撃を食らう寸前に素早く纏を行う技術を念能力者歴二日の奴が

出来る筈もなく、結果として一時間もの回避劇を続けた。ゴンは最終的に独楽の嵐に遭い、見事にこうして重症患者の仲間入りを果たした訳だ。

……まったく、また変人録に新たなページを刻みやがって。このままだとゴンがイルミと同列になる日も近いぞ。

まあ、一位の座はアイツの指定席と言っても過言では無いので、地位を脅かす存在にまで成長するとは流石に思えないが。

「ただでさえメガネ兄さんに試合は二ヶ月我慢しろって言われてたのにあんな事までしやがって。弁解が出来ねえじゃんかよ」

ゴン、ここにきて破門の可能性浮上。

「で、でもさ！ こうして念の怖さを身を持って体験出来たし、ケイタの言ってた通り絶もマスター出来たんだから悪い事尽くしじゃ

」

「「ふざけんなっ！！」」

確かに経験は貴重な財産だが、何も不必要な怪我を負ってまで得るモノでもないの、馬鹿な発言をしたゴンに折檻を働く俺とキルアは凄く正しい。

よってしばらくゴン君悶絶タイムが訪れる。

しかし、それも怒れる来訪者がドアを叩くまでだった。

「あ、ウイングさんだ」

扉を開けた先に立っていたのは二人の若いお師匠様で、無表情な顔を見れば分かる通りご立腹中。

その凄みに当てられたキルアもゴンを蹴るのを止め、直ぐに俺の隣へ飛び退いた。

「あの、ウイングさん……俺……ごめんなさ」

「私に謝っても仕方がないでしょう!!」

顔面ビンタで幕を開けたお説教だったのだが、ゴンが猛省しているのを見ると直ぐに態度を柔化させ、心の底から安堵の表情を見せるウイングさんは優しい人なのだが些か甘い気がする。

もっと何か言った方が良かったって絶対。

流石にもう指示には背かないし危ない事もしないだろうけど、散々クロ口達にド畜生な極悪非道罰ゲームに説教を受けてきた俺としては、この対応はどうも納得がいかない。

この師匠の差は何だ。

八つ当たりと逆恨みに満ち溢れているが、個人的に全く納得出来なかったから、キルアの機転により二ヶ月となった修行禁止期間に意義を申し立てようとした俺は悪くないだろう。

「……あ、もうこんな時間だ。俺はもう行くからまた後でねー」

ウイングさんがゴンの左手に念補助機能のある神字が施された糸を巻き付けるのを見守っていた俺は、ふと約束の時間が近付いていたのを知るとそそくさと部屋から退室する。

その際キルアから脈絡が無さ過ぎるとコメントを貰ったがそんなモノは知らん。



今とはとにかくあの人物が来るまでに待ち合わせ場所である闘技場一階ロビーに行かないとマズイ。

別にトラウマコンビとは違い沸点が低い人物ではないので多少遅れても許されるのだが、だからこそちゃんと時間は守りたい。待たせるのは可哀相だから。

「……………うん、だからって三時間遅刻は無い、無いっいたら無いよ絶対。俺の気遣いを返せ」

ロビーのベンチに座って待つこと三時間。

もう太陽も赤くなり始めている時間帯になっても、未だに待ち人は現れない。

もし俺が大人なら足元には大量のタバコの吸殻が群がっている事だろう。

しかもかれこれ長時間も居座っているので係りの人や周囲の視線も少し気になる。

昼飯と一緒に食べるつもりだったのでお腹も空いてきたし。

「ケータイは繋がらないし、全く何をやって」

「あ、ケータイだ」

随分久しぶりでかなり待ちわびた声が聞こえたので後ろを振り向く。

そこには当然の事ながら予想通りの人物がいた。

……………何で中央の闘技場方面から出てきたのか凄く気になるけど。

「遅いよシズク！ いったい何をやって……………ねえ、何でポップコー

ンやジューズ持つてんの？」

「試合を観てたから」

現れたのは黒い長袖シャツにジーンズ。首から金色のロザリオネツクレスを垂らしている天然メガネ娘、俺の具現化師匠その一であるシズクだ。

ハンター試験直後の集まりにはいなかったし、実に半年振りのご対面である。

……こんな長時間待ち惚けを食らうなんて予想だにしなかったが。

「つーか試合観てたって何！？ 待ち合わせの時間は十三時だよ！？」

「ここにも一応念能力者がいるみたいでけど皆弱いね。本当にここで修行になるの？」

「どっかの暗殺者みたいに質問を質問で返さないでくれるっ！？ 皆スルースキルが無駄に高過ぎだっ！！」

変人集団の我が家族の中でも、まともさならトップ3に入るシズクだが、同時に一番の天然でもあるから困る。

俺と会う約束をしたのは良いが来る途中に待ち合わせ場所を忘れ、俺を探して適当に歩いている内に偶然214階に辿り着いて200階クラスバトルを観戦（ちなみにタダ見）。その後も観戦ツアーを満喫し、今度は闘技場外に出て観光しようと思ったら俺に出会った……というのが、毎度御馴染みとなったレストランに向う途中でシズクから説明された内容。

一度忘れたら二度と思い出さないシズクが集合場所を忘れたのは

良いだろう（本当は良くないが）。

しかし観戦に夢中になって俺との約束すら忘れるのは流石にありえない。

もはや忘れるの次元を軽く通り越して記憶障害を疑うレベルだ。

俺と対峙しても結局待ち合わせをしていたのを思い出さなかったし。

「つかさ、何でケータイにも出ないの？」

「間違つてデメちゃん吸っちゃったから」

デメちゃんとはシズクの具現化する掃除機の名前で、生物以外ならどんなモノも無限に吸い込む事が出来るチートアイテムの事だ。

ちなみにこのデメちゃん、最後に吸つたものなら取り出せる便利機能が付いているのだが、取り出さない所を見ると別の物を吸ってしまったらしい。

……まさかシズクにドジっ子属性まであったとは。つかケータイを吸い込む場面が想像付かないぞ。何があった。

「……まあいいや」

俺の家族は規格外にして常識が一切通用しないので考えても埒が明かない。

考える事を早々に放棄してシズクを店内にエスコートする。

うん、飯時がずれているので大分空いていた。

これなら直ぐに料理も来るだろう。

「そういえばさ。俺に会いに来た理由言っただけで、やっぱ

リクロロの指示？」

「団長に『暇なら修行経過を見て来い』って言われて。私もケイタに会うのは久しぶりで少し楽しみだったし、ちょうど近くにいたから良いかなと思って」

会いに来た理由がクロロの指示だけじゃないのは素直に嬉しいし、シズクは気持ちをストレートに言うてくるので非常に助かっている。クロロもこのくらい感情を表に出せば良いものを。

「……っーかここら辺で仕事だったの？」

「うん。フランクリンやウヴオーと一緒に。あ、二人がケイタによるしくって」

「マジ？ 呼んでくれたら観に行ったのに」

シズク達が芸をする所なんて見たことないし、是非生で仕事風景を見てみたいものだ。

飛行船内でゴンに質問されてから、どうも家族の仕事に興味を持つようになってしまった。

しかし、よくよく考えると告知も無しに路上ライブ的なノリで公演を開いてちゃんと収入があるのだから凄い。正し今回はまた違ってみたいだが。

「うーん。……今回は殆ど二人が殺っていたし、私はデメちゃんて邪魔なモノを掃除してただけだから来てもつまらなかったと思うよ」

「そっか、なら次の機会か」

どうやら三人は皆が公演をする前の下見で美術館を訪れたと考えられる。

そういう観光名所では人が集まるので路上で稼ぐには便利だろうし、シズクの口ぶりから察するにどこか美術館に付属している今は使われていない倉庫みたいな場所を借りられたのかもしれない。

だから怪力自慢の二人が率先して大型荷物の整理をやり、デメちゃん装備のシズクが細かい清掃を行っていた。会場候補をビフォーアフターするために。

「……ケイタも相変わらずだよな」

一部言葉のニュアンスの違いに気付かなかった俺の考えは口から漏れていたらしく、シズクが珍しく呆れた視線を俺に注いでくる。

Why?

しかしそれでもパスタを口に運ぶのを止めないので、予想以上にこのレスランの味を気に入ってくれたようだ。

「それで、修行の方は順調？」

「あー……ちょっと問題が出てきた」

ステーキを切り分ける作業を中断した俺は、つい苦虫を噛み潰したような顔をしてしまう。

だが問題と言ってもイメージ修行に関してではない。

スプーンやナイフを具現化した時の経験から推測するに、あと一週間くらい経てば毎晩食器の夢を見るくらいまでイメージが固定されるだろう。

写生の他にも新入り食器でチャンバラしたり齧ってみたりと遊ぶに遊んだし、具現化自体は約束の日までに出来る筈。

しかし問題は具現化した後。能力を付加し、使用する際の事だ。

「　　って訳なんだ」

「そっか、ケイタのダイニングツールって一度に一つしか具現化出来ないもんね」

実は俺が新しく具現化するモノは二種類存在する。

一つは三本目の食器ナイフで、もう一つは全く別の食器だ。

そして俺は能力を決める際にこの二つを同時に使用しなければ効果が発揮されないような能力を構想してしまった。

制約上二つ以上の食器を具現化出来ない俺にとって、これは致命的と言って良い程の重大なミス。

何で今まで気付かなかったんだと自分自身を罵倒し、絶望したのは昨日の夜だ。

マジでどうしよう。

「じゃあ　　っていう風にしたら？」

「シズク……貴女様は天才ですか？」

「ごちそうさまと両手を合わせている女神二号を……っーか、家族に対して初めて尊敬の眼差しを向けてしまっ。

それ程までシズクが提案した解決策は革命的で、流石は具現化師匠その1と褒めて称えてしまうほどの素晴らしい物だったのだ。

「先ず能力に関する課題達成の目処が立って一安心。」

「さてと、それじゃあそろそろ行くね」

「え、もう!?!」

予想以上にお早いお帰りに啞然としてしまう。

てっきり数日間は滞在し、一緒にいられると思っていたのに。

何か急ぎの用でもあるのだろうか。

「うんうん、別に何も。ただ………ここ、ヒソカがいるんでしょ?」

……凄く納得のいく言葉だった。

ヒソカとのエンカウントを恐れ、そのシーンを想像したのかとて  
も嫌そうな顔をしているシズクの表情が全てを物語っている。

もうこれ以上無いってくらいの立ち去る理由だ。

「つーかここでも邪魔するんかい変態野郎め。」

シズクを引き止めるなんて非道を行える訳がない

「……あ、もう時間か」

シズクと会ってから早いようで一ヶ月が経過した。

その間は特筆するような珍事件が一切無く、修行をするかゴン達と遊んだ記憶しかない。ヒソカも姿を見せないから人生最大の幸福時間と言っても過言ではないだろう。

新食器ももう直ぐ具現化出来るという段階まで来たし、絶好調も良いとこだ。

全く命の危険に晒されない、これ程まで平和な生活が嘗てあっただろうか。

「キルアー!!」

「お、来た来た」

部屋を出て向ったのは212階の闘技場で、待ち合わせ場所である観客席にいたのはキルアだ。

今日ここでは待ちに待った魔王と勇者の戦いが行われるため客席は超満員。

試合開始十分前ということもあって観客のボルテージも最高値まで高まっている。

……今更ながら思うが、何故ヒソカの試合はここまで人気があるのだろうか。無駄なカリスマ性を発揮しやがって。

「あれ、 gon は？」

「gon は部屋。念能力者同士の戦いを見るのも修行になるからってウイングさんが言うからよ」

ふむ、ということとは明日の俺の試合もgon は見てくれない訳か。

まあ、ウイングさんが資料として録画するらしいから別に良いけ



ど。

「……お前さ、カストロって奴どう思う？」

「一回だけ試合観たけどかなり強いよ。能力次第ではヒソカを倒すのも夢じゃないと思う」

何かカストロに思うことがあるのか、キルアは少し物思いに耽った表情で訊いてくる。

少なくともカストロは肉弾戦だけなら俺よりも上だ。

念能力に絶対は無いし、ヒソカを抹殺するのも夢ではない筈。

他力本願上等。是非とも悪の変人大魔王を退治してこの世に平和を齎してくれたまえ。

「始まるぞ」

こうして大熱狂に晒される中、リングの中央に立つ死神ピエロとイケメン勇者の戦いが勃発した。

今日でヒソカによるストーカー恐怖もオシマイかと思えば、当然テンションも高くなってしまふ。

正直に言おう。今の俺ははっちゃけている。

「殺れカストロっ！！ あんな変態ぶっ殺せっ！！ KILL！

KILL！ KILL！」

「テンション高けえよ！？ お前ごんだけヒソカに不満持ってんだ！？」

「むしろ不満しか無いに決まってんでしょうがっ！！」

なにやらキルアがドン引きしているが気にしない。

カストロの放った横薙ぎの手刀がヒソカの頬を切り裂き、俺のテ  
ンションもメーターを吹っ切って大気圏に突入する。

避けた筈の一撃をどうしてヒソカが食らったのかは知らないし、  
一撃食らったことに関して俺が不満を抱く訳がない。

どうかこのままヒソカが殺されますように。もしくは再起不能。  
切にそのことだけを願う。

しかし、

「……ハア……俺、もう帰るわ」

「さっきの勢いはどこいったんだよ!? ……つて、最後まで見な  
いのか!？」

「うん。だってヒソカが勝つだろうし」

試合も中盤に差し掛かったこの状況、今の俺の発言を聞いたキル  
アが思い切りクエスチョンマークを浮かべている。

しかしそれも念の知識に乏しいキルアなら納得だ。だから念の先  
輩として少し解説。

「確かにダメージはヒソカの方が大きいけど、ただそれだけだし」

現在二人のポイントは4 - 0とカストロがリードしており、しか  
もカストロがノーダメージに対し、ヒソカはちよくちよくダメージ  
を負っている上に右腕を虎咬拳という体術で切断された。

しかし、それでもヒソカの優位は動かない。

「カストロの能力は大したこと無い……だから勝つのはヒソカだよ。すっごい残念だけど」

正直幻滅も良いところだ。

カストロはおそらく強化系。それなのにカストロは自分の分身体を作り出すという具現化と操作の複合能力を習得した。

この二つは強化系と相性が最悪なので、能力も燃費が悪く、多大な集中力が必要という使い勝手の悪いものになってしまっている。

しかも分身の最大の売りである「どつちが本物が分からない」という効果も、戦いで服に付着した汚れを再現仕切れなくて全く意味が無い。

強化系を極めて虎咬拳で攻撃していれば、それだけで強者になっていただろうに惜しい人だ。期待していただけにシヨックを隠しきれない。

……そう考えると、戦いの最中に直ぐ能力の正体に気付いたヒソカは、やはり掛け値なしの化け物だろう。冷静に能力の見極めに集中出来た俺と同じスピードで見切るとは。

……それに色々と常軌を逸している。自分の腕を食うとがありえないって。

「くそっ……なんか納得いかねえ」

「いやいやいや、分かんなくても仕方が無いでしょ。逆に俺やヒソカよりも早く気付くなんてありえないし」

念初心者のキルアに洞察力で負けたら切腹ものだ。

それに今分からなくても、キルアなら直ぐにこのくらいの洞察力が身に付くと思う。

俺も抜かれないように気を付けなければ。

ちなみに今凝で見たら、ヒソカがバンジーガムをカストロの身体に貼り付けている所だった。

カストロは気付いた様子も無いし、想像上の物だったカストロの墓標が着々と現実の物となっていく。

「そんじゃキルア、また後でね」

以前俺も騙された嘘っぱち予知能力をヒソカが披露しているのを背景に、俺はカストロの冥福を祈りながら闘技場を後にする。

先ほどのカリバニズムもどき映像をトラウマとして植え付けられながら。

「ハイ終わり！ 血管・骨・神経・筋肉、ほぼ100%繋がれたよ」

「見事だ？」

「いや……そのさ、何でわざわざ俺の部屋で念系縫合するの？」

部屋に戻って数十分後、纏と練をやっている俺の所に来たのは両腕を切断されたヒソカと、何故かここにいるマチだった。

予想外過ぎて扉の前で茫然自失してしまったのは、むしろ当然と言えるだろう。

マチに逢えたのは嬉しいが、新たに食人鬼の称号も手に入れそう  
なコイツがいるため嬉しさも半減だ。

「……ケイタ、あんたはアタシをコイツと二人っきりにするつもり  
？」

「……文句言つてゴメン」

そりゃそつだ。誰もコイツと二人っきりになんてなりたくない。  
訊くまでも無いことだった。

「嫌だなあ？ 何もしないよ……今はね？」

くつついた左腕の調子を見ながら舌舐めずりし、続いてマチの肢  
体と俺を視姦している変態は万死に値すると思う。

カストロ、何故お前はこの危険生物を討伐してくれなかった。

「ねえマチ。わざわざコイツの治療なんてしなくても良くない？

両腕無い方が俺達にとって都合良いつて絶対」

「奇遇だね。今まさにアタシも同じ事を考えたところだよ」

「軽い冗談なのに二人とも酷いなあ？ いくらボクでも傷つくんだ  
よ？」

そう言つて泣き真似するヒソカだが、はっきり言わなくてもキシ  
ヨい。無理。生理的に受け付けない。

露骨に不愉快そうな顔をしているマチも『何でアタシはここに  
いるんだろ？』って目で遠くを見ている。

「……」

俺のためだつたら何か申し訳ない。

「……ハア……次、右ね」

それでもやるべき事はやるのか、マチは疲れた溜め息を吐きながらヒソカの右腕をくっ付ける。わずか数秒で繋げるとは医者も真つ青な技量だ。

「いつ見ても惚れ惚れするねえ？ 間近で君の念糸縫合を見たいがために、ボクはわざと怪我をするのかも？」

「いーから、左手二億と右手五億、さつさと払いな」

値段が通常の十倍なのは迷惑料ですね分かります。そんな金をポンと払えるコイツも大概おかしいが。

「そういえばさ、マチ。俺もいくらか払った方が良い？ 収入もあつたし」

よくよく思い返してみれば、俺はマチに何度も助けてもらっている。

フエイタンの刀で切り裂かれた時、ヒソカのランプで指が千切れた時、ヒソカのバンジーガムで飛ばされた瓦礫が後頭部に激突した時、ヒソカに足を踏みつけられた際に骨が折れ、開放骨折した時……やはりヒソカは早いとこ抹殺した方が良い気がしてきた。

ついにイルミ名刺の封印を解く時か。

「子供が変な気使っんじゃないよ」

そう呟いてそっぽを向くマチの頬は若干赤い……なんてお約束展

開がある筈が無く、ぶつきら棒に言ったあとは無表情を貫いている。心底どうでも良いと思っっているようだ。

しかしこれは紛れもない多大な恩なので、もう金の亡者とは呼べないです。

「じゃあ、アタシは戻るわ」

「もう?」

不覚。ヒソカなんかと八モってしまった。

そしてマチ、そんな俺を気の毒そうに見ないでくれ。ヒソカ、お前は嬉しそうにするな。

「仕事終わったんだから当然でしょ、ケイタの調子も見れたし」

やはり俺の調子を見に来たのか。なんかごめんなさい。コイツに遭わせて。

「あ！ そーだ。肝心の用事、伝言の変更よ」

ドアノブに手を掛けたマチは振り返り、ヒソカを見据える。

「八月三十日正午までに『暇な奴』改め『全団員必ず』ヨークシンシティに集合。ケイタもね」

ここからヨークシンまでは飛行船で三日。微妙にタイムリミットが早まってしまった。

まあ、念能力は問題無い。

新食器を具現化出来るようになったらほぼ毎日戦闘を入れるつもりだし、十勝もなんとかなるだろう。

それでフロアマスターに勝てるかは少し不安だが、概ね計画通り。

「団長も来るのかい？」

「おそらくね。今までで一番大きな仕事になるんじゃない？」

「マジか。どうしよう。芸なんて一つも無いぞ？」

俺にも集合がかかるという事は、多分俺も雑疑団デビューするのだろう。

最初にクロロに言われた段階で覚悟していたが、いざ時が近付くと色々と考えてしまう。

今から芸を身に付けるべきか、俺は美食ハンターを目指すから雑疑団には入らないとクロロに言うべきか。かなり悩む所だ。

「……………」

……おかしい。何故二人の心がシンクロしている。そんな奴と心を通わせると身を滅ぼすぞマチ。

「……………そうだ？ どうだい今夜、一緒に食事でも？」

「寝言は寝てから言いな」

「もちろんボクの奢りだ？」

「行くよケイタ」

「俺まで巻き込まないでくんない！？ つーか奢りって言葉に釣られるなよ！？」

俺の手を引いて廊下に出たマチは立ち止まると、わざわざ膝を折



って俺に視線を合わせ、肩をしっかりと両手で掴む。  
その目は強い意思により燃え盛っているようだった。

「ケイタ、よく覚えておきな……奢りって言葉は、世界でもトップ  
3に入る甘美なものなんだよ」

「やっぱりマチは金の亡者だー!!」

「……………」

「別に褒めてないからね!？」

何で少し誇らしげなんですか貴女様は。

……そしてマチと食事が出来てかなり嬉しそうなヒソカを見るのは  
精神的にキツイので、絶対に視界に入れないようにしよう。

## 第十四話 師匠×落胆×変人進化（後書き）

予想より長くなったので試合は次回に持ち越します。

ぶっちゃけカストロは体術限定ならかなり強い部類だと思います。一応ヒソカと互角に戦ってましたし。そうなると体術ではヒソカに劣っている主人公、ひいては同じくらいの技量であるキルアよりも強いつてことになってしまいました。

まあ、もう登場しないので別にどうでも良い事ですけど。

この天空闘技場編はあと三話くらいで終わる予定です。基本主人公が絡まない原作はカットして進めていますし。早くヨークシン行きたいので。

では誤字誤用脱字の発見、御意見やご感想がありましたら是非ご連絡ください。

## 第十五話 良い人×激闘×水見式

早いようで、あの悪夢のような家族＋変人野郎との晚餐から一ヶ月以上の時が経過した。

昨日漸くゴンの修行禁止期間も終わりを迎え、二人は俺を目標に念習得に執念を燃やしている。……しかし、たった一日で練を習得するのは流石にありえないと思います。

いくら毎日点を続けていたとしても限度があるぞ。

思わず『ふざけんな馬鹿野郎！』と怒鳴り散らして二人をフルボッコにした後、ズシと一緒に自棄酒ならぬ自棄ジュースを飲みに行ったのは良い思い出だ。

ただその時、つい俺が練の習得に費やした時間が三日だとバラしてしまい、ズシに『ケイタさんも大概っスー！』と泣かれてしまった時はどうしようかと思っただが。

### 閑話休題

そんな飲み会から一夜明けた今、俺が立っている場所かというと、

『さあさあ、ついに参りました本日最後の試合！ 右手から現れたのは現在最年少の200階クラス闘士！ 戦績は一勝二敗と負け越しています、リングに顔を出せば未だ負け無し。しかも無傷で対戦相手をKOしている天才闘士、ドロップキックのケイタ選手だああああっ！！』

そう、俺がいるのは歓声の降り注ぐ203階闘技場。

そこで今回は四戦目を行うのだ。

……ええそうですね、四戦目です。しかも二敗。  
理由はあの悪夢の晩餐にある。

いつもとは違う三ツ星レストランで高級ディナーを堪能していたのだが、最初は良かった。

ヒソカだっていつもの変態衣装ではなく、メイクを落としてしっかりとスーツを着こなしてイケメン野郎にチェンジしていたし。

マチもそれに似合うだけのドレスをレンタルし、予想に反して凄  
い平和だった。

……しかしディナー中盤でヒソカが漏らした『こういった家族団  
欒という空気も良いねえ？』どうだいマチ、もう一人作らない？ほら、  
ケイタも弟か妹が欲しいだろ？』というキモイ発言と、円卓の右隣  
に座るマチの横髪をキザつたらしく撫で付けた瞬間、世界が凍り付  
いて今までの幸せタイムがブレイクした。

正直、この後の事はよく覚えていない。

今でも思い出そうとすると頭痛が襲ってくるので、きつとこのま  
ま忘却の彼方に追いやってしまうのがベストな選択なのだろう。

とりあえず尋常じゃない程の殺気とオーラを迸らせていたマチを  
宥め、セクハラ変態魔人を罵倒し、俺ら以外のお客と従業員にここ  
から逃げるよう必死で叫んだのはよく覚えている。

頭部裂傷に右腕と第三肋骨完全骨折。左足首脱臼。微妙に左腕に  
は千切れたような痕があったので、おそらく念糸縫合の世話にもな  
っている。

これがあの晩の結末だ。

起きたら翌日で、最初に見たのが様子を見に来ていたヒソカの顔のアップだった時、俺は心の底から泣いた。

マチはマチで『ごめん』という書置きを残して既に立ち去っていったし。

更に言えば半壊したレストランの修繕費が俺持ちだというのも納得がいきません。

『対するはここまで五戦して四勝一敗！ 初戦で今は亡きカストロ選手に敗れて以来負け無しの実力者、クード選手の入場だああああつ！…！』

長いこと自分の世界にトリップしていた気がするが、どうやら現実世界ではほんの数秒の事だったらしい。

改めて正面に視線を向け、歩いてくる人物を観察してみる。

見た目はシャルとどっこいどっこの優男。

パワーファイターとは到底思えない金髪イケメンは、まるで雑誌のファッションモデルが着るような場違い衣装で歩いてくる。

どうやらそれなりに人気があるらしく、さつきから女性観客の応援が凄いつつ。

『相変わらず物凄い声援です！ しかし、私は断然ケイタ選手のファン！ 可愛い正義！ ショタ最高っ！…！』

実況のお姉さん、そんなカミングアウトはいらん。

「ボウズー！！ しっかりやれよ！ お前に十万ゼニー賭けてんだ！！」

「キヤー！ クード様ー！！」

「てめえなんて負けちまえクソケイター！！」

「ちよつと、キルア！ 聞こえてたらまた昨日みたいにボコボコにされちゃうよ！？」

「頑張るっス、ケイタさん！！」

おし、この試合が終わったらキルアにはまた制裁だ。

練を習得してくれたお陰で念アリの攻防が出来るのは大いに助かる。

……なんだか直ぐに追いつかれそうだし、実力の差が開いている今を最大限利用しなければ。

「ポイント&KO制」

審判がルールを説明してくれている間、俺達は近付いて腹の探り合い……ではなく、普通に会話。

握手も求めてくる礼儀正しい人物だ。

あのトラウマコンビも見習ってくれないだろうか。

そうしたらかなり楽になるのに。

「良い試合をしよう」

「よろしくお願いします」

見た目通り爽やかな人らしく、かなり好感が持てる。

周囲が奇人変人の巣窟と化しているので余計に。

そしてお互いが距離を取った途端に場内は緊張に支配され、俺達の間ではピリピリとした闘志がぶつかり合い、弾けた。

「では、試合　開始っ！！」

審判が開始の合図として腕を振り下ろした瞬間、俺は一撃を食らって後方をゴロゴロと転がっていた。

まるで額をハンマーみたいな鈍器で殴られたような衝撃が襲い、衝撃を受け止め切れなかった結果がコレ。

もう少し練の発動が遅かったら、など考えたくも無い。

しかし、何をされたのか分からなかった。

「クリーンヒット&ダウン！　ポイント2！！」

『まさに速攻！　今までノーダメージで勝利してきたケイタ選手、ついに無傷勝利の記録を打ち破られたああっ！！』

赤くなった額を擦りながら立ち上がり、右手に包丁サイズのナイフを具現化しながら警戒心をMAXにまで引き上げる。

腕を組みながら不敵に笑っているクードに目にモノを見せてやるために。

「ふ〜ん……君は具現化系か。それは……食器ナイフかな？」

「そういうアンタは放出系でしょ。……何やったか見えなかったけど」

先ほどの攻撃はおそらく隠を施した念弾。

何だか放出系との遭遇率が高い気がするが、好都合なので気にし

ない。

そこまで分かっているスプーンを具現化しないのは、念弾を投げ返せるスプーンはこの戦闘において切り札になりえるからだ。

スプーンは相手の隙を作るための最大の布石。出来るだけ出し惜しみしたい。

『おーと！ ケイタ選手、いったいどこからナイフを出したんだ！？』

今回はバツクを持参していない。

カストロの分身を見る限り、そんなに気にしなくても大丈夫だと判断した結果だ。

それにもしバレそうになっても、こんな超常現象を一般人が信じるとは思えない。

人間はもっと間近で体験しないと理解しない生き物だから。

『えー、独自に入手した情報によりますと、ケイタ選手はあの死神奇術師ヒソカ選手と友達とのことです。もしかしたら、彼から奇術の手解きを受けたのかもしれないですね』

「誰だそんなデマ流した奴！？ この試合が終わったら名乗り出る！！」

せつかくここでは比較的まともな印象を得ていたのに、これでは努力が全て水の泡。

ヒソカと数回食事をしているなんて事実も存在しません。

きつと皆は幻を見ていたに違いありません。

……誰かそうだと言ってください。



『ちなみに情報提供者は同じ200階クラス闘士の』

「キイイイルウウアアアアっ!!」

「俺って決め付けかよ!？」

おのれ以外に誰がいるというんだ。

俺とヒソカの関係を知っている200階クラスがどれだけいると思っっている。

ゴンはそんな非道を行うとは思えない。

ハンター試験での腹黒前科が色々とあるがそれでもだ。

「あー、コホンっ」

「あ……」

すっかり今の状況を失念していた。

お陰で審判の白い目が俺の精神をガリガリ削り、今まで空気を読んでじっとしていたクードさんの大人な対応が心に響く。

その苦笑が馬鹿にしたような感じを一切醸し出さないのは、ある意味この人の才能だろう。

こんな人が身近にいたらと思っただけ仕方が無い。

たまにはまともな神経を持っている人物とお近づきになりたいものだ。

「ふふ……それじゃあ、行くぞ少年!!」

そう高らかに宣言したクードさんだが、相変わらず試合開始から一歩も動かず腕を組んでおり、余裕の姿勢を崩さない。

しかし、それとは裏腹に幾つもの念弾は俺に殺到してくる。

威力もスピードもフランクリンには遠く及ばない。

されど何十発も受ければ危険だと判断せざるおえないピンポン玉サイズ（と思われる）念弾は、俺に防御を強いるには十分な性能だった。

「こ、この！ 見えないのは能力か！！」

「ご名答。これが私の【理不尽な石礫】だ！！」

インビジブルショット

凝を用いても視認出来ないステルス性能は非常に厄介。

だから俺は円を駆使し、その範囲3mに念弾が入った瞬間に反射的な回避行動を続けている。

可能な限り動いて狙いを外そうとしているのだが、どうやらこの念弾はホーミング性能も付いているみたいで効果は薄い。

四方八方から取り囲むように念弾を飛ばされては逃げ場も少なく、被弾は免れない。

対人以外用のテーブルナイフで念弾を切り裂くにも限度がある。

着々とオーラも消費しているし、この防戦一方は非常に危険。

唯一の救いは、オーラの総量と顕現オーラ量が俺の方が遥に高い事だろう。

その事を悟ってか、又は攻めきっているのに相手を倒せない焦りからか、彼の表情には暗い影が見え隠れしている。

「……参ったね。どうやら君の防御力が高すぎて、私の念弾では大したダメージを期待出来ないらしい。ただ、これは死合ではなく試合。ポイント制というルールが課せられているここなら、物量で勝る私の勝ちだ！！」

悔しいがそれは正論。

現に審判が今クリーンヒットを宣言し、今までの加算もあってポイントが6・0となってしまうた。

一応接近戦に持ち込もうと奮闘しているのだが、距離はまだ10mと意外に遠い。

これではもう出し惜しみする余裕も無いだろう。

しかし、

『うおおおお！？ 大きい！ 大き過ぎるぞそのナイフ！ ケイタ選手、その奇術の種は何なんだあつ！？』

実況の叫びと共に、観客が息を呑む音も聞こえてくるような気がした。

だが今はそんな事に気を取られている場合ではないので、雑念を振り切り、最大出力の堅を維持しながら、俺は瞬間的に右手に具現化した最大サイズのテーブルナイフをクードさん目掛けて力いっぱい投擲した。

「クツ！？」

この時、今まで不動だったクードさんが初めて動き、慌てた様子で横に跳んでナイフの投擲を回避する。

俺の手元を離れたために脆くなったナイフでも、その大きさとスピードから念弾で迎撃するには時間が足りないかと判断したのだろう。そして彼が再び距離を取ると同時に念弾の嵐が止む。

これで相手の能力について大方把握でき、口元も自然に緩んでしまっていた。

「ふう……どうやら、バレてしまったようだね」

「アンタの能力はその場から動いてはいけない……もしかたら腕を組むのも関係しているのかもしれない。そうでしょ？」

よくよく考えてみればおかしい事だ。

クードさんみたいなバリバリな遠距離攻撃能力者が、何故俺みたいな近距離狙い野郎が接近してきても、その場から一步も動かなかったのか。

答えは一つ。

それが能力発動の制約になっているからだ。

このくらいの制約が無ければ不可視ホーミング機能付きの念弾なんて使えない。

もしかたら最初の握手だって制約に含まれているかもしれない。

……そうだったら完全に人間不信に陥るぞ俺は。

「はは、流石にそれは無いよ。私の課した制約は、君が推理した最初の二つのみだ」

「そんな簡単に教えて良いの？」

凄いいつさり認められてかなり意外なんです。

更に言えば、それさえも嘘だと疑ってしまった俺に自己嫌悪。

まだ汚れを知らない最初の清らかな俺はどこに行ってしまったんだか。

「構わないよ。例えバレてもバレなくても、私のする事は変わらない

い  
」

少し自嘲気味に笑った後、クードさんは未だかつて無い程真剣な目になり、それに比例するかのようにオーラも高まっていく。

漲る闘志と言い換えても差し支え無さそうなオーラが天高く昇っていく様は中々壮観で、ここまで来れば俺にも彼の意図が読める。

おそらく次がラストバトル。

俺は今から20mの距離を縮め、接近戦に持ち込めたら勝ち。

クードさんは俺が接近する前に全オーラをもった攻撃で後4ポイント取れたら勝ち。

やる事は非常にシンプルだ。

『な……なんだなんだこの展開は！？ いつからここは西部のガンマンが行うような決闘場にチェンジしたんだあ！？ くうう、熱い！ 熱い展開だぞコレは！！』

「実況、合図！！」

実況がそんな風に言うので勝手ながら荒野での撃ち合い的なノリで行こうと決めてしまった。

だがクードさんも面白そうに頷いたので結果オーライ。

これで決着まで後僅か。

巻き込まれるのを恐れた審判が少し離れた所で、実況姉ちゃんもカウントを始める。

それがゼロに近付くにつれ、先程までの熱狂的な声援が嘘のよう

に無くなり、耳が痛い程の静寂が闘技場を包み込む。

この天空闘技場では滅多に見られない　いや、おそらく初めて  
だろう異様な光景。

その中にいる人達は今、全員が俺達に注目している。

……空気を壊す発言だが、結構恥ずかしいです。今更？そんな事は知らない。

『3　2　1　ゼロっ！！』

瞬間、俺達は同時に動いた。

とは言え動いたのは当然俺だけで、クードさんは堂々と腕を組んでの仁王立ち。

そのイケメン目掛けて俺は突っ走る。

彼がこう見えて中々熱い性格で、真っ向勝負に乗ってくれたのが功を成した。

もしかしたら残存オーラの関係もあつたのかもしれないが、数十の念弾は全て真正面から向ってきている。

その事を円で感じ取り、俺は最後の賭けに躍り出た。

『おっと！！　ケイタ選手、大ジャンプ！！　高い、高いぞ少年  
！！』

両足に凝を施した俺の垂直跳びは20m近い。

唐突に目標を失った念弾の幾つかはリングに直撃し、残ったものは直ぐ様俺目掛けて飛翔する。

俺に集束するまで、もう幾羽かの時間も無い。

「勝負！！」

だがそんな事は分かりきっている。

だから俺は念弾が集束する前に、ここから避難する事にした。

『ああと！？ またケイタ選手は何かを出したああ！ しかし、それは一体何なんだ！？』

本邦初公開。

俺が今具現化したものは、つい最近具現化に成功した新食器。

あの晩餐で負傷し、試合を不戦敗して良かったと思えたのは、更に与えられた戦闘準備期間中に能力を完成させられた所にあるだろう。

苦節三ヶ月、これが努力の結晶だ。

「なにつ！？」

跳躍も最高値まで到達した所で逆さまになり、生み出したバッテリー  
クーラー ようはバッテリーを保存するための蓋の付いた金属製のお皿を足場にし、俺は再度力の限り跳躍した。

そう、リングにいるクードさん目掛けて真っ直ぐと。

「くそつ！！ そんな事で私のインビジブルショットが！？」

念弾が殺到する前に弾道ミサイルと化した俺は、集束する念弾を空中に置き去りにしてクードさんへと肉薄する。

流石に念弾の包囲網を無理矢理突破する際に幾つか被弾したが、  
ここは我慢。

一発頭部に食らって意識が飛びかけたけど踏ん張った。

「もう能力は使わせない！！」

能力を使わせないため、その場から動かすためにフォークを具現化してぶん投げる。

例えそれを念弾で弾いても無駄だ。

もしそんな事したら、その隙に俺がクードさんに体当たりをします。

堅は専ら防御に用いられるが正確には攻防力50の状態。

つまり半分は攻撃にもなるのだ。

念の実力で劣っているクードさんは唯でさえ度重なる念弾生成で防御に回すオーラが少ないし、全力攻撃も先程不発に終わった。

俺の堅状態の体当たりをモロに受けるのは敗北に等しい。

だから彼にはフォークを避けるしか選択肢が無い。

例えそれが、敗北に繋がっているのだとしても。

「くっそおおっ！！」

悔しがっているクードさん後方にステップし、フォークがリングに突き刺さったほんの一秒後に着地した俺は、追い討ちをかけるために三度跳躍した。

必死に能力発動の体制を取ろうとしている彼に向って。



「……っ!!」

腹に渾身の頭突き（もちろん凝をしています）を決められたクードさんは無言の叫びを上げ、何度もバウンドしながら場外の壁に激突して力無く横たわる。

直ぐに駆けつけた審判が気絶を確認して漸く、俺は肩の力を抜く事が出来た。

今は耳が痛くなる程の大歓声も、本来の用途とは全く違うクローラの具現化をした事による残念無念な気持ちも何も感じない。

とにかく疲れた。

……そういえばスプーンを具現化していない。

『決まったあああ!! ケイタ選手見事な大逆転勝利!! だが少年、ドロップキックはどうした!?!』

「やかましい! そんな事を気にする暇なんて無いわボケっ!!」

疲れたが、このくらいのツッコミはしておこう、うん。

「いよいよ今日から発の修行に入ります」

俺がクードさんと戦ってから更に約一ヶ月後の六月十一日。

天空闘技場に来てから五ヶ月以上経ち、約束の日まで三ヶ月を切った今日までで色々な事があった。

まずはあの弱い者イジメ三人衆がゴンとキルアにちよつかいを出した事で報復され、闘技場から逃げ出したり、俺があれから三戦して勝ち星を五つに延ばしたりと進展があった。

しかし一番の進展はコレ。

今日から発の修行に入るゴン・キルア・ズシの三人について。

……まさか二人が一ヶ月で発以外の基礎+凝を全てマスターするとは思わなかった。

流石に早すぎる。

真面目に修行していたズシに喧嘩売っている、非情とも言つべき才能の差。

現実とは残酷だ。

ちなみに俺が基礎を全てマスターするのに掛かった期間はだいたい四ヶ月。

それを知った時のズシの反応は……まあ、察して欲しい。

「以上が六つの属性とその相性を示す表、六性図ろくせいずです」

ウイングさんが系統について説明し、ついでに今まで戦ったり見たりした人達の系統について考察していく。

という事は、当然俺にも矛先が及ぶという訳で。

「じゃあケイタは具現化系？」

「そういうこと」

ゴンに訊かれたついでにダイニングツールを発動。具現化したスプーンを三人に触らせてみる。

三人の反応が見ていて初々しい。

そして具現化するためのイメージ修行についても簡単に説明してあげた。

「……本当にアレ修行だったんだな」

「だからそう言ったじゃん!？」

陰気臭そうな顔でこっちを見てくるキルアに叫ぶ俺。

そう言うのもイメージ修行の一環としてバタークーラーを舐めていたのをキルアに目撃され、数日の間精神鑑定を受けて来いと勧められていたからだ。

何度言い訳しても優しい言葉をかけられ、色々と気を使われて泣きそうになったのは当分忘れられそうにありません。

「でも師範代。どうやって自分に属する系統を調べるっすか？」

待っていましたと言わんばかりのズシの問いに答えるため、ウイングさんが取り出したのはグラスと 水に葉っぱが一枚。

水見式と呼ばれる選別法だ。

グラス一杯まで水を入れ、そこに葉を浮かべて手を近付け、練を行う。

その変化によって系統を見極める。

うん、凄く懐かしい。

「水が……凄いい勢いで増えてる!？」

水の量が変わるのは強化系の証。

実演したウイングさんは強化系だという事が証明された。

この調子で三人もそれぞれ調べ、結果はゴンが強化、ズシが操作、そしてキルアが変化系。

三人とも自分の系統を知り、これからの事を考えて凄いワクワクしているのが分かる。

俺もそうだった。

水見式を行う前日は楽しみで眠れなかったものだ。

……テンションを高くして眠れずにいたら、うるさいの一言と共に拳骨が飛んできて、クロロに物理的に眠らされたが。

「これで三人とも自分の属する系統が分かりましたね。これから四週間はこの修行に専念し、今の変化がより顕著になるよう鍛錬を続けなさい」

「押忍！ ……あ、ところでケイタが水見式をやるとどうなるの？」

「よくぞ訊いてくれた」

実は訊かれるのをずっと待っていた。

元々俺がここにいるのは具現化系のケースを参考までに三人に見せて欲しいと頼まれたからだ。

ゴン、グツジョブ。

ウイングさんは忘れていたっぽいし。そう焦り顔が物語っている。

「ほう……見事です。ケイタ君」

心底感嘆した声色でウイングさんが褒めてくれた。

水の味が変わる変化系、葉っぱが動く操作系に対し、具現化系は水の中に不純物が出現する。

今俺のグラスの中には容量の半分を占める程の巨大なクリスタルが出現していた。

……ちなみにコレ、具現化師匠その2であるコルトピがやったら水晶の大きさに耐え切れずグラスが割れた。

いくら雑技団内でもトップクラスの潜在オーラ量と具現化技術を持つているにしても色々とおかしい。本当に規格外な奴だ。

ただウイングさんの反応を見るに俺も相当なレベルらしく、俺をライバル視している三人を奮起させるには充分だった。

「ケイタに負けてられっか！ ゴン、ズシ、今から俺の部屋に行つて特訓すんぞ！！」

「うん！ 早くケイタに追いつきたいもんね」

「押忍！！」

告げるや否や早々と退室していく三人を見てウイングさんは微笑んでいる。

しかし俺にはシャツ出し兄さんの心が手に取るように読める。

思い切り『計画通り（ニヤリ）』って感じた。

……やはり水見式の変化を見せる事よりも、三人を奮起させるのが目的だったな。

まあ別に文句も無いが。

（……あれ？もしかしてイルミに言った通りになってる？）

思い出されるのはゼビル島での一件。

あの時は口からでまかせだったが、本当にキルアは俺を抜くために修行に励んでいる。

どうやらここで最凶お兄ちゃんによる死亡フラグは完璧に折られたらしい。良い事だ。

## 第十五話 良い人×激闘×水見式（後書き）

今回出てきた【理不尽な石礫】インビジュアルショットは読者投稿で送られてきたモノを少しアレンジしたものです。

この場を借りて、能力提供をして頂きましたB様に多大な感謝を送らせて頂きます。

ちなみにこの能力、射程は大体20mの一度に生成出来る念弾は20発くらいと思ってください。

コルトピはビルを50棟も具現化する実力者ですし、水見式もこんなくらいになって当然だと思っていたのでこうしました。後悔はしていません。

では、誤字誤用脱字の発見に御意見やご感想がありましたら是非ご連絡ください。

## 第十六話 さらば×バイバイ×天空闘技場

念というのはそのときの心理状態や精神力に大きく左右される。

絶好調と絶不調が念にもあるのだ。

その主な外的要因は周囲の気温や雑音などが挙げられ、集中力を欠けばそれに相応しい結果が伴う。

そんな俺の現在の調子はと言うと、

「 311回。余裕でクリアですね」

「ふっ……」

カウンタウォッチを手に持つウィングさんに結果を告げられ、俺は右手にあるフォークを消しつつテーブル上にあるバスケットを一枚齧る。

今俺が行っていたのは、約二週間前の七月九日までゴン達が行っていた発の修行である水見式より上級な修行。

個々の系統別の修行である『最速化』と呼ばれる具現化系修行だ。

その名の通りこの修行は一分間に何回具現化出来るかタイムアタックを行い、具現化スピードを向上させるための修行で、また素早く具現化するためイメージ修行も兼ねている効率が良い修行法として知られている。

正しこれはオーラを具現化する能力者だけの修行であって、オーラを一切具現化しない人が行う具現化系修行は通称『構想』と呼ばれる。念能力者としての理想の自分の姿を連想する瞑想、一種のイメージトレーニングが行われている。



先程も述べた通り念は心理状態や精神力に左右されるので、長い時間を掛けてしっかりと理想像を作る事で念の効率化を図るのだ。ただその際、瞑想するだけでなく同時進行で堅を行うのが主流になっっている。

堅を維持するのはかなり大変。疲労が蓄積しながらどれだけイメトレ出来るかが『構想』の一番辛い所と言って良い。

ちなみに他にも強化系修行である『石割り』、変化系修行の『形状変化』などがある。

そんな系統別修行で自己ベスト記録を更新した俺がいる場所はズシとウイングさんの部屋。

ゴンはヒソカと戦ったその足でキルアと共にくじら島へ帰郷してしまっただけ既に天空闘技場にいない。

目的であるヒソカの頬を殴り飛ばしたし、念を会得して裏ハンター試験に合格したのでここにはもう用が無いのだ。

本当なら俺も二人に付いて行きたかったが、不幸な事にクロロの指令がそれを許さない。

くじら島に行くのは俺があと一勝し、フロアマスターへの挑戦権を獲得して勝利してからだ。

それに万が一行けなくても二人の次の目的地はヨークシン。つまり俺と同じ。

現在幸せだから念の調子も絶好調と自己分析してみる。

ああ、ちなみに二人には俺もヨークシンに行く事を教えていない。だってサプライズって大切だと思うから。

「まったく。ゴン君やキルア君もそうでしたが、ケイタ君の技量にも驚かされます。もちろんズシもですが。……しかし、こうして次代を担う若者達の成長を見届けるのも気持ちの良いものですね。心源流拳法も安泰です」

「いやいや、俺って心源流拳法なんて上等な流派じゃないから。ただの喧嘩殺法」

それにウイングさん。その発言はかなりジジ臭い。精神年齢が老人化しているぞ。

「そういえばそうでしたね。どうですかケイタ君、この際だから入門してみても。我々は未来の武を担う若者達のために、こうして広く門を開いているのです」

「そうっすよ！ ケイタさんも一緒に頑張るっす！！」

同年代の同門が増えて嬉しいのか発の修行をそっちのけでプッシュしてくるズシの勢いもそうだが、さり気なくウイングさんの目もマジだ。

ふっ、人気者は辛いぜ……すみません。今の発言は無しで。キャラ崩壊も甚だしい発言だった。

「まあ考えてお………ああ!？」

食べていたビスケットを落としかけた俺の視線の先にあるのは掛け時計。

その短針が示すのは十五時五十分。

つまりこれはフロアマスターへの挑戦権を獲得出来るかの大事な

試合十分前である事を示していた。

「そうつスよケイタさん！ 試合っス！！」

「ケイタ君、急いで闘技場に！！」

言われなくても分かっているので、二人が同時に心中を察した頃にはもう、俺はこのアパートの窓から飛び出して闘技場に走っていた。

手に持っていたビスケットの袋はジャージのポケットに突っ込みこの数ヶ月でかなり伸びたポニーテールを靡かせながら走る俺の試合が始まるまで、あと八分

会場は超満員。地響きを引き起こす程の大歓声が会場内で轟いている。

ここ数ヶ月で俺はヒソカと並ぶ程の人気闘士にランクアップしたという理由もあるが、おそらく今回は相手の所為。

それは相手が200階クラス唯一の女性、紅一点という点だ。

そして、

『さあさあ皆さん！ 待ちに待った頂上決戦の幕開けです！！ 今日にはなんとお互い九勝同士、フロアマスターに王手をかけた実力者同士の戦いだああああっ！！』

そう、これが理由。

今俺の目の前に立っているマヤというお姉さんは九勝三敗。俺は九勝二敗。

そんな本来なら緊張している筈の黒髪メガネさんは、現在観客席に手を振ってアピール中。

服装もボディコンに出ても可笑しくないボン・キュツ。ボン！を強調する衣装なので、以前戦ったクードさんと同じで闘士に全く見えな

え。つーかアンタ、本当にそんな格好で闘うつもりかい。

『二人にとってはまさに天王山！ まもなくスタートです！！』

何故か俺が試合をする時は毎回同じ実況のお姉さんなのだが、それは早々にスルーして、俺と愛想を振り撒いているお姉さんはリング中央に歩みを寄せる。

歩き方もモデルみたいですね。やっぱり顔を傷付けたら逆上するタイプなのだろうか。

まあ、そんな事したらお姉さんのファンに何されるか分らないので故意に狙う事は無いと思うが。

「よろしく」

「こちらこそヨロシクねボウヤ……ああ、可愛いシヨタっ子は良いわあ。ジュルリ」

……俺は何も聞かなかった。わざわざ効果音を口にしながら涎を拭う仕草も何も見ていない。

見ていないっただら見ていない。

(くそっ！ まともそうだと思ったなら直ぐコレだ！！)

だけど現実とは無情也。

流石の俺も握手した手を恍惚な表情で舐める仕草だけはスルー出来なかった。

女性版ヒソカかおのれは。

きっとジャポンの文字である漢字で名前を表記したら魔邪に違いない。

邪まで魔性の女という意味で。

……全国のマヤさん、申し訳ないです。

「では 始めっ！」

そんな事を考えている間にルール説明を終えた審判が試合開始を宣言し、俺はそれと同時に一先ず様子を見るために後方へ跳ぶ。

しかし相手は一步も動かない。

ギドさんやクードさんといい、何だか俺の相手は一步も動かない人が多過ぎる気がしないでもない。

しかも今回の相手は思わず貞操の危機を感じてしまう程の極上の笑みを浮かべているので余計性質が悪い。

「どうしたのボウヤ、攻撃しないの？」

バッチ来いと言わんばかりに両手を広げて受け入れ態勢万全の相手に突撃かますのは一見愚かな行為に見える。

畏が待っていますと宣言しているようなものだからだ。

しかし相手の性癖を考えるに、ただ単に俺と触れ合いたいだけかもしれない。

……まさかこんな微妙な心理戦を仕掛けてくるとは。

「ホラホラ、早くモーション起こさないと観客さんが退屈しちゃうぞ？」

「ならそつちから来いよな全くもう!!」

そう不満を叫びながらも対生物用のステークナイフを具現化し、床を蹴る俺。

隠をしていないのは凝で確認済みなので、これなら例え相手に思惑があっても確実に一撃を入れられる。

どんな企みがあろうとも、一撃で倒せば意味が無い。

そう考えての俺の一撃は、

「おっと!!」

こんな軽い声と共に回避された。

下から斜めに切り上げられたナイフの切っ先は彼女の服を切り裂き、その白い肌を微かに傷付けるだけに止まる。

こんな見た目をしているが、今バックステップで避けた姿と目は戦闘者のそれに他ならない。

正直甘く見ていた。彼女は間違い無く、ここの住人だったのだ。

『おおっと! ケイタ選手の斬撃の所為でマヤ選手の胸元が大変な事に!?! ……』って、そのボヨンって効果音を発している巨乳が

羨ましすぎる！　そしてポロリを期待している男共の歓声がうるさ  
ーいつー！！』

「ちよつとは自重しろよエロ馬鹿共！　こんな時だけケイタコール  
するなー！！」

あまりにも五月蠅かったので実況に便乗して周囲に怒鳴り散らす。  
切り裂いた場所は際どい位置だったが、まだ最終防衛箇所を観衆  
に晒すという痴態にはなっていない。

それよりも観客の反応に恥ずかしがる事も無く、切られた部分を  
気にしてもおらず、不気味な笑みを見せているマヤさんの方が気が  
かりだ。

「嗚呼……可愛いシヨタ子に傷付けられ、髷られる……アリね！」  
「無しだよ変態女っ！！　おのれはマジでヒソカの種類か！？」

「ちょ、流石に言って良い事と悪い事があるわよボウヤ！？　私は  
ただ可愛いモノが好きなだけで、その出会いを身体と記憶に刻み付  
けたい一心で　」  
「その感情がヒソカ並に歪んでるって気づいてくんないっ！？」

ダメだこの人、根本的に狂っていやがる。

っーか、マジで俺の周囲には変人しか集まらない。

そんな世の中に絶望する俺は絶対に悪くないだろう、うん。

「ふっふっふ……戦いの最中に考え事をしていて良いのかなあ？」

鈴を転がしたような撫で声に今の状況を思い出し、改めて集中す  
る俺の目の前で、彼女のオーラが爆発的に増大する。

ついに能力を発動するのだ。

その時に伝わる独特な緊迫感が俺の男としての勝負心を刺激する。能力が発動する際の恐怖と興味が同居した不思議な気持ち。この気持ちは何なのだろうか。

「……へえ、具現化系なんだ？」

15m離れたマヤさんの隣に具現化された、桶程の大きさしか無い平凡な壺。

しかし、そこに込められたオーラの量を見て、俺の自己防衛本能と危険察知スキルがアラームをかき鳴らす。

勘が叫んでいた。アレは厄介極まりない代物だと。

「どんな能力か知らないけど、ようはその壺に近付かなければ大丈夫……っ！？」

途端、身体の異常な変化に気付き、俺は言葉の中断を余儀無くされた。

まるで身体の中から何かが失われ、それが壺に流れていく感覚。

そして、それと同時に消失した俺のナイフが最大級の不安を俺に与える。

「……俺のナイフが消えた……まさかっ！？」

新たにダイニングツールを発動しようとしても何故か出来ない。ある一つの可能性が俺の脳を揺さ振った。



「ふふ、ボウヤの探し物はコレかな？」

『ああ！ ケイタ選手のナイフが消失したと思ったら、何故かマヤ選手の手の中に！？ その壺の件といい、いつから天空闘技場は奇術師の巣窟と化したんだああ！？』

そんな実況の声にツツコミを入れる余裕も無く、俺は今の現状に舌打ちする。

身近に似たような能力を持つ規格外な化け物がいるため、相手の能力に気付くのは早い。

「ふーん、ボウヤの能力はダイニングツールって言うんだ。食器を幾つも見現化するなんて器用ね。それに、付属能力も面白いものばかり」

「まさか俺の能力を……」

俺の呟きが聞こえたのか、彼女は極上のスマイルを俺に返してくる。

「ボウヤの推測通り、私の能力【強欲で便利な壺】スティーレルポットは、相手の能力を壺に封じ込め、それを私が自由に使用出来るの。ボウヤの代わりにね」

思わずどこのクロロだと言いたくなる、全く同じ系統の能力。

彼女は具現化系ではなく特質系だったのだ。

他の系統のように決まった法則が無い、ある意味オールマイティ  
ーで様々な可能性を秘めているレア系統 特質系。

モノを強化する強化系、オーラを具現化する具現化系といったよ

うな大前提の効果法則が無い特質系は、戦う上で非常に厄介。

他にどんな能力があるか分かったもんじゃない。

「安心して。能力は一時間したらボウヤの方に戻るから。それまでは能力無しで頑張ってね」

『ね』と言った所で彼女最大サイズのフォークを具現化し、俺に向かって全力投球。

まさか自分の能力と敵対する羽目になろうとは。

本当、念は奥が深い。

(……って、そんな悠長なこと考えてる場合じゃないんだよなー)

俺は持ち主に牙を向いた裏切り者をサイドステップで回避しつつ、改めて相手の能力の考察に入る。

マヤさんは槍投げの要領で特大フォークを何本も何本も投げてるが、それで俺の思考を止めるのは不可能だ。

(まず、盗られたのはダイニングツールだから通常の念に問題は無い。けど近付いてナイフで切られて、フォークに追尾されるのも面倒だしなあ……。つーかフルスロットル過ぎでしょ!? そんなペースだとオーラを直ぐ使い切っちゃうよ!?)

ハイペースでガンガンと特大食器を具現化し続けるマヤさんに若干呆れてしまう。

俺達はだいたい15mの距離を取っているので、そんな離れた場所から投擲されたブツに当たる程、俺の回避能力は甘くない。

クロロからもお墨付きを貰うほど逃げる事に定評のある俺なのだ。そんな愚は犯さん。

「どうしたのボウヤ!? 逃げるだけだと負けちゃうよ!？」

「そつちだつて無駄にオーラを消費し過ぎだ!！」

このままオーラ切れを待つのも手だが、それだと何だか味気ないし、観客からブーイングが起きそう。

仕方が無いので俺も攻める事にした。

『今まで回避行動を取り続けていたケイタ選手! ついにマヤ選手の方へと一直線っ!!!』

実況姉さんの言葉は微妙に違う。

確かに俺はマヤさんの方に移動しているが、正確には彼女から数m離れた場所目掛けて走っている。

そう、発動してから常にあり、存在感を出しまくっている不思議な壺へと。

「やっぱり弱点はあの壺か!!!」

俺の目的が分かるや否や目の色を変えて壺の防衛へと行動をシフトしたマヤさん。

その必死さを見て自然と笑みが零れる。

そして振り下ろされた刀サイズのナイフを紙一重で回避した俺の拳が、無防備な彼女の腹へと炸裂した。

「クリーンヒット&ダウン! 両者、ポイント2!!」

今まで空気化していた審判の声が響いた瞬間、会場が熱狂で沸き始める。

今まで大した攻防も無かったので当然だろう。

……それにしても頬が痛い。

「……ハア……ハア……まさか殴り飛ばされながら反撃する気力があるなんて」

俺が腹パンをした瞬間、彼女は吹っ飛びながらも長い足に凝を施し、しっかりと俺の頬へ鋭い蹴りを飛ばしてきた。

ただ能力を奪うだけの能力者かと思っただが、他の技量もそれなりに高いらしい。

また評価を改めなければ。

「……能力のことバレちゃったかな？」

「自分で言ってたじゃん。能力を壺に封じ込めるって」

なら、壺さえ壊せば能力が俺の元に戻るのは道理。反応を見るに推測は当たったようだ。

「あと最初の行動を見るに、強奪能力の発動条件は相手の能力をその身に受けるってところ？」

能力とは麻雀やポーカーのようなもの。

発動条件が厳しければ厳しいほど強力な能力を行使出来る。

逆を言えば、これほどの能力を使うには難しい条件をクリアしなければならぬという事だ。

同系統の能力を持つクロコでさえ、厳しい制約を四つも抱えている。

相手の攻撃を受けるなんて危険なリスクを負っているが、それだけで発動出来るとは思えない。

「ふふ、それプラス、相手に『壺』ってキーワードを言わせることよ。三分以内にね」

「そんな簡単に教えちゃって良いの？」

能力がバレる事が敗北や死に繋がる事を知らないのかアンタは。

……試合が終わったら俺の能力を口外しないよう口止めしておく。

「大丈夫よ。……だって、勝つのはお姉さんだし」

「なに馬鹿なことを……って、アレ？」

立ち上がった瞬間、身体が思うように動かずふらついてしまった。俺を襲うその正体は痺れや毒といった類のものではなく、ただの倦怠感。

まるでクロコ達との修行を終えた後のように身体が疲れている。思えば随分前から息切れを起こしていたが、何故ここまで疲労が溜まっているのか分らない。

これではまるで

「ちょっと待ってよ……もしかしてその能力って……っ!!」

「そうよ、この能力の良い所は相手の能力を封じる事じゃない。相手のオーラを使って、封じた能力を使える所よ」

「……なんつー面倒な能力……」

そう、この疲労は念を使い過ぎた時に感じるもの。  
だからマヤさんはオーラの消費が激しい特大サイズの具現化を何  
十回と行っていったのだ。

まさか俺の方がスタミナ切れの危機に晒されていたなんて……

「ボウヤの堅も弱まってきたわね。もう上手くオーラを練れない  
でしょ？ どう、降参する？ それとも明日お姉さんとデートも  
」

「『それとも』の関連性が全く理解出来ないからっ！？」

まだまだ元気一杯という感じで叫んでみるが、これは全くの虚勢。  
このままだと後数分で俺のオーラは尽きる。いや、あと数回特大  
サイズの具現化を許したら一分も無いかもしれない。

正直、超絶大ピンチ状態。

（何か策を思い浮かばないと本ツツ気でマズイ……あ、もしかした  
ら……）

危機的状況で浮かび上がった可能性。

一筋の勝利への道。

チャンスは一回。

外したら俺の負けは確定。

『ああ！？ ケイタ選手、再びマヤ選手に突っ込んでいくー！！』

「最後の賭けだ……勝負っ！！」

横薙ぎに振るわれた特大ナイフをしゃがむ事で回避し、俺は石版をひっぺがす。

ゴンがヒソカ戦でも使った石版返した。そしてちょうど目隠しになった所でジャージのポケットに手を入れ、準備が完了した所で石版を蹴り砕く。

石礫が嵐のように彼女に降り注がれるのを確認しながら、俺は再度接近を試みた。

「くっ！ 小賢しい真似を！！」

彼女の突き出したステークナイフが俺の頬を切り裂くのと、俺が右手を彼女の顔の前に晒すのは同時だった。

そして、彼女の顔に降り注ぐ細かい破片。

その一部が口の中に入った途端、

「……………」

白目を剥き、無言のまま、彼女は後ろに倒れたのだった。意識を失っているのは一目瞭然。

「マ……マヤ選手、戦闘続行不可能！ ケイタ選手の勝利っ！！」  
「き……決まったあああああっ！！ 何がどうなったのかはサッパリですが、見事マヤ選手に勝利！！ ケイタ選手、フロアマスタへの挑戦権を手に入れましたあああああっ！！」

観客の健闘を称える声を一身に浴びながら、疲労のため床に座り込む俺。

まったく、本当にもうダメかと思った。

「ハア……ウイングさん、マジ感謝っス」

汗を拭いながら右手に視線を下ろすと、そこにあるのはポケットの中に仕舞ってあったビスケットの袋。ちなみに中身は無い。

これでもう分ると思うが、俺がマヤさんにやった事は至極単純。ペテンティストで俺の料理の味を再現し、激マズの味を施したビスケットを彼女の口に放り込んでやった。

俺のペテンティストは料理の味を改変する。

機械で作られた大量生産品だが、ビスケットも一つの料理である事にならない。

あの石版はポケットに手を突っ込み粉々に砕けていたビスケットを取り出す所を見られなくなかったからに他ならない。接近中そんな仕草を見られたら警戒されただろうし。

……それにしても、

「……まさかこの能力が戦闘に役立つとは……念能力恐るべし」

極限のマズさで相手を気絶させる、ある意味一撃必殺のこの効果。なんだかペテンティストの新たな可能性を垣間見た気がした。

しかし俺の料理の味を再現した結果なので、俺の精神に多大なダメージを与えたの言うまでもない。



「それではケイタ君。身体にお気をつけて」

「自分、もっともっと頑張るっス！ ケイタさんやゴンさん達に早く追い付くように!!」

「うん、また来るから。そんじゃウイングさん、今までありがとう  
ございました」

さてさて、俺がマヤさんと試合をしてもう直ぐ一ヶ月が経過しようという八月二十六日。

今日この日、俺は半年の時を過ごした天空闘技場を去り、ついにヨークシンシティへと旅立つことになる。

九月になったら世界最大のオークションがあるヨークシン。

きっと観光者の数も多く、途轍もない額を幻影旅団は稼ぐ事になるだろう。

俺はその手伝い又は雑技団デビューを果たす事になる。

そんな未来を想像する前に、俺は一つの重大な試練と立ち向かわなくてはならない。

それは、

「あの……その、元気出すすス！ きっと訳を話せば許してくれる  
筈っス!!」

「ハハハ……罰ゲームって何されんだろ？ ……指増やしの刑だけは勘弁……」

「指増やしって何っスか!？」

こんな風にガクガクブルブル震えている俺を見れば、俺がフロア

マスターになれなかったのは一目瞭然だろう。

マヤさんと試合した二日後である七月二十七日にフロアマスターに挑戦したのだが、結果は惨敗。

それに厄介なものまで憑かされた。

「そんじゃまたね」

乾いた笑みを浮かべたまま空港へ向う俺の肩に乗るのは、トリタテンという名の念獣。

俺が対戦したフロアマスターであるナツクルという不良に憑けられた【天上不知唯我独損】という能力だ。

そしてこの能力は相手に自身のオーラを貸し与え、利息分を払いきれずに破産したなら相手を三十日間も絶の状態に強制的にするという厄介極まりないもの。

フロアマスターに挑戦し、敗北した場合はまた200階クラスで勝ち星を稼ぐ羽目になるのだが、破産者に付き纏うこのトリタテンのお陰で試合を組む事が出来ず、結局フロアマスターにはなれず仕舞い。

「試合中にスプーンですくい取ってもすくい取っても、結局はハコワレ発動されてポットクリン憑けられるし。何でよりもよって俺の試合の時に帰ってくんだよバカヤロー!!!」

実はフロアマスターは普段どっか外に出て勝手に行動しているのが一般的らしく、それは相棒であるシュートさんとの修行やビーストハンターの仕事をして生活しているナツクルも例に漏れない。

バトルオリンピア開催と、闘技場サイドから『挑戦者現れたから相手してね』という対戦召喚命令が来た時のみ、天空闘技場に戻ってくるらしいのだ。

《俺の能力はオーラを目視で数値化っていう経験則がモノを言う。だから師匠に経験を積めって名目で色んな奴らが集まるここに放り込まれたんだよ。そんで、気付いたらフロアマスターになってたってこった。分ったかコラ》

とのことらしい。

リーゼントの師匠め、余計なことしやがって。

しかも戦う時に本気を出した理由が『決闘に本気を出さなきゃ相手に失礼』っていう実にバトルマニアらしい言い分だし。

……それにトリタテンになったらナツクルでも解除は不可能という事実。

絶状態だからスプーンで取り除くのは不可能。

まさに八方塞。

「まあ、俺の事情を知らなかったからこんな外道能力使ったんだし、最後は謝罪してくれたから良いけどさ……でもなあ」

クロロへの報告を思うと足取りも重くなる。

とりあえず、今度ナツクルに会ったら仕返しをしよう心に誓った今日この頃です。

## 第十六話 さらば×バイバイ×天空闘技場（後書き）

久しぶりの投稿、次からヨークシン編です。

本当はフロアマスター戦も書きたかったのですが、作者が早くヨークシン編を書きたかったためカット。ナツクルがフロアマスターという設定は、どうせならフロアマスターを原作キャラにしたいと考えていた時に闘技場に居ても問題無さそうなバトルマニア系を探した結果、ナツクルに白羽の矢が立ったからです。

元々主人公をフロアマスターにする気は無かったので、ハコワレはちょうど良い能力でした。命令達成ならずの理由として。

……はい、この展開は賛否両論でしょう。そしてヨークシン編……というか、一部のシナリオというか設定も、おそらく賛否両論だと思います。

一応矛盾が起こらないようなプロット構成にしたつもりですが、ヨークシンの展開に納得がいかない読者の方もいるかと思われれます。シナリオというより一部キャラの所為？

独自解釈と設定に溢れたヨークシン編になると思いますが、今後も宜しくお願い致します。

## 第十七話 集合×ヨークシン×盗賊団！？

世界最大のオークションを控えたヨークシンシティは活気に溢れている。

観光客は勿論のこと、チラホラと見かける明らかにカタギでない連中も楽しみにしているように見えた。

それは空港でも変わらない。

目的地に辿り着いた者は皆、例外無くこれからのことに胸を躍らせている。

……まあ、俺以外だが。

「やばい……マジでやばいって……行きたくないなあ」

上下迷彩柄のTシャツとミリタリージャケット、それにカーゴパンツを身に纏い、シオルダーバックを携えている俺の周囲はネガティブパワー全開の空気が漂っている。

指令達成が出来なかった分の埋め合わせとして強制絶中は自発的に他の修行をやっていたが、それで許してくれる程あの悪魔達は優しく無いと思う。

断じて安易な期待を持つてはいけない。

これからの事を考えるだけで冷や汗が浮かび、空港内を歩く俺の足も遅くなってしまう。

集合時間である今日の正午までに『あじと？』に着けるか不安になってしまう程に。

しかも、

「まあ、大丈夫じゃないかな？ 理由が理由だし、クロロもそう怒らない筈さ？」

「……だと良いね」

俺がこんな暗くなっている理由は先行きが不安というのもあったが、残り半分は食人鬼もどきが側にいるという理由もある。

思えば迂闊だった。

行き先が同じであるヒソカも一緒の飛行船に乗っている可能性を考えるべきだったのだ。

想像してほしい、念を封じられた状態で三日間もコイツと一緒に過ごす恐怖を。

隙を見せたら何をされるか分かったもんじゃなく、お陰で今は三徹状態で非常に眠い。

忌々しいトリタテンは既に消滅しているが、だからといって安心は出来ない。

コイツと行動するって事は恐怖と不安要素のオンパレードを意味しているのだから。

そんなニコニコ顔が相変わらず気色悪いヒソカに溜め息を吐いている時だった。

空港出口で救世主に出会ったのは。

「……シズク？ シズクじゃん！！」

「あ、ケイ……じゃ」

「何で俺を見た瞬間に別れを告げて全力疾走！？ 頼むから俺をコ

イツと二人つきりにしないでよ!!」

後ろを振り向き、俺の背後に立つ変人を見た瞬間に全速で逃げるシズクの気持ちは凄くよく分かる。

しかし、だからって容認出来るものでもないので、シズクと俺の逃走&追跡劇が幕を開ける事になった。

互いが全力疾走した甲斐もあって予定より早く集合場所の廃ビルに辿り着けたのだが、途中からヒソカが遊び半分にトランプ片手で俺を追いかけ始め、追う側から追われる立場になった時、俺は考える事を止めた。

廃ビルに入った時、メンバーはまだ二人しか集まっていなかった。少なくともクロロやフェイタンがいないので、俺の公開処刑が始まるまでまだ時間はある。

……斬頭台に上る囚人の気持ちなんて体験したくなかったです。

「よ、ケイタ」

「久しぶり。相変わらずウボーは時間に遅れたこと無いよね」

「おうよ、俺は蜘蛛で一番時間に几帳面な男だぜ」

そう言っつてワハハハと笑うのは我らが筋肉馬鹿。

ちなみに今言った蜘蛛という言葉は団員を指す言葉で、そう呼称するのはメンバーの身体にある蜘蛛の刺青に起因する。

どうやら雑技団入りした者はメンバーの証として刺青を入れるル



ールがあるらしく、実はその刺青が団員入りを躊躇っている密かな理由でもある。

だって蜘蛛の刺青なんてセンス悪いし。

「ボノレノフも久しぶり！ …… うん、本当に会いたかったよ」

「 …… どうやら、また何かあったようだな」

次に俺が笑いかける包帯グルグル人間こそ、雑技団内唯一の良心と言っても過言ではない俺が一番会いたかった男 ボノレノフ。

昔から悩みをよく聴いてくれる相談相手で、俺の愚痴を嫌がらず聴き、道を示してくれる大変良い人。

たまに精霊などと電波な発言をし、その精霊様を侮辱すると死屍累々・阿鼻叫喚な惨劇を引き起こす程のサイコ野郎な一面を持つが、それを差し引いても充分プラス面が残る程の良識ある大人。

今色々語り出すと止まらなくなりそうなので、もうちょい落ち着いたら愚痴を聞いてもらうとしよう。

…… その時に俺が生きていたらの話だけだ。

ここで一つ問いたい事がある。

もし人が気持ち良く眠っている所を蹴り起こされた場合、皆ならどうするだろうか。

結論、当然怒り狂う。

以前キルアにやったように地獄を見せること確定だ。

……今ほど俺は自分の力の無さを嘆いた事は無い。

「オラ、チビ。いい加減起きろつての」

「ゲホっ!?! ……このヤンキー……後で」

「あん?」

「何でも無いッス」

無理だつて。相変わらず怖いよフィックスさん。

ツッコミ時のテンションじゃないと暴言なんて吐ける訳が無い。

寝起きじゃ無理だ。

そして未だに鈍痛が残る腹を押さえ、改めて周囲を見渡してみれば、いつの間にか家族が全員集合している。

その中でも一番目立つ所に立っているオールバックに視線を送った俺に話しかける人物がいた。

「おう、やっと起きたか」

「こつこつのは起こされたつて言うんだよ……何で فرانクリンはポロポロなの?」

どこぞのマッド博士が作ったようなフランケンシュタインもどき、別名をトラウマ発動原因三人衆その三。簡単に説明すると、それがフランクリンという人物である。

家族の中でも比較的良識人なのだが、ヒソカのオーラ別性格分析を証明するかのような典型的な放出系ということもあって、その性格は短気で大雑把。ついでに負けず嫌いときている。

スプーンの効果を試す際にフランクリンの念弾をすくい取ったの

だが、いくら手加減されたものでも俺の能力に敗北？したのがプライドを傷付けたらしく、走馬灯を何度も見るほど若干本気のダブルマシンガンを浴びせられて見事トラウマを刻んでくれやがった。

見ればノブナガもボロボロなので、おそらく喧嘩でもしたのだろう。

「ようやく起きたか」

そして俺にいつものトーンで声を掛けてくる保護者。

アイコンタクトで前に出ると言ってくるクロロの命令に従いたくないのだが、それでもゆっくりと足を動かしてしまつのは、ヘタレの悲しい性である。

(俺……数分後生きてられるかな?)

「……ってというのが、俺の天空闘技場での半年なんだけど……ねえ、何で毎回皆が集まる度に俺は正座させられてんの？」

「目標に到達していないお前の所為だ」

俺を見下ろすクロロからの厳しいお言葉に内心で溜め息を吐く俺。家族が全員集合なんて数年ぶりだというのに、何故俺は正座を強いられているのだろうか。

しかも今まで周囲に散らばっていた皆も俺とクロロを囲むように

円になっているし。

仕事の打ち合わせをする前に、俺の現状報告からする羽目になるなんて。

「ちなみにケイタ、その強制絶を強いる能力者の名前は何だ？」

「ナツクルだよ、ナツクル」バイン」

ふとクロロに訊かれ、答えた所をシャルナークが『ビーストハンターだね』と補足した。

するとクロロは満足したのか、まるで『覚えておこう』という二ユアンスを含む笑いを俺達に見せる。

……すまんナツクル。どうやら半殺し&能力強奪フラグを立ててしまったようだ。上手く逃げてくれ。

「それで、その念を封じられていた一ヶ月の間、お前は何をしていた？」

「もちろん別の修行をしていたさ。今その成果を見せてやる」

本当はくじら島に遊びに行きたかったのだが、万が一パクノダに記憶を探られて遊んでいた事がバレると俺の人生はそこで終了する。そこで仕方が無く断腸の思いで筋トレに励んでいた俺だが、同時にとある修行も平行して行っていた。

あの生きる伝説（もちろん変人として）に師事するという時点で俺の苦渋の決断ぶりを理解してもらいたい。

「シャル、悪いけど鞆取って」

「アイサー」

マイバツクを手渡され、中から取り出すのはピンポン玉級の白いゴムボールとスカーフ。

皆に披露するのは当然の事ながら初めての事なので緊張します。

「コホンっ、さあさあここにるのは変哲の無い白いボールとスカーフ。それがなんと！このスカーフにボールが包まれた瞬間、なんとボールが消えてしまいました！！」

『……………』

「ふっふっふ、驚くのはまだ早いよ。こっからが腕の見せ所で」

俺の超絶マジックに度肝を抜かれている面々にドヤ顔をして次のマジックに移行しようとした所、唐突に鳴り響く一つの銃声。

いつの間にかクロロの左手に具現化されていた拳銃から発射され、赤い弾丸は俺の黒髪を数本焼き切って背後に積まれた木箱に着弾した瞬間、轟々と燃え盛って木箱を灰へとチェンジさせる。

……………いつスキルハンターを発動したんだアンタは。つーか、あんな物騒なもんを俺にぶっ放したのかおのれは。

「……………それで、その念を封じられていた一ヶ月の間、お前は何をしていた？」

先程と全く同じな台詞。

違うのはクロロが怒っているのと、俺が冷や汗ダラダラで顔面蒼白になっていること。

……………いったい何がお気に召さない。

皆と一緒に公演するには技術が足りないだろうから、客寄せくらいは出来るかと必死に修行したのに。

何この今にも法廷が開かれそうな現状。

どこで道を誤ったのか皆目見当も付かないけど、とにかく何か言い訳をしなくては俺の命が危ない。

「えっと、裁判長は当然の事ながら団長で、検事はパクか俺？ まあ、執行人はフェイタンが担当するとして……あとはもう無いか」「弁護士は！？ 思いつき重要な役職が仲間外れですよシャルナークさん！？ そしてフェイタンの嵌り役っぷりが果てしなくム力つく！！」

しかもパクノダが検事になった時点で俺に勝ち目は無いじゃないか。

ノブナガやウボーが盛大に笑い、他の面子が呆れた表情を取っているのが癪に障る。

気味の悪いクスクス笑いをしているヒソカは徹底的に無視。

「そしてパク！ 何で『育て方を間違えたかしら？』みたいな顔してんの！？ おのれらが俺にやってたのは修行っていう名の虐待だから！ あんなの世間一般では育児に入らないからね！？」

こんな発言をする俺だが、もちろん強く育ててくれた事に多少なりとも恩は感じている。

しかし、だからといって納得出来るものでもないのだ。

全面的に感謝するのは何故か負けな気がする。

「そしてクロロも無言で弾をリロードするな！！ これには非常に

難解で説明し難い壮絶な事情がありまして、だから一つ説明の場を

「

正に生きるか死ぬかの綱渡りを十分間続け、辛うじて罰は一先ず保留という奇跡的な結果を獲得した俺。

やっと異端審問染みた裁判が終了し、ようやくお仕事の話に現状はシフトする。

……よく五体満足で生還出来たな。

「それで団長、今回は何を盗めば良いの？」

「ま、だいたい見当は付いてるけどな」

とりあえず俺に対する罰は保留という事にされた途端、マチとちよんまげがクロロに訊ねる。

一部不穏な言葉がマチから発せられたのは気の所為だと思いたい。しかし、そう思い込もうと考えられたのも、クロロの馬鹿発言を聞くまでだった。

「全部だ。地下競売のお宝、丸ごとかつさらっ」

「……………はあっ!？」

冗談にしては笑えないと思ったが、残念ながら空気はマジ。しかもクロロの世迷言が予想外だったのは俺だけのようで、思わず全員の顔色を疑ったが、他の皆は特に疑問を抱いていないようないや、一人だけ俺と同意見の同志がいたようだ。

「本気がよ団長……………」

その同志はウボー。

最後の砦は俺達だけだ。

「地下の競売は世界中のヤクザが協定を組んで仕切ってる。手エ出したら世の中の筋モン全部的に回す事になるんだぜ! 団長っ!！」

「そっだそっだ! それに、いくら雑技団の活動が赤字ルートになったからって盗みに走るのはダメでしょ!? つーか強盗するにしても少しは場所を自重しろ! ホラ、皆からも何か言っちゃってよ!！」

と訊いてみるが、皆の反応は二通り。

俺に呆れた視線を寄越すグループと、笑いを必死に堪えているグループ。

何故?

「怖いのか?」



「いやクロロ、そんな挑発に俺達が乗る訳」  
「嬉しいんだよ……!!」

……どうやら俺は難聴を患っているらしい。

今この筋肉達磨が何て言ったのか聞こえなかったし理解出来ない。

いや、現実逃避だって事は分かってる。

本当は分りたくないだけだ。

「命じてくれ団長、今すぐ！」

「俺が許す、殺せ」

「え！？ ちょ、マジっ!？」

混乱する俺を余所に、皆は行動開始と言わんばかりに入り口向かって歩き出す。

全員が足並みを揃えているので、これではまるで俺だけ空気が読めていないみたいだ。

つーかウボーの喜びの雄叫びとテンションがヤバイ。

おかげで俺の鼓膜も限界必死。

しかしそれでも疑問を払拭するため、音書を撒き散らす馬鹿に負けじと声を張り上げる。

「本当に盗みに行くの!？ ねえってば!!」

「邪魔する者は一人残らず殺れ」

「よっしゃあああああつ!!」

「……って、聞けよ人の話っ!!」

先頭を歩いて容赦するなと命令するオールバックと歓声を上げる

マッチョ野郎にキレて、思わずダイニングツールを発動。

最大サイズのフォークを具現化して、それを立ち去ろうとする一団の中心目掛けて投擲した。

しかし、

「おいおい、もっとオーラを込めないと簡単に防がれちゃうぜ、ケイタ」

「俺のフォークを素手で掴むのはウボーくらいだから!? つーかお前からこそ正座しろ!俺が常識つてものを教えてやる!」

まるで癩癩を起こした子供を見るような視線に晒される中、特にクロロと暴力コンビに向って叫ぶ俺。

今ここで軌道修正しなければ世界中のマフィアから目の敵にされること確定なので、俺の安全のためにも強盗計画を防がなければ。

このままだと俺が巻き込まれるのは確定事項っぽいし。

「まったく……まさかここまでとは……シャル」

「はいはい。ほら、ケイタ。これを見てみな」

ガミガミ言っている俺をあやすようにノブナガが髪をわしゃわしゃ撫で、その隣でマチは両腕を組んで溜め息を吐いている。

深い溜め息を吐いているクロロの指示に従ったシャルはそんな一団に近付いて、俺に一枚の紙を差し出した。

まるでこうなる事を初めから読んでいて、事前に準備をしていたかのようだ。

「確かに収入が赤字なのは由々しき事態だけど、だからと言って盗

みに入るのは根本的な解決にならないって！ ちゃんと各自のスキルを上げて客を集めるような……何だよシャル。……ネットの印刷？ へえ、ちゃんと告知はし……て……」

シャルから手渡されたB5サイズの印刷用紙に書かれていたのは、我らが幻影旅団に関する情報。

そこに書かれていた衝撃の事実を目ん玉を引ん剥きながら驚愕し、数秒後

「メンバー全員がA級首の盗賊団……って、どうええええええっ！？」

全員が耳を塞ぐ程の絶叫がアジト内に響き渡った。

「クロロの団長って雑技団じゃなく盗賊団の団長って意味か……マジかい」

「俺達からしてみれば、逆に今まで雑技団だと勘違いしていたケイタに『マジかい』って感じだよな」

俺の咳きに反応してツツコミを入れたシャルを含む雑技団……訂正、旅団員がいるのは未だにアジト。

そこで現在昼食タイムをそれぞれが満喫中。

そうなったのも俺の絶叫が落ち着きを迎えて直ぐにシズクが呟いた『お腹空いた』が原因だったりする。

お陰で頭の中の混乱が落ち着かないままボロボロな台所で料理を作る羽目になったのだが、ほぼ作業が手に付かない状態でもしっかりと料理を完成させたので、俺の心にはしっかりと料理人魂が宿っているらしい。断じて雑用魂ではない。

「でもケイタ。アンタ本当に私達が雑技団だって事を疑わなかったの？」

「これっぽっちも。だってその変態奇術師が入団したし、音楽奏でて踊れるボノレノフがいるし」

マチの問いに答えた瞬間、今までチャーハンを頼張っていた全員が二人に注目する。

その視線に耐え切れずボノレノフはそっぽを向き、逆にヒソカの場合は思わず視線を送った者全員が変態の笑顔を見て自分から目を逸らした。

ちなみに変態を見て後悔した面子にはクロクも混じってます。

「たくつ、俺達が客商売なんてする訳無えだろ。おいチビ、俺達が客にヘラヘラ媚び売ると本気で思ったたのか？」

「もしそうだとしたら、筋金入りの馬鹿ね」

「くそつ……よりもよって、この暴力コンビに馬鹿にされるのがこんなに腹立つなんて……っ!!」

そんなこと以前から疑問視していたに決まってるだろ。

その後は大した会話も無く無言で食事が進み、次第に大皿に乗っ

た料理の中華料理の数々も消失していく。

ちなみに俺は料理を食べている間、家族が盗賊団だったという衝撃事実をすんなり受け入れている現状に思いを馳せていた。

（言われてみれば凄く納得なんだよなー……通りで金回りが良かったり戦闘訓練を施される筈だよ）

そりゃ歴史的財宝を強奪して闇市場で換金していたら金持ちになる筈だ。

というより、

「ねえ、そいっついや何で皆は自分達が盗賊団だって教えてくんなかったの？ もしかして、万が一ハンターに一網打尽にされた場合を想定して、俺に迷惑を掛けないように？」

という家族の優しさを期待してみたら、『んな訳あるか』という願望を打ち砕く容赦無いツツコミが送られた。

……何も全員が声を揃えなくても。

「賭けだよ賭け。ケイタがいつ気付くか全員で賭けてたんだよ。あゝあ、また団長の一人勝ちだよ」

「まさか期限一杯まで気付かないとは思わなかったわ」

シャルとパクノダが大損だと嘆いているのだが……何このデジャヴ？

「……この落とし前はしっかり付けさせてもらっつよ」

「だな。ケイタのせいで大敗したし、そんなくらいしてもらわなきゃ

割に」

「合わなくないからねウボオー！？ ……つて、このやり取りは以前にもうやったから！！ いい加減俺を賭けの対象にすんの止めてくんない！？ そしてそのちょんまげも刀を抜こうとするな！」

以前よりも人数が多いため、もしまた俺に罰を与える八つ当たり野郎が増加した場合、暴力の数がヤバイことになりそうで怖い。そもそもそんな理由で俺に秘密にしていたんかい。

やんごとなき理由があるんじゃないかと勘ぐっていた俺が馬鹿じゃないか。

「……さあさあ、ケイタを糾弾するのは後でにして。団長、そろそろ」

「ああ」

ここで俺折檻雰囲気をお仕事モードに変えてくれたシャルとクロ口にグツジョブと称賛を送ろう。シャルの一言が凄い余計な気がするが。

「やる事は簡単だ。オークションニアに扮して会場に潜入し、お宝を全てかつさらう。会場内の競売人を皆殺しにするのはシズク・フランクリン・フェイタンの三人。シャル・マチ・ノブナガ・ウボォー・ケイタの五人はオークション会場にいるSPを殲滅」

「ちよつと待ったクロロ！ 何で俺の名前がラインナップされてんの！？」

「他の者は俺と一緒にアジトで待機。実行時間はオークションが始まる」

「だから毎回毎回俺を無視すんの止めるよ！？ その耳は飾りですか！？」

皆も特に疑問を抱く事無くクロ口の作戦を聞いているし、何で毎度の事ながらスルースキルが高いんだコイツらは。

そう思っていると、クロ口の鋭い眼光が俺を威圧する。

「俺の指示を完遂出来なかった罰だ。お前も俺達に協力しろ」  
「うぐっ……痛い所を突きやがって」

しかし裏世界の住人全てを敵に回したり、幻影旅団のメンバーと勘違いされてしまったら、俺の美食ハンターへの道が閉ざされてしまう。

それ以前にクロ口達ほどの実力があるなら賞金首ハンターやマフイア達を返り討ちに出来るかもしれないが、俺の実力だと非常に危ない。

……っかこの戦力で俺は必要なかどうかを四・五時間問い詰めたい。

「というよりお前、何でそんなに躊躇ってたんだよ？ 盗みなんて団長に拾われる前に経験済みだろうが」

「……いや、フィנקスの言う通りなんだけどさ……でもねえ？」

確かに俺は元強盗と言っても過言ではない。

それも強盗の後に殺人まで付く根っからの犯罪者。

クロ口に拾われてからはすっぱり足を洗ったが、それまではゴミ捨て場での物拾いと強盗で生計を立てていたのだ。

当時五歳の身としては、それでもしないと生きていけなかった。

まあ、そんな危ない橋を渡っていたがために念能力を開花させる事になったのだが、その時の話は別の機会に取っておこう。

「俺ってほら、将来は美食ハンターになるつもりだし、言っちゃ何だけど皆の片棒を担いで賞金懸けられちゃうと、来年の受験に影響が……」

「なら変装すれば大丈夫じゃないかな？ 確実な証拠が無ければ、ハンター協会も君を捕らえる事が出来ないだろうし？ その年の試験官に合格って言わせれば、悪魔でも合格出来るのがハンター試験さ？」

「お前が言つと説得力があるな」

クロロと同じ事を思ったのか、俺を含む全員がうんうん頷く。しかしマズイ。なんか反論する手立てを失ったような気がする。

何故なら俺も覆面でも被れば大丈夫かなと思いはじめてしまったから。

さつきは『お前らとは違うんだ。常識人としての姿を見せてやるぜ』という意気込みで強盗反対宣言したが、強盗自体には何も罪悪感を感じなければ、他人の生き死になんてどうでもいいし。

……しかし、いくら盗賊団に適正があっても俺は美食ハンター志望。なるべくなら危険を冒したくない。

「とにかく、お前が参加するのは決定事項だ。だがもし拒むなら……そうだな、ヨークシンにいる間、お前はずっとヒソカと行動を共に」



「何なりとご命令ください!」

変態野郎とコンビを組まされるくらいなら懸賞金を掛けられるり  
スクを負う。

……覆面を被れば大丈夫だよね、きつと。

第十七話 集合×オークシン×盗賊団!? (後書き)

やっとオークシン編に突入しました。次話でやっとオークション襲撃やゴン達と合流する予定です。

今回出たクロロの能力は一応オリジナルです。あんなだけスキルハンターのページがあるので、拳銃くらい保存されていても不思議では無いでしょう。

……今は夏休みの筈、なのに休み突入前と大して生活が変わっていないのは何故だろうか？

忙しさがハンパない……

では誤字誤用脱字、御意見や御感想がありましたら是非ご連絡ください。

## 第十八話 探り×お話×地下競売

全員集合から一日と少し経った九月一日のヨークシンを一人で歩く俺が思う事はただ一つ。それは自由とは素晴らしいということ。

いや、別に今まで拘束されたり軟禁生活を送っていた訳ではないのだが、今までの旅や行動が修行の一環だったので、こつした純粹な意味での自由時間というのは実は初めてだったりする。ここに到着してからは修行の成果を見せるためにウボーと軽く模擬戦したり、フェイタンに拷問に関すること、シャルからは普通の勉強会を強いられていたという理由もあるが。

その所為もあって、自由を謳歌している今の気持ちは蒼穹の如く澄み渡っている。

……このままバツくれるのも名案かもしれない。

「そうだよ……このまま姿を晦ませれば良いんだよ！ オークションが終わるまで……！」

そうすればオークション期間中に変人筆頭が付き纏う事も無い。

もしかたら罰と称して嫌がらせのためにオークション後もヒソカとの行動を強制されるかもしれないが、あの殺人病患者も年がら年中俺に付き合うほど暇では無いだろう。

ゴンとキルアもいるし、そっちに時間を割く可能性大。

むしろアツチに行け。

「罰として修行倍増……ってのも考えられるけど、強くなるためっ

て考える事で我慢しよう、うん」

正直そっちの方が辛い気もするが、俺の未来のためにも仕方が無い。

何だか今回の盗賊家業に加勢すると、とんでもない面倒事に巻き込まれると第六感がビンビン主張しているし。

それだったら俺は短い期間の肉体疲労を選択する。

賞金懸けられる以上の厄介事になったら目も充てられない。

「確かここら辺だって……お、いたいた」

地下競売が始まるのは二十一時で、現在の時刻は十八時。場所はメインストリートからちよつと外れた普通の通り。

何故そんな所にいるのかと言えば、

「おーい！ 来たぞー！！」

「あ、ケイタだー！！」

「遅っせえよ馬鹿！」

そう、俺がここに来たのはゴンとキルアに会い来たからだ。

本当はレオリオもいるのだが、現在レオリオは目の前の寶石店で三百万の指輪を購入中とのこと。更に壁に立てかけてある板も気になるぞ。

……何故だ。

「へえ、髪切ったんだな」

そしてキルアの言う通り、今の俺はポニーテールからただのショートになっっている。

理由は『覆面を被る時に邪魔だから』らしい。

何故かマチとパクノダは散髪に反対だったが、そこはクロロの指示で強行突破。

ついでに言えば俺の散髪係は意外な事に毎回フェイタンだったりする。

本人曰くハサミを使う練習らしいが、その用途が一般的な使い方と大分違いそうなので考えないようにしよう。使用目的なんて怖くて訊けない。

唯一の救いは、そのハサミがフェイタンではなくクロロの私物だということ。

「久しぶりだね」

「というより、何でヨークシンに来るって教えなかったんだよ？あと、やっぱり来たのは仕事の関係か？」

少し前の俺なら家族が公演をするからって説明する所だけど、もし見に行きたいと言われると対処に困るので、素直に家族で観光に来たと嘘を付く。

そして、ヨークシンは契約の倍率が高くて公演場所を確保出来なかったとも。

我ながら、よくまあこんな嘘がポンポン飛び出すもんだ。

「二人は何しに来たの？」

「レオリオやクラピカと会う約束してたっていうのもあるんだけど……」

「ちょっと欲しいゲームが競売に出されるから、そのための金稼ぎ。」

そのゲーム、ゴンの親父の手がかりなんだよ」

ゴンが自分の父親を探しているというのは周知の事実だったので、手がかりを見つけられた事を素直に喜ぶ所だろう。

……天空闘技場で億単位の稼ぎがあったのに軍資金が尽き掛けているというのはツツコミ所満載だが。

「ふうん……ところでさ、そのゲームってどこのオークション？」

「サザンピークのオークションだよ？」

「そっか……」

サザンピークは九月六日に開催される、一風変わった品物が競りに出される変人達のオークション。

もしそのゲームが今夜の地下競売に出されるのならクロ口達の手伝いをするのもアリかもしれないと思ったけど、よくよく考えれば盗品をプレゼントされてもゴンは性格的に喜ばないかもしれない。キルアは喜々として受け取りそうだけど。

「でもそのゲームの推定落札価格が89億ジエニーですよ。たくつ、  
どんだけ高いんだっつーの」

「89億う！？」

何その普通って言葉に喧嘩を売るような値段は。

所持金が二百万でそんなもんを落札するとか無理ゲーにも程がある。

「だ・か・ら、今から稼ぐ必要があるってわけよ」

「レオリオー！」

「おう、生きてて何よりだぜ。つーかお前、ヒソカのターゲットだ

ったなんて、どんだけ運が無いんだよ？」

「ほつとけー！」

こんな会話をするのも久しぶりだ。

宝石店から出てきたレオリオと軽口を言い合い、そして今からする事を説明される。

それは、

「さあー！ いらっしやい！ 条件競売が始まるよー！！！」

そう、ここで今からゲリラ的にあるイベントを行うのだ。

その内容は腕相撲。

参加費は一万ジェニーで、一番最初に二代目ウボー（俺命名）とゴンさんに勝てた者に三百万の宝石をプレゼント。

……はつきり言つて、楽しんで稼ぐの代名詞になりそうな程のボロ儲け商売だと思つ。

聞いた所によると片側二つの両開き扉を念無しで開けられるゴンに一般人が勝てる訳無いでしょ。

それにしてもレオリオ、司会が様になってんな。

「はい残念、次の人ー！」

知らずに挑む人達が憐れで仕方が無い。

「でもさ、89億稼ぐのに、あと88万9999勝しないといけな

い訳でしょ？ レオリオって本気でコレで全額稼ぐつもり？」

「レオリオ曰く、この腕相撲は地中のモグラを引っ張るための餌撒きだったよ」

「……どういうこと？」

「さあな」

キルアと二人で挑戦者の列を整理しながらコソコソ会話。

その間も無知な人達が上納金を持って集まってくる。

交通妨害になりそうな程の大盛況だ。

それからしばらく経ち、ゴンがもう直ぐ百五十人切りを果たしそうな頃だった。

キルアが神妙な顔つきで訊ねてきたのは。

「……なあ、そういえばさ。ケイタンとこの雑技団って名前何て言うんだよ？」

「幻想魔団」

以前も行われたこの問答。

いきなりなタイミングだったのでデタラメ感がハンパない、いい加減なモノを創り上げてしまった。

この回答にキルアは『ふ〜ん』という騙せたのか見破られたのか分らないコメントをした後、ゴン達の調子を見ようと最前列の方へ向っていく。

それに俺は続いた。

「いきなりどうしたの？」

「別に。ただヒソカの所属している一団の名前が気になっただけ」



……あの変態がいらん事を話していない事を祈ろう。  
例えば、自分が蜘蛛と交流を持っているような発言とか。

それで俺の家族達が幻影旅団のメンバーかと疑ったのかもしれない。

悪名が多そうだし、何かしらの遺恨があっても不思議は無いので、秘密にするのが一番だろう。

隠し事に後ろめたさを感じるがケース・バイ・ケースという言葉もある。

真相が非常に気になるが、幻影旅団という単語がキルアから出ていないのに俺から話すのは不自然だし。

「おーっと！ 初めて女の子の挑戦だ！」

「そりやまた無謀な……」

……その挑戦者を見た時の驚きを全世界に伝えたい。

「シズク！？ 何してんの!？」

言った瞬間にマズイと思ったが時既に遅し。

俺の声に反応し、席に座ったシズクは俺の方を振り向いた。

「……あ、ケイタだ。シャルナークが怒ってたよ？ ケータイの電源切ってて連絡出来ないって」

「んな!？ ケイタ……お前、このお嬢ちゃんと知り合いか!？」

レオリオが色々和讯いてくるが無視。俺は今、心中で頭を抱えることで精一杯だ。

まさかこんな所でシズクと遭遇する羽目になるなんて思ってもみ

ない。

消息を絶つ事を決意してから一時間でエンカウントするとは。

「誰だよ？」

「……俺の家族」

この言葉でキルアの額から冷や汗が一筋垂れる。

俺の家族という発言から強さを想像しているらしい。  
多分その予想の斜め上くらいの実力だ。

そしてマズイ。

まさかこんなジョーカーが出てくるとは……百五十万の赤字確定  
ですね、ゴンじゃ勝てない。

「……おいケイタ、なんなら俺の事を今から義兄さんと呼んでも  
」

「やかましい！！」

レオリオなんかにはシズクを渡せるか。  
身内で唯一の天然癒し系だぞ。

そして始まる勝率ゼロの腕相撲……と、思われたが。

（レオリオ、ナイス！）

レオリオの言葉でシズクは利き腕とは逆の手で腕相撲を行う事に。  
これならゴンにも勝機がある。

そして、

「はい残念負けちゃった〜！！ ゴメンねシズクちゃん」

見事ゴンはシズクを下した。ギリギリだが。

「……お前の家族って本当に何者？ ゴンが本気出してギリギリつてどんだけだよ？」

「規格外野郎の巣窟。……ちなみにシズク、左利きだから」

キルアは当然のこと、俺達の会話を聞いていたゴンも鳩が豆鉄砲を食らったような顔をする。まあ、当然だと思う。あんな細腕から怪力なんて誰も想像出来ない。

「負けちゃった……それじゃケイタ、行こう」

「……了解。それじゃあ皆、頑張ってたね」

シズクと会った時点で逃げる事は当に諦めている。  
逃げてもどうせ捕まるし。

わざわざシズクに手を引かれて、シズクの激闘を称える拍手に晒されながら路地裏に移動。

そこに居たのは拷問狂とホラー映画野郎だった。

……三人衆の二人を見て、無意識の内にフィックスの存在を探した俺は精神的にかなり疲れているのかもしれない。

「お、なんだ。ケイタを見つけたのか」

「またく、どこ行ってたね」

「友達の手伝いしてた。ケータイの電池切れちゃってたみたい、ゴメンゴメン」

とりあえずこれで誤魔化せる筈。  
意図的に電源切っていたなんて言えない。

「どうだた？」

「負けちゃった。あの子強いよ。もう一度挑戦したいな」

「それは止めて。今度挑戦して利き手でやられたらゴンが勝てないから」

それに挑戦する時間が無い。

今回ばかりは二十一時から始まる競売に感謝だ。

「それに買ったり競ったりは邪道だぜ。俺達は盗賊」

「欲しい物は奪い取るね」

「……いやいやいや、金あんだから素直に買いなよ！？カツコ良く決めた台詞でも内容最低だからね！？」

シズクに見付かってからシャル達とも合流し、今からお仕事を開始する。

まず初めにやった事は、地下競売を取り仕切るマフィアンコミュニティの人間と入れ替わること。それは簡単だった。

どこで調べたかは知らないが、関係者が会場に向う道に先回りして連中のIDを人数分奪うだけだからだ。

後は俺達が潜入すると人数が増えるから、気付かれないために殺して数合わせ。

シズクの能力はデメちゃんという生物と念以外なら何でも吸い取るチート掃除機なので、死体を吸ってしまえば証拠も出ない。……完全犯罪過ぎる。

そして俺達がいるのは会場のあるビルの裏口。

見張りは一人を殺し、残りの一人はシャルの【携帯する他人の運命】<sup>クボイス</sup>という操作系能力で操っている。

こうすれば上に何か訊かれても勝手に対応してくれるし、殺した奴の居場所を訊かれても適当に誤魔化してくれる。

俺達の潜入が露呈する危険は少しだけ低くなった。

「……フェイタン、この覆面に目や口を出す部分が無いんだけど？」

「そんなモノ必要無いね」

「あるからね！？ つーかコレ、絶対に拷問用の覆面でしょ!？」

何でそんなもんを常時装備しているんだおのれは。

……使用済みでない事を祈る。

「……にしても、スーツってのは堅苦つしくて好きになれねえ。脱いじゃダメか？」

「ちよつとキツイぜ」

野生人間ウボーと巨漢のフランクリンが愚痴っている。

二人のサイズに合うスーツがあって良かった。

特注かもしれないが。

「よし、それじゃあ作戦決行。各自、しくじらないように注意する

こと」

「ケイタ、しつかりやんな」

パンパンと手を叩いて皆を鼓舞し、暫定リーダーであるシャルに従って、各自が自分の役割を果たすために行動する。

ここに残ったのはシャルとノブナガの二人だ。

マチの注意はしつかりと心に刻んでおこうと思う。

未だに気は乗らないが、迷惑かけるのは流石に忍びないから。

……断じて足を引つ張った後に待っているだろうとお仕置きを恐れての行動ではない。

「おし、そんじゃあケイタ、早くこの中に入れ」

「……入んなきゃダメ？」

ノブナガが広げているのは少し大きめの手提げバック。

流石に子供がビル内にいるのは可笑しいので、俺はこの中に入つて潜入する。

だから俺は皆と違って黒スーツではなく私服のままだ。

そう考えると迷彩柄なのは非常に空気を読んだ服装かもしれない。

覆面で大分雰囲気ぶち壊したが。

「ダメだ。運んでやるんだから別に良いじゃねえか。楽だし、中々体験出来ねえぞ」

「そりゃそうでしょ……」

入り心地が悪そうなので遠慮したいが、そうは問屋が卸さない。それは俺が逃走に関するキーパソンに他ならないから。

理由はまあ数分後にでも。

よくよく考えれば、もし俺があのままボイコットをしていたら冗談抜きで殺されていたかもしれない。そのくらい俺は大事な物を所持している。

「ケイタ、屋上に行くまで動かないように」

「アイアイサー」

思った通り狭いは揺れるはで入り心地は最悪。

途中擦れ違った人達からは中身をチェックされそうになったが、そこはシャルが口八丁で誤魔化してやり過ごした。

こういう手際は流石だ。他の面子ではこうはいかない。

(でもなあ……何でIDは身分証明の代わりなのに写真を添付しなかったんだろ？ 皆サングラスに黒スーツで似たような格好だし)

何だかんだ言って警備諸々が杜撰だと思う今日この頃。

まあ、マフィアのお宝を盗もうとするなんてイカレた連中はコイツらだけだし、そこまで本腰入れて警備しないかと自己完結しておこう。

そうこう考えている内に、俺達三人は目的地である屋上に到着だ。

「ふう、暑かった」

「そんじゃ、頼むぜ」

「了解」

ノブナガの持っていたバックから出て、屋上の中央に移動した俺は早速ダイニングツールを発動した。

ここで具現化するのは新入りであるバタクーラー。  
大きさは最大の6m。

形状に関してはステンレスの蓋付き鍋を想像してもらえば分かりやすいと思う。

そして外側の側面にはとある付属品が付いているのだが、それは今関係無いので置いておこう。

ようやく慣れてきたクーラーの具現化の出来に満足した俺は、中からバタクーラーではなく気球セットを取り出した。

「いや、ケイタが便利な能力を覚えてくれて助かったよ。コレが無かったら逃走手段の確保が面倒な事になってた」

「……まさかクーラーの初仕事がこんな事になるなんて」

このバタクーラーの能力は収納。

どんなモノでもクーラーの大きさに応じて一つだけ収納する事が出来る。

クーラーの限界具現化サイズが6mなので必然的に収納物質の限界も6mの大きさまでになるが、今回は風船も畳んでいた事もあってギリギリ許容範囲内だ。

「はいノブナガ、刀」

「おう、悪いな」

俺のクーラーは一つのモノしか収納出来ない。しかしそれだと汎用性に乏しいので少し裏技を考えた。

それは複数のモノを収納したい場合、収納容器にソレを仕舞ってか



らクーラーに入れば良いというもの。

ようはナニカで覆って一纏めにしてから仕舞えば良い。

例えば異なる食材なんかをカバンに仕舞ってから、それをクーラーに入れる。

そうする事で無理矢理『カバン』一つという括りにしてしまうのだ。

今回は『気球セット』の風船の中に刀を収納してから畳み、クーラーに入れてみた。

ちなみに生物は収納不可。

そしてまあ、コレにも一応とっておきの効果がある。

事前準備は必要だが、れっきとしたサポート系の能力が。

つーか物質収納はオマケ。

「さて、と……もう直ぐ競売が始まるから、ノブナガとケイタも手筈通りによろしく」

そう告げてシャルはウボーと合流するために屋上から出て行った。ノブナガは刀持ちだと目立つので外を出歩けないのと、気球の準備をするために残っている。

得物持ちはキツイっスね。

「……ところでお前、蜘蛛に入る気は無えのか？」

「……無いよ」

残すは風船にガスを入れる所という段階まで準備して、ノブナガがマジなトーンで訊いてきた。

ちようど屋上に風が吹き、それが俺の後ろめたさを感じている心に浸透して寒気を覚える。

今なら分かる。クロロが俺を拾って育ててきたのは、俺を旅団に入れるためだ。

しかし俺は旅団に入る気は更々無い。

恩を仇で返すような行為に少し罪悪感が沸き上がる……用済みって事で捨てられたり秘密保持の意味で殺されたりしないよね？

「別にハンターやりながらも良いんだぜ？ シャルや団長が良い例だ」

「でも二人はライセンスを所持しているってだけでしょ？ 俺はハンターとしても活動したいの」

嘘は吐きたくないので本音を言う。

それで見限られたり、関係が壊れる可能性があってもだ。

後ろめたさを感じたまま、皆と家族を続けたいとは思わない。

こんな暴力的で常識知らずな犯罪者集団でも、何だかんだ言っただ俺は皆を家族と想っているから。

中途半端な気持ちで『家族ごっこ』を続けたくない。

出来るなら本物の『家族』として。

それが俺の望み。

「……ま、良いんじゃないかねえのか？ お前はお前だ。好きに生きるこ

「……おい、何だよその目は？」

「……いや、なんか意外で。こんなにあっさり納得されるとは……」

予想外過ぎて自分の頬も抓ってみる。

うん、普通に痛い。

「どつちにしろ今は欠番も無いしな。まあ、これは俺の意見だ。ウボーなんかはお前と組んで仕事をするのを楽しみにしている節があるし、団長も今は予備くらいにしか考えてねえだろ」

「『今は』ね。肝に銘じとくよ」

確かに俺の実力では役不足だろうし、流石に勧誘は無い筈だ。

……気付いたら団員扱いされていそうで怖いけど。

「……ノブナガ……ありがとう……」

「あん？ 何がだ？」

「なんでもない！ ほら、もう直ぐ競売が始まるから準備した方が  
良いんじゃない！？」

とりあえずノブナガは俺の意見を尊重してくれたので大丈夫そう  
だ。

自惚れでなければ女性衆や他の男共（ヤンキーと拷問大王を除く）  
も、俺が旅団の活動で役立たずでも隣に居る事を認めてくれると思  
う。

……クロロが全く読めないが。

「……時間だ。行くぞ」

「了解」

ノブナガの刀で穴を空けてもらった覆面を被り、俺も覚悟を決める。

好んで人を殺す程どこかのピエロの様になったつもりは無いけど、邪魔者は排除しよう。

生き残られて俺の情報が漏れたら面倒だから。

何となく倫理に反していると思うので殺したくないが仕方が無い。

そして俺は、ノブナガに続いて地獄と化している悲鳴と鮮血に満ちた惨状へと足を踏み入れた。

「……やっぱり俺って戦闘に参加する必要無いじゃん!!」

何かもう、屋上で待機していて良かった気がする。

ノブナガと一緒に行動している所為か、SPが登場しても俺の出番が無い。

他の皆が暴れて凄まじい勢いで人数が減っている現状も俺の役立たずっぷりに拍車を掛けている。

……俺の意気込みを返せ。

「俺、地下の方見てきても良い?」

「おう、あっちも終わっている頃だから、シズクをこっちに寄越すよう言っとけ」

一応ビル内の地図は頭の中にインプットしているので迷う事は無い。  
次の別れ道をノブナガは左に、俺は右へと突き進んで階段を降りる。

途中に生きている人と会う事も無く、本当に一度も戦闘を経験しないまま、俺は地下の会場へと辿り着いた。

「切り刻み！ 地獄の苦しみを味あわせてや」

……まだ喋っている最中なのに念弾を撃ち込む فرانクリンさんが酷いです。

微妙に怒っている所為か念弾の数も通常と比べて五割増し。

何をしたり言ったのかは知らないが、どんな龍の逆鱗に触れたのだろう。

そして、こうして最後の競売人はいなくなった。

その人の死体以外、ここには何も無い。

もうシズクがデメちゃんに吸った後だ。

閑散とした会場を眺めていると、ファイタンは何故かこっちを一度見て、直ぐに物言わぬ肉の塊に視線を戻す。

「……やれるものならやてみるといいね。アレは簡単に死ぬタマ違  
うよ」

……俺の事なのだろうか。

ホント、いったいどんな会話だったんだ。

「ケイタ、そっちはどうなった？」

デメちゃんの掃除音だけが響く競売場でフランクリンが訊いてくる。

会話の内容が気になるが、今は伝言を伝える方が先だと判断する。いつ襲撃がバレるか分からないので早くお宝を奪って逃走しないと。

「こつちもそろそろ殲滅が終わる。だからシズクは掃除をしに行つて。俺達は金庫までGO」

さて、運搬作業に入りますか。

……今更ながらお宝をどうやって運ぶつもりなのだろうか。俺の能力にも限度があるし。

「まるで、予めこつちいう事態が起こる事を知っていたみたいだ」

ウボーは今クロロと話をして今後の方針を話し合っている。

ちなみに現在俺達は手ぶらで気球に乗って離脱中。

どうやら品物は全部襲撃前に運んだらしく、金庫はもぬけのから。何一つ残っていないかった。

まあ、25m四方の金庫びつちりにお宝が入っていたらしいから、運びきれないし好都合だとは思っけど。

俺は別にお宝が欲しいと思わないから無くても問題無い。  
いや本当、事情を知っている進行役が生き残っていて良かった。

お陰でその不幸な人はフェイタンとお話する事になったので、今回死んだ人達も含めてご冥福をお祈りします。

「ねえ、陰獣って何？」

シズクも俺と同じ事を思ったのか訊ねた人であるフランクリンの方を向いている。

そして明かされた陰獣の意味。

それはマフィアンコミュニティの長である十老頭自慢の実行部隊。

面子は十人で構成され、そいつ等は組織の中でも選りすぐりの実力者達。

その中の梟という男がお宝を運んだ張本人なので、そいつを探るのが最優先だと思われる。

具現化系って事しか分からないが、随分と便利そうな能力だ。

……俺のバタクーラーと被っていきそうなのが少し気に食わない。

「クロロは何だった？」

「とりあえず帰ってこいってよ」

通話を終えたウボーが籠に寄りかかったため、少し籠が傾く。つーが狭い。

俺なんて場所が無いからフランクリンの膝に腰掛けているし。

「じゃあ、帰る前にアイツらをどうにかしないとね」

呟いたシャルに便乗して俺も下を見下ろす。

そこで目に飛び込んでくるのは試験時に飛行船に乗った時を彷彿させる夜景に混じり、俺らの所まで聞こえてくる怒声と、列をなしている黒の車達。

気球は目立つので見付かるのも時間の問題だと思っただが、こんなに早く見付かるとは。

よって気球は『あじと?』に向わずゴールドー砂漠の方に空路を変更。

……まだまだ先が長い夜になりそうだ。



第十八話 探り×お話×地下競売（後書き）

時間を見つけたので珍しく更新。

バタクーラーの能力は次話で制約も含めて全て詳しく語る事になると思うので、それから人物紹介の方を更新したいと思います。

そして次は陰獣戦……上手く書けるかなあ……矛盾した行動や展開にもしたくないです。気をつけなければ。

では誤字誤用脱字、御意見や御感想があれば是非ご連絡ください。

## 第十九話 陰獣×拉致×追跡劇

空は雲一つ無い煌びやかな星々に彩られた夜空。

砂漠地帯　　というよりは岩石地帯に近い形状をした現場に吹く風が気持ち良く、散髪によって短くなった黒髪が優しく撫でられる。前方遠くに広がるヨークシンの夜景が美しく、周囲に人工物が無い事からか、澄んだ空気が肺一杯に広がった。

周囲の変人共の所為で年がら年中エンドレスで木枯らし風が心で吹き荒れている俺にとって、この一時は多大なセラピー効果をもたらしてくれる。

よって、

「降りて来いコラア!!」

「沈められるか埋められるかくらいは決めさせてやるぞ!!」

このヤーさん達からの熱心なお誘い声が酷く癪に障る。ついでに銃声も五月蠅い。

「……空気読んでよ、マジで」

気球のガスが尽きたため、降り立った岩壁の下に群がるマフィア達の姿を見て思わずげんがりとしてしまう。

ああ、こんな奴らに邪魔されるなんて、俺は何て不幸な少年なのだろうか。

出来る事なら何もかも忘れて遠くへ旅立ち、そこで白い小さな家でも建て、美人な奥さんと可愛い子供達に囲まれてひっそりと暮らしたい。

俺、この戦いが終わったら、あの子に告白するんだ

「……で、今回のソースは？」

「『あじと』の書棚にあった戦争恋愛小説。こんなもんまで守備範囲だなんて、ホントにクロクotte読書家だよな」

俺の言葉が意外だったのか、新たな事実を知ったシャルが声を上げて爆笑している。

確かに常日頃から難しそうな歴史書や哲学書を愛読しているクロクが恋愛小説も読むなんてキャラ崩壊も甚だしい珍現象だろう。

無慈悲無表情男が恋愛小説を読んで頬を赤く染めたり涙するシーンを想像し、何とも言えぬ寒気に襲われた俺らだった。

「降りて来いっつつつてんだろ!!!」

「ヤクザをナメンも大概にしとけよゴラアっ!!!」

そんな場違いなトークを仲間内で繰り広げている合間も、ヤーさん達は大変元気です。

「アレは掃除しなくていいんだよね？」

「別にいいね」

情報処理部隊の性かオーバーワークの域に達しそうなシズクにフエイタンを筆頭にした面子が必要無いと告げている。

それは暗に皆殺しを示唆した会話なのか、それとも無意識に出た言葉なのか、それは定かではない。まあ、高確率で大量虐殺と思われるが。

「俺達がやって来らあ。お前ら手エ出すなよ」

旅団内屈指のバトルマニア。オークション会場内でのSPとの戦闘で殺しも大好きという悪趣味が露呈したウボーが楽しそうに言うのだが……俺『達』とは何ぞや。

嫌な予感がハンパない。

「オラ、さつさと行くぞケイタ」

「やっぱりかああああああっ!？」

片手で俺の襟首を掴んで肩に担ぎ、まるで学生カバンを持つかのように扱いながら斜面を滑り降りるウボーに殴る蹴るなどの抵抗を試みるが、全くもってコレっぽっちも意味をなさない。

流石は強化系を極めた怪力馬鹿だ。

まるで某RPGに出てくる刃の鎧の如く、逆に俺に対してダメージを与えていく程の非常識なオーラ量。……これで纏んだから、強化系とは攻防のバランスが憎たらしいくらい出来過ぎている。

つーか、何故わざわざ俺を連れて行くのか意味不明。

地上に到達した瞬間に手を離されたためケツから落ちた俺の気持ちなんてきつと分からないだろう。

ケツを強打したという意味もあるが色々な気持ちも相まって、思わず尻尻に涙が浮かんできた。

「何でわざわざ俺まで連れてくるんだよ!? 一人でやれよ一人で

っ!!」

「あん？ だってお前エ、一度も戦闘してないんだろ？ このままじゃ可哀相だと思ってるよ……」

「人類全てがおのれみたいなバトルマニアだと思うなよっ!？」

本人にとっては善意だと思ってるの行動というのが性質悪い。

そんな本心から『悪かったな』みたいな顔をされたらこれ以上怒鳴れないじゃないか。

「おい、待てやコラ」

「とりあえずデメエは覆面外せ」

思いの擦れ違いを正したので崖上へ帰ろうと背を向けたら、後頭部に銃口×2を押し付けられる。

横目で見ればウボーの顔面にも銃口を向けている男がいた。

…… 何で俺には二人でウボーは一人なのだろうか。

危険度を考えたら明らかに人員配分を間違えていると思う。

そんな事を考えつつ、とりあえず俺は両手を挙げて今のところ敵意が無い事をアピールし、ゆっくりと正面を向いた。

これで多少は動き易くなったと胸を撫で下ろす。

安心しつつも周囲の警戒を怠っていない俺をよそに、ウボーとヤーさんは会話を続けていた。

「この場面でええ根性しとんのオ。てめエらのアタマはどうだ？」

「コイツ」

そう言っ指差す方向にいるのは俺……っ、ちょい待てオイ。

『んな訳あるかコラあつ！！』

俺だけではなく周囲のヤーさんの怒声も重なる。

崖を滑り降りてくる時のやりとりから俺アタマ説を全否定していたヤーさんは大層ご立腹だ。

……ウボー、おのれはいつからそんなお茶目なキャラになったんだ。

「何でこの状況で無意味な嘘を吐くのかなっ！？ そんなキャラじゃないでしょおのれは！？ 馬鹿じゃないの！？」

「おいコラ馬鹿って何だ！？ この殺伐とした状況を和ませてやるうつつー俺の親切心を無碍にする気が、オイ！？」

「心にも無い事を言うな！ それに空気を読む方向性間違ってるからね！？ ウボーがやったのは火に油を注ぐ行為に等しく」

色々と言いたい事も多々あるが、それを今の状況が許してくれる筈も無く、俺達の言い合いは近くに居た三人から漏れる殺気によって中断させられる。

そこから先は一瞬だった。

ウボーは顔面に飛んできた一発の銃弾を噛んで止めるという変態技を見せた後に相手の首をへし折り、俺は銃弾が飛んでくる前にヤクザ二人の持っていた拳銃を具現化ナイフで切り飛ばす。

この攻防がワンサイドゲームの始まりだった

念とは一見して何でもありの便利能力に見えるが、実は万能ではない。

確かに常人では不可能な事を現実にし、魔法とも言える現象を引き起こす高等戦闘法ではあるが、流石に物事には限度がある。

つまり俺が何を言いたいのかということ、

「無理無理無理無理無理いいいっ！！」

周囲を弾丸と怒声が飛び交う中、俺は敵に後頭部や背中といった背面部分を敵に晒しながら、まるで水上を走るかのように高速で両足を動かして岩壁を駆け上がっている。

理由は単純明快。

あんな銃弾の嵐を浴びたら死ぬ確率が高いからだ。

オーラを纏う事で防御力は格段に上がる。しかし、それは決して過信して良いものではない。

銃弾を食らってもほぼ無傷でいられるのは強化系を極めたウボーだからであって、強化系とは相性が悪い俺の防御力など高が知れている。

確かに致命傷は負わないだろう。

だが、それも数が膨大なら軽く死を迎える事になる。

……硬を施した背面に着弾する銃弾からのダメージから逆算した結論だ。

威力の高いライフルやマグナム弾ではなかったのが幸いした。そうでなかったら痣以上の悲惨な結末を迎える自信がある。

「ちょ、何でトランプなんてしてんの!? のん気ってレベルじゃないんですけど!？」

死地から生還した俺の目の前に広がっているこの光景。明らかに下とは世界が違う。

……死人が続出しているのを肴にトランプに興じているとは。

「シャルが持ってたの。アジトにあったんだって……ダウト」  
「げっ!？」

シズクの発言と共に呻き声を上げたシャルナーク。それを見てマチが中央に集まった捨て札を嘔吐きイケメンに渡し  
ている。

なんとというアットホームな空気。

つかフランクリンの手と対比するとトランプの大きさが可笑しい。

そんな楽しそうな一面に加わろうと思ったが、とある重大な事実  
に気付いたため提案を却下。そして俺は、その残酷な真実を言葉に  
しなければならなかった。



「……それ、ヒソカのトランプだよ」

まったく、『あじと?』のどこで拾ったんだか。

そして告げた瞬間、遊んでいた四人が即座にトランプを手放した。しかも変態菌に汚染されたトランプをシズクがデメちゃんて処理するという徹底ぶり。

気持ちは十二分に分かるがそんなに嫌か、おのれら。

そしてトランプの見分けが付いてしまうほど見慣れていたという事実気付、今更ながら絶望する俺。膝についてうな垂れるなんてポーズを久々にとった気がする。

「シャル……お前、やってくれたな」

「最低」

「不潔」

憤怒のオーラを滾らせながらフランクリンが片手を向け、胸糞悪そうな表情をしたマチが針を取り出し、汚物を見る目をしたシズクがデメちゃんを構える。

変態菌を撒き散らす媒体と化した参謀を抹殺するために。

「ちょっと待とうよ三人とも……言っておくけど俺だって被害者だし、一番泣きたいのは俺だよ?」

あんな汚染物を手元に持っていたのはシャルだしね。

しかし、問答無用。

そんな顔をしている三人と冷や汗を掻いているシャルを見ながら優越感に浸ることにする俺だったが……やはり世の中はそう上手くいかない。

高レベルな喧嘩を観戦していた最中に飛来してきたナニカを避ける事が出来ず、太ももに突き刺さったアンテナを見た瞬間、血の気が失せた。

「俺まで巻き込むなよ馬鹿シャルっ!?!」

「この騒動の原因はケイタの一言なんだから責任取れっ!?!」

「ふざけるなああああっ!?!」

ブラックボイスの自動操作（他人用）、シャルの援護と敵迎撃を命じられて強制参加させられる俺に拒否権などある筈がなかった。

シャルに放たれた手加減念弾をスプーンですくい、それを投げ返す。

この効果を知らない面々は驚いていたが、そんな周囲の動揺には眼もくれず、俺の視線は青筋を額に浮かべているフランクリンに釘付けた。

どうやらまた彼の要らんプライドを傷付けてしまったらしい。

……ここにきてトラウマ三人衆の本領発揮かい。

「来たね」

「陰獣だな」

「「それどころじゃないっ!?!」」

三人の暴れん坊將軍に折檻されかけている俺とシャルの嘆きが重なる。

登場した陰獣やら面白そうに顔を歪ませているウボーを見る余裕などある筈が無かった。

「つーか見てないで三人を止めてくださいフェイタン様にノブナが様。」

「いや、かなり切実にその事を願う。」

これなら下で戦っていた方がマシだったと涙を流すくらい、俺は世の中の理不尽さを嘆くのだった。

先程の銃器の騒音に比べれば随分静かになったものだが、それでも崖下での戦闘は苛烈さが増している。

現在ウボーの相手をしている陰獣は三人。

本当はもう一人いたのだが、それはウボーのビックバンインパクトを食らって跡形も無く消し飛んだ。

その時の地面を砕いた轟音で俺達の戦闘も一時中断し、シャルとの共闘も解消されたので、注意を引いてくれたウボーにはグッジョブという言葉を送りたい。

お陰でオーラを半分消費し、打撲などの怪我を負ったが、化け物家族を相手にした事を考えれば上々の被害状況だ。

そして、

「………なんとという非常識技……つーかうボー、おのれも変態と同じで食人鬼？」

蛭と名乗った陰獣の最後を思い出して身震いする。

大声を上げたウボーの声から耳を庇い、両耳から手を離すのと、鼓膜が破れて脳にダメージを負い、ショック死した最後の陰獣が倒れたのは同時だった。

マフィアのお偉いさんが誇る最上級戦闘部隊の名に恥じず、彼らは俺から見ても強者に分類される念能力者だというのは疑う余地も無い。

三人がかりとはいえウボーの強靱な身体に傷を負わせ、麻痺毒を仕込み、必殺に成りえる念で操ったヒルを体内に侵入させたのだ。

残りの陰獣が彼ら以上の実力者だと仮定したら、俺にとっては充分脅威。

勝てないとは思わないが苦戦することは高確率でありえる。

どうせなら皆が相手をしてくれないかなと他力本願精神を胸中に宿しながら、厄介な奴らに目を付けられたと溜め息を吐く俺だった。

……しかしウボー、このままだとヒルの所為で死ぬのに何故笑っているんだ。この樂觀主義者め。

「シズク！ 俺の体内の毒とヒルを吸い出してくれ！ お前の掃除機なら出来るだろ！？」

「デメちゃんは毒なら吸えるけど生き物は吸えないよ！」

そう、チート掃除機デメちゃんは生き物と念を吸う事が出来ない。妙に落ち着いていると思ったらデメちゃん頼りだったのか。

そんな身内の基本能力を把握仕切れず猛烈に焦っているウボーに

呆れた視線を送る俺だが、実は心の中ではウボーと同じで焦っていたりする。

流石に家族には死んで欲しくない。

確かに皆は悪行三昧・極悪非道の代名詞と言っても過言ではない事ばかりしているので死ぬ確率は比較的高いだろう。

それはアルドーンとギルの死亡が証明している。

こういう仕事に伴う戦闘は勿論の事、中には怨恨で復讐者の手に掛かる事だってあるかもしれない。

もしそんな場面に遭遇した場合、俺はどうするか。

(……覚悟、決めといた方が良いのかな)

……正直、複雑な心境だ。家族には死んで欲しくない。

しかし例えばの話、皆と復讐者、どちらに正義があるかと訊かれれば、俺は復讐者側だと即答する。

因果応報。自業自得。

クロク達にはこの言葉が相応しい。

他者の都合は省みずやりたい放題やっている皆に同情の余地は無い。  
い。

(同情の余地は無いけど……やっぱり死んで欲しくない)

この考えで、所詮は俺も悪党だという事を改めて自覚した。

残虐非道だが暖かい家族と正当な復讐理由を掲げる有象無象の輩、加勢する方など考えるまでもない。やっぱり俺は何だかんだ言っただけ(ピエロ以外)が好きだから。

心境的には復讐を応援したいが、どうでもいい奴の手助けをするほど優しくない。

キツイ修行と理不尽が多い　しかし楽しく、充実している今を脅かす敵対者には容赦しない。

今まで通り、自分のエゴに従って生きていく事を決意する。

（まあ、あくまで例え話。もしそうならどうするかって話だけど……くそっ、シリアスなんて俺のキャラじゃないのに……変な事を考えちゃったじゃん）

この時の俺は甘かった。有象無象ではなく、身内とと思っている友達が復讐者として家族に牙を向く事を考えていなかったのだから

「ケイタ！　お前のスプーンはどうだ!？」

「デメちゃんと同じく生き物は無理!」

「この役立たずッ!」

「やかましいわ脳筋っ!」

そして、決断の時が近付いている事も知らなかった

「俺が見てみるよ」

クロロに次ぐ雑学王であるシャルがウボーの検診に行き、そこで判明した事はヒルの種類がマダライトヒルという希少種であることだった。

このヒルは人の膀胱に卵を植え付け、その卵が孵る時の激痛で人を殺す危ない種類。

なにやらアンモニア濃度がどうのこうのという難しいウンチクを言っていたが、ようはビールを沢山飲めば助かるらしい。

……ビールってヒルに強いんだな。ありがとうビール。

「誰か車でビールを沢山盗ってきてよ」

買うではなく盗るといふシャルの発言に慣れてしまった辺り、中々俺も皆に染まってきている気がするが、抱いた複雑な思いは心の奥底に仕舞い、皆と一緒に崖を滑り降りる。

そんな時だった。

ウボーの身体に沢山の鎖が巻き付き、あっという間に捕縛されて連れ去られてしまったのは。

「よし、それじゃウボーを助けに行きますか」

行動方針を決めたシャルが手をパンパンと二回叩き、皆は拉致されたウボーを助けるために行動を開始する。

本来なら助けに行かなくてもウボー一人でなんとか出来そうだが、今回は毒のため身体が動かないので自力脱出は無理だと判断しての行動だ。

今なら拉致される寸前にウボーの靴にマチの針が刺さっているため、伸びる念系から追跡出来る。

俺達はヤーさんが乗っていた車の一つに向った。  
ちなみにビールを盗りに行くフランクリンは早々に車を出発させている。

「ねえ、追跡中もしくは追跡後に陰獣と戦う可能性ってあるよね？」  
「可能性はあるね。覚悟しときな」

やはりマチも同じ考えらしい。  
なら、俺も準備をしなければ。

流石に乱闘に巻き込まれた後のコンディションで陰獣を相手にするのはマズイ。

「シズク、悪いけど協力して」  
「うん。いいよ」

車に乗り込む前に少し時間を貰い、俺はダイニングツールを発動させて等身大スプーンを具現化する。さあ、ここで俺の新能力のお披露目だ。

「じゃあシズク、ちょっとオーラを貰うね」

俺は前から考えていた。スプーンですくったオーラもとい念を、  
どうにか有効活用出来ないかと。

そして思い立ったのがコレだ。

練状態のシズクのオーラをすくい、それを放り捨てる。

そして、その放物線を描いているオーラが消える前にスプーンを



素早く消し、落下予測地点にバタークーラーを具現化して中にオーラを放り込んだ。

「ほう。それが本当の使い方か」

ノブナガが面白そうに呟いた通り、これが生物以外を何でも収納出来るバタークーラーの正しい使い方だ。

スプーンですくい取ったオーラを保存し、クーラーに鎖で付属されているバターナイフで保存されたオーラを対象者に塗り、対象者のオーラと同化。

そうする事でオーラの量と質に比例して一定時間のオーラドーピングを施す。

これが俺のバタークーラーだ。

当初はバタークーラーとバターナイフを別々に具現化して使おうと考えていたが、自分の複数種類の具現化禁止という制約を思い出して絶望。

そんな俺に『ナイフをクーラーに付属させて一緒の食器にすれば良いんじゃない？』とアドバイスをくれたシズクには感謝仕切れない。

「そのオーラはどのくらい収納可能？」

「念を保存する時だけはクーラーの大きさが1m固定だから、それに見合うだけの量。あと、中に保存出来るオーラは一系統が限度で、ドーピングは同系統の念能力者じゃないと無理。そんで半日経ったら自動的に保存されたオーラは消滅する」

つまりこの能力で俺がドーピングする場合、具現化系である俺は

シズクとコルトピのオーラしか活用出来ない事になる。

ついでに言えば相手の発や具現化された物を保存した場合、それは即座にただのオーラに戻って保存される。

「ケイタ、効果時間はどのくらい？」

「クーラーが満タン状態なら五分くらいかな。どのくらいオーラが強くなるかは質次第」

スプーンでオーラをすくう場合はそれと同等のオーラを消費する。それですくい取ったオーラを保存しても本末転倒なので、そこら辺は効果持続時間を短縮する制約を課す事で無理矢理ドーピング効果を上げた。

満タン状態でも持続時間が短いのはそのためだ。

「微妙ね」

「黙らっしやい!!」

収納や効果時間について質問してきたマチやシャルと違い、興味が失せたような顔をするフェイタンを睨み付ける俺。

ドーピング効果よりも物品の収納の方が使い勝手が良いというのは自覚しているので、このドーピングは『あつたら便利かも』くらいの気持ちで使う事になるだろう。

……とにかく、これで俺の能力は完成だ。

ナイフとフォークは攻撃。スプーンは防御。クーラーは補助（主に生活面）。

中々バランスが良いと思う。

説明しながらシズクの上質なオーラをすくい、クーラーを満タンにして準備完了。

シズクのオーラが少し減ったが、この程度は問題無いらしい。

礼を言い、ここで時間を駆ける事も出来ないので早速誘拐犯を追う事にする……のだが、

「特等席ね」

「トランクのどこが特等席だと!？」

フエイタンの特等席の定義を疑うぞ。

そしてシズク、『良かったね』なんて天然で返すんじゃない。

悪意が無いから本心だと分かってしまうのが悲しい。

「何で俺だけトランクなの!？」

しかもこの車、ここに駆けつけてくるまで何をしていたのか知らないが、既に死体という先客が存在した。

当然退かしたし中に溜まった血液もデメちゃんて吸い出したが、籠った死臭だけは取り除けないので色々とキツイ。

元ゴミ山生活者をなめんなと言いたいけど、久しぶりな臭いなため限界です。

「他に座る所が無いんだから我慢しな」

「我慢にも限度があるわっ!？ アンタらには膝の上に乗せるとか、ぎゅうぎゅうに詰めて子供一人分の席を確保するとか、そういう優しさは無いんかい!？」

そう主張するが、駄々っ子を見る目をしているマチがかなりムカつく。

「……時間が押ししてるんだから早くしろ」  
「痛っ！ ちょ、無理矢理押し込むなよちゃんまげ！ って、痛い痛い！！ 分かった！ 入るから…… 自分で入るから！！」

シャルの荒い運転とトランク内の臭いにより、込み上げる嘔吐感と格闘する事になるのは言うまでも無い

「な、何があつた!？」

不意に不自然な衝撃が車を襲い、現状が把握出来ないまま取り合えずトランクから反射的に飛び出した俺の目先には、黒い布に包まれながら縮んでいく車の姿が一つ。

そしてその縮んだ車を布ごと拾い上げる大男。

明らかに敵だ。

「やっぱタダ者じゃねーなお前ら。あの一瞬で扉を開けて脱出する反応の鋭さはよ。警戒に値するぜ」

俺を含む脱出者四人を称賛する男だが、目は敵意満々といった感じでギラついていらっしやる。……しかし、四人？

「あれ？ ノブナガは？」

シズクの脇に立って訊いてみるが、シズクの返答は黒い布を指差す事だった。

耳を澄ませば中からノブナガの声が聞こえてくるので、おそらく逃げ遅れたのだろう。

俺をあんな所に仕舞いこんだ罰だ。ざまあみる。

「あの布で包んだモノを小さくする訳か。万引きするのに便利だね」  
「マチ、考える事がセコ……ナンデモナイデス、ゴメンナサイ」

口は災いの元という言葉を身に染みるほど理解し、反省もしているから、首に念糸を巻くのは止めて欲しい。

敵に能力を見せているし、今はそんな場合ではないから。頼むから空気読んで。

「アレなら競売品も入っちゃうな。奴が運び屋か」

「冷静に状況を分析するのは美点だけどさ、ちよっとは助けようって気は無いのシャルナークさん!？」

未だ首に巻きついていて念糸に危機感を抱かない訳にはいかない。そして、家族の手で危機的状況に陥っている俺を他所に場は進んでいく。

残りの陰獣五人が現れたのだ。

「あれ？ 陰獣って全部で十人だよ。これで揃ってるよ」

これが意味する事はただ一つ。

ウボーを拉致したのは陰獣ではなく別組織だという事だ。

……これはまた面倒なことになった。

「まあ。こいつらに聞けば分かるね」

フェイタンの一言と殺気を浴びて、陰獣全員が戦闘態勢に入る。それにつられて団員全員も力を放出したので、荒野一帯がオーラによって明るく照らされた。

一般人が立ち入ったのならショック死してしまう程の濃厚なオーラと殺気。

それに平然と耐えているコイツら陰獣もまた、皆と同じ強者の一角だ。

今、ここは地獄と化す

「……………って、戦闘体制に入って力むのは分かったから念系に力を入れるなマチ！ 絞まってる絞まってるっ！！」

……………一瞬だけ緊張感が霧散して白けた空気になったのは絶対に俺の所為ではない。ないったらない。

## 第十九話 陰獣×拉致×追跡劇（後書き）

はい、感想やメッセージの返信が遅れて大変申し訳ございません。今後も返信に関しては遅くなると思います。

しかし目は通しており、応援もその他の意見もかなり参考並びに執筆の糧にさせて頂いております。

……心理描写が難しい。本当に文才が欲しいです。

主人公設定の能力部分を更新しました。

では、誤字誤用脱字の発見や御意見に御感想がありましたら是非ご連絡ください。

## 第二十話 新たな×変態×殲滅戦

事前に準備しておく事の大切さをこれほど理解させられる出来事もそうそう無いだろう。

少なくともシズクのオーラを保存していない状態で陰獣と遭遇していたらチェックメイトだったかもしれない。

殺されなくても皆の足手まといになる可能性大なので、そうならなくて良かったと心の底から思う。

……生き残った後の罰ゲーム回避的な意味で。

足手まとい認定されたら目も当てられない。

「ケイタ、最低でも一人は殺りな」

「……アイ・ママ」

元々全力時でも手加減が出来る相手ではないのでマチの意見に異論は無い。

殺らなきゃ殺られる。

所詮、俺の住むこの世界はそういうルールが出来てしまっている。なら、身の安全のためにも徹底的にやるべきだ。

トランク内が蒸し暑かった所為で覆面を取ったため、コイツらに素顔がバレてしまった事だし。

首に巻きついていた念糸も消え、漸く俺は自由に動く事が出来た。

「俺はあの運び屋をやるか」

「私はあの奥の奴」

「じゃあ、私はあのしわくちゃ」

「余た二人貰うね」



「……ハア……俺は美形の兄ちゃんを相手にする」

相手は六人。こっちも六人。

本当ならタイムマン上等という展開になる筈だけど、ちよんまげがファーストアタック回避に失敗したためフェイタンが二人相手にする。

万が一にも逃がしてはいけない大柄な男をシャル一人に任して良いのか少し心配してしまうが、だけどもあ、なんとかなるだろ。

とりあえず自分だ。気にしている暇など無い。

「はん！ ご指名だぜ鴉<sup>カラス</sup>！！ どうすんだっ！？」

「ふっ……私の相手はあのボウヤか。まあ、良いだろ」

今まで俺達と会話をしていたタラコ唇の陰獣の言葉に微笑みながら、鴉と呼ばれた陰獣がキザったらしく前髪を掻き上げて俺を見下ろす。

まるで目踏みするかのよう。または自分と対峙した不幸を哀れむかのよう。

濁った目で俺を見据える。

……まさか指名通りに戦ってくれるとは。

意外と良い奴なのかもしれない。

「ふむ。いくら盗人とは云えワシ等を相手にするのは不憚じゃ。その不幸を考えれば、相手くらい選ばせてやっても良いじゃろう。のう、海豚<sup>イルカ</sup>？」

シズクご指名の老人がタラコ唇を見た後にシズクを見る。

……主に尻を。このスケベジジイめ。

「ハイハイ、陸亀の爺さんがそう言うならそうしてやるよ。……まあ、そんなじゃお前ら、さっさと死ねや」

海豚の声がトリガーとなり、戦場の火蓋は切って落とされた

まず俺達がやらなければならぬのは陰獣の殲滅。

しかしその前に行くのはノブナガの救出だろう。

まあ、さっきも言ったけどそれはシャルに任す。

そうすれば化け物五体が野放し状態になるので勝利は磐石だ。

今でも皆がいるので負ける気はしないけど。

「……お被いでもしてもらった方が良いのかなー」

不幸人生にピリオドを打ちたい今日この頃。

まるで図ったかのようにトラブルが俺に舞い込んでくる。

もしかしたらそういう念を知らぬ内にかけられているんじゃないかと、今は『あじと?』で本でも読んでいるだろう能力コレクターに疑惑の視線を送った。

あのトンデモ人間ならこんな距離でも感じ取るんじゃないだろうか。

……流石にそこまで人間を辞めていないか。しかし、全くもって

否定出来ん。

なにせ『物事対処の修行になる』と故意に念を施していてもこれっぽちも不思議は無い真正銘の変人なのだから。

「さて、私の名は鴉。この美しい私の名を是非覚えておいてくれたまえ。これ以上の冥土の土産は存在しないだろう？ なにせ、最後にこの私と言葉を交わし、あまつさえ私自身の手で天国へ逝けるのだから」

「……俺の相手ってこんなんばかりかよっ!？」

悲しい事に様々な変人共が知り合いにいるけど、まさかここで新たな人種『ナルシスト』と遭遇する羽目になるうとは。

……いや、ナルシストを変人呼ばわりするのは言い過ぎかもしれない。

中にはただのナルシストもいるだろう。しかし、こんな奴を世間一般的なナルシストと同視するのは全国のナルシストさんに失礼だ。

自分で具現化した二対の烏羽に見惚れ、更に両手に具現化した鉤爪について誇らしげに語り、どんな女性や可愛いモノを美しく始末してきたかを自分に酔いながら喋るコイツは、充分変人にカテゴライズされる。

周囲で激戦が始まったが、俺達はまだ動かない。

「私は今まで気に入った敵は全て殺して収集している。今から君も私のコレクションに加えてあげよう。その可愛い眼なんか中々

」

「もう黙れよお前っ!？」

ヒソカサイドに分類される生理的に受け入れられない変人をこの

世から抹殺する。

そう決意を固めた俺の横に具現化されるのはバタクーラー。  
その中にある極上の念を付属のバタクーラーナイフで取り、その全てを  
全身に塗る。

塗ると言っても動作は簡単。

クーラーの中のオーラを全て一箇所に　　ナイフの腹に凝縮し、  
それを自分の身体に一閃するだけ。

それだけで全てのオーラは俺と同化し、直ぐに沢山の力が溢れて  
くる。

万全状態の俺を100とするなら、ドーピング前の俺は40程度。  
しかし今はシズクのオーラのお陰で120くらいまで底上げされ  
ている。

効果持続は五分間。それまでにコイツを倒す。

「ああ、頭部をそのまま剥製にするのも」

「まだ言うか！？　　つか猟奇的過ぎるわボケ！！」

生き物を切り裂く小太刀サイズのステーキナイフを首筋に叩き込  
む。

が、それは鎌爪を伴った右手で掴まれた。

反応速度はやはり高い。

マフィアの中でも指折りの能力者という称号は伊達ではないとい  
う事か。

「中々乱暴だ。……ああ、生きたまま持ち帰り、飽きるまで飼育す  
るのも良いかもしれない」

変態の背中にある漆黒の翼がざわついている

「だから、少々躑が必要か」

瞬間、剃刀のように鋭さを増した左翼が横薙ぎに振るわれた

「甘いつての」

しかし俺は動揺もせず、躑どころか胴体を切断しかねない翼を身体横に具現化させた小型のバタークーラーで受け止める。

消失したナイフを掴んでいた相手の右手は宙を泳ぎ、翼はクーラーを傷一つ付けられない。

元々戦闘面では盾としても活用しようと考えていたので、このクーラーはそれなりに堅くなるよう力を込めて具現化してある。

防がれるとは思っていなかったのか、動揺を隠せていない変態の鳩尾に回し蹴りが炸裂した。

「ガハっ!？」

凝でカバーしたみたのだが、ダメージを全て軽減出来ていない。

残念ながら地面に倒すという結果にはならなかったけど、口から垂れる血が相手のダメージ量を物語っていた。

「……良いぞ、やはりボウヤは生きたまま持ち帰りだ。ふっふっふ、調教するのが今から楽しみだよ」

「ふん、押されてる癖によく言うよ。油断していると直ぐに殺られる

よ?」

堅すらしていないのがその証拠。お前はヒソカではないんだ。油断していると足元を掬われるぞ。

そう忠告する義理も無いし、早々に決着を付けるために変態目掛けて駆け出した。

それが、悪手になるとも知らずに。

「ふっ、油断は君の方だよ、ボウヤ!」

両手両翼を広げて勝ち誇った笑みを見せる鴉。

あの変態ナルシーから多大なオーラが噴出し、警戒した俺は直ぐにストップして後方に跳び、距離を取った。

その時、上空から影が射す。

攻撃は前方からではなく上空。  
その大袈裟な仕草はフェイク。

「ヤバっ!?!」

跳躍中に逃げる術は限られている。

上空から飛来してきた翼のある陰獣の口が開き、鋭い牙が視界に入る。

その吸血鬼の如き二対の牙が月明かりで輝き、俺の首筋目掛けて襲い掛かった。

「フェ……っ」

食器を具現化し、地面に打ち付けて方向転換しつつ、二人を相手にすると言っておきながら一人を取り零している拷問チビを罵倒しかけ、直ぐに予定変更。

蛭という陰獣はヒルを操り、山嵐という陰獣は体毛を針状に変化させた。

鴉だつて翼と鉤爪を具現化している。

名がそのまま能力を現しているのなら、この可能性は高い。

「シャル！」

今まさに鼻にアンテナを刺そうとしていたシャルが俺を見た数瞬後、首筋に牙が突き刺さった。

「くっくっく……………あはははははっ！ 聞けえ、盗賊共！！！」

勝利を確信した鴉が戦闘を繰り広げている者全員に告げる。

それでも手を休めて隙を作る馬鹿は一人もいないが、お構いなしの鴉は途切れない。

「貴様達の仲間であるボウヤは、蝙蝠の能力で我々の制御下にある！」

オークションで目玉商品を紹介するように、身体をずらして後方

にいる蝙蝠を皆に見えるように前に立たせる。

その蝙蝠がハムスターを掴むように襟元を持って掲げているのは俺 ケイタールシルフル。

マチ、シズクが僅かに反応するも、それで隙を作るほど彼女達は愚かではない。

舌打ちだけして、目の前の敵にそれぞれ攻撃をしかけていた。

……これっぽっちも興味を示さない鬼畜馬鹿はスルーの方向で。まったく、誰の所為でこうなったと思っている。

そして、最後の一人であるシャルは、

「くっ……ハハ……アハハハハっ！」

盛大に馬鹿笑い。

場違いにも程がある。

「……な、何が可笑しい!？」

「ごめんごめん、続けて続けて」

殴って気絶させた鼻を足元に。腹を抱えて笑った後、目尻に溜まった涙を拭って先を促すシャル。

見当外れな反応に青筋を立てる鴉だったが、その怒りの表情は直ぐに見下しの顔に変わった。

「まあいい。貴様は今すぐ鼻をこっちに渡せ。そうしなければ、貴様らの大事なボウヤがどうなっても知らないぞ?」

鴉の羽が伸び、首筋に先端を当てられる。



僅かに切られ、小さな血玉が浮かんだのを満足そうに見届け、再度鴉はシャルに視線を戻した。

その、未だに笑顔を曇らせないシャルに

「……どうやら、見かけによらずかなりの馬鹿のようだね。私のように聡明になれないとは、全く持って嘆かわしい」

「ハハ、そうだな。本当に嘆かわしいよ……ねえ、ケイタ？」

操られている奴に話しかけても意味が無い。

そう、本当に操られているのなら

「なっ!？」

「ッ!？」

俺は実は操られていない。

踵で蝙蝠の腹を蹴り、その反動で人質領域から脱出を図る。

全くの予想外だった鴉が翼の追撃をかける余裕も無ければ、無言の驚愕を示す蝙蝠が再び俺を掴む余裕も無い。

反動を利用し、空中で独楽のように身体を回転。

その最中に両手で握るのは、3mのナイフ。

「バイバイ」

回転しながら、周囲を薙ぎ払うように巨大ナイフを一閃。

着地に成功した途端、二ヶ所で赤い鮮血が舞った。

……いや、一つは血だけでなく切断された首まで宙を飛んでいる。血系を引きながら遠ざかる蝙蝠の首の行方を見届け、噛まれた首筋を手で押さえながら、大の字に倒れている鴉に歩み寄った。

「……な、ぜ……こ……もり、の……りよく、が……」

喉を断ち切られた所為か、途切れ途切れの言葉に混じってヒューヒューという空気の漏れる音が聴こえてくる。

この出血量では、あと一分も持たない。

冥土の土産だ。

能力が効かない種明かしをしてやろう。

「これ、なーんだ？」

左手に持つのはシャルのアンテナ。

そう、リンチに巻き込まれた際に刺されたコレを未だに持っていたのが幸いした。

あの時、空中での回避を止めた俺のたった行動は、太ももにアンテナを突き刺す所をシャルに見せる事だったのだ。

そして計画通り、意図を察してくれたシャルは鼻にアンテナを刺す予定を変更し、俺にブラックボイスを発動した。

「操作系は早い者勝ち。残念だったね」

殆どの操作系能力は既に念で操作しているモノを操作する事が出来ない。

厳密に言えば操作する事は出来ても、出来ない場合の方が多いと言った方が正しいか。

その理由は制約と燃費の問題にある。

操作能力は精度向上と、対象が念に掛かっているかの有無を確かめるために『既に操作系能力に掛かっているモノは操作出来ない』と制約を課しているのが大半であり、相手の念では対抗出来ない程の念を込めて支配権を奪うのが、かなり面で多大なオーラを消費するからに他ならない。

俺に操作系と気付かれた時点で相手の負けだ。

「恨むんなら吸血鬼の知名度を恨んで」

「……く、そ……」

最後に恨みの視線を向け、呆気無いけど鴉も死亡。

梟はシャルが捕らえたし、これで残りは三人。

「サンキュー、シャル」

「どういたしまして。でもケイタ、どうやってアイツが操作系って知ったんだ？」

残りの戦いを見ながら近寄って来たシャルに、俺は『ああ、それね』と言いたげな表情で答える。

「俺が相手をしていた奴、俺を生け捕りにしたがってたんだよ、だからアイツの牙で殺される事は無いだろうし、こもりなら吸血鬼のように相手の血を吸って操る能力があってもおかしくないなって」

……それにしても、たった一瞬で俺の考えを読み取ったシャルは掛け値なしに化け物の一人と言えるだろう。

潜った修羅場の違いなんだろうけど、やっぱり人間止めている。

梟のポケットから丸まった風呂敷を幾つか取り出し、その内の一つから聞こえてくるノブナガの怒声に安堵しながら、その包みをシヤルに渡した。

……何でこの優男は呆れ顔をしているのだろうか。

「だってそれ、全然根拠になってないだろ？ 限界まで血を吸われて身動きを封じられたり、ただ単に神経毒を注入される可能性もあった訳だ。俺が気付かなかつたり、こうもりの気分次第で殺すって選択肢もあつた訳だし」

「……………確かに」

いや、もしそうだとしても皆が助けしてくれると信じているから、思い切つた作戦に出れたんだと言いついて試してみる。

それに対するシヤルの対応は俗に言う『やれやれ』のポーズ。

「あゝあ、こりゃ団長に報告かな」

「ちょ、それだけは堪忍を！？ つーかシヤル、絶対まだフランクリン達にリンチされかけたの恨んでるでしょ！？」

只でさえドーピングも切れ、オーラも三割くらいしか残っておらず疲労困憊気味だというのに、そんなに俺を抹殺したいのかおのれは。

状況判断が甘いつて地獄の鬼課題を課せられるのは確定だぞ。

「お願いシヤル！ クロロには黙つといてくんなまし！！」

「ケイタの貯金、今幾らくらいだっけ？」

「堂々と足元見るなよ馬鹿っ！？」

そして数分間行つた討論の結果、貸し一つという好条件を引き出せた時だつた。

岩場の一部が崩れ、轟音が響き渡ったのは。

「……ねえ、フェイタンってもしかして調子悪い？」

「うーん……確かに、いつもより動きが悪いな」

予想に反してフェイタンのキレがいつもより良くない。

決して相手が強いという考えに至らないのは、俺にとって当たり前だった。

そして今のフェイタンの姿を見て、俺に天啓という名の電流が走る。

「ちょっとフェイタンに加勢してくる！」

数百m離れた戦場を見たまま、隣のシャルに一言告げる。

充分フェイタン一人でも倒せるだろうけど、それでは俺の目的を果たせない。

止めとけば？という傍観者の忠告に感謝して、俺は目標目掛けて駆け出した。

（チャンス！ 日頃の恨みを晴らしてくれる！）

復讐の機会を与えてくれた神に感謝。

心の中で両手を合わせながら右手を迷彩服のポケットに突っ込む。本来なら弾薬やら信管を入れておくミリタリージャケットの胸ポケットから取り出したのは、非常用兼オヤツとして持っていたビスケット。

ここまで来ればお分かりだろう。

それを袋から出して粉々に砕く事で準備万端。

戦闘の余波が何かでフェイタンのマスクが下にずり下がっていたのも、天の采配としか思えない。

(もらった！)

まるで最後の勝負でもするのか、互いに走り寄っているフェイタンとタラコ唇に近付き、二人からしても流石に無視出来ないレベルの練を行う。

二人の意識と顔をこちらに向けるために。

「食らえ！ 俺の最凶技っ！」

二人の間は5mほど離れている。

そして二人とも俺を見た。

だから俺は右手を一閃。

砕いたビスケットを放射状に顔面目掛けてばら撒く。

これでは口に欠片が入り、マヤさんのようにペテンティストの餌食になるのを待つだけ。

フェイタンを巻き込む形になった言い訳としては、敵の逃げ場を無くすため周囲にばら撒いたといえはOK。

後のフェイタンが怖いけど、ある程度のリスクは覚悟の上。報復を一々恐れてなんていられない。

(さあ、二人揃って気絶し……ろっ!?)

当たると思った。

こんな細かい欠片を全て避けるなんて不可能だと思った。現にフェイタンの口には欠片が幾つか侵入した。

それなのに、

「念獣!？」

突如現れた通常サイズのイルカの念獣が、ビスケットの雨から主人を守りやがった。

自らが盾になる事によって。

「甘エんだよクソガキがつ！」

イルカは弾丸の如きスピードで俺に迫り、腹に向かって最大な頭突きを。

タラコ唇はペテンテイストを味わって硬直状態のフェイタンを殴り飛ばす。

……非常にマズイ。

「ぐわっ!？」

まるで鉄球のような肩さと重みがあるイルカの頭突きを食らって吹っ飛び、腹に鈍いダメージがじわじわと広がっていく。

ヤバかった。

フェイタンとの死闘で疲労し、咄嗟に凝で防御していなければ内臓破裂は必死な一撃。

背中から地面に激突し、追撃に來た念獣を硬で蹴り飛ばしてから、直ぐに立ち上がった。

(マズイって……フェイタンが脱落したから、アイツの相手は俺が

……って、アレ?)

正直、目の前の光景が信じられなかった。

俺が見ているのは余裕綽々で高笑いしているタラコ唇でもなければ、マチ達の戦いでもない。

俺の料理の味が再現されたビスケットを食し、それでもなお立ち上がったフェイタンから目が離せなかった。

その、信じられないくらい高まっている憤怒のオーラからも。

『クソがつ……ケイタ、何のつもりだ?』

……今、フェイタンが何を言っているのかサッパリ分からない。未知の言語を拷問狂は喋っている。

ということはつまり……フェイタンのマジ切れを意味していた。

破壊される部屋。

半壊する『あじと』。

数年前のトラウマが蘇る。

『良い度胸だ……ちよっとそこを動くな』

殴られた時に口内を切ったらしく、血を吐き捨てながらフェイタンが俺に歩み寄ってくる。

逃げなければ殺られる。

分かっているても、蛇に睨まれたカエル状態の俺に抗う術は無かった。

(まさか……もう何度も食べてるからマズさに耐性が出来てたっ!?)



一瞬で気絶させられると思ったから……能力を使う暇が無いと思  
ったから決行したのに、なんという人間の適応力。

怒髪が天を衝く所か宇宙空間まで進出しそうなほど怒りのボルテ  
ージが膨れ上がる。

そして、フェイタンの服装が変わった瞬間、迫る危機からか金縛  
りの解けた俺は漸く行動を開始した。

「全員退避　！　フェイタンがマジ切れしたー！！」

身内にはこの説明だけで充分。

シャルは鼻を担いで遠くの岩場目掛けてダツシユ。

マチは敵をフェイタンの方へ蹴り飛ばし、シズクはデメちゃんの  
フルスイングで老人陰獣を同じ方向に殴り飛ばす。

対して俺とタラコ唇は、

「ハッ！　来るなら来いや！　俺の【無敵装甲海豚】ハイフェクト・ドルフィンの防御力を突  
破出来る奴はいねえ！」

……愚かにも、フェイタンの能力を受ける気満々。

『……雑魚がつ、邪魔するならテメエからだ』

全身強固な鎧　まるでドラム缶を纏ったような金属鎧を着込ん  
だフェイタンから、光の球が排出される。

素肌が一切見えない全身装甲とフルフェイス兜のため表情は見え  
ないけど、きつと邪悪な笑みを浮かべているに違いない。

タラコ唇はイルカの影に隠れ、フェイタンのほうに追いやられた

陰獣二人が、能力発動前を叩こうとフェイタンに殺到する。

その点俺は、間に合うか分からないけど大岩に向って全力疾走。

『……………【許されざる者】……………』  
ペインバッカー

怒りと痛みに応じて威力と姿を変えるペインバッカー。

その特性上、一切の手加減が施されない無情な一撃が解き放たれる。

「マチ！ ヘルプミー！！！」

岩の影から飛んできた針が服に刺さり、あっという間に念糸が身体中に巻き付いてマチに一本釣りされながら、俺は確かに見た。

フェイタンの頭上に浮いていた光球が収縮し、一気に膨れ上がるのを。

「キャッチ」

「ありがとうシズク！」

マチと共に大岩に隠れていたシズクにキャッチされると、フェイタンの能力が発動するのは同時だった。

『死ぬ　【爆風に爆ぜられ《オーバーフロー》】！』

瞬間、周囲を巻き込む大爆発が巻き起こった

「……なんとか生きてる」

脳は正常。両手両足も動く。完全無欠な五体満足。爆心地そのものと化したいわばでフェイタンの起こした爆発によって散々な目に遭いながら、岩片や砂の中から身体を起こした。

結局、ペインパッカーの中でも最大の射程範囲を持つオーバーフローの余波は俺達が隠れていた大岩をも粉碎し、見事に砂と埃塗れにしてくれた。

それだけで済んだのは運が良かったんだろうけど……何をどう防いだのか、少ししか汚れていないマチとシズクを見れば、なんか理不尽さを感じてしまう。

「どうしたの？」

「何でもないッス」

首を傾げるシズクは放っておき、ここから更に遠くまで避難していたシャルが鼻を引きずりながらこちらと合流し、俺達は爆心地の中心へと向った。

……超行きたくない。

「諦めな」

「……マチ、怒ってる？」

未だに巻き付きっぱなしの糸が食い込んで痛いんですが。

つか、耐性が付いたとしても相変わらず腹は痛くなるんですね。

俺の実力も上がっているのか、『あじと』を半壊させた時以上の威力がオーバーフローに込められていた。

「うわあ……まあ、生きてる訳ないよね……」

煙が晴れ、見えてくるのは幾百にも分けられた三人分の人肉。  
何がパーフェクト・ドルフィン（笑）だ。

「フエイタン、ちょっとは落ち着いたか？」

俯いたまま佇んでいる破壊神の肩を叩くシャルナークさん……ア  
ンタ怖いもの知らずだよ。

元の服装に戻っているから声を掛けたんだろうけど、再発の恐れ  
だつてあるのに。

「……後で覚悟するといいね」

大人でも粗相をしてしまいそうな殺気に塗れた視線を向けるフエ  
イタンさん、マジハンパないツス。

とりあえず、今は彼のオーラが尽きているのを喜ぶべきか。

さもなければ冗談抜きで八つ裂きの危機。

口調も元に戻っているし、怒りは大分収まったようだ。

能力発動の副作用として怒り具合が少し沈静化しているのが唯一  
の救い。

「いや、アイツの逃げ場を無くすために満遍無く撒こうかと」

「覚悟するね」

「あの、だからさ」

「簡単に終わらせないよ。まずは皮剥ぐ」

「あのさ、フエイタ」

「今死んでみるか？」

「マジでごめんなさい」

フエイタンの右手がピクッと動いた瞬間にすかさず土下座。  
やはりその場のテンションに身を任せてはいけない。  
日頃の鬱憤を晴らした喜びよりも後悔の方が大きいから。

「 やっぱり、そっちの方が良いか。分かった」  
「 団長、何だつて? 」

梟と……ついでに俺も拘束しているマチが、クロロに指示を仰いでいたシャルに訊ねる。

反応を見る限り、クロロとシャルの意見は一致したっぽい。

「 一旦アジトに戻れだつてさ。コイツがウボォーを攫った奴らを知ってるかもしれないし」

……拷問・尋問タイムか。  
とりあえず、これから地獄を見るだろう陰獣に合掌しておこう。

「 ……精々、死なないうう気を付けるね」  
「 俺もなのっ!?! 」

ナンテコッタイ

## 第二十話 新たな×変態×殲滅戦（後書き）

かなり遅くなりました。申し訳ありません。  
ちゃんと生きてます。

次からはもつと早く更新できると思います。一ヶ月放置は無いかと。

週刊誌のHUNTER×HUNTERが面白すぎる。

イックションペとか何であんなに人気なんだ？

学級委員を押し付けられる苛められっ子のポジションなのだろうか？

## 第二十一話 会議×救出×鎖野郎

アジトに戻ってから数十分が経った。

時刻が二十三時であり、現在の俺は夜食を炊事場で調理中。

ここは十畳ほどの個室。

たった一日で荒れ果てていた一室を掃除し、テーブルを幾つか持ち込んだお手製のキッチン。

ボロいが、調理に影響は無い。

……皆の空腹感に託けて拷問訓練を回避した俺、グッジョブです。

「おう、メシはまだか？」

「あ、やっと解放されたんだ？」

ガス・電気・水道といったライフラインが壊滅しているここで携帯式のプロパンガスコンロや買い置きしていたミネラル水で料理を作っていると、現れたのは少々お怒り気味のちょんまげ侍。

うーむ、敵に捕縛されたのと誘拐犯に逃げられた事に対してかなり腹を立てているらしい。

こめかみがピクピク動いている。

「ちょうど良かった。テーブルに乗ってる皿を持ってって。オニギリは一人二つまでだから」

初めて飯盒なるモノを使用したため、ちゃんと炊けているか少し心配。

この前に作ったチャーハンは市販されていたライスを使用したものだったし。

でもまあ、もしダメでも焼きソバや唐揚げ、卵焼きといったものさえあれば、腹ペコ家族は皆満足するだろう。

数種類ある大皿を危なげ無く運んでくれたので、戻る途中で摘んでいった唐揚げに関しては不問に処す。

普段はそっちがルールでも、台所は俺の世界だ。全ての決定権は俺にある。

「よし、完成」

揚げていた唐揚げの油を落とし、皿に盛り付ける。

全体的にカロリーが高めな夜食だけど、このあと沢山動く事を考えればこれでも低いくらいだ。

「……ちよつと作りすぎたかも」

大量の料理を作り慣れていないという理由もある。

しかし、普通ならこのくらい誤差の範囲。

普段ならどうにでもなってしまう量であるが、大食いであるアイツがいなかったため、おそらく料理は残ってしまう。

たった一人いなくなるだけでこつも勝手が変わるとは。

「絶対……絶対に助けてみせるから」

今はいない愛すべき脳筋の笑顔を思い浮かべ、意気込みつつ両拳を握り締める。

情報を集めるためにも必ずウボーは尋問される。

まだ殺される可能性は低い。

それまでにウボーがいる場所を特定出来ればこつちの勝利。



今は陰獣との戦闘で疲弊した身体を癒す事が先決。

逸る自分をそう言いくるめ、皆がいる大広間へと足を運んだ。

「ボノレノフ、クロロ達はまだ拷問部屋？」

最後の卵焼きを巡って牽制し合っているヤンキーとフランケンに侍。

焼きソバを頬張っているマチとシズクにコルトピを見つつシートに唐揚げを置きながら、茶をすすっているボノレノフに訊いてみる。

この問いに、包帯男は頷く事で肯定を示した。

ちなみに変態ピエロは人に会う用があるとかでこの場にはいない。

このまま魔界にでも旅立ってくれば良いのに。

……アイツなら魔界でも上手く立ち回れそうだけど。

「しかし、もう悲鳴は聞こえなくなっている。もしかしたら拷問も終わっているかもしれない」

情報収集のためにフェイタンとパクノダ、その情報から作戦を立てるためにクロロとシャルのブレイコンビが拷問部屋に籠っている。

もう直ぐ一時間が経つし、終わっていても良い頃合だとボノレノフは語った。

「そっか、じゃあ夕食はあっちに送ってあげ」

言って気付く、自己中やら大食漢やら自棄食いをしている男三人の所為で、もう殆ど夜食が消失している事に。

すると、ぬつと皿を差し出された。

「ケイタはコレを四人に渡してこい。きつと団長達も腹を空かせている」

「さっすがボノレノフ！」

ちゃんと四人分を確保しておくなんて流石は旅団一の良識人。気配りが出来る大人は本当に素晴らしい。

俺もこんな大人になりたいものだ。

……本当、俺の周囲は反面教師しか存在しやがらない。

「ほら、ケイタ」

「サンクス」

確保してくれていたらしい俺の分のオニギリをマチから受け取り、食べながら大皿を持って拷問部屋に行く。

一度通路に出てしばらく歩き、奥から二番目の扉が無い部屋に入り込んだ。

「飯だよー」

「ありがとう」

ちょうど入り口近くに立っていたパクに皿を手渡し、改めて中をマジマジと見る。

仄かに感じる血臭は無視し、まず目を引くのは、穴の無い覆面を被らされて椅子に縛られている哀れな男。ピクピク動いているので生きてはいる。

しかし、抜け目の無いクロロのことだ。ノブナガを解放した時に

しっかりとあの便利能力を強奪しているだろう。  
だから瀕死の状態で生かされている。

……南無。

同情はするけど敵であるため情けをかける筋合いは無い。

「何か分かった？」

「ああ。コミュニティーの連絡系統は把握した」

「皆がいる所で説明するよ」

パクから手渡されたオニギリを受け取りつつ、クロロとシャルは大広間へGO。

そのあとに夜食を幾つかフェイタン用に残しつつ、パクも二人に続いていく。

……うむ、持ってこなくても良かったらしい。

「フェイタンは戻らないの？」

「ワタシ、まだやる事あるよ」

久しぶりの拷問なのか、珍しい事に機嫌の良いフェイタンさん。けど陰獣は気を失って……水をぶっかけて意識を覚醒させやがった。

鬼だなコイツ。

「丁度良いね。お前も」

「夜食はそこに置いとくからっ！」

断言出来る。

今絶対、拷問野郎の魔の手から逃げる俺の速度は神速の域に達しただろう、と……。

「説明は以上だ。質問はあるか？」

夜食を食いながら行ったウボー奪還作戦も、たった数分で終了してしまった。

クロロが言うにコミュニティの下部組織は上役であるコミュニティ上層部に連絡を入れる場合、必ず通さなくてはならない通信人達が存在するらしい。

十老頭直属以外が必ず通さなくてはならず、多くの情報を集め、マフィア間での情報伝達を円滑に行う、連絡網を牛耳る部署。

そこを襲撃して情報を集める。

このシンプル・イズ・ベストな作戦が、クロロとシャルが立てた計画だ。

「ねえ、何でそんな部署を作る必要があったの？」

「コミュニティに属する組織は多いっつたる……っつて事は、それだけ多くの思惑があるっつて事だ。組織も一枚岩じゃねエからな」

見た目に反して意外と頭の回るノブナガが訊き手である俺の頭をポンポン叩き、パクがもつと頭を動かせろと言いたげな視線を送ってきた。

……そんなに集中砲火をしなくても良いじゃないか。  
シズクとか絶対に理解してないぞ。

しかし、ノブナガのお陰で疑問も解消出来た。

「ケイタ、情報部を作った理由を説明してみろ」

「えっと……ようは『私情挟んで足を引っ張り合うんじゃない』ってこと?」

……トンチンカンな答えだったら鉛弾ぶち込むぞと言いたげに構えられていた具現化拳銃をクロロが消したので、どうやら正解らしい。

つまり、情報部を作ったのはマフィア間でのトラブルを未然に防ぐ事で全体へ及ぼす悪影響を無くそうと考えたからだ。

コミュニティーに属する組織は沢山ある。

そして、その全員が仲良しという事はありえない。

自分ももっと上にのし上げるために邪魔な野郎を蹴落とす事なんて日常茶飯事。

マフィア達の抗争は続いている。

一応、そういつたいざござはオークション開催中は全て忘れる取り決めになっているけど、自分の気持ちを簡単に抑制出来るほど人間の心は甘く作られていない。

表立って他者の手柄を妨害出来ないなら、どうやって相手を蹴落とすか。

そこで出てくるのが情報だ。

大事な情報は仲間内だけで占有し、誤報をワザと嫌いな組織に伝え、自分の組織がコミュニティーの信用を勝ち取る。

しかし、そういつた事をやられると全体で力を合わせて何かしようという時に支障が出る。

だからコミュニティーは情報部という中立組織を一同が会するこ

の時期に設立したのだ。

「場所はここ。アジトからなら車で二十分の所に、奴らの情報部がある」

シャルが地図を広げて指差した場所を全員で覚える。

……うん、意外と近い。なら、善は急げ。

「団長、俺は行くぜ。構わねエよな？」

「勿論だ」

敵の居場所が知れたため、刀を脇に差しながらノブナガが立ち上がる。

ウボーと一番仲が良いのはノブナガだから、早く行きたい気持ちは痛いほど伝わった。

頑張れノブナガ。

俺はいざという時のために念の回復に心血を注ぐ所存であります。

「ノブナガの他にいくのはシャルナーク・シズク・マチ・パクノダ・フィンクス、それにケイタだ」

「意義がありまくりですよ馬鹿野郎っ!？」

フィンクスが選ばれたのは分かる。

フェイタンが趣味に没頭しているため、ノブナガ以外の純粋な戦闘要員を救助隊に入れておきたいのだ。

フランクリンは行動するとかかなり目立つからお留守番。変装なんて巨漢の前には無に等しい。

コルトピとボノレノフも目立つから隠密機動は論外。

……何で俺がラインナップされた？

俺の今の疲労困憊気味は知っているだろ。

「荷物持ちでお前以上の適任者がいるか？」

木箱に座るクロロが自身の背後を親指で指すと、そこにはフランクリンの盗ってきたビールの山、山、山。

「……納得です……」

確かに、救出したウボーにビールを届けなくちゃいけないから、ここは仕方が無いけど納得してやる。

くそっ、ちゃんとした理由だったか。

……それにしても、

(……ヤバい。新食器の所為で今後もパシリにされそう……)

なんてモノを創ってしまったんだ俺は

「時間は有限だ。さっさと行け」

「……ガッテン」

よく考えれば、この暴君の命令に逆らえた例なんて無かったし、決定を拒否する権限も無かった。

ビールを包んでいたらしい風呂敷でビールの山を覆い、バタークーラーに収納してから、俺はもう外に出て行った一団を追いかけた。

……目から溢れる水は鼻水だ、絶対に。

情報部のあるビルに到達。強行突破。そして殲滅。

一応戦闘員も居たけど、所詮陰獣以下の実力でしかない烏合の集である情報部を制圧するのに三分と掛からなかった。

戦闘員は始末し、通信人もパクノダが記憶を読み取ってから一人を除いて皆殺し。

ウボーを捕らえたという情報がまだ来ていない事を確認し、ホツと一息吐いた時、時刻はもう零時近かった。

……少し眠い。

「それじゃあ、私は戻るわ。ウボーの事はお願い」  
「了解。任せといて」

クロコの率いる幻影旅団には一つの方針というか決め事がある。

それは『生かすのは個人ではなく蜘蛛』というもの。

ウボーが捕まったとしても、例えばそれが団長であるクロコの命が危険に晒されたにしても、例外は無い。

触れた対象の記憶を読み取るという稀少な能力を持つパクノダは、旅団からしてみれば絶対に失ってはいけない人材。

蜘蛛という組織の運営と存続を第一に考えれば、そんな重要人物は前線に出るべきではない。

だからパクノダの役目はここで終わり。

ウボーの情報を引き出したらアジトに直ぐ帰宅。



そうだった決め事が予めクロロと交わされていたらしかった。

ビルの下までパクノダを見送ってから、俺は再び元情報部へと引き返した。

「分かった。ノストラード組の功績は十老頭にも伝えておこう」

使い方のよく分からない様々な通信機やパソコンの類が密集している部屋に入った途端、そのような会話が聞こえてきた。

電話で受け答えしていたのはノブナガ。

そして俺が状況を理解するのと、念のために残しておいた通信人が用済みになってフィングスに処分されるのは同時だった。

「ウポールの居場所が分かったの？」

「みたいだね」

言うや否や、マチは俺の横を抜けて外へと出て行く。

ちなみに俺以外皆はスーツ姿だ。

コミュニケーションに成り済ましたお陰で油断も誘えだし、なんとも単純な奴らだと呆れてしまったのは言うまでも無い。

「ケイタ、行くよ？」

「アイサー」

部屋の掃除をし終えたシズクと一緒に部屋を出る。

この面子では頭脳派の部類に入るノブナガは参謀様と作戦会議。

フィングスは血で汚れた手をタオルで拭き、マチはビル前に停めてあった車（もちろん盗難、ちなみに黒の乗用車です）の後部座席に乗り込んだ。

そしてシャルは運転席に、フィングスは助手席、ノブナガはマチ

の隣へ。

ということとは、

「……俺はまたトランク、か……」

本当、世知辛い世の中だ。  
思わず涙が流れてしまう。

「……死体の臭いはしないよ？」

「気休めにならんわっ!？」

この天然娘め、そう言うなら代わってくれ。  
そう想いを載せてシズクを見上げるが……。

「露骨に目を逸らすなよ!？」

深夜になってもヨークシンは眠らない。

確かに人通りは少なくなったけど、大通りは未だに人の流れが絶えなかった。

「まだかな、皆」

ガードレールに座り、とても高いビルを見上げながら皆を待つ。  
俺が見ているビルはウボウを攫ったマフィア、ノストロード組が  
所有しているビルの一つ。

ここに、ウボーが捕まっている。

シャル達はウボーを引き取りに来たコミュニティの人間に成りすまして潜入している最中。

俺は子供だから変装もクソも無いので、こうして皆が出てくるのを待っているという訳だ。

「お、来た来た」

しばらく待つこと更に数分。

正面玄関から出てきたのは元気に動いている脳筋馬鹿。

身体に根付いていた毒はシズクが除去済みらしく、陰獣にやられた肩の傷以外の外傷も見当たらない。

無事な姿を確認出来て、安心からか目を細めている自分がいた。

「おーい！ ウボ」

「止めても無駄だぜ！ あの鎖野郎に借りを返すまでは腹の虫が治まらねエ！」

ウボーは自分の直ぐ後にビルから出てきたシャル達と何やら揉めている。

言葉から察するに、自分を攫った誘拐犯を始末するまで好き勝手させてもらつたというところだろうか。

皆に近寄ると、今まさにシャルがウボーを窘めているところだった。

「ウボー、そもそもこの広いヨークシンの中で、どうやって鎖野郎を見つげるつもり？」

この言葉でウボーは露骨に身体を硬直させる。

報復の事しか頭に無く、手段諸々を考えていなかった事がモロ分  
かり。

「そりゃー……お前エ……色々調べてだな……」  
「一人で？」

……無理だウボー。

おのれじゃシャルに口では勝てない。

「無理だね」

「無理だよ」

更にマチとシズクが追い討ちをかける。

普段大きな背中が哀愁を漂わせて小さく見えたのは見間違いなん  
かではない。

「ねえ、中にその鎖野郎はいなかったの？」

「ウボーがでけエ声を上げちまったからな。俺達を案内した奴以外  
中は蛻の空だ」

別に鎖野郎なんてどうでも良いと表情で語っているフィックスは、  
そのまま面倒臭そうにウボーとシャル、そして団体行動の規律を乱  
すウボーに反論しているノブナガを見ていた。

つまり、ノストラード組の構成員にはまんまと逃げられたという  
事だ。

もし裏口を張っていたらドンピシャで遭遇していたかも。

「……ハア……こんな時にはコレしか無エな」

結局、頑固者なウボーを納得させるにはコレしか無いと考えたのか、ノブナガが懐から出したのは一枚のコイン。

『揉めたらコインで。勝った方の意見に従う』が、昔から存在した俺達のルール。

……俺はコインで決める権限すら無く一方的に命令されていたのだが……未だに解せん。

「おっしやあああ!!」

「え？ あれ、どっち勝ったの？」

今までの生活を思い出してメランコリー状態に陥っている内に、ウボーとノブナガの勝負は決していたらしい。

喜んでいるウボーを見た所、コインの表裏決めはウボーの勝ちなようだ。

「やれやれ。強化系は勘も鋭いんだよな」

呆れたように呟くノブナガだけど、『お前も強化系だろ』というツッコミをするのは野暮なのだろう。

これで堂々と鎖野郎を追えるので、ウボーと手伝いのシャルは車の方へと歩いて行く。

「団長には伝えておく。だが、明日の集合時間までには戻って来いよ。時間厳守でな」

「誰にモノを言ってるんだ？ 俺は蜘蛛一、時間に几帳面な男だぜ」

コインで勝負を決めた癖に、注意事項を言ったノブナガはどこか楽しそう。

本当はウボーの恨みを晴らさせてあげたかったのだろう。

それに、ウボーが負ける事を微塵も疑っていない。  
互いの信頼加減と男の友情を感じる光景が、少しだけ羨ましい。

「シャル、運転頼むわ」

「アイサー。……あ、ウボー！ 早くビール飲まないとヒルが睨っ  
ちやうよ!？」

「そっだよ！ ほら、ウボー！ ビールビール!！」

「ぬお!? ケイタお前エも居たのか？」

「居たよ馬鹿っ!？」

ビール持ちである俺も、やはりウボーの報復に付き合わなくては  
ならないのだろう。

しかし情報収集はシャルに任せられるし、俺はとても楽が出来る  
と思うから、別に構わないかと考えを改める。

折角また無事に会えたのだ。我が俣に付き合うのも吝かではない。  
なにより、

「やっと……やっと普通に車に乗れる!！」

……何でこんな当たり前の事に喜びを見出しているんだ俺は。  
しかし嬉しい事があれば頑張っつていけるので無問題。

そして 鎖野郎との遭遇までの、カウントダウンが始まったの  
だ。

「えつと……どんな状況？」

今いるのは見知らぬ部屋。気付けば夜が明けていて、目の前には人だったモノが二つ。

正直、車に乗って直ぐから記憶が無かった。

「おう、起きたかケイタ」

「……もしかして、寝てた？」

椅子に座ってハムに齧り付いていたウボーが頷いている。

どうやら俺は車に乗って直ぐ車内で寝てしまったらしい。

深夜だった事もあり、その時間帯に十歳が起き続けるのは少々酷だから、そのまま寝かされていたという事だ。

……そのまま寝かせておくなんて優しさが二人にあったなんて。比喩無しに目から雫が零れ落ちる所だった。

「シャルは？」

「アジトに帰ったぜ」

この分だと必要な情報は入手出来たっぽい。

だからお払い箱になったシャルは帰宅し、荷物持ちの俺だけ残されたということか。

……深夜にビールと子供を担ぐ野生男。よく補導されなかったな。いや、もしかしたら補導されかけて強行突破したのかもしれないけど。

「じゃあコイツらはノストラード組の構成員？」

「ああ。鎖野郎については何も知らなかったぜ」

ウボーを見ていたら腹が空いたので俺も朝食代わりにパンを齧る。こういう時、死体を見慣れていて良かったと思う。死体如きで俺の食欲は損なわれないから。

「調子は？」

何を、とは訊かなくてもウボーなら分かるだろう。

「ヒルの方はまだ駄目だ。しかしまあ、鎖野郎の方なら、今日中に見つかるだろうぜ」

ビールを一気飲みし、新しい缶を開けてから、ウボーはその自信満々な根拠を語り出した。

（ノストラード組の所有物件が二つ、構成員が宿泊しているホテルが三つ……違う、ここがそうだから、あと二つか）

鎖野郎がヨークシンにいる限り、必ずこのどこかに奴はいる。

この分なら今日中に見付かるだろう。

「けどさ、この情報ってハンターサイトからなんでしょ？」

本当、プライバシーも何も無いな。

そしてハンター証の万能さに少し驚く。

これならクロロも『あれば便利』と言っていた理由がよく分かった。

「くそっ……の変態さえいなかったらハンター試験に合格したかも



しないのに」

本当、何であんな化け物が野に放たれているのだろうか。  
人類史に残る汚点だ、あのピエロは。  
不合格なのが悔やまれる。

そんな試験の事を思い出して腸が煮えくり返っている俺に、ウボー  
が言った言葉とは……。

「そんなに嫌なら殺つちまえば良いだろうが。そんであれだ、お前  
エが四番になれば良い」

「……簡単に言ってくれるね」

俺がヒソカを殺す。

……どんな無理ゲーだ。

勝利するビジョンすら思い浮かばないぞ。

「じゃあなんだ、俺がヒソカを殺ってやるうっか？」

「お願……いや、いいよ、無理しなくて」

思わずウボー任せにする所だったけど踏み止まる。

ウボーには悪いけど、ヒソカは危険だ。ガチで殺し合えばウボー  
もただでは済まない。

例えヒソカが死んでも俺は蜘蛛に入らないし、無意味な戦闘を起  
こす必要も無い。

万が一、ウボーが振り返ちにあつたら目も当てられないし。

「ハア……そんなに蜘蛛に入りたくねエのか？」

「盗賊に興味無いから」

ウボーの望みを一刀両断。

それでも食いついてくるかと思ったが、ウボーはこの解答で手を引いた。

それが、少しだけ意外。

「ま、良いけどよ。いつか自分から蜘蛛に入りたいて言うかもしんねエし、気長に待つさ」

「ありえないから諦めた方が良いよ」

「はん、言ってる。いつか俺が心変わりさせてみせるぜ」

ビシッと俺を指差すウボーには、不敵な笑みで応答する。

この時の俺達は、そんな時間がもう無い事に気付いていなかった

425

そして夕暮れ、最後の宿泊ホテルを訪れた時、人生の分岐点が訪れた。

何故、こんな事になったのだろうか。

今までの人生でも理不尽な事なんて何度もあった。悲劇には慣れている。

しかし、今回はやはり今までと次元が違った。

運命の悪戯。

そんな言葉でも生温く感じる悪魔の所業。  
俺は今日、初めて心の底から神を呪った。

「何で……どうしてっ!？」

ホテルの一室で俺達を待ち構えていた一人の男。  
中世的な面持ちで金色の髪。

どうやら黒のコンタクトを入れているようで目の色が以前と違  
が、それよりも目を引く変化は彼の右手。

ジャラジャラと、右手に絡みつくのは鉄色の鎖。

「……やはり君は、蜘蛛と関わりがあったか……」

クラピカが、鎖野郎として俺達の前に佇んでいた

「ケイタ……知り合いか？」

「……友達、だよ……」

苦々しく、それだけをやっとの想いで口にしながら、混乱する頭  
を必死に働かせて今後を考える。

正直言えば、クロ口達は鎖野郎殺害については執着していない。  
お宝は手に入ったしウボーも救出した。

いくら脅威と言えどこちらから鎖野郎を相手にするほど暇ではな  
く、明日行われる地下競売に専念したいのが皆の総意。

鎖野郎……クラピカに報復を考えているのはウボーだけ。

なら、まだウボーを説得すれば間に合う筈だ。

わざわざマフィアの構成員たった一人に時間を割く程、事態は深刻化していないのだから。

やはり、友達には死んでほしくない。

（大丈夫、クラピカだってこんな化け物クラスの能力者を相手にしたくない筈。仕事だから仕方なくウボーを捕らえたんだろうし）

クラピカの生きる理由を知らない俺には、この程度の考察が関の山。

よく考えればクラピカの事を何も知らない俺の、覆す事の出来ない限界。

「あのさ、ウー」

トンツという音と首筋への衝撃は、驚く程クリアな情報として鼓膜と脳を揺るがした。

全身に力が入らず、前のめりに倒れて漸く現状を理解する。

（攻撃……ウボー、が……）

どうして。何で手刀を。

それが俺を気遣つての行動だと、まだ俺は気付かない。

『……何の真似だ？』

『コイツがいねエ方が、ためエも都合が良いだろ』

脳を揺す振られて気持ちが悪い。

声は何重にも聞こえてくる。

意識を失うまでもう幾羽かの猶予も残されていない事を、誰よりも俺が理解していた。

『どこで死ぬ？ 好きな所で殺してやるよ』

『人に迷惑が掛からない荒野が良いな。お前の断末魔は煩そうだ』

ヤメテ。

この三文字の言葉すら告げる事が出来ず、俺の意識は暗闇へと墮ちて行った。

今は何時だろう。

高級ホテルの一室で目を覚まし、うつ伏せに倒れたまま横を向いて時計を見て、気を失ってから数十分しか時間が経っていない事を知る。

「あれ……何で……」

何故、時刻を気にする必要があったのか。

それを一瞬で思い出してから、弾かれたように俺は立ち上がった。

「そうだった……痛うう……」

まだ気分が優れず立ちくらみを起こしてよろけながらも、しっかりと両の足で床を踏む。

今は、倒れている暇なんて無い。

「とりあえずウボーに連絡……って、ダメだ……」

そう、ウボーはケータイを持っていない。  
ならクラピカと思うも、俺はクラピカのケータイ番号すら把握して  
ていなかった。

気絶する直前の会話から大体の戦闘場所は分かってても、どうせな  
ら対話からウボーの説得を試みたい。

戦闘が始まっていたら、最悪の場合もう手遅れだ。

「そうだ！ ゴンやキルアにクラピカの番号を聞けば……っ！」

ズボンのポケットからケータイを取り出し、電源を入れ……かけ  
て、寸での所で思い止まった。

「……ダメだ。もし電源を入れたら、俺のいる場所がシャルにバレ  
る」

このケータイはシャルのお手製であり、コレにはGPSに似た発  
信機が組み込まれている。

電源を入れればその機能も復活してしまうだろう。  
少しだけ考えた後、あの腕相撲の条件競売から電源を落とせば  
なしのケータイを静かにポケットの中に仕舞った。

「……もしウボーがクラピカに返り討ちに遭っていたら……」

確率は低いけど、もしそうなら俺の位置を知られる訳にはいかな  
い。

ケータイを復活させてゴン達に番号を聞き、それから二人がいる  
だろう荒野に急行する。

その時、もし既にウボーがクラピカに殺されていたら？

もし、戦いを止める事が出来ず、結果的にウボーを死なせてしまったら？

万が一そうになったら、きっと皆は草の根分けてもクラピカを見つけて出して殺してしまおう。

俺とウボーが一緒に行動しているのは周知の事実。

荒野に移動したのが発信機からバレ、ウボーと一緒に戻ってこなかったら、きっと俺は不可思議な行動を取った事を不審がられ、皆から質問攻めに合うだろう。

パクノダがいるため偽証は不可能。

そして、鎖野郎の正体を見破られたクラピカは問答無用で始末される。

ウボーが殺された時点で俺もクラピカに復讐しようとする可能性もあるけど、現段階ではまだ俺はクラピカを友達だと考えているので、ウボーとクラピカ、両方の生きる道を模索したい。

「そうだった！ ゴン達に訊いた後に直ぐ電源を切ればっ！」

そうすれば俺が荒野に行くのを悟られる事も無い。

しかし、名案と思われた策の穴にも直ぐ気付いてしまおう。

そろそろ集合時間である十八時近い。

つまり、シャルが自作ケータイから俺の位置を突き止めようと受信ツールを起動させている可能性が高い。

ゴン達と話している最中に位置情報を割り出され、直ぐに発信が途絶えたら不審に思われてしまおう。

少しでもクロ口達に疑問を持たれれば、待っているのはパクの能力。

最悪の事態だ。

「くそっ……結局、俺のケータイは使えないじゃん」

仕方が無いので電話からの説得は諦めるしか無い。

それにゴン達の電話番号なんて覚えていない。

俺がソラで言えるのは家族の番号だけだ。

なら、

「……せめて、今後も上手く立ち回れるようにだけしとこう」

気分も大分良くなった。

部屋から外に飛び出し、地面に問題無く着地。

全力疾走で荒野を　昨日、陰獣やマフィアと交戦した荒野を指してヨークシンを駆ける。

ここからなら約二十分。

渋滞気味なので二人が車で移動している事を願い、俺はひたすら走り続けた。

そして、途中で目的のモノを見つけて走るのを止める。

俺は息を切らしながら電話ボックスに駆け込み、息を整えてから、クロクのケータイ番号をコールした。

『……誰だ？』

「俺だよクロク」

少しでも違和感や緊張を悟られてはいけない。



かつて無いほど心臓をバクバクさせ、冷静を保ちながら一世一代の化かし合いを開始した。

『ケータイはどうした？』

「電池切れちゃってさ。それで相談っていうか、ちょっと面倒な事になっちゃって」

クロロはまだ不審に思っていない。  
今のうちに……。

『何があつた？』

「ウボーと逸れたんだよ。どこにいるか分からなくて困ってる……あ、ビールはちゃんと持ってってるから大丈夫な筈」

逸れた理由はトイレに言っている内にウボーがどっかに行つたと説明した。

何か不測の事態でも起きたのかと声色が強張っていたクロロの深い溜め息が受話器越しに伝わってくる。

……ウボーの性格はクロロも充分知っているだろうし、ありえる話だと自分で納得したのだろう。

『なら、ウボーはほつといて良い。お前は今すぐ帰って来い』

「その事なんだけどさ、ウボーを探している最中に友達見つけたんだ。そつちと合流しちゃダメ？ 今すぐ追いかけないと友達を見失つちゃうから答えは早く！」

ちゃんと急かす演技も行う。

クロロの性格だから、多分……。

『……良いだろう。だが、明日の九時までには戻れ』

よし、読み通り。

クロロに礼を良い、俺は電話を切ってから安堵の息を吐いた。

「……障害はクリア。アリバイ作り成功」

これで俺は朝の九時まで自由だ。安心して荒野に向う事が出来る。

これで二人の対決を止められたら万々歳。

ウポーにはクロロに嘘をついた件を口止めし、俺はウポーを再発見出来たから改めて行動を共にしたとクロロに言えば良い。

最悪の事態が荒野で起こっていたとしても、クラピカを助けるために策を練る時間も作れるし、俺がウポーと一緒にいなかった説明も付く。

まさか皆も、俺が鎖野郎を庇うとは夢にも思っまい。

俺の立ち回り次第でどうにでも出来る。

「でも、パクとの接触は注意しないと」

それも、違和感を悟られないレベルで慎重に。

「よし……お願いだから、まだ戦っていないでね二人とも！」

確率の低い望みを抱き、俺は再度目的地へ駆け出した。

結論から言えば、二人を見つけるのは簡単だった。

広大な荒野から人間二人を探すのは難しいかと不安になったが、二人は殺し合いをする念能力者。

岩壁が崩れる戦闘音とウボーと思わしきオーラの猛りが、俺を戦闘場所へと導いてくれた。

運良く真新しいタイヤの跡を発見出来たのも大きい。

そして、目的地に到着した俺が目にしたのは

ポロポロの状態で鎖が全身に巻き付いているウボーと、彼の胸に鎖を突き刺しているクラピカの姿だった

第二十一話 会議×救出×鎖野郎（後書き）

……こんな文章力で何を言うかと思うかもしれませんが、最近スラ  
ンプ気味。

久しぶりに文章を書きますし、なんか思うように行きませんが、  
頑張りますが。

今回は場面移動が多かったので読み辛かったかもしれませんが、  
申し訳ありませんでした。

次話は……多分、難産になるんでしょう。プロットはありますが、  
果たして心象表現が上手く出来るか……

では、誤字誤用脱字に御意見や御感想がありましたら、是非ご連絡  
ください。

## 第二十二話 悲しみ×プライド×想いの末に

俺の上げた声は言葉にならなかった。

ただ奇声を上げただけに過ぎない、気が動転した事による叫び。頭が一瞬で真っ白になり、時間の流れがスローに感じられる。

それがかつて無いほど目の前の光景に集中し、駆け出した結果に起こった体感時間の弊害だと気付く前に、友達の頬に力強く握った拳を打ち付けていた。

「……ッ!？」

反射的に凝でガードした鎖野郎　クラピカが岩壁まで吹っ飛び、崩れた土砂に埋まる。

ウボーの胸に突き刺さっていた鎖が消え、身体の内を奪っていた原因が緩み、ウボーが膝を付いたのを見てから駆け寄った。

「ウボー！ 大丈夫」

感謝はされど、まさか殴られるとは思ってもみなかった

裏拳気味に放たれた岩のような拳が頬を打ち抜く。

ウボーが弱っていないければ、念を纏っていないければ頭が吹っ飛ばすような。

それほど、本気の一撃。

「ウ……ボ……?」

「ケイタてめエ……何で手エ貸しやがった？」

ウボーの表情は憤怒の感情に支配されている。

初めて見る本気の怒りに、頬の痛みも忘れて呆ける事しか出来なかった。

「な、何言つて……」

「コレは俺の戦いだ……邪魔すんな」

……流石に、このアリエナイ一言には納得出来なかった。

「何言つてんだよ！？俺が助けなかつたら死んでた癖に！？」

クラピカは本気だった。

一目見て分かるほどの殺気と負のオーラが鎖には込められていた。殺されないなんて楽観視、出来る訳が無い。

「だからなんだ……アイツの恨みと俺の怪力、どっちが勝つかの真剣勝負に水を差すんじゃねエよ」

「じゃあ死んでも良かったって言うの！？」

「ああ。手エ貸されて生きるくれエなら死んだ方がマシだッ！」

ウボーにもプライドがある。

戦いと殺しが人生の全てと例えられるウボーにとって、過去の敵を全て力でねじ伏せてきたプライドが、半端な生を自分に許さない。

だからこそ、ウボーは俺に辛辣な言葉を告げた。

「お前エのやった事は、俺の覚悟に泥を塗るようなもんなんだよ！」  
「……………」

横槍を入れた事に悪いとは思いつつも、どうしようもない馬鹿だ  
という気持ちが抑えきれない。

呆れの感情が十割を占めてしまい、怒りの入る隙間もなくなる。

俺の沈黙をどう解したのかは知らないけど、少し言いすぎたと思  
ったのか、そんな俺にウボーは尚も言葉を続けた。

「ハア……っーかよ、何で来たんだ？」

「……二人が心配だからに決まってんじゃない」

今、『二人』という言葉がすんなりと出てきた事に自分で驚いた。

家族が殺されかけた。

それでもクラピカを助けたいという気持ちが変わらない。

我ながら甘いと思う。

しかし、初めて出来た友達の一人を失うのは絶対に嫌だったのだ。  
どんな理由があろうとも。

「たくっ……目の前で殺ったら泣くと思ったから、わざわざ気絶さ  
せてやったっつーのによ。ここまで来たんだ。アイツの死に様を見  
ても泣くんじゃねえぞ」

「安心しろ。ケイタが私の死を見る事は絶対に無い」

冷静であり、どこまで冷たい声。

底冷えするような声が俺達の耳に届く。

次いで、瓦礫が横にズレる音。

手加減無し of 全力攻撃をその身に受けたクラピカが、無傷で再び戦場に降り立った。

「……クラ、ピカ……」

腫れてもいない頬に気付く余裕も無い。

崩れ落ちた瓦礫の音は記憶にあった優しいクラピカ像が崩れ去った音でもあった。

「ケイタ　君も蜘蛛の一人か？」

見た事も無い緋色の瞳が俺を見る。

血とは違う綺麗な赤。

その不思議な目と殺気に吞まれて反論を忘れてしまった俺の頭に、大きな手が乗せられた。

「コイツは蜘蛛じゃねえって言ったろーが。ただ俺達が世話してやっただけだ。緋の目にも関係ねえ」

「……緋の目？」

おそらく現物を見ているからだ。

未知のワードを聞かされても宝石といった宝の類とは思わない。

クラピカの眼は正にそれだから。

「私達クルタ族が幻影旅団に虐殺された理由だ」

「……虐……殺……」

そこでクラピカが語ったのは一つの悲劇であり、ただの理不尽。盗賊団にとっては当たり前前の行動であり、ただの仕事。



一つだけ確かなのは、クロ口達がクラピカの人生を狂わした事のみ。

「仲間の無念を晴らすため、私はハンターになった」

正義はクラピカにある。

それは誰もが思う事であり、俺だってそう思う。

クラピカには正当な復讐の資格があった。

一人生き残った正規無を果たす理由すらも彼にはある。

「それを邪魔するのならば」

君も殺す

……だからこそ、戦いを止める理由も無ければ説得する術も無い。

関係者でもあり第三者でもある俺には、二人の戦いに介入する資格すら無かったのだ。

なにより、説得しようにも復讐に取り憑かれているクラピカに掛ける言葉が見付からない。

「……ウボーはさ、因果応報って言葉知ってる？」

「そんなリベンジ野郎を返り討ちにすんのも楽しみの一つだ」

なんとというクソツタレな発言。  
罪悪感という言葉に喧嘩を売り、聖母や神様に唾を吐く外道な趣味。

ウボーは今までそんな我を通し、自分の好きなように生きてきた。だから、今ここで自分を偽り、今までの人生を否定するような事は絶対に言わない。

例えそれが、相手の神経を逆撫でするような発言だったとしても。

「……今までの人生に悔いはある？」

「ああん！？ そりやお前エ、俺がアイツに殺されるって言いてエのか！？」

一度俺の頭に拳骨を落とすも、真剣な眼差しを向ける俺を見てバツが悪そうな顔をして、小さく『無えよ』と呟くウボオーギン。

なら、

「……俺は介入しない。二人の戦いを見守る。絶対に手を出さない」

ここで手を貸して勝利を信じないのは、ウボーの人生と今まで築いてきた信頼の否定。

もう既にウボーの『殺すの上等、返り討ちに遭うのも上等』という覚悟と戦闘に対するプライドを踏み躪ってしまった。

例え最低の事しかやってこなかったウボーだけど、彼の生き様を否定する事は、もう絶対にしなくなかった。

下手に介入するのはウボーへの侮辱に繋がるから。

「……ケイタはそれで良いのか？」

意外そうな声を上げるクラピカ。

本気で俺達二人を同時に相手にするつもりだったらしく、鋭利な刃物のようにコーティングされたオーラに揺らぎを感じた。

「……本当は戦って欲しくなんかないよ。万が一でも、家族に死んで欲しくない。でも……心情的にはクラピカの味方なんだ」

信じられないけど、クラピカはウボーと互角に戦えるだけの力を身に付けている。

怪力自慢のウボーが鎖を引き千切れなかったという時点でウボーの敗北は濃厚。

(でも……クラピカの邪魔なんて出来ない……っ！)

これは今まで好き勝手に生きてきたウボーを家族に持つ俺の責務。家族に代わる贖罪として、正当な復讐の邪魔はしてはならない。

昨日の時点で俺は、復讐を掲げる有象無象と家族の誰かが対峙した場合、家族の手助けをすると決めていた。

しかし、知り合いが、友達が、身内が、復讐を誓った場合を想定していなかった。

これまでの様々な葛藤を経て、これが俺の辿り着いた結論。

ウボー達が己の生き方に覚悟を持つように、俺もどんな結末でも見守る決心を持つ。

これが、俺の責務であり覚悟。

少なくとも、今回は手出し無用と言っているウボーの意志を尊重

して傍観に徹する事に決めた。

それが、ウボーの死に繋がるのだとしても。……そんな生は、ウボーだって望んでいない。

「……なら、その男が死ぬのを見届ける」

「ハン！死ぬのはてめエの方だ！」

明らかに纏の乱れているクラピカと、自分のフリを自覚して尚も信条を曲げないウボーが再び動き出す。

軽やかな疾走と豪快な突進。

対照的な二人は俺の見守る中、直ぐに衝突を果たした。

「だらああああつ！」

ウボーが自慢の怪力を持って地面を蹴り上げる。

容赦無くクラピカの殺到するのは、散弾と化した石礫の嵐。

それを、クラピカは上空に跳躍する事で回避した。

しかし、それこそがウボーの狙い。

「空中じゃ避けられねエだろ!？」

今度はアッパーで地面を砕き、本命の一撃である無数の礫をクラピカに放つ。

それも砕く時に施したのか、幾つかには周もしているオマケ付き。

しかし、クラピカも負けていない。

傷を負いながらも全ての礫を練で受け、技を放った硬直時間を狙い、複数ある鎖のうち中指の鎖をウボーに叩き付ける。

だが、ウボーはギリギリ技後硬直が解けて前方にダッシュ。死角となる鎖の真下に潜り込み、クラピカの落下予測地点に駆け出した。

僅か五秒の鮮烈な攻防。

その瞬きすら惜しむ戦闘を、脳に焼き付ける。

(……クラピカって何者？ どんな能力なんだろ……)

鎖を武器にしている事から、十中八九クラピカは具現化系か放出系の能力者。

だけど、強化系を極めたウボーの攻撃を無傷で無いにしても防ぎきっている事実が、ただの能力者でない事の証明となる。

つまり、

(クラピカは特質系だ。それしか考えられない)

いかに異質な特質系でも全ての系統を極める事なんて出来ない。なら、全系統を得意系統レベルで限り無く修得出来る特質系能力。そう考えるのが一番妥当だ。

瞬時に結論を出す内に、ウボーは着地したクラピカの下へ辿り着いていた。

「終わりだ鎖野郎！」

中指の鎖　先程ウボーを拘束していた鎖は十数mも伸びきっている。

手元に手繰り寄せ、再び拘束するよりも、ウボーの必殺技である

右ストレート【超破壊拳】ビッグバンインパクトがクラピカを砕く方が速い。

バキボキッ。

そう、骨を砕く音が戦闘音に混じって響く。

予想通り、ウボーの拳はクラピカの身体を粉碎した。

これが、

「 そうだな。これで終わりだ」

これが、短い戦闘の終着だった

「ウボー……クラピカ……」

傍観者に徹していたから俺は気付けた。

ビッグバンインパクトが肋骨諸々を破壊する寸前、クラピカは自身の鎖を全て消し、手元で具現化し直した。

こうする事で手繰り寄せる手間を省略。

殴られながらカウンター気味に再度具現化した鎖をウボーに巻き付けたのだ。

結局、俺が着く前の戦闘が勝負の分かれ目。

ダメージが蓄積され、ノーガードの相手に骨折程度で収まるレベルの威力しか出せない必殺技しか放てないウボーに、勝ち目なんて最初から無かった。

「私の得意系統は具現化系と言った筈だが？」

暗に迂濶に近付き過ぎだと揶揄し、吹っ飛ばされたクラピカは拘束されているウボーに歩み寄る。

同時に治療でもしているのか、殴られた腹部に当てた十字架の鎖から光が洩れている。

時間が経つ毎に顔色が良くなり、歩みもスムーズになっているので、あの親指の鎖が回復能力なのは確定的。

「……………」

「……………殺せ」

ウボーの前で立ち止まり、沈黙を保っていたクラピカにウボーが言った。

念を使わないのを見ると、あの鎖には特別な力が働いているらしい。

強制絶を強いられたウボーが敗北を認めた瞬間だった

「……………くそ……………っ！」

一度だけ後方を振り返り、俺を見たクラピカが狼狽した後、悔しそつに舌打ちする。

彼からはもう、怨嗟にまみれたオーラが消滅していた。

クラピカも途中で気付いたのだ。

ウボー達がクラピカの家族を殺したように、自分もまた、全く同じ事をしようとしている事に。

「……何故だ……何故お前達はケイタを育てた!? 何故、お前はこつも彼に慕われている!? 何故……何故人並みの感情と優しさを持ちながら、お前達は私の一族を皆殺しに出来た!? 答えるッ!」

魂からの咆哮。

そつ評せる言葉が、やり場の無い疑問と苛立ちを乗せて放たれる。しかし、鬼気迫る勢いのクラピカを無視するように、ウボーは小さく『殺せ』と呟くのみ。

それが、クラピカの沸点の限界だった。

「……答えるッ!」

クラピカの小指から鎖が伸び、音も無く切つ先がウボーの胸に埋没する。

【律する小指の鎖『ジャツジメントチェーン』】。  
これが後に知った鎖の名称。

「……先程も言ったが、私の問い、定めたルールに従わなければ、



この鎖が貴様の心臓を容赦無く握り潰す」

心臓を潰す 即ち死。

そう理解し、先程定めた決意も忘れ、弾かれた様に駆け出そうとしたその時

「ケイタツ!!」

家族の怒声とキツイ眼差しが、俺の足を地面に縫い付けた

「……答える。……非道の限りを尽くし、血と怨嗟にまみれた手で子供を育てた貴様は……人の情を持つ貴様達は、何故、幻影旅団などを設立した!？」

クラピカは感情と行動を制御出来ていない。

突発的に最後の手段を行使して疑問を晴らそうとしたクラピカは、滲み出すように質問を述べる。

怨敵を目の前にして他にも言いたい事があるだろうに、俺というクラピカにとってのイレギュラーがもたらした影響を知るため、身の内をさらけ出させようとする。

そして、ウボーは

「ケイタ」

俺の名を呼び

「  
」  
ウボーは、最後に満面の笑みを魅せた

地面に崩れ、俯きながら呆然としている俺に近付く足音があった。ウボーが逝ってしまった今、ここに生者は俺を除くと一人しかない。

よく考えれば俺もクラピカに攻撃されても可笑しくない。

クロロ達の居場所。皆の能力。

クラピカの知りたい情報を山ほど持っている。

しかし、俺は特に動こうと思わなかった。

「……彼を埋葬してやってくれ」

目の前にスコップを放られ、ついでにクラピカの鎖が俺の手に伸びる。

ウボーが鎖に拘束されてから握りっぱなしで、爪が食い込んで血塗れの掌。

淡い光が俺の両手を照らしたと思ったら、いつの間にか俺の両手は完治していた。

「……ケイタ、君が旅団でない事も、地下競売を襲撃したが、逃走ルートの手配をしただけで誰も殺めていない事も彼から聞いた。私は、君と戦うつもりは無い」

立ち去るため、クラピカは俺に背を向けて車の方へと歩いて行く。足音がゆっくりだが遠ざかっていった。

「私がノストラード組に雇われている事は旅団にバレている。私の素性が奴等に知られるのも時間の問題だろう。私の事を話したければ」

「話さないよ」

足音が止む。

見なくたって、怪訝そうな顔をしている事くらいよく分かった。

「……クラピカの事は話さない。友達だから……みすみす死なせたくない」

友達。

ウボーを殺した張本人にこう言える俺は、少なからず心が壊れているのかもしれない。

それでもコレは俺の本心だ。

そして、今から言う言葉も。

「……悪いのはクロ口達……俺達だから、クラピカも殺さない。でも」

もう誰も死なせない

顔を上げ、真っ向からクラピカを見る。  
その顔を見て、俺は決心を固めた。

正直言えば、少しはクラピカに復讐してやるうという気持ちがあった。  
しかし、もう迷いは無い。

「復讐を止めたりはしない。でも、向ってきたら全力で阻止する……  
……家族に死んで欲しくないってのも当然あるけど、クラピカにはもう人殺しなんてしてほしくないから」

無理をしているのが分かる声色。

死人みたいに顔色が悪いクラピカを見て、友達として、これ以上ナニかを背負って欲しくないと思ってしまう。

家族の身の安全だけではなく、友達であるクラピカの体調も心配していた。

「……俺に訊きたい事があるんじゃないの？」  
「情報提供者は他にもいる」

それは誰だろうか。

……いや、一人だけ該当しそつや奴がいる。

旅団の内部関係に詳しく、俺の知る限り最凶最悪の愉快犯が一人だけ。

「……私は止まる気は無い。家族を死なせたくないなら、次会った時に私を殺す事だ」

それだけ告げると、クラピカは振り返る事もせず俺の下から立ち去って行く。

残されたのは俺と、物言わぬウボーの二人のみ。

「ウボー……本当にコレで満足だったの？」

今はまだ、ウボーの死を皆に知らせられないため、暫定的でもここに墓穴を掘るしか無い。

亡骸に問い掛けながら、俺の穴掘りは続いていく。

「……満足なんだよね、馬鹿だから。……本当、馬鹿だよっ」

ウボーの顔は気持ちの良いくらい笑顔だ。

この笑顔を見れば、この結末はウボーにとっても納得の行くもので、人生に悔いが無かった事も頷ける。

《たくっ……目の前で殺ったら泣くと思ったから、わざわざ気絶させてやったっつーのによ。ここまで来たんだ。アイツの死に様を見ても泣くんじゃねえぞ》

今までのウボーとの一時を思い出し、ふと、この言葉が脳裏を過ぎった瞬間、俺にも限界が訪れた。

「……馬鹿……ウボーが死んだって、俺は泣くんだよ……っ！」

一度溢れた涙は止まらない。

決壊したダムのように、留めなく涙が零れ落ちる。

いつの間にか、穴を掘る作業も中断していた。

「ふざけんな……最後の言葉……聞こえなかったじゃんっ！ もつと……もつとちゃんと喋れよっ！！」

ウボーが俺に宛てた最後の言葉。

それは俺個人に宛てたものかもしれないし、クロ口達に残した遺言かもしれない。

どのみち、もう確かめる術も無い。

あの脳筋馬鹿の声も聞けなければ、一緒に馬鹿をやったり、俺の料理を美味しいと食べてもくれない。

本当に、もう、ウボーは何もしてくれない。

「馬鹿……俺の気も知らないで……本当に……馬鹿野郎っ！」

俺の泣き叫ぶ声は、しばらくの間、途切れる事は無かった

## 第二十二話 悲しみ×プライド×想いの末に（後書き）

少し短いですがキリが良いのでここまで。

この展開、読者の皆様方には賛否両論でしょう。

しかし、自分の力にプライドを持っているウボーならこう思い、考えて行動していても可笑しくはないかなと思いましたし、アニメでのウボー戦後すぐのクラピカが精神的に参っ*て*い*そ*う*だ*ったので、こ*う*い*っ*た展開にしました。

少なくとも自分はそう判断しました、はい。

……反応が怖いなあと少しビクついたり。

というより、シリアス展開なんてこの作品に望んでないのに、とか書いていて思いました。シリアスな主人公なんて主人公じゃない。多分コレが一番のシリアス回です。

では、誤字誤用脱字、御意見や御感想がありましたら是非ご連絡ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0705s/>

---

俺の周囲は変人ばかり

2011年12月22日03時59分発行